SONORAMA FOREIGN MASTERPIECES

眠られぬ夜のために

I CAN'T SLEEP AT NIGHT

《ウィアード・テールズ傑作選》

カート・シンガー選
オーガスト・ダーレスほか
長井裕美子 訳

眠られぬ夜のために
《ウィアード・テールズ傑作選》
カート・シンガー選
オーガスト・ダーレスほか

ソノラマ文庫
海外シリーズ
㉔
定価
620円

◉朝日ソノラマの海外翻訳文庫◉

監修・仁賀克雄

ソノラマ文庫海外シリーズ

---

1 モンスター伝説
ロバート・ブロックほか／仁賀克雄編・訳

2 10月3日の目撃者
A.ディヴィドスン／村上実子・訳

3 機械仕掛けの神
リチャード・マシスンほか／仁賀克雄編・訳

4 宇宙の操り人形
フィリップ・K・ディック／仁賀克雄・訳

5 地球への侵入者
ヴァン・ヴォークトほか／熱田遼子ほか・訳

6 影よ、影よ、影の国
シオドア・スタージョン／村上実子・訳

7 御先祖様はアトランティス人
ヘンリー・カットナー／秋津知子・訳

8 アメリカ鉄仮面
アルジス・バドリス／仁賀克雄・訳

I can't Sleep at Night

《ウィアード・テールズ傑作選》

眠(ねむ)られぬ夜(よ)のために

オーガスト・ダーレスほか／長井裕美子(ながいゆみこ) 訳

かつて二本の足で歩いていたものの皮で装丁された禁断の書——この呪われた本を手にしたとき、恐るべき夢魔の時が始まる……

A．ダーレス「空白の夢魔」から、R．ブロック「美しき人狼」まで、カート・シンガーが選んだホラーとファンタジーの11の短編。

K．シンガーは、ヴァン・サール、ピーター・ヘイニング等と並んで恐怖小説のアンソロジストとして名高いアメリカ人であり、本書収録の11編はすべて「ウィアード・テールズ」誌より彼が選び抜いた傑作である。

朝日ソノラマ

SONORAMA FOREIGN MASTERPIECES

ISBN4-257-62024-2 C0197 ¥620E 定価＝620円

12 ウォー・ゲーム
フィリップ・K・ディック／仁賀克雄・訳

13 魔の配剤
O.クックほか／熱田遼子・松宮三知子 訳

14 ウイッチクラフト・リーダー
フリッツ・ライバーほか／村上実子・訳

15 暗黒界の悪霊
ロバート・ブロック／柿沼瑛子・訳

16 冷凍の美少女
ジェラルド・カーシュ／小川隆ほか・訳

17 真夜中の黒ミサ
M.アーウィンほか／羽田詩津子・長井裕美子 訳

18 悪夢の化身
G.エンドアほか／樋口志津子・竹生淑子 訳

19 13人の鬼あそび
エクス-プライベイト・Xほか／猪俣美江子・笹瀬麻百合 訳

20 神の遺書
ジョン・ラッセルほか／小島恭子 訳

21 暗黒の秘儀
H.P.ラヴクラフト／仁賀克雄 訳

22 モンスター誕生
リチャード・マシスン／柿沼瑛子 訳

眠られぬ夜のために

SONORAMA FOREIGN MASTERPIECES

眠られぬ夜のために

I CAN'T SLEEP AT NIGHT

《ウィアード・テールズ傑作選》

カート・シンガー選
オーガスト・ダーレスほか
長井裕美子 訳

ソノラマ文庫

眠られぬ夜のために
《ウィアード・テールズ傑作選》
カート・シンガー選
オーガスト・ダーレスほか

ソノラマ文庫
海外シリーズ
24

定価
620円

◉朝日ソノラマの海外翻訳文庫◉

監修・仁賀克雄

ソノラマ文庫海外シリーズ

---

1. モンスター伝説
   ロバート・ブロックほか／仁賀克雄編・訳
2. 10月3日の目撃者
   A.ディヴィドスン／村上実子・訳
3. 機械仕掛けの神
   リチャード・マシスンほか／仁賀克雄編・訳
4. 宇宙の操り人形
   フィリップ・K・ディック／仁賀克雄・訳
5. 地球への侵入者
   ヴァン・ヴォークトほか／熱田遼子ほか・訳
6. 影よ、影よ、影の国
   シオドア・スタージョン／村上実子・訳
7. 御先祖様はアトランティス人
   ヘンリー・カットナー／秋津知子・訳
8. アメリカ鉄仮面
   アルジス・バドリス／仁賀克雄・訳
9. 悪魔はぼくのペット
   ゼナ・ヘンダースン／村上実子・訳
10. 月を盗んだ少年
   デイヴィス・グラッブ／柿沼瑛子・訳
11. 銀河の女戦士（アマゾン）
   C.L.ムーア／仁賀克雄・訳

デザイン＝矢島高光

イラスト＝生頼範義

I can't Sleep at Night

《ウィアード・テールズ傑作選》

眠られぬ夜のために

オーガスト・ダーレスほか／長井裕美子 訳

かつて二本の足で歩いていたものの皮で装丁された禁断の書――この呪われた本を手にしたとき、恐るべき夢魔の時が始まる……

A．ダーレス「空白の夢魔」から、R．ブロック「美しき人狼」まで、カート・シンガーが選んだホラーとファンタジーの11の短編。

K．シンガーは、ヴァン・サール、ピーター・ヘイニング等と並んで恐怖小説のアンソロジストとして名高いアメリカ人であり、本書収録の11編はすべて「ウィアード・テールズ」誌より彼が選び抜いた傑作である。

朝日ソノラマ

SONORAMA FOREIGN MASTERPIECES

ISBN4-257-62024-2 C0197 ¥620E 定価＝620円

12 ウォー・ゲーム
フィリップ・K・ディック／仁賀克雄・訳

13 魔の配剤
O.クックほか／熱田遼子・松宮三知子 訳

14 ウイッチクラフト・リーダー
フリッツ・ライバーほか／村上実子・訳

15 暗黒界の悪霊
ロバート・ブロック／柿沼瑛子・訳

16 冷凍の美少女
ジェラルド・カーシュ／小川隆ほか・訳

17 真夜中の黒ミサ
M.アーウィンほか／羽田詩津子・長井裕美子 訳

18 悪夢の化身
G.エンドアほか／樋口志津子・竹生淑子 訳

19 13人の鬼あそび
エクス-プライベイト・Xほか／猪俣美江子・笹瀬麻百合 訳

20 神の遺書
ジョン・ラッセルほか／小島恭子 訳

21 暗黒の秘儀
H.P.ラヴクラフト／仁賀克雄 訳

22 モンスター誕生
リチャード・マシスン／柿沼瑛子 訳

23 魔の創造者
V.ラウスほか／熱田遼子・松宮三知子 訳

24 眠られぬ夜のために
オーガスト・ダーレスほか／長井裕美子・訳

ソノラマ文庫海外シリーズ㉔

眠られぬ夜のために

《ウィアード・テールズ傑作選》

カート・シンガー 選
オーガスト・ダーレス ほか
長井裕美子 訳

SONORAMA FOREIGN MASTERPIECES

朝日ソノラマ

監修・仁賀克雄
ソノラマ文庫海外シリーズ㉔

眠られぬ夜のために
《ウィアード・テールズ傑作選》

カート・シンガー 選
オーガスト・ダーレスほか
長井裕美子 訳

朝日ソノラマ

I CAN'T SLEEP AT NIGHT

Edited by

Kurt Singer

1966

目次

空白の夢魔

THE LOST DAY

オーガスト・ダーレス

August Derleth

ジェスパー・キャンバヴェイは、几帳面の代名詞のような男だった。起床は毎朝かっきり七時、降っても照っても変わりはない。しかし、その朝に限ってどうしたわけか、目覚めると七時を三十分も回っていた。

それが、事の始まりだった。

続いて起こったできごとも、なんとも理解の範囲を超えていた。バスルームへ行って鏡をのぞくと、彼を見返しているその顔は、赤の他人のものだったのだ。それだけではない。しばらくの間、それが自分の顔ではないということに、気がつきさえしなかった。ひと目見ただけでも、その皺(しわ)よった顔から容易に年齢(とし)は想像できたはずなのに——五十歳という彼の年齢の倍近くも老けこんでいたのだから。と、鏡はにわかにかき曇り、キャンバヴェイはいきなりわけのわからない激しい衝撃に打ちのめされて、危うく卒倒しそうになった。鏡の顔は見る間に霧におおわれ、ついでしだいに新しい顔が浮かび上がってきた。新しい、知りすぎるほどよく知っている顔が。鏡の向こうからは彼自身の当惑しきった青い瞳が彼を見返し、見慣れた指が頑固そうな自分のあご

をなぞっていたのだ。
しかし、事件はそれで終わったわけではなかった。いつものようにラジオに手を伸ばしBBCにダイヤルを回すと、アナウンサーの声が飛びこんできた。「おはようございます、五月十七日、土曜日です。イギリス爆撃隊は昨夜再び、敵領土内に侵入し……」
五月十七日、土曜日だって！
初めは、アナウンサーの間違いだろうと思った。厳格なまでに日々の習慣を守っている学者肌の彼にしてみれば、そう思ったのも無理はない。だがニュースが金曜日に起こったという事件に及ぶにつれ、さすがの彼もきょうは土曜日だと認めないわけにはいかなかった。
が、それならいったい、金曜日には何が起こったのだろう？
キャンバヴェイは木曜日の夜、いつもどおりにベッドに入った。ということは、宇宙のあらゆる法則、時間の法則にかけて、今は金曜の朝のはずなのだ！
頭の中がぐるぐる回っていた。木曜日に体調でも崩していたなら、金曜日丸一日寝こんでいたと考えられなくもない。しかし木曜日には、心身ともにふだんよりずっと調子がいいくらいだった。あの日は、例によって古本屋を巡り歩いて――ああ、そうだ、ソーホーのマックス・アニマにあの革綴じの古い本を返さなくては――ベッドに入ったのもいつもと同じ時間だった。そう、かっきり十一時。五年前妻と死別して以来、この就寝時刻は崩したことがない。そして今朝、いつもとまったく変わりない朝を迎えたのだ。あのバスルームでの一件以外――そしていうまでも

なく、三十分寝坊したことを除いては。三十分だって！　冗談じゃない、まる一日と、まる一晩だぞ！　その上おまけの三十分だ！

　キャンバヴェイはひげを剃り、朝食をとり始めたが、何をしてもまるでうわの空だった。もし本当に金曜日じゅう眠っていたのなら、相当空腹を感じているはずだ。だが、ちっとも食欲がない。それに金曜日にひげを剃っていないとしたら、当然もっと伸びているはずなのに。いや、もっと奇妙なことがあった。部屋の中のものが、ふだんとは違った所に置いてある。どう考えても、金曜日じゅう眠っていたとは思えなかった。間違いない、確かに、起きて何かをしていたのだ。彼は必死に記憶をたどってみた。しかし、その一日分は完璧な空白になっていた。

　いや――完璧というわけでもない。心の奥底に、切迫した確信めいたものが渦巻いている。なんとかそれを突きとめなければ――何か途方もない、恐ろしいことが起こったに違いない。

　しかしながら、キャンバヴェイは夢想家ではなかった。漠然とした恐れや予感、何かの前ぶれといったものを、常々軽視していたのだ。ともかく本当にきょうが土曜日で、金曜日の記憶はすっかり失われているというのなら、それはそれで、きょうは二日分の用事を片付けなければならない。まず、古本屋のアニマに借りた本を返すこと。医者にも行っておこう。突然前日の記憶をなくすなんて、どこか悪いのかもしれない。早めに確かめておくにこしたことはない、と彼は自分に言い聞かせた。

そうと心が決まると、まだ空白の一日が気にはなっていたものの、腰をおろして例の本に目を移した。アニマが押しつけるようにして貸してくれた本だ。古代の風習がいろいろ書いてあると言っていたが、それは確かだった。本の装丁を調べてみると、なんとも気味の悪いことに、紛れもない人間の皮で綴じてあった。内容はラテン語で書かれている。活字があちらこちら消えかかっていて、実に読みにくかった。が、ちょっと読んだだけでも、それが悪魔学かオカルトに関するものであることは歴然としている。なぜアニマは、あんなにこの本を勧めたのだろう。自分の専門が昆虫学と鳥類学であることはよく知っているはずなのに。そのどちらも、オカルトとは程遠いものだった。

彼はラテン語を頭の中で翻訳しながら拾い読みしていった。「地獄より使い魔を招ずるべし。されば、その深遠なる術によって汝の望みは成し遂げられ……」ついで、こみ入った法則がしるされている。二、三ページ先をめくってみた。「真夜中に死者の霊を呼び出し、未来の事象を予知するにあたって、その霊と交わること可能なれば……」さらに二、三ページ先に進む。「したがって、呪われしものを媒介となすならば、自らの魂、すなわち霊体を解き放ち、限られたる時間においてのみ、他者に乗り移ること可能なり。ただし、そのものは必ずや彼の者の所有下におくものとせよ」彼はもっと先をめくってみた。「魔界のクウェンタスが、常に身辺にはべらせていたとされる巨大な黒犬に関して。その犬こそ彼の僕、地獄より呼ばわれたる悪の使いなり。かくて主の命には絶対の忠誠をもって従い……」

なるほど、確かにおもしろい。こういった分野への偏見を抜きに考えれば、興味深い書物だ。しかし、専門外の本であることには変わりなかった。惜しい気もするが、早く返してこよう。これ以上、この本に時間を割くわけにはいかない。自分の研究に従事する時間さえ、十分とはいえないのだから。彼はていねいに本を包み、身じたくをすませると傘を持って——だが、外は上々の天気だった——家から歩いていける距離の、主治医の診療所に向かった。

診察の結果、悪いところはどこもなかった。「健康そのものですよ」と医者は言った。「あなたが経験なさったことは確かに妙ですが——それほど気に病むようなことでもないでしょう。こういった症例は今までにも何件かありましたし、いくらでも起こりえることなのです。あまりくよくよ考えないことですね」

「でも、昨日はどう考えても何かおかしなことがあったような気がするのです」

「あなたの立場にあれば、わたしだってそう思ったでしょうね」

キャンバヴェイはいくらか安心して診療所を出た。地下鉄の駅へ降り、電車が来るのを待つ間に、『デイリー・テレグラフ』を一部買い求める。イギリス爆撃隊の進退やドイツの報復の脅威などいささか食傷気味の記事に加えて、スペインが枢軸国の顔色を伺っているだの、アメリカがスペインの機嫌をとり結んでいるだの——どの記事もうんざりだ！　中のページをめくる。と、彼の知り合いのひとりが、昨日無惨な死を遂げたという記事が目に留まった。『ロチャード・クレイグ氏　殺害！』見出しには、そう書いてあった。『犯人は昨日ロチャード・クレイグ氏宅に

押し入り、氏の書棚よりコレクション中もっとも稀少価値のある古書を物色中発見され、殺害に及んだものと見られる。凶器には刃物を使用。犯人の手がかりはいまだ得られていない。奪われた蔵書の行方をめぐって捜査は今なお続行されているが、発見の可能性はきわめて薄く……』まったく、ひどい事件だ！　キャンバヴェイはちらっとそう思っただけで、すぐにいつものコラムを読み始めた。郊外の鳥の生態を描いたこのコラムは、サセックス州の、今はもう引退した養蜂家の寄稿によるものだった。

電車が来て、彼はまっすぐソーホーに向かうつもりで乗りこんだ。ここ数週間、サセックス州にベニヒワやカッコウや珍しい外来種が姿を見せているという記事に心は躍っていたが、しかし、中に間違った記述があったことも見逃さなかった。取るに足らない間違いではあったが、彼は心の中でそれを書き直し、寄稿者に間違いを指摘してみた。科学に対する節度は、きちんと守ってもらわなければ。想像を事実と混同してはならない。そして事実は正確に記されなければならない。それが科学に対する唯一の正しい姿勢なのだ。

もぐりで開業しているアニマの古本屋に着いた頃には昼食時を少し回っていたが、彼は気にもとめなかった。どっちみち、昼はいつも食べたり食べなかったりだ。店内は相変わらず、夜のような暗さだった。建物が細い小路の奥にあるため、どんなに晴れた明るい日でも、店の中にはあまり光が届かない。キャンバヴェイは、初めてアニマの店に来た時からそれを感じていた。初め

て来た時、といってもほんの二週間ちょっと前のことだ。本屋の主とたまたま防空壕でいっしょになったのがきっかけだった。当のアニマは、どうやらこの店の造りが気に入っているらしい。

彼はしばらく店の中に立って待っていた。本屋の主は昼食に出かけたのかもしれないし、ベルの音が小さくて聞こえなかったのかもしれない。しばらくたっても返事がないので、本の山の間をすり抜けて入り口に戻ると、もう一度傘でベルを押した。と、今度は奥からアニマが現れた。皺だらけの脆弱そうな小男が、目を細めて媚びるように近づいてきた。「ああ、あなたでしたか」アニマのあいさつは、失礼なほど慣れ慣れしかった。「本を返しに来てくださったんですね?」アニマの目は、じっとキャンバヴェイの包みに注がれている。そして——気のせいだろうか?——その顔は大切な本を一刻も早く返してもらいたいという、憑かれたような熱っぽさに輝いていた。

と、キャンバヴェイの口がひとりでに動いた。「いや、悪いんだがアニマさん、この本は実におもしろいのでもう少し貸していただきたい。日曜日までお借りしてても、かまわないでしょうな?」

アニマは、急に顔をくもらせた。探るような鋭いまなざしをちらっとキャンバヴェイに走らせたが、その表情を見て安心したらしい。短くうなずくと、そうなさりたいならどうぞ、と答えた。「でも、月曜日までにはお返しください。必ずですよ！　月曜日には、その本が入用ですので。その——ちょっと、研究をしているんです」

店を出たキャンバヴェイは、狐につままれたような気持ちだった。いったい全体、どういうはずみでまたこの本を借りてきてしまったのだろう？　それに、以前にはまるで注意を払わなかったあの顔が、きょうに限ってぞっとするほど身近なものに感じられたのはなぜなのか？　きっと、自分がどうかしているに違いない――だが、はたして本当にそうだろうか？

次の瞬間、彼の体を戦慄が駆け抜けた。そういえば、つい最近アニマの顔を見かけている。この前店に来た時ではなく、そのあとで。漠然とした疑いはしだいに確信に変わり、もはや疑念をさしはさむ余地はなかった。

ほんの一瞬ではあったが、今朝、バスルームの鏡の向こうから彼を見つめていた顔――あれは、紛れもなくアニマの顔だ！

家へ戻りながら、彼はなんとか先ほどの自分の行動を論理的に考えてみようとした。だが、もとよりできない相談だった。あの暗い店内に立ち、早く奇怪な本を取り戻そうと熱心に待っているアニマと向かい合ったとたん、突如として不可解な衝動に襲われたのだ。何がなんでも、この本を手元に置いておきたいと。

そして、思いもかけずあんなことを口走った。今までの彼には、とても考えられないことだ。こうして地下鉄に揺られている間にも、言い知れぬ不安と動揺が胸に渦巻いていた。今まで気づきもしなかった、心の奥深くに潜む相反する感情が、激しくせめぎあっている。それは、彼自身にも説明しようのない感情だった。結論はひとつ、きのうのできごとをなんとかして知る以外に

は、この謎を解くことはできない。それでいて心のどこかには、その謎を解く一歩手前まで来ているという確信があった。そう、もうすでにわかっているはずなのだ。わかっていながら、それが何なのか理解できていないだけなのだ。それは理性ではとうてい理解できないもの、キャンバヴェイのような合理的な人間には気も遠くなるような、常軌を逸したことに違いなかった。

それにしても、アニマの本などもう見たくもない。こんなものを持って帰って来るとは、なんという性質の悪い気まぐれだろう。すでにこの本には、十分な時間をかけたのだ。これ以上関わりになるのはたくさんだった。ついさっき、得体の知れない衝動に駆られて本を借りてきたように、今度はわけもなく嫌悪感がこみ上げてきた。彼は本を持って家に帰り、今一度包みをほどいた。

本の装丁に使われているのは、やはり間違いなく人間の皮膚だった。どのくらい古い本なのかは、見当もつかない。しかし、はるか昔にその道の蒐集家たちが方々から怪しげな文書を集めてきては編纂し、見るもおぞましい装丁をほどこしたという、正真正銘の禁断の書ほど古くはなさそうだ。おそらく黒ミサや悪魔信仰がロンドンで徹底的な弾劾を受けていた頃のものだろうと、キャンバヴェイは推測した。ただ、それがいつ頃だったのかは、いまひとつ記憶があいまいだったが。

彼は本から離れて、今朝届いた郵便物の返事を書き始めた。だが、どうしても集中できない。本のこと、アニマのこと、アニマの奇妙な行動——初めは無理やり彼に本を押しつけ、次にはな

んとかして取り戻そうとした——のことばかりが、くり返し心をよぎる。あの本には抗いがたい魅力があると同時に、激しい反発をかき立てる何かがあった。
とうとう彼は立ち上がった。こんなことを考えていても、きりがない。本の前に行き、ページを繰り始めた。こうなったらこの本を徹底的に、飽きるまで読んでやろう。普通の本を読むように、理路整然と筋道だてて。彼は自分の決心を実行に移した。悪魔に魔女に妖術使い、秘教の儀式にドルイド教の奇怪な慣習、古代の宗教、幽霊、精霊、黄泉の霊——日が暮れるまで、彼はずっと読み続けた。それからやっと、本を脇に押しやった。
そろそろ掃除にかかる時間だ。きれい好きなキャンバヴェイは、毎日の掃除をかかしたことがなかった。ところが、いくらもたたないうちに、ソファの後ろにグレイのスーツが落ちているのを見つけた。一番上等のスーツじゃないか！　なんだってこんなところに落ちているんだ？　彼は憮然としてスーツを拾い上げた。自分がそうしたのだろうか、問題の金曜日に。だがたとえ催眠状態だろうと何だろうと、こんな高価なスーツを放り出しておくとは！　腹を立てながらそれを手にとってみると、スーツはしわくちゃになっているだけでなく、何か重いものをぴったり押し当てて運んだかのように、よごれて埃まみれだった。それだけではない。服のあちこちに、茶色っぽい乾いた染みがこびりついている。染みはすでに色あせて、くすんださび色に見えた。
彼は上着にブラシをかけ、ためつすがめつ眺めていたが、ついに心を決めてそれをバスルームへ持っていくと染みの一つをたらいにつけ、おそるおそるこすってみた。水は見る間に濁った赤

茶色に染まった——ひと月前、傷の止血に使った血まみれのハンカチを洗った時と、まさに同じ色だ。キャンバヴェイはじっと立ったまま、たらいの水を見おろしていた。その中に、何ものかが潜んでいるような気がした。いまわしく色づいた水は果てしなく深く、恐怖をはらんで、彼を呑みこもうと待ち構えているかのようだ。彼はスーツに目をやり、いきなりそれを投げ捨てた。それから思い直したように拾い上げると、前より注意深く眺め回した。もし、この染みが血の染みだとすれば——筋になっている、こっちの埃の跡はなんなのだ？　まるで、ぴったりと本を押しつけて運んだ跡のようではないか！

口の中がからからに乾いてきた。体が小刻みに震えている。

その時、ある妄想が頭をよぎった。いやまさか、あまりにもばかげている！　だが動揺が静まり、持ち前の理路整然たる思考が戻るにつれ、認めたくない事実が容赦なく思い出されてきた。彼は木曜日にアニマの店を訪れた時のことを、その時の会話を、丹念に追ってみた。

「ロチャード・クレイグという方をご存じですか？」アニマはそう訊ねた。

「ああ、知ってるよ」

「その方のお宅へ行かれたことは？」

「もちろん、あるとも」

「じゃあ、そのあたりの地理には詳しいわけですね？　ところで、彼のコレクションはご覧になりましたか？」

「うん、まあね。だがあいにく、古本の収集にはあまり興味がないんだ」
「そうでしょうとも。あなたのように昆虫や鳥に夢中になっている方々は、生命あるものにしか興味を示されないようですね」
一語一句が鮮やかに甦り、頭の中に響き渡る。そう、アニマはロチャード・クレイグのことをあれこれと訊ねた。クレイグのコレクションのことが話題にのぼると、明らかに羨望を隠し切れない様子だった。なんという題名の本だっただろうか？　冷静に記憶をたどると、そのうちのひとつ、ふたつが思い浮かんだ。すぐさま新聞を取り出し、問題の記事を捜しだす。はたしてその本の題名は、奪われたコレクションのリスト中にはっきりと書かれていた。
キャンバヴェイはスコッチにソーダを混ぜ、ひと息に飲み干した。
もう一度、テーブルに広げたままのいまわしい本の前へと戻る。
ページを繰っているうちに、見覚えのある例の記述が目に留まった。「したがって、呪われしものを媒介となすならば、自らの魂、すなわち霊体を解き放ち、限られたる時間においてのみ、他者に乗り移ること可能なり。ただし、そのものは必ずや彼の者の所有下におくものとせよ」読み進むうちに、しだいに動悸が激しくなってきた。こんなことは、とうてい信じられない。あり得るはずがない。しかし……
しかし現実に、彼のスーツには染みがついている。本を持ち運んだらしい跡もある。単なる偶然とは思えなかった。奇妙なできごとが、あまりにも多過ぎるのだ。

しかも、ここに記されている〈呪われしもの〉――当然、この本のことに違いない！　アニマはこの本を彼に渡した。そして、彼に乗り移った。それゆえ、丸一日の記憶が空白になっているのだ。確かに想像を絶することだ。まるで常軌を逸している――しかし、空白の金曜日に起こったことと照らし合わせて考えてみるならば、それだけが唯一の、納得のいく説明だった。

キャンバヴェイは夢中で読み続けた。どれも愚にもつかない狂言だと囁きかける、生来の理性の声を追いやりながら。彼に乗り移り、計画を実行に移した張本人は、明らかにひとつの大きな危険を冒している。〈呪われしもの〉が持ち主の手元に戻らない限り、その持ち主と本を渡された人間との間には、いまわしい絆が存在し続けるのだ。だからこそアニマは、あんなにも躍起になって本を取り戻そうとしたに違いない。そうだ、間違いない。これですべて辻褄があう。これがただひとつの真相なのだ。

彼は深く椅子にもたれた。額に冷や汗がにじみ出ている。煙草を取り出し、火をつけた。これからのことを、冷静に考えてみなければ。

証拠というものが犯罪捜査においてどれほど重要な意味を持つものか、そんなことはわかりきっている。もし、ロチャード・クレイグ殺しの捜査の手が伸びてきたなら――ああ、なんてことだ！　自分が自らの手を汚してクレイグを殺したとは、どうしても信じたくない――だが、そんな希望は無に等しかった。現に手元にはあのスーツがある。分析すれば血の染みが誰のものか、すぐにわかってしまうだろう。それに、例の蔵書――アニマが持っていることは、疑いの余地も

なかった。奴は金曜日におれが持ちこんだのだと証言するに違いない。そう、あのいまいましい空白の日に。それに、もしかすると凶器も――！　彼は雷に打たれたように立ち上がると、血相を変えて部屋の中を捜し始めた。
三十分とたたないうちに、それは見つかった。ずっと前にペトリの店のバーゲンで買った、小ぶりの短剣だった。本棚の後ろに無造作に隠してあったのだ。まったく、なんたる証拠だ！
キャンバヴェイは短剣を取り出すと、念入りに洗った。
もう、とっぷりと日が暮れている。闇の帳があたりを包んでいた。彼はあれこれと考えを巡らしながらしばらく部屋の中を歩き回っていたが、結局また本の前に戻った。
どうすれば、アニマがやったのと同じことができるのだろう？
いまだ半信半疑のまま、本を手に取りベッドに横になって、難解なラテン語で記されている教示をたどり始めた。
そうしているうちに、やがて睡魔に襲われて……彼は、夢を見ていた。そこは霧深い通り、闇に紛れて悪行の徘徊するロンドンの通りだった。ただ、少しも質感がなく、まるで蜃気楼を見ているようだ。キャンバヴェイはいくつもの壁の中を、それが空気でできているかのようにやすやすとすり抜けていった。見慣れた通りを、路地を、建物の間をふわふわと飛んでいく。まもなく彼はソーホーに来ていた。そのまま狭い路地を抜け、かび臭い本が山積みになった秘密の店の中へ入っていく。気難しそうな、皺だらけの老人が眠っていた。と、彼の体がすうっとその体の中に

入っていき、老人に乗り移って自らの息の根を止めた——ような気がした。ついで再び霧の中へ、夜のロンドンへと出ていった。町はひっそりと眠りに閉ざされ、通りには夜ごとにあたりをうろつき回る、暗い目をした浮浪者が時折歩いているばかりだった。帰る家もなく、世間から忘れ去られ、慈悲深い闇の陰にそのみじめな姿を隠して……。キャンバヴェイは、悶々と寝苦しい夜を過ごし、ようやく目を覚ました。一睡もしなかったみたいに疲れ切っている。とはいえ、睡眠は十分とったはずなのだ。日曜日の朝で、時計はきっかり七時を指していた。

やれやれ、ひどい夢だった！　いや——本当に夢だったのだろうか？　服は着たままだった。彼はさっと起き上がると、マックス・アニマの本を床に投げつけた。が、いきなりぞっと身震いがして、再び本を拾い上げるとテーブルの上にのせた。

とにもかくにも、きのう一日の悪夢はやはり現実だった。あのおぞましい人殺しの跡のついたスーツはまだ部屋にあったし、短剣もそのままだ。何にもまして、人間の皮膚で装丁した禁断の書が、現にこうしてここにある。この呪われた本の魔力は、いまや疑うべくもなかった。

怒りと苛立ち（いらだ）と苦い思いが、いちどきに胸にこみ上げてきた。彼はしばし激情に我を忘れていたが、ようやくのことで気を静め、持ち前の理性を取り戻すと、慎重に問題の打開策を検討し始めた。まず、自分の立場を考えてみる。決して有利な立場とはいえなかった。おそらく、クレイグ宅の付近で誰かに見られているはずだ。目撃者ゼロという可能性は、まず皆無だろう。一方ア

ニマの方は、当然のことながら姿を目撃されている心配はない。たとえ当のアニマが不安を感じているにしても、どうしてこんな話を警察になどできよう？　彼らの反応は目に見えていた。狂人の戯言だと一蹴されるに決まっている！

キャンバヴェイは本をつかみ、スーツを手にとると地下室へ降りていった。炉に火をおこし、注意深く本とスーツを投げ入れる。両方とも完全に燃え尽きたのを見て、灰をとり除き、炉を冷ました、灰は下水溝に流してしまった。それから短剣を携えると、家からほど近いテムズ河まで歩いていって、投げ捨てた。

家に帰ると彼はきちんとひげを剃り、物思いに沈みながら朝食をとった。

もしあの空白の金曜日に姿を目撃されていたなら、常識的に考えて必ず警察が来るだろう。だが少なくとも、証拠となるものだけは隠滅したのだ。少しは望みがあるかもしれない。彼は本能的に、きたるべき闘いに備えて身構えていた。事実、自分に罪はないのだ。しかしどう頑張ったところで、アニマに容疑を向けさせることは無理な相談だった。

事件をふり返ってみるにつけ、暗い疑念が彼の心にかげり始めた。あの呪われた本には、いかなる霊力もその人本来の性質に相反する行為をさせることはできない、と書いてあったはずだ。もし、それが本当なら――ああ、なんと恐ろしいことだ！

彼はラジオをつけ、ニュースにダイヤルを合わせた。いつもより、少し遅かったようだ。戦争関係のニュースはすでに終わり、ロンドン市内で起こった事件の最新ニュースが流れていた。

「古書籍商マックス・アニマが本日未明、店続きの自宅にて死体で発見されました。アニマ氏の蔵書には一風変わったものが多く、特に絶版となった稀覯書の収集ではその名を知られていました。現場の状況から自殺と見られています。部屋のドアには内部より錠がおろされ……」

ではあの夢は――そうだったのか！

と、その時ドアをノックする音がした。どっしりした、権威に満ちたノックだった。

とうとう来たな、と彼は思い、毅然と顔を上げてドアを開けに出て行った。

ポーチには、ロンドン警視庁の警部が立っていた。警部は慇懃に朝のあいさつをすると、確信に満ちた態度で部屋に足を踏み入れた。

祖霊に安らぎを

PLEASE GO AWAY AND LET ME SLEEP

ヘレン・W・カッスン

Helen W. Kasson

それは、なんの変哲もない部屋であった。壁があって床があり、天井があって――それにドアさえついていた。ただ、窓はひとつもない。その部屋は、スペイン語でいうとトゥンバ、フランス語ではトゥンボ、そして英語になおすとクリプト――納骨堂だった。

とにかく、そこには一族全員が集まって――それぞれの家庭で家族がひと部屋に集まるように――みながみな、憤怒にかられ、対策を練っているところだった。まず最初に、ひいおじいさんをご紹介しておこう。この墓所は、ほかでもない彼のために建てられたものなのだから。（それに、誰よりも腹を立てているのはひいおじいさんだった）威厳たっぷりに長いあごひげを生やした彼は一族の家長であり、さらに最初の死者でもあった。むろん彼とて人の子、当然祖先というものがあるはずなのだが、誰も彼の祖先のことなど、考えてみようともしなかった。というのもこのひいおじいさんが一代で築きあげたビール醸造所のおかげで、子孫たちは生活のために働く必要もなく――その上ゆうゆうと――左団扇で暮らしてきたからである。子孫たちは一族の家系を逆のぼり、ひいおじいさんに突き当たったところで十分満足して、彼を初代に祭り上げてし

まった。子孫たちにとって、彼は申し分のない初代だったのだ。
お次はその伴侶の、ひいおばあさん。もともと小柄でしわだらけの人だったが、一世紀近くもこんな湿った所にいたため、なおさらしなびたようだった。そして、おじいさんとおばあさん。このふたりの骨は、まだそれほど古くなっていない。それから母さんと父さんとパンジーおばさん。パンジーおばさんは一度も旦那というものを持ったことがなく、生きている時からもうすでにしなびきっていた。次に、八歳で死んだため、今でもガキのままでいる小さなウィリー。それから遠縁にあたる、貧しいご夫婦。夫婦にしてみれば、ほかに行き場所もないのでやむなくここにいるだけだし、みんなにしてみれば仕方なく置いてやっているといったところで、とにかくふたりは生粋の一族ほどには腹を立てていなかった。最後に、よそ者がひとり——彼がここにいるのは、コリンズ家の死者たちがこの二十年間嘆き悲しみ続けてきた、取り返しのつかない誤ちのせいであった。
棺の頭上の壁龕(へきがん)には『ネッド・コリンズ』と刻まれているものの、彼はネッドおじさんではなかった。列車が脱線して脇の堤防に突っこんだ時に、たまたまその横に座っていた紳士なのだが、ばらばらに入り混じってしまったふたりの骨を選り分けた人間が、運悪くそうした仕事には不慣れだったのだ。彼の一部は、確かにネッドおじさんだった——右手の小指の骨と、左のすねの骨とが。だがそれだけではとうてい、生粋のコリンズ一族というわけにはいかない。早い話が、一部を除いた彼の体はまったくのよそ者なのであり、その彼がこの先永遠に聖なるコリンズ家の納

骨堂に安置されることを考えると、家族たちの胸は張り裂けんばかりに痛むのだった。もちろん、コリンズ家の者たちは死後にして初めて、この神をも恐れぬ冒瀆的な真実を知ることになるのであるが。かくして現世のコリンズ一族はネッドおじさんの墓に参ってはその死を悼み、露ほども疑いをさしはさむことはなかったのであった。

だが、ここ納骨堂の中においても時は流れ、ネッドおじさんの替え玉も今ではすっかり骨がついて——こんな言い方ができるならば——五体満足の体となった。彼はよく、右手の小指の骨と左すねの骨がどうしても言うことをきかないと不平をこぼしたが、コリンズ家の死者たちから見れば、それこそが本物のネッドおじさんのプライドを表しているものであった。おじさんの気持ちが、自分から切り離されてしまった手足の骨までをも動かし、本来ならば自分が安置されるべき場所を恋しがり、コリンズ一門のまんまん中によそ者が混ざっていることに、いたく立腹しているのだと確信していたのである。

とはいえ、今夜こうした集まりが開かれたのは、ネッドおじさんの墓に納まっているこのよそ者のことではなかった。妙な話だが、みなの怒りは一様に、コリンズ家のただひとりの末裔に向けられていたのである。彼の名前はアンビィ・コリンズ。俗世では善良なる、尊敬すべき人物として通っていた。

そしてまたもや奇妙なことに、この善良かつ尊敬すべき行いこそが、納骨堂の一族たちの怒りと不満の原因となっていたのであった。

「なぜ奴は、わしらをそっとしておいてはくれんのだ？」ひいおじいさんが嘆いた。「毎週毎週日曜日となると、降っても照ってもやってくる。わしらの頭の上をどしんどしん歩いては、花びんを立てるためにあっちこっちと掘り返す。わしらの名前を声に出しては、泣いて嘆いて、あれじゃあまるで泣き妖精のバンシーだ！」

「あの子は、それがいいことだと思ってやっているんですわ」母さんが答えた。(死んでからまだ間もないため、今もって生者の短所というものを覚えているのである。そのうえ彼女はアンディ・コリンズの母親だったので、いまだに彼に対して愛情らしきものを抱いていた)「それが死者を悼む時の、俗世の人間の習慣なんですもの」

「習慣だと！」ひいおじいさんが、かみつかんばかりに言った。「習慣だなどと悠長にかまえていられるのは、おまえくらいだぞ。ここに入って来たのも最後ならば、並んでいる場所も一番奥じゃないか。そんな場所じゃあ、あいつの騒々しい足音が聞こえるわけがない。あいつが足を踏みならして歩くのは、わしの頭の上なんだぞ。あいつが一時間もかかってほじくり返すのは、わしの棺の上なんだ。それも、良識のある人間なら、まだ寝ているような時間にだ。わしはずいぶんと長生きした。死んでからもずいぶんたつ。わしには休息が必要なんだ！」

ひいおばあさんがうなずく。「そうですとも、おじいさんには十分そうする権利がありますわ。このあたしだって、そうです。あたしの棺も一番上の方にあるんですからね。あの子の足音には、誰よりも悩まされてるわ」ひいおばあさんの皮ばかりになった頬を、二粒の涙が流れた。「おじ

いさんや、あたしはもぅくたくたですよ」

ひいおじいさんはその骨ばかりの体をちょっと動かし、右手で壁をこつこつ叩くと、大きくうなずいた。「そうとも、わしには休む権利がある」その声は、いかにもゆううつそうだった。

「わしには休息が約束されていたはずだ。生きている間、わしは一度も欠かさずに教会にいった。年に五十二回、日曜日ごとに八十年も通ったんだぞ。死後に約束されているという平和と休息の話を、かれこれ四千回は聞いたことになる。それがどうだ、このざまは？　わしのたったひとりの子孫が週に一回、悪意たっぷりにわしから永遠の眠りを奪いにくるとは！」

「はいはい、わかりましたよ」母さんが答えた。「ええ、あの子は確かにおじいさんを悩ませていますわ。それで、おじいさんはどうしようと――」そのあとの言葉は、どんどんと激しく何かを叩く音にかき消されてしまった。

「ウィリー！」母さんは金切り声をあげた。

「お棺を叩くのはよしなさい。壊すつもり？」

「ヤッホー！　ぼくは食屍鬼（グール）だ！」ウィリーの叫び声が返ってきた。「これから墓を略奪するぞ。さあ、どうだ！　ぼくは食屍鬼の頭（かしら）だぞ！」

＊注――小さな男の子は、死後妙ちきりんなことをたくさん覚えるものである。

「やめなさいって言ったでしょう」母さんが声を張り上げた。「やめないと、吸血鬼を呼びますよ」

＊注——死後の世界では、いくら小さな子供をおどかそうと全然問題はない。ありとあらゆる幽霊や化け物を引き合いに出しておどしても、心のねじけた子供に成長する心配は皆無である。ありがたいことに、彼らは大きくならないのだから。

ひいおじいさんは、浮かない顔で話を続けた。
「わしにもどうすればいいのか、わからんよ。だがとにかく、なんとか手を打たなければならん。アンビィの奴め。これじゃあまるで——奴に取り憑かれているみたいだ！」
「だったら、そいつに取り憑いてやったら？」ウィリーが八歳の子供ならではの、斬新な意見を出した。
みながいっせいに、感嘆の目をウィリーに向けた。お情けで納骨堂においてもらっている貧しい遠縁の親戚や、ネッドおじさんの永眠の場を横どりしたよそ者までもが。
「それがいい」十の声が、考えうる限りの完璧な調和で響いた。
「それがいい」ひいおじいさんが一族の初代として、大黒柱として——そしてついでに、コリンズ一族の中で独力で生計を立てた、最初で最後の人間としての重みを持ってくり返した。「まったくそのとおりだ！　奴はずっとわしらに取り憑いていた——今度はわしらが奴に取り憑く番だ。住む世界の違う人間につきまとわれるのはどんな気がするものか、教えてやろうじゃないか！少しばかりいのちの縮む思いをさせてやるとしよう」
「やりすぎないでくださいね」母さんがすかさず釘をさした。「あまりあの子に、寿命の縮むよ

うな思いをさせないでくださいよ」

「ああ、わかってるとも」ひいおじいさんは、鬼の首でもとったような笑いを浮かべた。「今までさんざんこっちのいのちが縮む思いをさせられたから、ちょっとお返しするだけさ。わしらが死にかけている時に味わった思いを、奴にも教えてやるとしよう。覚えているかね？

息が苦しくなって呼吸ができなくなり、骨が強く強く引っ張られて、関節がぬけそうになるんだ。それにあの、胸にずしっとのしかかってくる重み。どうだ、思い出したか？ 肋骨が折れて砕けそうになっただろ？ それに、心臓を**ぎゅーっと締めつけられる**ような感じ、あの**痛み**。心臓がいきなり破裂して、何者か知らんがぎゅーっと締めつけていた奴の手に、血がぱっと飛び散りそうな気がしたもんだ。それにあの、〈死の天使〉に導かれていった、身の毛もよだつ旅はどうだ。天使が羽ばたきするたびに、氷のように冷たい風が吹きつけてきただろう。まだあるぞ。ここへ来る前に渡った、ぬるぬるしたどす黒い川。気味悪い爬虫類がうようようごめいて、こっちがボートから落ちるのを待ちかまえていたもんだ。そうとも。大丈夫さ、あいつを脅しすぎたりはせんよ。ほんのちょっぴりだけだ。死ぬというのはどんな感じがするものか、〈死〉を成就した後にはどれほど休息がいるものか、知ってもらうだけだ。奴が日曜日の朝ごとにわしらの頭の上を歩き回り、あの毒々しい花を置いていくのをやめてくれれば、それでいい。ただそれだけのことだよ」

ひいおじいさんはにやりと笑った。いや、生きている者ほどはっきりにやりとは笑えなかった

が、とにかくみんなには、ひいおじいさんの気持ちは十分伝わった。
　その日は金曜日だった。しかし、花の金曜日の夜だというのに、アンビィ・コリンズの心は晴れなかった。シャーロットがまたもあのことでぶつぶつ言い始めたのだ。前々からの、お決まりの問題——ルルのことだった。だがアンビィとルルとが間違った関係にあるなどとは、お思いにならないように。そんな関係ではないのだから。ふたりには、ある共通点があった——ふたりとも、霊媒だったのだ。ただそれだけのことである。ふたりには繊細な精神面での類似点があるだけで、シャーロットがそれに嫉妬するのは、邪道というものだった。だがとにかく、それが事の始まりだったのである。
　アンビィ・コリンズは、善良かつ尊敬すべき人物だと思われていた——そう、世間的には。しかし、妻のシャーロットの判断によると、欠点だらけの男だった。洋服は脱いだら脱ぎっ放し、そのままベッドにもぐりこむし、良識ある市民として恥ずかしいほどの入浴嫌い、おまけに指の関節をぼきぼき鳴らしては、彼女をいらいらさせる。何より悪いことには、〈それはぼくの勝手〉と彼が感ずるプライベートな問題に関しては、どんな質問を浴びせられても、ひどく腹を立てていきまくのである。
　だからといって、彼が不作法な男だというわけではない。どうぞ誤解なさらないように！　彼はコリンズ家の伝統に従って、債券の利札を現金に換えながら、日々の生計を立てていた。祖先がそれだけの債券を買うことができたのも、すべてはひいおじいさんのビール醸造所（とっくに

売り払われている）のおかげだった。そして毎日株式取引所に足を運んでは、大事な虎の子が増えたり減ったりするさまに一喜一憂している人々を眺めて過ごしていたのである。そんな彼が、シャーロットに言わせれば許すまじき行いに及ぶのは、一日のうちたった三十分にも満たなかった。その行いというのはほかでもない、株式仲買人の事務所を出たあと角のドラッグ・ストアに寄って、鋭気を養うためにアイスクリーム・ソーダを注文するという、ただそれだけのことなのだ。それをシャーロットは非難した。目をつり上げ、親の敵にでも出会ったような形相で！

それというのも、ある日たまたまシャーロットが、四時ちょうどにドラッグ・ストアの前を通りかかり、アンビィの姿を目撃したからであった。アンビィはうわの空でアイスクリーム・ソーダをすすり、心を奪われた様子でルルの姿を追っていたのである。（それはちょうど、アンビィとルルがお互いに心惹かれていることを意識し始めた頃であった）それ以来シャーロットは、アンビィが飢えという苦痛を癒すためにいかにアイスクリーム・ソーダが必要であるかと力説しても、頑として信じようとしなかった。正直な話、アンビィにしてもそれほどアイスクリーム・ソーダが必要なわけではなかった。彼が必要としていたのは、ルルの方だったのだ。心の安らぎを得るために、明日への士気を鼓舞するために、そして、〈死後の世界〉の実態について共に語り合うために。ルルとアンビィは、どちらも〈来世〉というものを信じていた。どちらも自分たちが霊媒だということを知っており、いつの夜か心やさしい幽霊が現れて、ふたりにはいまだ謎に包まれたままの様々な疑問を解き明かしくれるのを心待ちにしていたのだ。そしてふたりはごく

近いうちに、いっしょに交霊会に出る約束になっていた。
それでこそアンビィの日々は生きる希望にあふれていたのに、鬼婆シャーロットがふたりのことに口出しし始めたとあって、彼はひどく腹を立てていた。実を言うと、彼は内心少しばかり妻を恐れていた。そして、ある意味ではルルを愛していた――非常に次元の高い、精神的な意味合いにおいて。だがシャーロットを相手に離婚話を切り出そうとは、夢にも思っていなかった。第一、彼女を離縁できるような、格好の理由が見つからなかったのだ。シャーロットといっしょになったのは、魔がさしたとか言いようがなかった。彼は霊媒だが、彼女はそうしたものとは縁もゆかりもない。言ってみれば、彼には奥深い高邁なる天分が備わっているというのに、彼女ときたら、一寸の虫はおろか、シチュー鍋ほどの志も持ち合わせていなかった。
「もし、シャーロットが死んでくれたら――」こっそりとそんなことを考えてみることもあった。草木も眠る丑満時、神様も疲れてお休みになった頃を見計らって。そうすれば、彼は晴れて自由の身となり、ルルとともに心ゆくまでふたりの知的好奇心を追究することができるのだ。そうすれば、日々の暮らしは昼も夜も満ち足りたものとなるだろう。そう、ふたりの未知の可能性など、誰が予見できよう？　ふたりの精神が束縛を逃れ、自由になった暁には、彼とルルとで幽霊を呼び出すことさえできるかもしれないのだ。
こうしてその金曜日の夜、アンビィが株式取引所から疲れて帰って来ると、またもやいつもの

同じ問題が蒸し返されたのであった。彼はチョコレート・ソーダを注文し、さらにバニラシェイクをも飲んできた——その日、ルルはいちだんと魅力的だった。そういうわけで、彼の心は羽根のように明るく軽く、元気はつらつとしていたが、お腹の方はどっしり重く、とても夕食を食べる気分ではなかったのだ。アンビィの食べ方を見てシャーロットはいち早くそれを察知し、例によって例のごとく、夫に叱言を言い始めた。（その日は運悪く、メイドが休みだった。シャーロットが腕によりをかけた手料理をさっきから突っつき回しているだけのアンビィを見て、彼女は腸が煮えくりかえる思いだった。それもこれも、すべてはあの——あの小ダヌキのせいなのだ！——あのドラッグストアのカウンターの後ろにいる——娘っ子のせいなのだ！）

「どうやら、うちに帰る前にチョコレート・ソーダを飲んできたみたいね」彼女は嫌みたっぷりに言った。

「ああ」

「さぞかし、お腹がすいてたんでしょうね」

「ああ」

「あまりお腹がすいていて、物も言わず、グラスから目も上げずにソーダを飲んできたわけね」

アンビィが、ぐちゃぐちゃに混ぜた食べ物の皿から目を上げた。「いいや」彼は冷ややかに答えた。「別に物も言わずに飲んでたわけじゃないさ。なぜ、そんなことを聞くんだ？」

シャーロットの頬がさっと赤くなった。これは、予期していたより苦戦を強いられそうだ。ア

ンビィはいまだかつて、カウンターの後ろの甘ったるい色キチ女と話したことなど認めたことがなかったのに。
「なぜって」彼女はカッとなって言い返した。「わたしにはちゃんとわかってるんですからね、あなたが裏で何やらこそこそやってることくらい。あなたが嘘つきの女たらしだってこと――それにあなたが株式仲買人の事務所から、アイスクリーム・ソーダ以外のものが目当てで、毎日そこに通ってることもね」
アンビィはナプキンを放り出して、怒鳴った。「この嘘つきめ！」
「あんたこそ、けだものよ！」シャーロットの小さな黒い目がキラッと光った。「人でなし！女をたぶらかす極悪人！　あんたの思いどおりになんてさせないわ。絶対に離婚はしませんからね。絶対によ！」
それは、アンビィがかねがね恐れていた言葉であった。おそらく、だからこそ一度も話題にしたことがなかったのだ。しかし今、彼女の方からその問題を持ち出してきたからには、できるだけぶつかってみるべきだろう。「ぼくは善良なる市民だ」彼はそう切り出した。（以前、ほんのちょっと知り合っただけの人にそう言われたことがあったのだ。その人は、アンビィがルルとシャーロットとの二股をかけているとは、思いもよらなかった。日曜日ごとに欠かさずコリンズ家の墓参りをしている彼を見て、そう言ってみただけのことなのである）「でもおまえがそんなふうにぼくを見ているのなら、お互い違う道を歩む方がよさそうだな」彼は断固たる決意を秘めて、

親指を鳴らした。

この際指を鳴らしたことなど無視して、シャーロットは作戦を変えた。彼女にはわかっていたのだ。アンビィを失ったら、この先二度と結婚相手は見つからないだろうと――洗濯板みたいにがりがりで、おまけにひどい寄り目だったから。「アンビィったら！」彼女は、いきなりわっと泣き出した。「ひどいわ、あんまりよ！　どうして平気でそんなことが言えるの？　わたしたちの結婚を、わたしたちの生活を、わたしたちふたりの愛を切り裂こうだなんて」

〈愛〉という、まさにその言葉が引き金となった――アンビィは突如としてネズミからライオンに変身したのだ。その聖なる言葉はシャーロットの薄い唇にのぼったとたん、あらゆる輝きを失ってしまった。

「愛だと！」彼は鼻で笑った。「おまえにはその意味がわかっていないんだ。おまえなんか肉と骨と――それに胃袋の寄せ集めじゃないか！　おまえには精神というものがない――ただのひとかけらもだ！　おまえの――おまえの精神は――安ステーキ並みだ！」

「だったら――だったら、あの女はなんなのよ？　あのドラッグストアのバカ女は！　何の取り柄があるっていうの、聞かせてもらおうじゃない！」

アンビィは微笑みを浮かべた。ひそやかな、謎めいた微笑みを。話し始めたその声は優しく、限りない郷愁にあふれていた。「この世には、おまえには想像もつかない世界があるんだ」彼は囁くように言った。「そう、ほかの世界――精神の世界、魂の世界が。我々はすべてそこから来

た。そしてそこへ帰っていくんだ。死者は生者とともに歩み、語らう。生者は死者とともに眠り、会話を交わすのだ」
シャーロットは、ひどい寄り目を精いっぱい見開いて夫を見つめた。今の今まで、アンビィにこんな面があるとは知らなかった。指を鳴らしたり、入浴を嫌がったり、債券の利札をお金に換えてくるアンビィならよく知っている。だが精神を語る、霊的なアンビィなど、見たこともなかった。気でも狂ったのだろうか？　ずっと以前から、そんな考えを抱いていたのだろうか――それともたった今、ルルとのことを追求されてそんな狂言を思いついたのだろうか？
「幽霊は実在するんだ」アンビィは続けた。「目に見えない霊が、常に我々と共にある。神のみぞ知ることだ。おそらく、今だってここに霊が――」突然、アンビィの声が途切れた。さるぐつわでもはめられたみたいに声を詰まらせ、あえいでいる。もちろん、彼が話すのを邪魔しているものなど何もない。それなのに、声はひとことも出てこない。そのうえ、彼が必死でしゃべろうとしていることは、その白黒させている目を見ただけでも一目瞭然だった。
シャーロットはコップに水を入れて、夫に突き出した。彼はすぐにそれを口に運んだ。が、唇のすぐ手前でぴたりと止まってしまった。何かが間にはさまっているような気がする。しかし、いったい何だろう？
「飲みなさいよ」シャーロットが促した。
「ひいーっ！」アンビィはわけのわからない返事をした。

「いったい、どうしたっていうの？」シャーロットが金切り声を上げる。
「教えてやれ」そう言うとひいおじいさんは、アンビィの口から手を離した。
そう、それこそひいおじいさんの仕業だったのだ。アンビィの、目に見えない霊の話を証明するのにちょうど間に合ったおじいさんは、残念ながらルルの話は、紙一重の差で聞き逃してしまった。
アンビィはくるっとふり向いた。「ひいおじいさん！」思わず叫ぶ。「ほんとにおじいさんなんですね？」
「ほんとに誰だって言うの？」シャーロットが聞き返した。（おわかりのように、霊的なアンビィにはひいおじいさんが見えたが、あいにくと安ステーキ並みのシャーロットには見えなかったのである）
「おじいさんだよ、ひいおじいさん。〈もう一つの世界〉から戻って来たんだ。こいつはすごいぞ！　すばらしい！　しばらくここにいてくださいね、ルルに教えるまで」興奮しすぎて、アンビィはついうっかり口をすべらせてしまった。妻の前で〈もうひとりの女性〉の名を口にするという、タブーを犯してしまったのだ。
「おやまあ、アンビィったら」さすがのシャーロットも、度胆を抜かれたらしい。「ちょっと、とにかく座ったら」
「うん、とにかく座ろう」アンビィは消え入りそうな声で答えた。そしてちゃんと椅子に腰をお

ろした――つもりだった。だが、尻が椅子につく直前に、椅子は消えていた。ひいおじいさんが引っ張ったのだ。アンビィはどしんと音をたててちゃんとしていない場所、すなわち床に尻もちをついた。

そしてまたしても、顔をまっ赤にして声を詰まらせていた。口をふさいでいるものは何も見えないのに、手足をばたばたさせ、しゃべろうとしても声が出てこない。やっと出た声も、とても人間のものとは思えなかった。「ふがっ、ふぎゃっ」まるで発情した猫のようだ。「あー、うー」翻訳すると、「放せ、いい加減にしてくださいよ、おじいさん！」という意味である。

しかし、もちろんシャーロットには、その意味がわからなかった。彼女の目に見えるのは、気のふれた、てんかんらしい男だけ。床の上をのたうち回り、足を蹴り上げては必死でもみ合っている――相手などいないのに！（はてさて安ステーキ並みの精神というのは、時として決定的なハンディになるらしい）

ようやくアンビィは立ち上がり、今一度自由にしゃべれるようになった。シャーロットに背を向け、ひいおじいさんと向かい合う。「さてと！　ひいおじいさんのおいたもおしまいのようですから、改めて訪問を歓迎しますよ。おじいさんに会えるなんて、夢のようです。それに、とても元気そうじゃないですか」

（ひいおじいさんがまあまあ元気そうに見えたことは、確かだった。ひいおばあさんがていねい

にあごひげを梳いて墓地の土やかびを落としてくれたし、埋葬の時の服は戦争前の品物だったため——言うまでもなく、南北戦争である——生地が本当にしっかりしていて、驚くほど長持ちしていた)
「わしが元気でいるとしたら、まさに奇跡だな」ひいおじいさんはむっつりと答えた。「なにしろ、ほとんど休んでいないんだ」
「きっといろいろと忙しいんでしょうね——おじいさんのいる世界では」
「必要以上に忙しいね」ひいおじいさんは意味ありげに答えた。
シャーロットは、ただただ仰天して聞いていた。霊感などというものはおよそ持ち合わせていない彼女には、会話の半分、つまりアンビィがしゃべっていることだけしか聞こえなかったのである。「いったい——誰と——話してるの？」きつく夫に問いただした。
と、アンビィが誰かにつねられたみたいに飛び上がった。実際、つねられたのだ。ひいおじいさんは意地悪そうにくすくす笑った。
「これで、少しはおまえにもわかっただろう」
「わかったたって、何がです？」
「取り憑かれるということが——休息を奪われるということが、どんな気持ちのするものか」
一瞬アンビィは、自分とルルが〈あの世〉に興味を抱いていることで、ひいおじいさんが憤慨しているのかと思った。だがすぐにそんなことはありえないと思い直し、とにかく今の言葉は無

視することに決めた。「ねえ、ひいおじいさん」彼はなだめるように言った。「謎かけみたいな話し方はよしてくださいよ。それより、どうやってここへ来たんです？　壁を通り抜けるのは、大変なんですか？」
「わしは、ここにはいない」ひいおじいさんは言った。「あれだけ厚い石壁から外へ出られるのは、ジョージア一の脱獄犯くらいのもんだ。おまけにドアには、ごていねいに二重の錠までついている」ひいおじいさんは、すねたようにつけ加えた。「おまえは、わしが絶対に抜け出せないようにあの納骨堂を作ったらしいな」
「でもひいおじいさんは、現にここにいるじゃないですか」アンビィは言い返した。「ぼくにはちゃんと見えますよ」
ひいおじいさんが、いらただしげに答える。
「いないといったらいないんだ。わしは今もあそこにいる。わしの棺の中にな！」
「だっておじいさん――」
「いいか、アンビィ。おまえはフロイトの、幻覚症状についての学説を読んだことがあるな？」
「ええ、でも――」
「それがそのまま、おまえに当てはまるんだ！」
アンビィは深く息を吸いこんだ。「でも、ひいおじいさんはフロイトの本なんて読んでいないはずですよ。おじいさんの生きてた時には、英語に翻訳されていなかったじゃないですか」

「読んだとはひとこともいっておらん」ひいおじいさんがいきりたつ。「とにかく、おまえは読んだんだろう。それで十分だ」
「つまり、ここにいるひいおじいさんは幻覚であって、幽霊ではないということですね？」アンビィは、確かめるようにゆっくり言った。
「どう違うっていうんだ？」ひいおじいさんはどうだっていいという様子で答えた。「わしにはわからん。おまえはいろいろと本を読んでいるんだから、そのくらいわかるはずだ」
しかしながら、シャーロットとて、無視されていつまでもおとなしく黙っているわけにはいかなかった。
「アンビィ」かん高い声で夫の注意をひく。「ひとりごとはよして」
その時、玄関のベルが鳴った。しかし、シャーロットはアンビィをひとりにしておくのが不安で玄関に行くのをためらっていたし、アンビィはアンビィで呆然と妻を見つめていたため、ベルに気づきもしなかった。そこで結局、ひいおじいさんが出ていった。
「ひいおじいさんの姿が見えないっていうのかい？」アンビィは、とても信じられないというように訊ねた。
「もちろん、見えないわ。あなたにだって、何も見えてないのよ！」
「声も聞こえないんだね？」アンビィは食いさがった。
「あなたの狂ったひとりごとなら、さっきからずっと聞かされてますけどね」

ってたっけ」

「ブラボー！」アンビィが叫んだ。「じゃあ、ぼくは本物の霊媒なんだ。ルルも、いつもそう言

シャーロットの視線にアンビィがふり向くと、牧師が立っていた。紙のように白い顔をして体を震わせ、額の汗をぬぐいながら壁によりかかっている。

「いったい誰が、ドアを開けたんです？」牧師がうわずった声で訊ねた。

「わしだ」ひいおじいさんが答えた。

しかしあいにく、霊の声に対しては牧師の精神も安ステーキ並みだった。ドアの側に立っているひいおじいさんの姿も見えなければ、その声も耳に入らない。牧師がじっと返事を待っている様子を見てとって、アンビィが代わりに答えた。

「ぼくです」

「しかし——しかし、あなたはここにいたじゃないですか」

「ちょっとした手品ですよ」アンビィが軽く受け流す。「ひいおじいさんに教わったんです。姿も見られず、気配さえ気づかれないよう、光のごとき速さで動けばいいんですよ。さあ、お掛けください、牧師さん」

牧師は座った。さっきのアンビィと同じく、床の上に。（ひいおじいさんは古い世代に育ったので、あまり新しい芸を知らなかった。たとえば人の靴の間にマッチをはさんで点火させる〈ホ

ット・フット〉といういたずらが、彼の生前流行っていたかどうかは、はなはだ疑問である。それゆえひいおじいさんにとっては、人が腰をおろす直前に椅子を引き寄せるといういたずらは、たいそうモダンなユーモアだったのである)

それだけではない。ひいおじいさんの胸に今、日曜日ごとに教会で聞いた、死後に約束された永遠の眠りのことが、そしてそれにもかかわらず、日曜日ごとに早朝からアンビィに叩き起こされている現実が甦ってきたのだ。そしてその衿のカラーから客が牧師だと知って、日曜ごとの説教の、せめて一回分だけでもお返しさせてもらったわけである。

シャーロットがあわてて牧師を助け起こし、その間アンビィはしっかりと椅子を支えていた。

「もうたくさんですよ、ひいおじいさん」アンビィは言った。「どうしてもいたずらしたいのなら、このぼくにしてください。お客さんにまでそんな――」いきなり口をふさがれて、彼は息を詰まらせた。ひいおじいさんが、アンビィの言葉を真に受けたのだ。

突然、ぴしゃりと大きな音がした。

「アンビィ！　指を鳴らさないでちょうだい」シャーロットが注意した。

アンビィは片手を頬に当てた。その手をはずすと、そこには耳から頬にかけて、五本の骨ばった指の跡がくっきりとついていた。

「ひいおじいさん」彼は泣きそうな声で頼んだ。「お願いだからやめてください。ぼくがいったい何をしたのか――」だが、最後までは言えなかった。そしてひいおじいさんのいたずらも、こ

れが最後ではなかった。アンビィはまたもしゃべろうとして、もがいている。
牧師はまじまじとアンビィを見つめ、後ずさりしながら訊ねた。「どうなさいました、コリンズさん。ご病気ですか？」

アンビィは、もういっさい口を開かないことにした。黙って首を横に振り、部屋の向こう側に歩き始める。が、その足が途中でもつれたかと思うと、まるで牛に向かっていく闘牛士のようなすり足になった。とはいえ、もちろん牛の方へでもなければ、どこへ向かっているわけでもない。ただ同じ場所に立ったまま足をすり、何もないのにつまずいたのだ。カーペットは完璧に平らで、しわひとつなかった。くつひもはちゃんと結んであるし、くつ下はきちんとくつ下留めでとめてある。肉眼には何一つ、彼の歩行を妨げるものはない。にもかかわらず、確かに妨げられている様子だった。
「痛い」彼は叫んだ。「どかしてくださいよ！　何です、それは？」
「有刺鉄線だよ」ひいおじいさんがくっくっと笑った。「あの納骨堂を建てた奴が、そのまま置いていったんだ。いつか役に立つと思っていたよ」
「なるほど。じゃあ、そこに戻しておいてください。ついでにおじいさんも、お戻りになってほしいですね」
「だから、わしは**あそこ**にいるんだ」ひいおじいさんが答えた。「この有刺鉄線だって、そうだ。

忘れたのかね、それはフロイトの幻覚症状で――」
「帰ってください！」アンビィは声を張り上げた。
「ちょっとちょっとコリンズさん、いったい誰と話してるんです？」牧師がたまりかねて口をはさんだ。
シャーロットはますます仰天して目を見開いていたが、ふとある考えを思いついた。「アンビィ」やさしく夫に話しかける。「ここにはわたしたちしかいないのよ。さあ、こっちへ来て座ってちょうだい。レモネードでも作ってくるから、牧師さんとお話していて」
アンビィはそっちへ行った。そして座った。だが、お話するわけにはいかなかった。何かしゃべろうとするたびにひいおじいさんが見えない手で口をふさぐので、声が出なかったのだ。牧師は精いっぱい、一方通行の会話を試みた。お決まりのお天気の話に始まって、教区内の信者たちの近況をくどくどと並べあげたあげく、ついに本題を持ち出した――それは教会の増築のために寄付を集めているという話だったが、実を言うと、牧師はその金の一部を自分の懐に収める算段だったのだ。牧師がアンビィに向かって率直に寄付を頼むと、ひいおじいさんは考え深げに手を放し、その間にアンビィはどうやら「イエス」と答えることができた。
牧師は書類を出し、アンビィはサインをした――金額は二百ドル。ということは二十ドルが牧師の臨時収入となるわけであり、ひとりの教区民の寄付金としては、とてもそれ以上望めないほどの額だった。そこで牧師は立ち上がり、暇を告げた。もうレモネードは飲みたくなかった。こ

の上そんなものをご馳走になっていては、消化不良をおこしそうだ。どっちみち、シャーロットはレモネードなど作っていなかった。弁護士に電話をしていたのである。

日曜日の朝となった。納骨堂の中はひっそりと静まり返っていた。そう、午前九時までは。それから頭上をばたばた歩く音が聞こえ、あちこちを掘り返す音が響き出した。間もなく、どしんと激しい衝撃があった。花の入った花びんを、どこかに落ち着けたらしい。さてそれがすむとアンビィは、ゆったりと納骨堂の上を行きつ戻りつ、故人の美徳を声に出して語り始めた。

「お母さん、お父さん。愛するおじいさんとおばあさん。そして、子孫のために財産を残してくれたひいおじいさん。ぼくにいつもペパーミント・ドロップをくれたひいおばあさん——ぼくをひざに乗せて遊んでくれたネッドおじさん——」アンビィはそうやって、一族の名をひとりひとり呼んでは、その思い出を語り続けた——ほかに行き場所がなくてみなのお情けで納骨堂にいる貧しい遠縁の親戚や、生前はずっと嫌っていた小さなウィリーのことまでも。やがてついに、ひいおじいさんが癇癪(かんしゃく)をおこした。

「さっさと消え失せろ、このばか者」彼は怒鳴った。「出て行け！　頼む、わしを眠らせてくれ！」

しかし、きょうに限ってどういうわけか、アンビィにはひいおじいさんの声が聞きとれなかった。幻覚症状が軽くなったのかもしれないし、ひいおじいさんの声が弱すぎて、ふたつの世界の

境界はおろか、ふたりを隔てている石と土の層をさえ越えられなかったのかもしれない。あるいは、アンビィの霊力が全然働いていなかったとも考えられる。口でこそ故人の死を嘆き悲しんでいたが、心の中はルルへの思いでいっぱいだったのだ——それも、決して精神的な次元ではなく！

というわけで、ひいおじいさんがどれだけ怒って罵ろうとも、アンビィは露とも知らずに朗々と故人への感謝の思いを語り続けていた。なぜならこの日曜日、アンビィは言葉に尽くせないほどひいおじいさんに感謝していたのだ。ほかでもないひいおじいさんの幻覚が出たあの金曜の晩、シャーロットはそそくさと家を出てしまい、離婚手続きもすでに着々と進みつつあったからである。シャーロットはシャーロットで二つの事実を周到に天秤にかけたあげく、気違いの夫と暮らすよりはこの先ずっとひとり暮らしをした方がましだと心を決めた。それにアンビィが狂っているということ自体、彼がシャーロットよりルルに惹かれた理由を十分説明している。かくしてプライドを傷つけられることもなく、あの指を鳴らす耳ざわりな音ともさよならして、別居手当で一生不自由なく暮らせる身分を選んだのであった。

それゆえアンビィの心は、シャーロットに離婚を決意させてくれたひいおじいさんへの、愛と感謝でいっぱいだった。こうして彼は故人の死を嘆き悲しみ、その泣き声に、ひいおじいさんはますますいきりたった。ひいおばあさんはあまりの騒々しさにひどい頭痛がすると言い出し、「死者のように安らかに」という説教の文句はいったいどういう意味なの、と嘆いた。とうとう小さ

なウィリーも目を覚まし、棺から飛び出して、ネッドおじさんの替え玉を相手に〈吸血こうもりごっこ〉をやりだした。ネッドおじさんの替え玉は手を振ってウィリーを追い払い、自分とネッドおじさんの骨を混ぜてこんな場所に安置した人々を、心から呪った。そしてオールドミスのパンジーおばさんは、こう言って嘆くのだった。「わたし、その人と結婚していればよかったわ――わたしには不釣り合いな相手だったかもしれないけど――それでもこんな所ではなく、その人の家族の納骨堂に入れてもらえたでしょうに。そうすれば約束されていた永遠の眠りも、少しは味わうことができたんだわ」

貧しい遠縁の親戚は、ひとことも言葉を発しなかった。結局彼らはお情けでこの納骨堂に置いてもらっている身分だったし、もし思ったことを口にしていたら、コリンズ家の死者一同がぎょっとなったことは確実だったから。

とにかく、アンビィはそうして嘆き続けた――九時からたっぷり十二時まで――そして黒い帽子をかぶり、車に乗りこんで、ドラッグストアへと向かっていった。

彼はルルと交霊会に出る約束だった。でも、それはキャンセルしよう。代わりに湖のほとりに車を停め、ふたり静かに水入らずの時を過ごすのだ。

聖家族

THE FAMILY

マーガレット・セント・クレア

Margaret St. Clair

「デイビットは真剣にその女(ひと)を愛しているのかもしれないわ」母さんは、心を決めかねるように口を開いた。「おまえたちだって、この子を悲しませたくはないでしょう」

ケイトが頭をのけぞらせて笑いだした。長い、鋭い歯がランプの光に冷たく輝く。「もちろん兄さんは彼女を愛しているわ」ケイトはしわがれた声で言った。「切ないほどに、命を賭けて愛しているのよ。でなかったら、どうして彼女と結婚したがると思う？」肋骨のようにむき出しになったたる木造りの暗い天井に、ケイトの声が反響した。「彼女と結婚……彼女と結婚……」

「ケイトはいつだって、兄さんの心配ばかりだな」部屋の向こう側から、ランスが口をはさんだ。ランスロットはひどくやせこけている。いろいろな人々を見てきたデイビットも、彼ほどのやせっぽちは知らなかった。「間違えないように注意してもらわないとね。ぼくたちの家名はヴルセックだよ。ボルスング家（十三世紀の伝説に登場する一族。若者シグルドが幾多の冒険で危険に立ち向かう）とは違うんだ、キャサリン」

どっと笑い声がおこった。みなはすぐにランスのジョークを解して、愉快そうに狎(な)れあった視線を交わし合っている。が、ひとりケイトだけは、不満そうに喉を鳴らしてこのジョークを無視

した。
「悪気があったわけじゃないんだ、キャサリン」ランスはあわてて弁解した。「そんなつもりで言ったわけじゃない。だって、もうずっと前からみんなが了解していることじゃないか——ぼくたちの中で一日以上外の世界で過ごせるのは、デイビットだけだって。それに、デイビットは確かに異性を惹きつけずにはおかないような強烈な魅力を持っている。でもだからって、妬んでいるわけじゃないんだよ。何をしようと、デイビットはいつもぼくたちのためにやってくれているんだから」
「でも、もしこの子が真剣に彼女を愛しているのだとしたら——」母さんは両手をおおっているすり切れた緑色の布を見つめながら、くり返した。「もし、この子が真剣に……」
見かねて、当のデイビットが口を開いた。「確かに彼女には好意を持ってるよ」彼は素直に白状した。「今までの誰よりも、彼女が好きだ。でもだからこそ、いっそうの価値があるんだよ。ランスが言ったように、どんなことだろうとぼくはみんなのためにやっているんだからね」
「おまえはほんとにやさしい子ね、デイビット」母さんは微笑んだ。「おまえがいなかったら、わたしたちはどうなっていたことやら。もう長いことずっと、おまえは家族に尽くしてきてくれたもの」
その言葉に、一同は心からうなずいた。デイビットは喜びと誇りにさっと頬を染めた。かけがえのないぼくの家族。それ以上に大切なものなどあるだろうか、たとえ愛するエレーヌであって

も？

「トラブルなんか起こらないわよね？」ミンナが気づかわしげに訊ねた。「二年前は、ひと騒動だったじゃない」

「大丈夫、心配いらないよ」とデイビット。

「デイビットがお膳立てしてくれたんだもの、大丈夫よ」ケイトが、愛情のこもった声で言った。

「ああ、デイビット。日に焼けて、たくましくて、そのうえとっても頭がよくて。お兄さんに任せておけば、何もかも心配ないわ」ケイトはデイビットのそばに行くと、半ば目を閉じて、そっと兄の肩に頭をもたせた。デイビットは顔を輝かせ、手を伸ばすとこわばった短い髪をなでてやった。彼は心からケイトを愛していたのだ。

「それで、彼女はいつここへ――？」母さんがすっと椅子から立ち上がった。

「あしたの晩だ」

翌日、家族の者はみな息を詰めて彼女を出迎えた。デイビットが連れてくる相手を迎える時は、いつも緊張の一瞬なのだ。もちろん母さんが空気を入れ替え、塵を払い、床を磨いて家じゅうを掃除してはおくのだが――それでも、この家の奇妙な雰囲気まではぬぐえなかった。二年前、あの世話の焼けるじゃじゃ馬娘が来た時などは、家に入るなり鼻をくんくんさせて、変な匂いがすると言い放ったものだった。しかし、エレーヌは物静かに落ち着いてドアをくぐった。どうやらこの家が気に入ったらしい。

「彼女の着替えを手伝ってくれ、ケイト」デイビットは階段の上まで妹を引っ張っていって、頼んだ。「彼女、おまえの目がかわいいってほめてたよ。でもいいかい、決して彼女の前でそのバンダナをはずしてはいけないよ。へたに怯えさせたくないんだ」

「わかったわ」ケイトは熱心にうなずいた。

「ああ、デイビット、彼女ってとても感じのいい人ね。ひと目で好きになったわ。わたしのことも気に入ってくれたみたい」喉を震わせながら、ケイトは続けた。

「そりゃあ、よかった！」デイビットは軽く妹を押しやった。「さっきの注意を忘れないようにね」

地下室では何もかも準備が整っていた。祭壇には黒い垂れ布がかけられ、黒い蠟燭と大きな真鍮の器が置かれている。デイビットの身内に、感謝の気持ちがこみあげてきた。すべてが順調に進んでいる。あくまでも気品を失わず、荘厳に。もめごとは起こしたくない。完全を期したかった。例のじゃじゃ馬娘の一件は、伝統ある儀式にぬぐいがたい汚点を残してしまった。だが、今夜はそんなことは起こるまい。彼の心は、安らかな確信に満たされていた。

デイビットが祭壇の前にひざまずいているところへ、母さんが降りて来た。「ヒヨス（麻酔用の毒性植物）を忘れていたのよ。ミンナが注意してくれてね」そう言うと、棚から緑がかったまだら模様のついた、陶器の太いびんを取り上げた。「デイビット、おまえ、本当に大丈夫？　エレーヌを諦めるのは、辛すぎるんじゃない？」

「いや。かれは——」デイビットは祭壇の方にうなずいてみせながら——「それでこそ、いっそう喜んでくださるだろう」

「そうね」母さんはいたわるように、冷たいぎざぎざした鋸歯状の手に息子の手をとった。「わたしのかわいいデイビット」

その夜、晩餐の席でのエレーヌは、すばらしいのひとことに尽きた。ゆったりとくつろいで飲み、食べ、ランスの冗談に朗らかに笑い、母さんの手には何も気づいていないようだった。それに、なんという美しさ！　その肌は黒いドレスに映えて象牙よりも羊皮紙よりも白く艶やかに輝き、唇は濡れたような深いワインレッドで、豊かな黒髪はサテンのような光沢を帯びていた。

給仕をつとめていたケイトも、すっかり彼女に魅せられてしまった。一度、自分の立場も忘れてそっとエレーヌにすりよってしまったほどだ。するとエレーヌは顔を上げ、愛情に満ちた眩しい微笑を返してきたのだった。

そしていよいよ、微妙なひと時が訪れた——たとえエレーヌがヒヨスの毒で半ば催眠状態になっているにしても、母さんが地下室へ降りようと誘うその瞬間は、限りなく微妙であった。だがエレーヌは、ごく自然に立ち上がった。まるで未来の義母というものは、夕食のあと花嫁を地下室に案内するのが習慣だとでもいうように。

地下室への階段は昨年修繕したばかりで、ぎしぎしという耳ざわりな音をたてることもなかった。ぴんと背筋を伸ばして降りていく母さんのあとを、エレーヌが優雅に続く。家族の者たちは

一列になってそのあとに続き、おしゃべりのミンナさえひとことも発しなかった。

　階段を降りきって、エレーヌは立ち止まった。この部屋こそ二年前、あのじゃじゃ馬娘が悲鳴をあげながら逃げまどった場所だ。みなは固唾（かたず）をのんで、緊張の一瞬を迎えた。（しかしそもそも、彼女を招じ入れたその時から、今夜は緊張の一瞬の連続なのだ。やがて訪れるもっとも微妙な瞬間、突き刺すような快感に満ちた最後のその瞬間まで）エレーヌはデイビットの方をふり向いた。「すばらしいわ。何もかもきちんと整っているのね」

　その言葉を発する前に、あの美しい瞳が驚きに見開かれはしなかったろうか？　デイビットはふと、そんなことを考えた。だがエレーヌは王家の娘のように物慣れた優雅な調子で語り、背後の者たちはさながら女王の忠実な僕（しもべ）のように、彼女の問いに答えては顔を見合わせ、誇らしげな笑みを浮かべていた。ただその目だけは一様に、闇夜の蝙蝠（こうもり）そのままに怪しく輝いてはいたが。もしかしたらこの昔ながらの地下室の内装は、彼女にとっては別段珍しくもないものだったのだろうか？

　もっとよく考えてみたかったが、すでに来たるべき時が差し迫っていた。エレーヌがゆっくりと祭壇の方へ進み出ていく。と、すぐさま家族たちの手がデイビットの背中を押した。それは現実に確かな手応えで彼の肉体（からだ）を押すと同時に、ひるむ彼の魂をも押しやった。礼拝者たちはゆっくりと舞うような足取りで進み、祭壇がじりじり後退していったかと思うとそこにぽっかり空い

た空間そのものが巨大な空気の渦となって回り始め、めくるめくような早さでふたりを呑みこんだ。次の瞬間、デイビットとエレーヌは再びどっしりした不動の床の上に立ち、ひきがえるをくし刺しにした十字架と向かい合っていた。

詠唱の声が低く柔らかく響いてくる。エレーヌは、肩にかけていたケープをするりと床の上に落とした。黒い蠟燭の灯りに、輝く大理石のようなエレーヌの肌が浮かび上がる。ピンを抜いた頭から漆黒の闇と見まごう黒髪が滝のように肩に落ち、それを目にしたケイトは（デイビットは視界の隅で、彼女の肉付きのよい体をとらえていた）思わず躍り上がりそうになって、感嘆の吐息を洩らした。

ああ、なんと麗しきエレーヌ。デイビットは彼女を愛していた。家族の誰もが彼女を愛していた。彼の胸を、刺すような鋭い感覚が貫いたが、それが苦痛なのか至福なのか、彼自身にもわからなかった。

詠唱の声がますます高まっていく。その時が来たのだ。半ば息を詰まらせながら、デイビットは自らをミサの司祭の役へと投じていった。言葉に尽くせぬ感情が身内にあふれ、大波のように彼の理性を押し流していく。溺れそうな激情のただ中にあって、デイビットは最後の気力をふりしぼって儀式の象徴と聖なる呪文にしがみつき、式典は驚くほど荘厳に淀みなく、そして目まぐるしい早さでクライマックスへと向かいつつあった。

ついにデイビットは、ナイフを取り上げた。「ひざまずいて」うわずった声でエレーヌに、こ

の世ならぬ美しさに輝くエレーヌに囁きかける。エレーヌはかすかに微笑み、そして、手を伸ばすとデイビットからナイフを取り上げた。

はたしてケイトの驚愕ぶりは？　いや、彼女は呻き声ひとつ洩らさなかった。不思議なことに詠唱の声は少しも弱まらず、デイビットがひざまずき、エレーヌがその喉の前に真鍮の器を掲げたその時でさえ、いやます力強い声が響いてくるのだった。

いや、それさえも不思議でも不自然でもなかったのだ。デイビットはこれまでずっと、家族にすべてを捧げてきたのだから。来る年も来る年も、彼は家族に尽くしてきた。そして、そう、今夜もまた自らの血をもって家族のために尽くすのだ。エレーヌが手にしたナイフがゆっくりと下りてくる。デイビットは目を閉じた。安らかな、満ち足りた気分で。

時を超えて

OUTSIDE OF TIME

キャロル・ジョン・デイリー

Carroll John Daly

私の愛称はL・Dことのらくら学部長（レイジィー・ディーン）。私はこの愛称を、敬意と愛情の証（あかし）と受け止めている。最初にそう呼び始めたのは、大学の学生たちだった。続いて教授たちもがそれに倣（なら）った。動作がのんびりしているためにこの愛称を賜ったわけで、別段私は怠け者ではない。確かに、日々世間をにぎわしているようなできごとには疎（うと）いが、それは人の読まないような本にばかり時間を割（さ）いているせいなのだ。

たとえば新聞で事件の記事を読んでいても、どうしてもその事件の水面下、すなわち活字に表れていない部分に興味をひかれてしまう。新聞の杓子定規（しゃくしじょうぎ）な説明を当てはめるより、もっと柔軟で適切な解釈のしかたがあるはずなのだ。そういうわけで、私には回り道をしながらのんびり人生を歩いていくのが性に合っている——そう、表街道から外れない程度に。

大学での教師生活にしても、非常に個人的な立場で楽しませてもらっている。私が熱心な聞き手であり、人の話を疑ったりしないためにいろいろな人が様々な話を持ってくるのだ。では、ありえないような話まで信じるのかって？　いや、ありえない話を信じたりはしない。私の辞書に

はもともと、〈ありえない〉などという言葉はないのだから。もちろん、〈ありそうもない〉と思うことはいくらでもあるが、だからといってそれを作り話だなどという気は毛頭ない。この世の中には、不思議なことがいくらでもあるものだ。

この大学には、なかなかおもしろい諺（ことわざ）がある。誰かが理性と常識ではとても信じられないようなことを口にするたびに、皆はこう言うのだ――「レイジィー・ディーンに話してこいよ」

そこで〈ありそうもない〉事件を見聞きした生徒たちは、必ず私のところへやってくる。教授たちでさえ、その例外ではない。バツの悪そうな顔をして、いかにもこれは冗談半分に話しているのだというふりをしながら――その実、ひそかに私の反応を伺っているのである。

おかげで私は、毎日目が回るほど忙しい。

だがパイプをくわえて腰をおろし、生徒たちが親友にさえ打ち明けられなかった話に耳を傾けるのは大いなる楽しみでもあり、ひそかな誇りでもある。

それは、あの夜も同じだった。私は誇りと期待に胸を躍らせながら、医学部のトミー・スレーターを待たせておいた研究所二階の自室のドアを開けたのである。トミーは中背でいくぶん細身の、健康に日焼けした青年だった。専門を極めようとか、外科手術に手を出そうとさえしなければ、理想的な主治医（ファミリー・ドクター）になれそうなタイプだ。おっとりとしていて人当たりがよく、そのブルーの瞳はやさしく親しげで、口元はいかにも陽気そうだった。これといって目立つ業績を残しそうな男ではなかったが、私に言わせれば腕のいい医者とはそうしたものなのだ。人間には、自然

の治癒力が備わっている。良い医者は患者を安心させ自信を与えるだけで、余計な治療はしないものだ。
見ると、トミーの目の下には隈ができていた。いつもちょっと笑っているように釣り上がっている口元が、心なしかわずかに歪んでいる。トミー・スレーターは今や、大学じゅうのヒーローとなっていた――もっとも当の本人は、一週間前にあの事件が起こって以来ぱったり大学に姿を見せていなかったが。いや、彼は大学ばかりかニューヨークじゅうの、アメリカじゅうの、さらには国際的なヒーローだった。新聞もラジオもこぞって彼のニュースを取り上げ、人々の口にのぼるのも彼の噂ばかりとなっていたのである。
私が時計に目を走らせたのを、彼は見逃さなかった。夜ふかしは毎度のことだったが、それにしても、もうあと五分で午前零時になる。
「やあどうも、お帰りなさい、L・D」トミーは無理して笑顔を作っているようだった。「先生なら、昼だろうと夜だろうと相談に来た相手を追い返したりはなさいませんよね。ええ、わかっています。もう夜もふけていますし、ぼくの話は長くかかりそうですが、どうぞごいっしょにパイプでもふかしながら付き合ってください」
トミーは私を手伝って、部屋の反対側にあった安楽椅子を火のそばに引き寄せた。身ぶりで座るように勧めても、私が腰をおろすまでじっと立ったまま待っている。それから私と向かい合っ

て座ると、暖炉の方に足を伸ばし、口に煙草をくわえて火をつけた。ごいっしょにパイプでも、というのが彼の口ぐせだったが、パイプをくわえているところなど一度として見たことがない。私はゆっくりと自分のパイプを詰めると火をつけ、トミーに笑いかけて彼が口を開くのを待っていた。

「先生が最近の新聞をお読みになっていると話がしやすいのですが」トミーは唐突に切り出した。「それとも、あの事件のことをもうお聞きになっていれば」

「もちろんだとも」私は答えた。「例の事件を扱った記事なら、片っぱしから読んだよ。写真も全部見たし――わざわざ二度もニュース・センターに足を運んで、ニュース映画を見て来たくらいだ。私の祝辞を受け取ってくれたと思うがね」

「祝辞をくださったのですか。でもあいにく、読んでいないのです」トミーは大きく息をついて、「実を言うと、あれ以来――その、文字通り何千、何万という手紙が舞いこんできましてね。何百人という女性が結婚してほしいと言ってくるし、金を受け取ってくれと書いてくる人たちもあとを絶ちません――かと思うと、まだぼくが受け取ってもいない金を巻きあげようという連中がうようよしている始末です。映画会社は目が回りそうな金を積んでぼくを映画にひっぱり出そうとしますし、あるナイトクラブなんか、ちょっとステージに立ってくれれば一万ドル出そう、なんて言ってくるんですからね」トミーはすっと上体を起こすと、赤々と燃える火の方に身を乗り出した。「ねえ、ぼくをよく見てください。疲れているように見えますか？――大学であまりに

騒がれすぎて、心身ともにすり切れてしまった、というような顔をしていませんか？」
「いいや、トミー。全然そんなふうには見えないよ」私は答えた。
「そうですか。よかった」彼は弱々しく微笑んだ。「実は、ストーン総長に会って来たんですよ――この大学を一手に治めている、あの畏れ多き総長殿にね。前に一度、遠くからちらっと見かけたことがあったんですが、なんだかぼくたちとは吸っている空気まで違うように見えました。その総長殿がですよ、足が埋もれるくらいふかふかのじゅうたんから降りてきて、わざわざぼくに握手を求めにお越しくださったんですからね」
「当然だよ」私はうなずいた。「君は随分と謙遜しているが、あれは非常に勇気ある行動だった――実に崇高な行動だ――大学じゅうの人間が君を誇りに思っているよ」
「ばかなことを」トミーのブルーの瞳がきらきらと輝いた。「ぼくはただ、あの場へ行って例の少女を空中で受けとめただけですよ」
「そうとも――君は新聞記者にもそう言ってたね。大学でもその話でもちきりだった。誰もが君のことを、実に謙虚な若者だと思ってるよ、トミー。大学当局は、君の態度を誇りに思っている。謙虚さという美徳は――」
「残念ながら、ぼくの柄ではないんですよね」トミーが口をはさんだ。「これっぽっちも謙虚なところがなくて、恥じ入っているくらいですよ。ええ、なんだか詐欺かぺてんでもやってるような気がするんです。だって、実際ぼくは、ただあの場に行って少女を空中で支えただけなんです

から」
「しかし、その娘は屋上のテラスから落ちたんだよ——それを君が受けとめたんじゃないか。まあ、かすり傷ひとつなかったというのは、多少新聞の誇張かもしれないがね」
「誇張なんかじゃないですよ」トミーは力をこめてうなずいた。「本当に、かすり傷ひとつ負いませんでした」それから急に真顔になると、「その娘が何階から落ちたか、記事で読みましたか？」
「うん——十四階だろう？　どうした、恥ずかしがることなんてないじゃないか、トミー。実に勇敢な、すばらしい行為だよ」
「十四階」彼はかみしめるようにくり返した。
「ぼくは両足を広げ——ぴんと背筋を伸ばし——彼女を抱きとめた瞬間、わずかにひざを曲げただけでまっすぐに立っていた。新聞には、そう書いてありましたよね。だけど——重力のことはどうお考えになりますか？　先生は——先生ならそんなこと、可能だと思いますか？」
「可能かって——そうだな、とてもありそうにないとは思うよ。でも、現に起こったことじゃないか。君は確かに、あの娘を抱きとめた。そして、倒れずに立っていた。大勢の人が君を見ていたんだよ。ニュース・カメラにも映っているし——」トミーは、まじろぎもせずに私を見つめている。「どうかしたのかい、トミー？」
「どうぞ続けてください」彼は答えた。「先生が読んだこと、ニュースで見たことをそのままに、

その事件をまるで知らない人に話すようにぼくに聞かせてもらえませんか」
「そんな人がいるとでも思うのかい？　まあいい、君がそう言うなら最初から話そう。その日大富豪の鉄鋼王、ジョンソン・H・シェアマンの十八歳になるひとり娘、ワンダ・ルー・シェアマンはパーク・アベニュー五十番地にあるマンションの屋上で、卓球(テーブル・テニス)をしていた——私が子供の頃には、ピンポンと呼んでいたものだがね。そしてゲームに夢中になって、あるいは相手の球にスピンでもかかっていたのか、とにかくフェンスの方にダッシュしていった。ダッシュして——飛び上がり——ボールを捕らえたまではよかったが、どういうわけか——そう、そういう事件はいつも〈どういうわけか〉起こるものなんだ——重くて頑丈なはずのスチールのフェンスが、体をぶつけたはずみで折れ曲がり、彼女はまっさかさまにはるか下の通りに投げだされた——十四階という高さからね。ここまでは間違いないかい？」
「ええ、間違いありません」トミーは真剣そのものだった。「続けてください」
「わかった。時刻はちょうど夕食前で——五時頃だった。通りの向こうで結婚式があったため、下の通りには大勢の人間がいた。そこへあの少女が、悲鳴をあげながら落ちていったんだ。群衆は驚いて顔を上げ、カメラマンはとっさにカメラのシャッターを押した。その時だ、トミー、君が猛然とダッシュしていったのは。そして落ちてくる少女を受けとめ——よろめいて倒れそうになった。が、しっかりと足をふんばり、少女の命を救ったんだよ。さて次は、君が彼女と結婚し、鉄鋼業界に入るだろうという話だが——」

「やだなあ、よしてくださいよ。で、ぼくが猛然と走っていって少女を受けとめた場面を見た人は、どのくらいいると思いますか？」

「そこに居合わせた人間すべてだよ。実際に君を見ていた人も、見ていなかった人もね。群衆の心理なんてそんなものさ、トミー。彼らの話によると、君は通りの向こうから突っ走ってきたそうだ——もっともほとんどの人は、君がどの方角から走ってきたのか知らないようだったが」

「ショールをかけた老婦人を覚えていますか——ニュースに出てきたでしょう？　あの婦人は何と言っていたと思います？」私が当惑したように黙っているのを見て、トミーは続けた。「老婦人はこう言っていましたよね。ぼくがどこからともなく忽然と現れて、少女を抱きとめたように見えたって」

「それが何か、重大なことなのかね？」

「重大ですとも」トミーは答えた。「それこそただ一つの、正確な証言ですから。それともう一つ、ぼく自身の話した言葉だけが——本当にぼくは、ただあの場に行って落ちてくる少女を支えただけなんです」

トミーは立ち上がると、部屋の中を歩きだした。

「聞いてください、L・D」歩きながら続きを話し始める。「引力の法則と落下する人間の体の速度について、論理的に考えてみてください。常識で考えればぼくのような小柄な男はもちろん、

巨人のような大男だって少女を受けとめることはできなかったはずです——いくら彼女が身長五フィート二インチ、体重百ポンドちょっとの小柄な女性だとはいえ——なにしろ、十四階という高さから落ちたんですからね。普通ならぼくたちはふたりとも地面に叩きつけられ、骨が粉々になっていたはずなんです。そうは思いませんか？」

「人間は時として、信じられないような力を発揮するものだよ。火事場のばか力というやつかもしれないし、あるいは君がそうした潜在的な力を秘めていたのかもしれない」

「そりゃあ、いろんな可能性が考えられるでしょうけどね」トミーは考えこむようにかすかに微笑んだ。「でももっと単純明快な答え、すべての疑問をいちどきに解決するような答えがあるんです。それがわかれば真相が——ぼくがあの場に行って少女の体を支えただけだと言った理由が明らかになりますよ。ぼくはストーン総長に会った時、もう少しでそれを洩らしてしまうところでした。実利一点張りの冷たい人間が、その真実をどう受けとめるか知りたかったのです。ぼくは総長に、真実を公表したら世間はあっと驚きますよ、と言ってやったんです。そうしたら、総長は何と言ったと思います？　『真実は何者も傷つけはしない』ですって。先生もそう思われますか？」

「そうだな——いちがいにそうとも思わないけどね。それはつまり、言ってみれば、職務に忠実な総長の常套句なんだよ。真実がたとえどんなに世間を驚かすものであれ、総長の立場では君にそれを話すなとは言えないからね」しばらく沈黙が流れた。やがて私は、待ちかねて彼に訊ねた。

「私には真実を話してくれるかい、トミー？　別にそのせいで私や君の立場が傷つくこともないだろう」

「そうですね」トミーは答えた。「先生ならその話にショックを受けるようなこともないでしょうし。先生は信じられないような体験を——世間の人に聞かれたら、狂っていると思われるような話をいろいろ聞いてこられたはずですから。それでも先生は、一度だってそうした人たちを気違い扱いしたり、精神病院に引き渡したりするようなことはありませんでしたね」

「そうとも」私は微笑んだ。「間違っても、そんなことはするものか」

「でもその人の見たものが、ただの幻だったということだってありえるでしょう？」

「そう、人生を幻と呼んでもいいものならね」

「人生が幻？」

「幻かもしれないし、夢かもしれない——まあ、本心からそう思っているわけではないがね。いいかい、トミー。私は数多くの人たちから様々な話を聞いてきた。ひとつひとつをとってみればとても信じ難いことであっても、それがたくさん集まれば、十分信憑性のある証拠となるわけだ。くもった夜には星が見えないからといって、星がただの幻だとは誰も思わないだろう？」

「じゃあ先生は、今までにありとあらゆる不思議な話を聞いて、信じてこられたんですね？」

「ありとあらゆる、とは思いたくないね、トミー」私は心底からそう思って答えた。「もしも私が何か変わったこと、私にとって——そして人類にとって未知のできごとを話に聞くという期待

ろう」

を――少なくとも希望を――持てなくなったなら、人生は恐ろしく退屈なものになってしまうだろう」

「よくわかりました」トミーは足を止め、じっと私を見おろした。「ぼくの場合も、自分の正気を疑うような経験だったんです。もしこの腕であの少女を受けとめたという現実がなかったら、それを書きたてた新聞記事やニュース映画がなかったら、きっと気がふれたのだと思ってしまったでしょう。でも、どんなに奇妙な信じ難い話であっても、ワンダ・ルー・シェアマンの一件を……ぼくが空中で彼女の体を支えただけだといった意味を説明できる真実は、ただ一つです。それを聞けば、ぼくの行為がちっとも英雄的ではないということがおわかりになりますよ――やすやすと彼女を受けとめられた理由(わけ)もね」

「本当かい、トミー?」私はしばらく待って、言葉をついだ。「私にそれを話してくれるね?」

「お話ししていいものかどうか」トミーはそう答えたが、すぐに腰をおろして話し始めた。それは私にとって、想像だにしなかった未知の世界の話であった。おそらく、あなた方にとってもそうだろう。

「これは現実に起こったことなのです」トミーは切り出した。「断じて夢を見ていたのではありません。それどころか、いつもよりずっと頭が冴えていたくらいです。あれほど冷静だったこともありません。彼女だって、ちゃんと知っていますよ」

「彼女って？」
「ルツという娘です。アスター図書館で知り会ったんですよ。あれは、ドクター・クラシューマンの文献を調べている時でした。あの時は我ながらすばらしい成果をあげたと思っていたのですが、あとになってその大半が彼女のおかげだったことがわかりました。ええ、ルツがそう言ったのです。ぼくは何時間も何十時間もかかりそうなほど、たくさんの資料を写さなくてはなりませんでした。ところが、彼女が代わりにそれをやってくれたのです——それも、一瞬のうちに。百二十ページ分ものタイプを——一瞬のうちにです」
「一瞬のうちというのは——どのくらいの時間だったんだい、トミー？」
「ですから」トミーはその時を回想するかのように微笑を浮かべた。「ぼくが彼女に用紙を渡し——もちろん、白紙の用紙です——彼女がそれを左手で受け取って、右手で返してくれたのです。すべて、きちんとタイプされたものを。一瞬のうちにでした」
「そいつはすごいな」私は軽く答えながらも、真剣に耳を傾け始めた。
「すごいどころじゃないですよ。だって彼女はタイプライターなんて持っていませんでしたし、第一、図書館の中ではタイプの使用は禁止されていますからね」
「じゃあたぶん、君はうたた寝していたんじゃないかな——それとも時計を見ていなかったか、あるいは彼女がほれぼれするくらいきれいな娘だったんだろう」私はトミーが話しやすくなるようにと、水を向けた。

「時計なら、ちゃんと見ていました。彼女がそうしろと言ったんです。一分、一秒とたっていませんでしたよ。それからL・D、ほれぼれするくらいきれいな娘だっていうのは当たってますね。ルッっていう名前からしてそうですが、彼女はアラブ人なんです。アラビアン・ナイトの映画に出てきそうな、理想的なアラブの美女ですよ」

「なるほど。でもまずは、さっき君の言っていた単純明快な説明の方を聞かせてもらいたいね」

「失礼、そうでしたね、L・D」トミーはぎこちなく笑った。「もちろん、お話ししますとも――ルッに言わせれば、しごく単純明快な説明をね。とにかく、その不思議なできごとがすべての発端だったんです。そのあともぼくは、よくルッに会いました。彼女は二十歳くらいに見えますが、実際は――まあ、年のことはあとでお話ししましょう。あまりいっぺんにいろいろ話しても、混乱するでしょうから」

「ご心配なく。いっぺんにいろいろな話を聞かされるのには、慣れているからね。もっと聞きたいくらいだよ」

「先生なら、そうかもしれませんね」トミーは急に少年っぽい笑顔になった。「でもとにかく、少しずつ話していきますよ。ぼくだって少しずつ経験していったのですから。それで、そのあとも同じようなことが二度、起こったのです――つまりルッが、一瞬のうちに仕事を片づけてくれるというできごとが。ぼくたちは、しょっちゅういっしょに出歩くようになりました。メインストリートから外れた小さなレストランを巡って食事を楽しんだり――どれも、外国料理専門の店

でしたっけ。そうそう、彼女は十何カ国もの言葉を、母国語のように操るんですよ。すごいでしょう」
「うん、たいしたものだな。で、それから？」
「それで学期末試験の日はどんどん迫ってくるし、やることは山のように残っているし、というわけでぼくは口を開けば時間が足りないとこぼしていたんです。するとルッは、笑ってこう言いました——そうです、今でも一語一句、あの声の調子まで覚えていますよ。『もっと時間があったって、たいしたことはできないわよ、トミー。それよりもっと時間が少なくなればいいんだわ。ええ、時間がなくなればいいのよ』——そう言ったんです」
「どういう意味なのか、話したかい？」
「いいえ——その時は、何も。でも後になって、何もかもはっきりしましたよ。とにかく彼女は、何度もその不思議な手品を見せてくれました。白紙のタイプ用紙を受け取っては、ぼくが書きなぐったメモや何かといっしょに、きれいに正確にタイプしたものを渡してくれたんです。嘘でも誇張でもなく、一瞬のうちにですよ」
「ああ、ちゃんとわかってるとも」
「本当ですか？」彼は口元をきゅっと釣り上げて微笑を浮かべた。「ぼくよりずっと呑みこみが早いみたいですね、L・D。ところで、ルッは本当に物知りで賢い女性でした。ぼくたちは、すぐに惹かれあうようになったんです。ぼくが自分という人間を知っているように——おかしな話で

すが彼女の感じていることもすごくよくわかるような気がしましてね。ルッは、彼女の友だちとは全然違うタイプでした。もちろん、すごくまじめなことはまじめなんですが――陽気で、いっしょにいると楽しいんですよ」

「彼女の友だちって?」

「ええ、年上の友だちがいるんです。年上といっても、まだ二十五歳くらいですが――暦の上では、と言っておくべきでしょうね。その女の前に立つと、ぼくはなんだか博物館の展示品になったような気分になるんです。ぼくの過去まで、何もかも見通しているような目で見られるものですから。初めて会った時から、そんな感じを受けましたよ。確かに彼女は実に美しい。でも、息苦しくなるくらい生まじめなんです。まるで、世界じゅうの重荷を一身に背負っている、とでもいうように」

「その女の名前は知っているのかい?」

「ええ――知っています。でも、そんなことはどうでもいいじゃないですか。とにかくぼくは、いつもルッといっしょにいました。ところがしばらくして、ものすごくショッキングなことが起こったんです。どんなことか、想像がつきますか、L・D? 彼女がぼくの両手をとって――ぼくを長い間まじまじと見つめ――そして、消えてしまったのです。ええ、まさに消えてしまったんですよ」

「消えてしまった?」

「ええ――彼女は目の前にいたのに、次の瞬間にはもう消えていたんです。その時には、何が何だかさっぱりわかりませんでした――今なら十分、説明できますけどね」

トミーはそう言うと、澄みきったブルーの瞳をじっと私に注いだ。まるで、先のことを見通そうとしているかのように。私が今までの話をどう受けとめたかではなく、この先どういう反応を示すだろうかと考えているみたいだった。一瞬、先を話してくれるだろうかと危ぶんだが、はたしてトミーは再び口を開いた。

「そして、彼女は戻って来たんです」トミー・スレーターはもう一度、深々と椅子に腰をおろした。「消える前と同じようにぼくの両手を握って――ぼくの目をのぞきこんでいました。まるで魔術師のように、空気中から不意に立ち現れたんです。ぼくは動転して、我ながらひどくばかげたことを口走ってしまいました。『ステージに立って、その術を見せたらどうだい』とか何とか。それだけならともかく、とまどいながらもいきなり結婚を申しこんだんです。

彼女の返事は、今でも耳に残っていますよ――それにあの、柔らかな笑い声も。『だってトミー、わたしたちは結婚するわけにはいかないのよ。それより、いっしょにみんなの前から姿を消しましょう』それがどういう意味かは、ちょっと待ってください。もう少しでその話になりますから。先生がぼくの話をすべてそのままに受け入れてくだされば、おのずと明らかになるはずです」

「ぼくは心から彼女を愛していました。ええ、もちろんです。だから彼女にキスしようとしたのも、ぼくにしてみれば、当然の成り行きでした。ところが彼女は、急に逃げ腰になってしまったのです。別にそこまで内気な娘だったわけでもないし、ぼくを嫌っていたわけでもありません。でも、いざキスしようとすると尻ごみするのです。そして真顔になって――とても厳かな口調で――そんなことをしてはいけない、とぼくに注意しました。ぼくの両手を握りながら」彼はちょっと考えこんでから、言葉を続けた。「ちょうどその頃だと思います、彼女がこんなことを言い出したのは。

『トミー、永遠に生きていたいと思う?』と彼女は訊ねました。

『うん、君といっしょにいられるならばね』ぼくはすぐに、彼女の気持ちを察してそう答えました。するとルツはしばらくぼくを見つめていましたが、急に笑い出したんです。まるで、ぼくの言葉を信じたいのだけれども台詞でも言うみたいに簡単に言われたので、信じかねているといった様子でした。確かに、台詞みたいにすんなり口から出てしまったのです――あまり考えもせずに。でも、いったん口に出してそう言ってみると、その言葉はぼくの気持ちそのままだということがわかりました。だから彼女にそう伝えて――結婚してほしいと重ねて言ったんです。結局最後には、彼女もぼくの気持ちを信じてくれました。そしてこの腕に彼女を抱いて――天にも昇る気持ちでしたよ、L・D。ルツこそあとにも先にも世界じゅうでただひとり、ぼくが求めていた女性でしたから。彼女はぼくに何度もくり返させました。永遠に生きていたい――君といっしょ

に、とね。もちろん、ぼくは本気でそう言ったんです」
「そしてそのあとは、夢のようなひと時でした」トミーは照れくさいらしく、急に早口になった。
「ぼくの腕の中には世界一の美女がいて、その唇がすぐ間近にあったんですから。ルツは、ずっとぼくを待っていたと告げました――二千年の間、待っていたと。そう、二千年の間です。彼女の言葉は、真実味にあふれていました。それでいて自然で、きらきらと輝いていて。そして――そしてこの腕に抱いていたのは、紛れもない最愛の女(ひと)。ぼくに身を委(まか)せきって――もちろん力なくもたれかかっていたわけではなく、しなやかで弾(はず)むような身体でした。そして、こう囁いたのです――これは永遠の生命(いのち)のキスよ、って」それからトミーは無表情につけ加えた。あふれ出る思いを懸命に抑えようとでもしているように。「永遠の生命のキスなんて、聞いたこともない台詞ですよね？」
「さあ、どうだろうね、トミー。私はなにぶん、ロマンチックとはほど遠い人間だから。仕事、仕事――ずっと仕事ひとすじだった」私は彼に笑いかけた。「恋をするような時間があったら、エジプトのミイラや古代の彼らの生活でも調べてみたいものだ」
「古代って、どのくらい昔のことをですか？」トミーは私に訊ねかけて、すぐに話題を戻した。
「とにかく、ぼくたちはそういうキスを交したんです。あの時も、そして今も、これっぽちもルツの気持ちを疑ってはいません。ぼくは彼女を愛しているし、彼女もぼくを愛しています」それからトミーは笑って、「二千年か――その間ずっとひとりの男を待っているなんて、気が遠くな

るような話ですね。彼女にも正確な歳月はわからないんです――でも誰だって、そんなに長い歳月のうちには忘れてしまいますよね。ぼくはそれをわかってやるべきでした。それに――」トミーは、急にはっとしたように言った。「ぼくを見てください、L・D。どこか前と変わっていますか？」彼の目は、マントル・ピースの上の時計に釘づけになっていた。「ちゃんと時を刻んでいる。針が動くということは、時間がたっているんですね。時がたったことなんて、感じなかったような気がしますが」トミーはとまどいがちに訊ねた。「先生は感じましたか？」

「時間の流れを感じる人間なんて、いやしないよ――時が過ぎたということはわかる――だが、それを感じることはないものだよ、トミー」

「そうでしょうか？」トミーはまだ不安げな面持ちだった。「どっちみち、これまではそんなこと考えてもみませんでしたが。でも、今となると、ますますわからなくなってきました。何かそういった感じ――何かの感覚があったような気がするんです。いや、気のせいなのかな。だめだ、思い出せません。とにかく先に進んだ方がよさそうですね」

「そうだな――」私はうなずいた。「ゆっくりでいいんだよ、トミー。なかなかこみ入った話みたいだね」

「ええ、そうなんです。実を言うとあれ以来、ルッと会っていないんですよ――鉄鋼王の跡とり娘が空から降ってきて、あっという間に有名人になってしまって以来ね。だから、ぼくにもわからないんです。今のぼくは人と同じなのか、それとも永遠の生命を持ったのか。確かめる方法さ

えありません。ルッに会うか、それとも——」彼は大きな旧式の柱時計を見上げた。「あの時計が止まらない限り」

「あれは止まったりしないよ」私は断言した。

「絶対にね」

「そうでしょうか？　止まるかもしれませんよ」トミーは体を乗り出した。「もし時間というものがないとしたら、L・D、時計が時を刻むなんて意味のないことですよね？　だって実際に時間がないのなら、時計が刻む時間もないわけですから。理にかなった考え方だと思いませんか？」

「そうだな。時間についての君の仮説が正しいとするならばね」私は静かに微笑んだ。

「ええ、実はそれが本題なのです」トミーは大きくうなずいた。「もちろんルッが関係してくるんですけど。彼女の教え方は少々荒っぽかったようですね。その年上の友だちは——名前はちょっと伏せておくとして——ぼくにあらかじめ真実を話しておくようにと、強く彼女に勧めたんです。それが起こる前にと。でも、ルッは反対しました。いきなり——それこそ青天の霹靂といった感じでそれを経験した方がいいのだと。ぼくはそれを受け入れることのできる人間だと言って。いや、〈受け入れる〉という言葉は使わなかったな、〈順応する〉という言い方をしたと思います。狐につままれたような顔をしてますね、L・D。ぼくが見聞きしたとおりのことをかいつまんで話しているつもりなのですが。でも先生でさえわけがわからないとおっしゃるなら、あの時

のぼくの気持ちを想像してみてください。どんなにめんくらったことか。でも、先生みたいに怪訝な表情はしていなかったと思いますよ——ぼくには真相を探ろうという知的好奇心はなかったんでしょうね。ただ、ぽかんとしていて聞いていただけでした。頭が混乱していたというより、そんな話はどうでもよかったんです。ただルッのことしか考えていませんでしたから。そして彼女は腕の時計に目をやり——こう言いました。

『街へ出てみない、トミー。タイムズ・スクウェアがいいわ。どうせならまず最初に、一番壮観な眺めを見せてあげたいの』春の陽気にあふれた午後で、時刻は五時頃でした。その頃にタイムズ・スクウェアにひしめいている人間の数を思い浮かべてくださいよ。まさにラッシュアワーもピークの時間ですからね。ぼくには、彼女の意図が理解できませんでした。初めて愛を交わし合い、生涯の愛を——永遠に続く愛を誓い合った恋人たちには、どう見てもふさわしい場所とは思えなかったからです。

さて、ぼくは今までずっと肝心の点を避けてきました。これからが、この話の核心です。いいですか、ぼくたちはニューヨーク市のど真ん中、ラッシュアワーのタイムズ・スクウェアにいたんです。上機嫌な人々が軽やかにすれ違っていくかと思うと、むっつりふさいだ連中に突き飛ばされる。いちいち人をよけていると、貴重な時間がむだになるとでもいわんばかりです。群衆のざわめき、耳を聾さんばかりのクラクションにがらんがらん鳴り響く鐘の音、人々の罵声や怒鳴り声が洪水のように押し寄せてきて、そして不意に——静寂が——死んだような静寂があたりを

閉ざしたのです。まるで都市全体がすっぽりと大きな手に包みこまれ――音という音を吸いとられてしまったかのようでした。
不気味なほどの静寂の中で、ぼくの腕をとっているルッの柔らかな息遣いだけが聞こえていました。往来する車のクラクションは途絶え――ごうごうと地下を走る地下鉄もなく――群衆のざわめきも囁き声も、すべてがかき消えてしまったのです。そして同時に、せかせかと歩く人々の姿までもが。いえ、そのままそこにいたことはいたのです。歩くと彼らの体に触れはしましたが、しかし誰も押し返してくる者はいませんでした。まさに不思議な光景でしたよ、L・D。
ありとあらゆる生き物が、凍りついたように静止してしまったのです。
路上の車の列は石のように沈黙したまま動かず、道を行く人々はぴたりとその場に静止して、さながら博物館の蠟人形かショーウインドーのマネキンの列のようでした。身じろぎもせず息さえ止めて、それぞれ奇怪な姿で歩道に貼りついているのです――ええ、あまりに妙な格好ばかりなので、奇怪に感じたのでしょうね。近くにいた男などは、足を踏み出そうとして片足を地面から離したままでした――何者かがいきなり彼を凍らせてしまったかのように。女性客がひとりタクシーに乗りこむところだったらしく――体の半分は車内に、半分は外に出したまま、動かなくなっていました。
以前、ニュース映画でこんな場面を見たことがなかったら、とてもこうして説明などできなか

ったでしょう。あの時スクリーンにはグランド・セントラル・ステーションが映っていたのですが、急に映写機が故障して、画面がそのまま止まってしまったのです――動画が突如として、一枚の静止した絵となりました。それとちょうど同じ光景が、目の前にあったのです。息づき、活気にあふれていた都市が不意に冷たい彫刻と化したようでした。何ひとつ、動くものはありません。生き物という生き物は呼吸さえ止め、聞こえるものといったらルッとぼく自身の息遣いだけ。

恐ろしく、畏怖に満ちた、と同時に魂を魅了するような光景でした。まるで死の都に――死の天使に息を吹きかけられ、老若男女のすべてが凍りついてしまった死の都にさまよいこんだかのようでした。

『いったいどういうことなんだ、ルッ?』ぼくはやっとの思いで声を出しました。

『時間よ』彼女は力をこめてぼくの腕をつかみ、『時間が止まったのよ、トミー』と言いました。ぼくはきっと、呆然としてルッを見つめていたのでしょう。彼女は続けて、『やっぱり前もって話しておくべきだったのかもね――きっとあなたには、ショックが大き過ぎたんだわ。時間が止まったのよ――そして、時の流れの中にいる、すべての生あるものが。わたしを含めて、ひと握りの仲間たちだけが時間の外で生きているわ。そうよ、今ではあなたもそのひとり。わたしは二千年以上も時間の外で生きてきたの。だから今でも、暦の上では二十歳そこそこ。時の流れは、わたしの横を通り過ぎてしまうのよ』

わかっていただけますか、L・D、ぼくの話を? 時間が止まってしまって――ぼくとルッは

その外で生きている――時間の外で、ですよ。信じられますか？」
「先を聞かせてくれ」私は言った。「その状況は、どのくらい続いていたんだね？」
「どのくらい、ですって？」トミーは笑いだした。「ぼくも同じことをルッに聞きましたよ。でもどのくらいって、どういう意味です？　時間なんてないんですよ。だから一秒と続いていなかったことにもなるし――永久に続いていたともいえます。その時、ぼくはどんな気持ちでいたと思いますか？　不思議なことに、今と少しも変わらない気持ちだったんです。今とも、あんな経験をする以前とも。そりゃあ、あまりのことに気圧されてはいましたけどね。あの信じ難い光景――そう、まったくありえないようなことが目の前で起こったのですから。
　頭上には、大きなジェット機が静止していました。ぼくはルッに、あのジェット機は落ちないのかと聞いてみたんです。彼女はぼくの腕をぎゅっとつかんで、蠟人形のように凍りついた人々の間をどんどん引っぱっていきながら、『落ちるはずないわ』とあっさり答えました。『だって時がないんですもの。時が止まっているのよ、トミー――だからこの世のあらゆる生き物が、ああして凍ったように止まってしまったの』
『じゃあ――また時が流れ出したら――みんな、どう思うだろう？』
　ぼくが初めのショックから立ち直ったのを見て、ルッもその頃にはぼくの狼狽ぶりを楽しんでいるようでした。声をたてて笑うと、こう答えたんです。
『何も思いはしないわ。今までだって、ずっとそうだったもの。ねえトミー、こんなことはもう

ずっと昔から、何千回、何万回と起こっているのよ。わたしが最初に図書館であなたの仕事をやってあげた時もそうだった。時間が止まって――その間にあなたの書類をタイプしてあげたの。わたしのアパートにいた時だってそうだわ――わたしはあなたの手を握って、消えてしまったでしょう？』

『そういう人たちはたくさんいるのかい――君のような――その、ぼくたちのような人は？』ぼくはルッに訊ねました。

『時間の外で生きている人たちのこと？　ええいるわ、多くはないけど。わたしの友だちに会ったでしょ？　彼女なんて、わたしが生まれる前から時間の外で生きているのよ。さあ、八番街へ行ってみましょう――防げそうな事故は防がなくちゃ』

あまりいろんなことがあって、とてもお話ししきれません。でも、新聞で奇跡としてとりあげられているような事件をいくつか目撃しましたよ。ぼく自身も一役買っているんです。まずぼくたちは、大きなトラックにひき殺される寸前の子供を見つけました。ちょうどそこで時間が止まったわけですが、一瞬おそかったら巨大な車輪の下敷きになって、無残な最期を遂げていたでしょう。まわりには大勢の人がいて――もうだめだと覚悟したように、子供の方を見ていました。母親はひと目でわかりましたよ。狂ったようにその子に駆け寄ろうとしていて、その顔は恐ろしい苦痛に歪（ゆが）んでいました。そして時が止まって、そのまま静止してしまったのです。ぼくは子供をかかえ上げ、そっと歩道の縁に下ろしてやりました。あとはご存じのとおり、新聞で大騒ぎで

すよ。おまけにごていねいに、車輪はその子すれすれのところをかすめていったのだなんてコメントまでついていましたっけ」

「ほかにも、いろんなことがありました」トミーはまたも物思うような微笑みを浮かべた。「嫉妬に狂った女が、満員のレストランの中で夫に発砲したのです。ぼくたちは窓ごしにそれを見つけましてね。ブロードウェイのお店でした。とても信じられないことでしょうけど、L・D、これは本当の話なんです——空中からその銃弾を取り上げてきたんですよ。今ここに持っていますトミーはポケットに手を入れてまさぐると、てのひらにのせた鉛の玉を見せてくれた。「それからぼくは残らず弾を抜いて、銃を女の手に戻しました。ええ、彼女の指は少しも硬張ってはいませんでしたよ——生きている人間の指のように曲げやすくてしなやかでした」彼は苦笑して、つけ加えた。「もちろん、生きている人間の指だったんですけどね」

「動いている人間たちにも出会いました——ぼくたちの仲間です。数は多くありませんでしたが、あちこちで会いましたね。それぞれやることがあって、忙しそうでした。その中の中年の男性が話してくれたのですが、ダウンタウンのアパートで火事があって、女の人が消防士の腕から炎の中にすべり落ちるところだったんだそうです。『おれは彼女を助け起こして、しっかり消防士の肩につかまらせてやったんだ』と彼は言いました。『こいつも奇跡のできごととして新聞にのるだろうな——その消防士が、本当のことをしゃべればの話だが——その女はまさに、炎の中に落

っこちる寸前だったんだ』
『で、あなたはやけどしなかったんですか?』とぼくは訊ねました。
『いや、時間が止まっているからな』それが彼の答えです」
トミー・スレーターは長いこと押し黙っていたが、やがて顔を上げてまっすぐに私を見つめた。くわえていた煙草をつまんで火の中に投げ入れ、口を開こうとしたがまた黙って新しい煙草に火をつけた。私は何も言わなかった。ほどなく彼は話を続けた。
「これでもう、ぼくの言いたいことは察しがついたでしょう、L・D」それから深く息を吸いこむと、「あまりうまい説明ではありませんでしたが、とにかく言葉にできたというだけで驚いているくらいです。先生はすばらしい聞き手ですね」そして、唐突に先を続けた。「ぼくたちは、死んだように動かない人々の間を縫って進んでいきました——といっても、彼らが全然無表情だったわけではありません。立ち止まってひとりひとりの顔を見たり——まっすぐその顔をのぞきこんでみると、なんともいえずに奇妙な感じでしたね。まあそれはともかく、ぼくたちはパーク・アベニューを歩いて、五十番地にさしかかりました。結婚式があったのでしょう——カメラマン、それに大勢の人が集まっていました。その場に居合わせた人たちは、口々に悲鳴をあげたに違いありません。が、もちろんぼくには聞こえませんでした。なにしろ時間が止まっていたのですから。ええ、美しい跡取り娘の体が固いアスファルトに叩きつけられる直前に、時間が止まったのです——もしあのままだったら、確実にむごたらしい死を迎えるところでした。

ぼくは最初、娘に気がつきませんでした。人々の表情を見て、気がついたのです。誰もかも一様に娘の叫び声を聞いて顔を上げ、あるいは肩ごしにふり返ったという表情をしていましたから。その顔つきには、一瞬前に彼らが感じたことが、そのまま表れていました。そしてカメラマンはいち早くカメラを向け、シャッターを押しているところでした。彼らの目には何が映っていたのか——そして再び時間が流れ始めた時には、何を目のあたりにするのか？　それはつまり、落ち始めた娘の体と、再び落下し始めた娘の体ということになりますよね。これでもう、おわかりでしょう？」

「いや——はっきりとはわからないな」私は答えた。

「いいですか——みんなはその娘が十四階から落ちるところを、一部始終目撃したと思いこんでいる。ところが、実際はそうではないのです。時が再び流れ始めてから群衆が見たのは娘がほんの六フィートの高さから落ちてくる光景なのですよ——腕に切り傷のひとつもつくるかもしれないし、足首を挫くくらいのことはあるかもしれません。しかし、健康で丈夫な若い娘にとって、地上六フィートの場所から落ちるというのは、要するに——それほど恐ろしい事故ではないわけです。あの事件だって、しばしば紙面をにぎわす奇跡のひとつとして終わっていたことでしょう。彼女が地面からほんの数フィートのところで運よく時間が止まったということは、再び時間が流れ始めた時にはその高さから落ちるだけなのです。

ところがぼくは、こうした時間のことも周囲を埋め尽くしている凍りついた人々のことも、す

っかり忘れていました。その時何を考えたのかは、自分でもわかりません。わかっているのは、自分のとった行動だけです。通りを走っていって――その下に行き、空中で少女を受けとめた――それが起こった時にね」

「何が起こった時に？」

「時間が戻った時にです。あたりは水を打ったように静かで――ぼくは今まさに、両腕でその娘を抱きとめるところでした。次の瞬間、大都会の喧騒がいちどきに耳に飛びこんできたのです。ヒステリックに泣きわめく女たちの悲鳴――男たちの叫び声。続いてその若い娘の絶望の悲鳴が尾をひき――そして、すべては終わりました。彼女はふわっとぼくの腕に落ちてきて、ぼくは彼女を受けとめた。十二歳の男の子にだって、楽々とできたことです。ええ、要するに――こういうことだったんですよ。これが事の真相です。だからぼくは、聞かれるたびに同じことをくり返していたわけです――ただ彼女を、空中で受けとめただけのことだって」

トミーはじっと私の言葉を待っていた。だが私はこう聞いただけだった。

「それで、ルッはどうしたんだね」

「わかりません、あれ以来会っていないのです」

私は彼を見つめたままパイプの吸いがらを火の中に空け、ゆっくりていねいに詰め直すと、トミーに訊ねた。

「それで、もうひとりの女性――その年上の女性の方は？」トミーは返事をためらっていた。「その女とは、連絡がついたんだね？」
「ええ、そうです」彼はようやくうなずいた。
私は立ち上がった。ゆっくりと落ち着いてパイプに火をつける。それから壁に備え付けた小さな金庫の方へ歩み寄り、ポケットから鍵を出して扉を開け、中から何百ページにも及ぶノートの束を取り出した。
「実におもしろい話だったよ、トミー」私はそう言って椅子に戻り、ノートの束をひざの上に置いた。「このノートは、二十年近くにわたる徹底的な研究と調査の上で書きあげたものなんだ。エジプトの歴史を本に書こうと思ってね。だが、完成するだけの時間があるかどうか」
「たぶん――」トミーはわけありげな笑みを浮かべた。「先生に必要なのは時間ではなく――時間のない世界じゃないですか」
「たぶんね」私は大まじめに答えた。「私にも、ちょっとしたエピソードがあるんだ。君の体験のようにドラマチックでもないし、華やかでもないがね。でも私にとっては、前々から心にかかっていたことなんだよ。というのはね、私が何時間かうたた寝していた間に誰かがこのノートに触れたらしいんだ――訂正や、加筆の跡がある。手に入れるのを諦めていたような資料が加えられ、この二十年、どうしても推測の域を出なかった仮説が理路整然と立証されている。その上、現在の段階ではまだ知られていないようなデータまでそろっていたんだ」

「じゃあ、ぼくが医学論文の資料を集めていた時みたいにですか？」
「そう、実によく似ている」私はうなずいた。
「手がかりがひとつだけ、残っているんだ。この中の一枚に、鉛筆で名前がなぐり書きしてあってね。ほとんど読めないくらいだったが、どうにか判読することができた。ルッの友だちの名前は——ナオミじゃないかね？」
「これでぼくの話も信じてもらえそうですね」トミーは椅子から立ち上がった。「ええ、そうです——ナオミです。言わずにおくつもりだったのですが、でもまさか先生の口からその名を聞くとは。先生は——」トミーは口をつぐんだ。
「君は彼女に頼まれて、私に会いに来たんだね？」
トミーはまわりを見回し、暗がりになっている部屋の隅にじっと目を凝らした。まるで誰かがそこに潜んでいるのではないかと、疑ってでもいるように。
「そうです——そう頼まれたんです、L・D」トミーはやっと打ち明けた。「ええ、ノートに手を加えたのはナオミです。ただ、彼女の意図がどうもひっかかるんですよ。今の彼女はぼくはおろか、ルッさえ眼中にないようで——先生のことばかり気にかけています。何時間も、先生のことで質問攻めにあいましたよ。それに、きょうの件だって——その、ぼくはまだルッに会わせてもらえないのです——先生が、L・D、ナオミと……とにかく彼女は、先生に関心を寄せていますす」

「私にか、私の仕事にかは知らないが」私は微笑んでみせた。「でも彼女の考えはもっともだよ、トミー。私に残された時間では、この仕事を完成させることはできまい」私はうぬぼれていると思われないように言葉を選びながら、続けた。「これは重要な仕事なんだ――重要で――非常に遠大な仕事なんだよ」
「さっそく、彼女に連絡しましょう」トミーはすっかり興奮して、電話の方に向き直った。「もう一度ルッに会わせてもらうためには、すぐにナオミに電話しなくてはならないのです。彼女はぼくを先生のところに送りこんで――そして――そして――」彼はあとの言葉を呑みこんだ。「彼女の口ぶりから考えても、先生の仕事に関心があるだけとはとても思えません、L・D。それに、彼女に会うのは危険です――先生にとってはとても危険な女性ですよ。きっと先生を時間の外に連れ出そうとするでしょう――彼女といっしょにね。そんなことができますか――しようと思いますか？　ナオミはルッより何百歳も年上なんですよ。そんな思い切った決心がつきますか？」
まったく正直な奴だ、トミーというのは。それにロマンチックな青年だ、と私は思った。この私は数多くの話を聞いてはきたが、自分自身で経験したことはあまりにも少ない。その女性と話をすることを思うと、自然に微笑みが浮かんできた。そう、二千五百歳の女性と――そして私の仕事――私の未完成の仕事のことを思うと。
私はトミーを見つめた。ひどく興奮しているようだ。私自身にとっても、これほどの興奮を覚えたのは本当に久方ぶりのことだった。私は穏やかな声で、彼に告げた。

「ナオミに電話してくれ、トミー。そして彼女に伝えてほしい——喜んで彼女といっしょに、時間の外へ踏み出そうと」

謎の木片

SKYDRIFT

エミール・ペテイジャ

Emil Petaja

荒涼とした夜明けの海岸には、昨夜の嵐の爪跡が生々しく残っていた。猛り狂った海が難破船から剝ぎとった、ありとあらゆる残骸が打ち寄せられている。その中に半ば埋もれるようにして、ふたりの浮浪者が立っていた。くすんだ赤銅色の空が、あたかも宇宙に潜む脅威から地球を守っているかのように、海と陸とをおおっている。無数の悪魔の咆哮にも似た烈風も、暗い空を切り裂いて丘陵をゆるがしていた雷鳴や稲妻も、日の出とともに過ぎ去ったようだった。できるだけ深く、乾いたほら穴を見つけて一晩じゅう身を縮めていた男たちは、空腹と寒さに耐えかねて今、夜明けの空気の中に這い出してきたのであった。風はぴたりと息を止め、灰色の海は異様な静けさに閉ざされている。サン・クエンティンの北方三十マイルに位置するこの打ち捨てられた海岸の朝は、四月も末とは思えないほどの寒さだった。

ビッグ・トムのぶ厚い唇からは、すっかり血の気が失せていた。トムは震える唇をゆがめ、濡れた砂にいまいましげに唾を吐き捨てた。

「そ、そいつを拾えってんだ、このまぬけ！　乾いた木がたくさんいるんだぞ。ううっ、さ、さ

むくて凍っちまいそうだぜ！」
骨と皮ばかりのチビのアイノも震えていた。だが、押し黙ったまま潮くさい湿った砂の上に立って背中を丸め、目の前の木ぎれを見ているだけだった。骨ばった胸には、拾い集めた大小の板きれがしっかりと抱えられている。
その木ぎれは、誰かが砂に突き刺していったような形で半ば砂に埋もれていた。平べったく、長さは十センチほどで、白っぽく変色し、表面はなめらかだった。一見したところ、海岸じゅうに散らばっている板きれとなんら変わりはない。波に揉まれて角がとれ、奇妙な鋸歯状のぎざぎざは、文字のように見えなくもなかった。
ビッグ・トム・クレッグは、突き出た腹に食いこんだ牛革のベルトのあたりをもぞもぞと掻いた。怒鳴りつけても動こうとしないアイノに、短髪で幅の広いその顔がたちまち険しくなっていく。ものも言わずに、いきなり相手を蹴とばした。アイノはよろめき、危うく奇妙な木ぎれにさわりそうになったが、とっさに板きれの山を落とすと、濡れた砂に両手をついて体を支えた。
「おい、拾えって言ったんだぞ！」ビッグ・トムが声を荒げる。ふだんならアイノはすぐさま飛び上がって、しつけのいいハウンド犬よろしく命令に服従するところだった。三年前、鉄格子つきの部屋にいっしょにぶちこまれてからというもの、この関係はずっと続いてきたのだ。
アイノ・ハルヴァーは小柄で貧相な男だった。おそらく、もともと強い人間に従うように生まれついているのだろう。彼の内面の声が、自分より力ある者に、人生から自分よりすぐれた力を

与えられた人間に服従するようにと絶えず囁きかけるのだ。そしてトム・クレッグは腕力だけを盾に、この役回りをほしいままにしてきたのだった――サン・クエンティンでの三年間に及ぶ獄中生活と、娑婆に出てきてからのこの八日の間。だが今、この三年と八日のうちで初めて、アイノは命令に従わなかった。

「拾うんだ!」ビッグ・トムは吠えるように言うと、抱えていた木ぎれの山を下ろした。

アイノがはっとふり向いて、トムを見上げた。肉の薄いあばた面は色を失い、その口――それはまるで、くすんだ土くれをえぐりとったひとすじの溝のようだった――はしまりなく開いて、出っぱった歯がのぞいている。両の目は恐怖に飛び出さんばかりだった。

アイノはビッグ・トムを恐れていた。とりわけ、今のような形相のビッグ・トムを。トムの左目がわずかに細まり、垂れ下がった下唇が不機嫌に突き出ている。言いつけに従わないとどんな目に遭うかは、これまでいやというほど思い知らされてきた。アイノは問題の木ぎれにさっと目を走らせ、小犬のように哀れな鳴き声をたてたものの、やはり手を出そうとはしなかった。

ビッグ・トムの拳が飛んだ。

アイノは砂の上を、波打ち際すれすれのところまで転がっていった。おそるおそる目を開く。顔から血が流れていたがそれをぬぐおうともせず、じっと這いつくばったまま待っていた。ビッグ・トムは砂に足をとられながら近づいてくると、ぐいとアイノを立たせた。その大きな手が、ねずみをふり回すテリヤのようにアイノの体を揺さぶった。

「てめえ、なんだってそいつを拾わねえんだ？　え、なぜなんだ？」
まるでアイノが大切な約束を破ったといわんばかりの口ぶりで、トムはしつこく同じ文句をくり返した。それからやっと手を離し、アイノに返事を催促した。アイノはぜいぜい息をしながら、何か恥ずかしいことでもしているみたいにこっそりと切れた唇についた血を拭きとった。
「おいら――」
「文句があるなら言ったらどうだ！」トムの左目が細まった。
「あれはただの木ぎれじゃない。あれ――あれには文字が書いてあるんだ。だからきっと――空から降ってきたんだよ、稲妻といっしょに」

ビッグ・トムはまじまじとアイノを見つめ、それから急に笑い出した。聞いたか、今のセリフ！　トムは内心、心配していたのだ。アイノも少しは利口になって、言うなりになってばかりいるのがばからしくなったのではないかと。いいようにこき使っていた子分を失う羽目になるのではないかと。ビッグ・トムはいつもアイノをうすのろ呼ばわりしてきたが、彼に読み書きができるのは確かだった。それに、フリスコの町の三番街へ物乞いにいくたびに、首尾よくお恵みをちょうだいできるのはいつもアイノの方なのだ。彼は見るからに弱々しく、ひもじそうだった。だがそれがビッグ・トムともなると、通行人は誰しも冷たい視線を投げて足早に去っていくばかりだった。その視線は、こう言っていた――おい、でかいの、自分の食いぶちくらい自分で稼い

だらどうだ。
「刑務所(ムショ)の図書室で本ばかし読んでいるから、そんなアホなこと思いつくんだ」ビッグ・トムは余裕を取り戻して、皮肉っぽくひやかした。「ろくでもない本ばかり読ませとくんじゃなかったぜ。おかげでオツムがこのとおりだ。本なんか読む連中は、みんなそうなっちまうんだよ。だろ、うすのろ？」トムは白い木ぎれのそばに戻った。「なら、おれさまがこいつを拾ってやろうか？どうなると思う、え？ 拾ったとたんに死んじまうのかよ？」
「よしなよ――」アイノは貧弱な歯で薄い唇をぎゅっとかみしめた。
ビッグ・トムに言ってみても、しょせん無駄なことだ。彼はチャールズ・フォート（一八七四～一九三二。アメリカの超常現象研究家）のことも、稲妻とともに地上に落ちてくるという雷石の言い伝えも知らない。風や嵐の中に潜む恐怖も、それに地球の外の世界に住むかれらのことも……
ビッグ・トムはくっくっと笑いながら、かがんで平べったい木ぎれを拾いあげた。「どうだ？」彼は鼻で笑った。「拾ったら死んじまうと思ってたんだろ。これが何か――魔法の木ぎれか神サマだとでも思ってたんじゃないのか。え、そんなとこだろ、まぬけ？」
トムは戻って来るなり、それをアイノの顔に押し当てた。アイノが身をよじるように飛びさがる。
「まだそう思ってんのかよ、え？ なぜだ？ 言ってみろ！ その辺に散らばってる木ぎれとこれのどこが違うってんだ？」

アイノはこわごわとビッグ・トムの手の中のものに目を向けた。するとその目はそれっきり木ぎれに釘づけとなり、まばたきもせずに皿のように見開かれたままとなった。アイノは口元をゆがめ、それから急に確信に満ちた口調で話しだした。

「それは海から流れてきたがらくたとは違うよ、トム。海からじゃなく、空から降ってきたんだ。ゆうべの嵐の最中に。かれらはそうやっていろんなものを地上に送りこむ。自分で姿を変えて降りてくることもあるしね。チャールズ・フォートはそうやって外の世界から降ってきたものを、雷石って名づけたんだ。でも、かれらがいるということは知っていたけど、それがいったい――」

ビッグ・トムは鼻を鳴らしてさえぎった。

「ふん、それでてめえは、そういう本を書いた連中よりオツムが冴えてるって言いたいのか？　自分の脳ミソはサイコーだと思ってんのか、え、このまぬけ？　博士サマかなんかのつもりかよ？」

「違うよ、トム。おいらはただ――」

「よく見ろよ！　海から流れてきた、ただの木の切れっぱしじゃねえか！」

「でも、文字が書いてある」

ビッグ・トムは横目で木ぎれをにらみつけた。「こいつが文字だと？　おい、おれだってな、字は読めなくとも文字かどうかの区別くらいできらあ。この木のどこに、文字が書いてあるんだよ！」

アイノは何も言わなかった。トムに説明してみたところでわかるまい。本にある文字は何も英語だけではなく、様々な言語がそれぞれの異なる文字で書かれているということを。したがって、もし何かの物体が空から落ちてきたとして、そこに書かれた文字が見たこともないものだとしても……

「こいつが文字なもんか。波に揉まれてでこぼこになった、ただの木目じゃないか。アタマのある奴なら、誰だってそのくらいわかるってものよ。たきぎにちょうどいいぜ」

とり落とした木ぎれを拾い集めながらも、アイノの胸は恐怖と不安でいっぱいだった。ほら穴に戻る道すがら、とうとう耐え切れずに口を開いた。

「トム、よしなよ。それを燃やそうなんて！」

「こいつを燃やすなだと？」ビッグ・トムはにやりとした。「つべこべ言わずに見てなって！」

言いながら、重い靴で絡み合ったぶよぶよの海草を踏みつぶす。

「よしなったら、トム！」アイノは叫んだ。「違うんだ――木ぎれみたいに見えるけど、そうじゃない。それは生きてるんだよ。神のような生命を持って」

ふたりは折しも、黒ずんだ海水のうねる湾曲した海岸沿いを歩いていた。

「てめえがそこまでイカれてるとはな」とビッグ・トム。「本にばっかしかじりついてて、おと

ぎ話と現実の区別もつかなくなったのかよ。なんだって、そんなおめでたいことを思いつきやがったんだ?」

アイノは口ごもった。「そ、それが——おいらに話しかけたんだ」

「ほう。この木ぎれが口を開けてきさまに話しかけたってわけか!」

「おいらの心に話しかけてきたんだよ」

ビッグ・トムはいらだたしげにアイノに向き直った。もう、たくさんだ。口先にサディスティックな笑いを浮かべ、抱えていた板や木材の山を下ろすと、アイノが怖れている例の木ぎれをその足元に放り投げた。

「そいつを蹴るんだ!」有無を言わせぬ口調だった。「粉々になるまで蹴っとばせ! 中から神サマがおでましになるかどうか、見てやろうじゃねえか! ぐずぐずするな! それとも、きさまが代わりに粉々にされたいのかよ!」

アイノは身震いした。顔に玉のような汗が吹きだしている。「頼むよ、トム! それにさわるのだけは勘弁してくれ!」

ビッグ・トムが詰め寄った。「どういう目に遭うか、わかってんだろうな」単調な潮騒の音にかぶさって、容赦ない怒声が響いた。

アイノはしゃくりあげながら、ひざまずいた。その目は問題の物体にじっと注がれている。まるで、それに魅入られたかのように。言葉にならない声が、喉元にこみ上げてきた。アイノは顔

を上げた。ビッグ・トムの表情は残忍そのものだ。いらだち、腹を立て、今にも爆発しそうだった。わずかばかりの人間らしい理性は激情に押し流され、凶暴な野獣の怒りに大きな体を震わせている。逆らったりすれば、ただですまないことは目に見えていた。

アイノはまわりをきょろきょろ見回した。背後ではささめくように波が打ち寄せ、赤銅色のくすんだ空にはかもめが鳴き、飛びかい、ゆうゆうと翼を広げている。荒涼とした海辺には人影ひとつ見当たらない。アイノは目の前の物体を見下ろした。それからうやうやしく頭を下げると、そっとそれに口づけしたのであった。

たちまちトムの拳と鋭い蹴りが雨あられのように全身を襲い、アイノは息も絶え絶えになって砂の上に倒れこんだ。すかさずトムがその衿首をつかんで立たせ、ほら穴の方角に突き飛ばす。例の木ぎれは、たきぎ用の板きれもろともアイノに押しつけられた。ゴムのように重たい、感覚のない足を引きずり、つまずきながらもアイノは一歩ずつ進んでいった。目元は腫れあがり、空も海もうら寂しい海岸も何もかもがぐるぐる回り、かすんで、黒ずんだ汚点のように見える。それでもどうにか足を前に出し続け、ようやくの思いでほら穴の入り口にたどり着くなり、その場にぺたりと座りこんでしまった。木ぎれの山が一度に地面に散らばり落ちたが、それだけはしっかりやせた胸に抱いて離さなかった。

「立つんだ!」

ビッグ・トムに蹴とばされ、岩に爪を立てながら再びよろよろと立ち上がる。

「ボリナスへ行って来い。おれが火をおこしている間に食い物を持ってくるんだ。さあ、とっとと行け!」
「でも、一銭も持ってないんだ、トム」
「まったく、きさまもわかんねえ奴だな。人さまに恵んでもらうか、だめなら無断でちょうだいしてきな。とにかく、手ぶらでは戻って来るなよ」アイノがふらつく足で外へ出ようとすると、トムがぐっとその手首をつかんだ。
「いいな、必ず戻って来るんだぞ。じゃないととことん追いかけてって、きさまの首の骨をへし折ってやるからな。ただの脅しと思うなよ」
「大丈夫、必ず戻って来るよ、トム」アイノは呻くように答えた。
先ほどの湾曲した幅広い海岸線に着いた時には、もう十一時近くになっていた。打ち寄せる波が岩やほら穴にあたっては、白い腹を見せて砕けていく。アイノはびっこをひきひき進んでいった。殴られ、蹴られた背中や脚が、ずきずき痛んだ。土気色の顔には、内出血の跡であちらこちらに紫色のあざがついている。それでも背中には柔らかな陽射しがさんさんと降り注ぎ、アイノは一歩踏みだすごとに、乾いた砂を蹴とばしながら歩いていった。気分は晴れ晴れとしていた。
そしてその夕刻、アイノはきょう一日のことを思い出しながら帰り道を急いでいた。ツイてる日には、どうして何から何までこうもうまくいくんだろう。ボリナスで過ごした、きょうの午前中といったら! 誰もかれもが親切にしてくれた。みんなが彼に微笑みかけ、友人のようにもて

なしてくれた。うまいコーヒーを二杯も飲み、砂糖をまぶした上等の菓子もごちそうになった。でも、コーヒーや砂糖菓子のことは、ビッグ・トムには黙っていよう。わざわざ機嫌を悪くさせるようなものだ。背負った大きな袋には、ふたりで食べてもたっぷり二日分はある食べ物が入っていた。おまけにその中の一つとして、盗む必要はなかったのだ。この食べ物の山を見せれば、ビッグ・トムも機嫌よく迎えてくれるだろう。

アイノは赤銅色の太陽を見上げ、足を早めた。ビッグ・トムはすきっ腹をかかえて、遅いアイノの帰りを待っていた。おそらくそのせいだったのだろう、初めはひどくむっつりしていた。

「ふん、豆か！」吐き捨てるように言うなり、不服そうに袋の中をのぞきこむ。「豆なんか、胸くそが悪くなる。うんざりだ！」

アイノは急いで袋の奥から、肉の缶詰をふた缶と干した鶏肉を取り出した。

「どこでそいつをかっぱらったんだ？」トムの声が少し穏やかになった。

「食料品店の親父さんがくれたんだ」アイノはとがった小さな歯を見せて、はにかむように笑ってみせた。「おいら、誰かに似てるんだって」

「マンガのウサ公(バッグス・バニー)にか？」トムは嘲(あざけ)るように笑うと唾を吐き、折りたたみ式のポケット・ナイフの刃をビシッと出した。「気にすんなって。どうせかっぱらったんだろ。もう少したきぎを足して、早く食おうぜ。腹の虫がもうさっきから騒いでらあ」

ふたりはひとこともしゃべらずに、むさぼるように肉と豆を飲み下した。アイノは身内に湧き上がってくる思いを口にしたくてたまらなかったが、黙っていた方が賢明だということくらいはわかっていた。アイノは、こう言ってみたかったのだ。**おいら、何も盗んじゃいねえ。盗む必要なんてなかったんだ。みんな、いい人たちばかりだった。サン・クエンティンを出たてのごろつき扱いなんて、一度だってされなかったよ。みんな、おいらのことをごろつきなんかじゃなく、ほんとの友だちみたいにもてなしてくれた……**

アイノはうまそうに食物をほおばった。こんなに満ち足りた食事をしたのは、生まれて初めてのような気がする。

腹がふくれるとビッグ・トムは大きなあくびをして体をずらし、すぐに寝入ってしまった。だがアイノはじっと火のそばに座ったまま、思いを巡らしていた。心の中に様々な考えが湧き起こってくる。そのどれもが新しく、これまで考えてもみなかったこと、あるいは考えてみる勇気のなかったことばかりだった。アイノは安らかな幸福感に満ちて、未来に思いを馳せた。これからは、何もかもが今までとは違ってくるのだ。なぜ、そしてどのようにかはわからない。しかし、とにかく変わるはずだった。そうやって火にたきぎをくべながら物思いにふけっていると、ビッグ・トムが急に咳こんで目を覚ました。

「今、ちょうど思い出したんだ」アイノが快活に話しかけた。

「えっ、何を？」アイノがこんなふうに自分の考えを話すなんて、めったにないことだ。ビッ

グ・トムは複雑な思いだった。アイノの奴、いったいどうしちまったんだろう？
「スティンソンの近くの海辺できのう見つけた箱のことなんだけど」
「それがどうした？　波に流されてきたガキのおもちゃ箱じゃねえか」
「開けてみたらどうかな」
ビッグ・トムは顔をしかめた。「どうせガキのがらくたが詰まってるだけだろ」
「じゃあ、おいらが開けてもいいかい？」
「好きにしな」ビッグ・トムは咳ばらいし、唾を吐いた。「おれもきのう一時間がかりで開けようとしたんだが、釘が打ちこんであっておまけにさびついてるもんだから、まるでムダ骨よ。ここにはハンマーもかなてこもねえしな。でも、開けたいってんなら止めはしないぜ」
アイノは腰をかがめながら天井の低いほら穴の隅まで行くと、平べったい長方形の箱ににじり寄った。きのう荒れ狂う嵐を逃れてこのほら穴に入ってきた際に、ビッグ・トムが放り出しておいたままの場所に納まっている。ビッグ・トムは目に嘲りの色を浮かべて、アイノを眺めていた。あの箱は水を吸って、ずっしり重くなっているはずだ。アイノがそれを持ち上げようとする。トムはにやりと笑った。奴め、あのへし折れそうな腕であれを持ち上げる気か。と、トムは目を疑った。アイノが難なく箱を持ち上げ、まるで中に羽根が詰まっているかのように軽々と運んでくると、火のそばに腰をおろしたのだ。あっけにとられているトムを尻目に、今度はやすやすとふたを開け始めた。まるで開けるコツを、釘で打ちつけたふたの一番弱い部分を、正確に知っていてで

もいるように。とがった棒を隙間にさしこむと、大して力も入れずにあっさりふたをこじ開けてしまった。
見ていたビッグ・トムの左目が、細く険しくなった。アイノは本からそんな知識を学んだに違いない。ビッグ・トムは本が大嫌いだった。本は自分の腕力を脅かすものだ。現に今、アイノはトムにできなかったことをやってのけ、面目を丸つぶれにしてくれたのだ。考えれば考えるほど、おもしろくなかった。
「それで？」トムは挑むように言った。「何が入ってた？　どうせ子供だましのハジキか何かだろ」
「違うよ」アイノが答えた。「すごい金目のものだ。古い金貨や宝石がぎっしり入っている」
ビッグ・トムは、すぐにはその意味が呑みこめなかった。二つのものが、どうしても頭の中で結びつかなかったのだ。釘で打ちつけられ、海に投げこまれたおもちゃ箱と、今、海草のくずを取り払われ、たき火の光に燦然と輝いている金貨や宝石とが。彼の頭で理解するには、その二つはあまりにもかけ離れていた。眩いばかりの金貨や宝石をためつすがめつ眺め、歯で嚙んで確かめてみながらも、心中は混乱しきっていた。つまり、これが現実ならば、彼とアイノは――後ろ暗い過去を持つふたりの浮浪者は――突如として、巨万の富を持つ大富豪ということになるのだ。
「いったい、どこから流れてきたんだ？」トムは興奮してそう訊ねると、アイノを脇に押しやっ

て、開いた箱のまわりをうろうろ歩き回った。

「さあ、中国かペルシャからかもしれないし、ムー大陸から流れてきたのかもしれない」アイノの灰色の目は、ほら穴の入り口の向こうに広がる彼方の水平線に注がれていた。「それとも、もっと遠くからかもしれないな」

「大急ぎで隠そうぜ。早いとこ埋めちまうんだ。持ち主が取り返しにきたらことだからな」

「大丈夫だよ」アイノは落ち着いて言った。「誰も、この宝に指一本触れられるものか。これはおいらたちのだ。おいらたちが、波に浮かんでるのを見つけたんだ。誰も文句なんかつけられないさ。見つけた宝はその人のものだって、法律で決められているんだから」

ビッグ・トムは何か言い返そうとした。が、この小男の口調にはどこかそれを思いとどまらせるものがあった。まるでそこに立って水平線を見つめていながら、その実彼方の未来を見通し、予言しているように思えたのだ。アイノの言葉は確信に満ちていた。きっと、こいつの言ったことは本当だ。波間に浮かんでいたこの宝物を見つけたのは、おれたちなのだ。そうとも、誰もこれを取り上げたりなどできるものか。

ひとたびそれを確かめると、ビッグ・トム・クレッグはとたんに本来のビッグ・トム・クレッグに戻っていた。トムは生まれついてのならず者で、盗っ人だったのだ。アイノもこそ泥には違いないが、それは必要に迫られてのことだった。つまり、強要されてやっていただけのことなのだ。環境のせいだったのかもしれないし、不平等な政治や飢えのせいだともいえるだろう。実際

泥棒の世界に入ったきっかけも、ずっと昔に出会った人物に誘われてのことであった。人に仕えること、従うことこそアイノの性分なのだから。一方、今ビッグ・トムの心には、持ち前の貪欲さが頭をもたげ始めていた。

この宝物、そう、これはふたりのものだ。しかし、アイノなどどうにでもなる。あいつは弱虫の腰抜けだ。つまり、この宝は――おれさまのものということになるのだ。確かにアイノは役に立つ。この三年、よく働いてくれた。この箱にしたって、最初に見つけたのはアイノだ。スティンソン・ビーチのすぐ近くの、両側から張り出した岩の間で、渦巻く波間に浮き沈みしているところを見つけたのだ。棒を捜し出して箱を引き寄せたのも、雷雨や突風にもかかわらず、箱を持っていくべきだと頑張ったのも、みんなアイノだった。とはいえ、もう奴に用はない。これだけの宝があれば召使などいくらでも雇えるだろう、それも奴よりましなのを。

ビッグ・トムはそんなことを考えながら、満足気に宝の箱を眺めていた。アイノには、永久にここにいてもらおう。トムはついにそう肚を決めた。このもの寂しい、岩場にえぐりとられたほら穴が、アイノの終の住み家となるのだ。アイノがどうなろうと、心配するような奴はひとりとしているまい。

夜もふけていた。ほら穴の外では、海鳴りの音が響いている。ぎざぎざした岩の入り口から見える空はどんよりした灰色に塗りこめられ、はるか彼方の大洋との境に、ほんのひとすじ、かすかな光の線が走っていた。遠く沖の海は穏やかに凪ぎ、満ち潮とともに狂ったように海岸に押し

寄せてくる波とは、まるで無縁のもののように思われた。
アイノは、子供のように眠っていた。

火はほとんど消えかけている。時々、思い出したように赤い舌がアイノの頭上のごつごつした天井をなめ、ふたりの間に置かれた平たい宝の箱を照らし出していた。箱のふたは、再び閉じられている。ビッグ・トムは寝ずの番を続けながら、欲深い盗っ人の手でぶ厚い唇をぬぐった。そのうちに針ほどに残っていた炎も消え失せ、ぼうっとした残光がたき火のなごりをとどめるばかりとなった。

アイノの姿が全然見えなくなった。こいつはまずい。暗闇の中でビッグ・トムは顔をしかめた。事を運ぶには、灯りが必要だった。ほんのかすかな灯りでいいのだ。しかし、もうたきぎは残っていない。ほら穴の外に捜しに行くのは、気が進まなかった。アイノが目を覚ますかもしれない。それに何よりも、今すぐ片をつけてしまいたかったのだ。今宵、この宝物がすべて自分ひとりのものとなったことを確かめて、満ち足りた眠りにつくために。

トムはじっと目を凝らし、深い闇の中に横たわっているアイノを見きわめようとした。その姿は見えないが、何か目に留まったものがある。かすかな白い光を放っている何かが。それはほかでもない、当のアイノのシャツから半分だけはみ出していた。

ビッグ・トムはほくそ笑んだ。

それこそ、ふたりが今朝がた見つけた例の木ぎれだったのだ。アイノの心におかしな妄想を植えつけ、さんざんトムにぶちのめされる原因となった、なんの変哲もない木ぎれ。ビッグ・トムは邪な笑いを浮かべながら、アイノがこの木ぎれの前にうやうやしくひれ伏していたことを思い出していた。まったく、どこまでも間の抜けた奴だ！

たった今、アイノのシャツからはみ出しているそれを見るまで、トムはすっかり木ぎれのことなど忘れていた。あのうすのろめ、一日じゅうこれを持ち歩いていたに違いない。見つからないように、シャツの下に隠して。それが眠っている間に隠した場所からずり落ちて、ちょうどいい具合におれさまの目に触れたという寸法だ。

こいつはお笑いだぜ！　奴はこの木ぎれには魔力が潜んでいると、これは神サマだと思いこんでいた。今、そのありがたい神サマがアイノを天国に導いてくださるってわけか。

ビッグ・トムは、猫のように忍びやかにアイノに近づいた。宝箱の閉じたふたの上に手をすべらせ、鳩を狙う大蛇さながらにじりじり回りこむと、アイノの胸から木ぎれをひったくった。してやったりという顔で、木ぎれを残り火の中に投げこむ。それから火のそばにかがむと、冷たく硬張った指を握ったり開いたりして温め、ほぐした。海辺で拾った白い木ぎれは、煙を出しながらくすぶっている。やがて小さな炎がほとばしり、トムの双眸に赤い殺意の火を映し出した。

潮はますます満ち、海鳴りの音がいっそう大きく轟いている。

アイノが身動きし、か細い呻き声をあげた。トムはふり返り、身構えた。アイノの手がシャツ

の上をまさぐっている。例の木ぎれを捜しているのだろう。と、アイノが目を開き、その瞬間トムはうなり声をあげて飛びかかった。

叫ぶ間も身をかわす間も与えずに、太い指でアイノの喉を押さえつけ、両の親指を食いこませる。あまりにやすやすと事が運んだので、かえっていやな気分だった。せめて少しでも抵抗してくれればと思ったが、アイノはもがきもしない。なすがままに横たわり、カッと両目をむいている。喉笛を締めつけられているせいであろうか、その目はビッグ・トムの後ろを、何かひどく恐ろしいものを凝視しているように見えた。

ビッグ・トムは、ふり向いてそれを確かめたいという衝動に駆られた。が、その前にまず片づけることがある。彼はさらに指に力をこめた。だが次の瞬間、その指はゆるみ、トムの喉から世にも恐ろしい悲鳴がしぼり出された。断末魔の叫びがほら穴に反響し、闇夜に吐き出され、海を渡っていく。トムの背後には、煙がもうもうとたちこめていた。トムの目にこそ見えなかったが、煙は腕を持ち、触角を生やし、その触角がトムの喉にぐるぐる巻きついて締めあげていた。目がかすんできた。もう、目の前のアイノも見えない。まださっきのように、目をむいているのだろうか。煙は黒々とした柱と化し、その柱には尾をくねらせる無数の大蛇がびっしりと折り重なってうごめき、そして幾重にもトムの喉に巻きついていった。

トムは声をふりしぼり、よろよろと後ずさり、足をとられてたき火の中に倒れこんだ。その体に、燃えさかる炎が飢えたように襲いかかっていく……

そこには、変わりはてたビッグ・トムの残骸がわずかに残っているばかりだった。原形をとどめないほどに焼け焦げた、いくつかの骨の断片。それは、どこかの旅人がこのほら穴で一夜を明かして火を燃やしすぎ、煙にむせかえりながら外へ逃げる途中でつまずき、炎の中に倒れこんで焼け死んだ、というふうにも見てとれた。残された骨の状態を見れば、それは少しも無理な憶測ではなかった。おそらく、誰もがそれで納得したことだろう。いや、それよりもまず、はたしてこれが人間の骨に見えるだろうか？

アイノは燃え尽きた木片や骨の残骸を、しばし考えこむように見つめていた。それからつと身をかがめると、その中から慎重に例の木ぎれを拾い上げた。白い木ぎれには焦げ跡ひとつなく、もとのままの形で、上等の絹のようにひんやりとすべらかなさわり心地だった。アイノはうやうやしく、そっとその上に指を走らせた。続いて木ぎれに頭を下げ、再びシャツの下にしまいこむ。その顔は、つつましやかな誇りに輝いていた。

アイノはふり返った。そうだ、あの箱を忘れていた。彼は足でそのふたを開けた。中を見るなり、ゆがんだ微笑みが口元に浮かぶ。その中にあったものは、石ころと土に混ざった、猫の骨だったのだ。おそらくはどこかのセンチメンタルな少年が、かわいがっていた猫の死体を水葬に付したのだろう。アイノはごうごうと轟きわたる潮騒に、まっすぐ向かい合った。薄い肩を精いっぱい張り、ほら穴から一歩を踏み出す。人気のない海岸を、彼はきびきびと歩いていった。仕え

るために生まれてきたアイノは、今新しい主人を見いだしたのである。

過去からの遺言

THESE DEBTS ARE YOURS

アーサー・J・バークス

Arthur J. Burks

元陸軍大尉エヴァン・フロムは、なんとなく不安を覚えながらリンカーン・ハイウェイにさしかかった。自分の足でハイウェイ沿いを歩いてみたことなど、めったにない。こうして、つかのまだが歩行者の立場になってみると、ドライバーたちはまるで、どれだけ歩行者ぎりぎりのところを走り抜けていけるか競ってでもいるように思えた。時にはその目算を誤って、葬式と相成るのだ。つい昨日も、コンクリートの上に広がった赤いしみのそばで、隣人に会ったばかりだった。その黒っぽいしみがどのようにしてできたか隣人に説明され、エヴァン・フロムは身震いした。死人なら、普通の人が一生かかっても見られないほどの数を見てきた。が、いまだに死体と聞いただけでぞっとする。

「老人が五十フィートも車に飛ばされてね、ハイウェイの反対側に叩きつけられたんだ」と隣人は言った。

その声が今も耳の中でこだましている。隣人はかなりその事故に詳しいらしかった。

エヴァン・フロムは、ほんの少しだが猫背だった。むろん年寄りだからではない。あまりにも

大きな重荷を背負っていたからだ。より収穫の大きな戦術を遂行するという名目で大勢の部下に出撃を命じ、死なせてきた。それは今なお、心に大きなしこりを残している。彼はいらだたしげに首を振った。もういい加減、この重荷になじんでもいい頃だ。いつまでもそんなものに押しつぶされていないで、背筋をぴんと伸ばして歩こう。だが戦争の重荷にはなかなかなじまなくても、昨日移って来たばかりのこのクライスト・ホームの町には、説明しがたいなじみ深さを覚えていた。以前クライスト・ホームを訪れた覚えは全然ないし、健忘症にかかった経験も皆無だというのに。戦争前に車で通り過ぎたことくらいはあったが、いつものとおり時速七十マイルは出していたはずだ。クライスト・ホームだけでなく、ペンシルヴァニア州全体がなじみ深いものだった。ここにいると、ほっとすると同時になにか落ち着かない。フロムは長い間、クライスト・ホームに来る日を心待ちにしていた。かけがえのない親友ピーター・ベルッが、この村のはずれの小さな家をフロムに譲ると言い残し、彼の腕の中で息を引きとったあの日から。

「おれの家族はおまえだけさ」ピートはそう言い、にやっと笑って、死んでいった。

車がスピードを増してフロムの横を走り過ぎた。どの車もみな、スピードを出している。超大型のトラックがすごい勢いで通り過ぎ、その煽りで危うくよろめきそうになった。ハイウェイ沿いの土手を左に折れると、泥で濁った小川にまっ白いあひるが泳いでいる。風船のように丸々と太った、針で突っつけばパンと破裂しそうな羊がほこりっぽい頭を上げ、ぼんやりと彼を見つめた。この羊にもまた、見覚えがあった。

「きっと、ピートが何度もここの風景を話してくれたからだろう」と彼は思った。「羊やあひるのことも、彼から聞いたんだ」
彼は舗装した道路から外れると、曲がりくねった道を足元も見ずに歩いていった。まるで、足が道を覚えこんでいるかのようだ。右手を見るとハイウェイの向こうの丘に、二階建ての細長い家が目に留まった。その家もずっと前から知っていたような気がする。自分は、このダッチ・カントリーの村ででも生まれたのだろうか。
「おかしいな、こんなにいろんなものになじみがあるとは！」彼はひとりごとを言った。「ペンシルヴァニア・ダッチ・カントリーなんて、今まで何の関わりもなかったのに」
牧草地を越えて一番手前の家まで来たフロムは、思わず身震いしそうになるのを必死で抑えた。左手に小さな川が流れている。あたりの家々はどれも古く、岩で固めた土台の上に、明るい赤のペンキを塗った昔風の特大レンガが積み重ねられていた。家々も頭より高い岩の壁も、まるでフロムを覚えていてこぞって彼を歓迎し、今までどこにいたのか、いつ戻って来たのかと問いかけているかのようだ。それは、実に妙な心持ちだった。
ドアに書かれた文字を見る前から、角の建物は銀行だということもわかっていた。さらに角を曲がった裏通りを横切ると郵便局があることも、その裏通りはゆるやかな坂となって東に延び、やがてしだれ柳の並木道となることも。
そちらに目を移すと、やはり思ったとおりだった。

「知ってて当たり前だ」彼はまたひとりごちた。「きのう見たばかりじゃないか！」
しかしそう言いながらも、おそかれ早かれ事実に目を向けなければならないことはわかっていた。きのう初めてクライスト・ホームの中心部を見た時に、すでにこの村を見知っていたのだ。あの瞬間、彼の心にさまざまな感情が渦巻いた——悲しみ、虚しさ、怒り、そしておそらくは、彼自身にも説明しがたいかすかな恐怖が。
フロムは幾世紀をも経た郵便局の石段を、まるで聖堂に入るような気持ちで昇っていった。スチームが効きすぎた内部には熱気がこもり、秋の冷気もここまでは届かない。彼は、〈局留め郵便〉〈切手、書留〉〈為替、郵便小包〉と書かれた窓口に順に目を走らせた。この消えかかった金文字にも、確かに覚えがある。窓口の後ろで働く男たちの大半は、生まれつき髪が灰色で眼鏡をかけ、背をかがめながら震える手でのろのろと仕事をしているように見えた。彼らは一生をこの窓口の後ろで過ごしてきたのだ。その姿を見ていると、ここを離れたらたちまち死んでしまうに違いない、と思えるほどだった。彼らにとって今や郵便局は、心臓の鼓動そのものなのだから。
老人のひとりが、口をぽかんと開けてフロムを見つめた。震える声で仲間に呼びかける。
「オリー、フロム大尉が来たぞ。エヴァン・フロムだ！」
フロムは一番大きな窓口に歩み寄り、肘をついて身を乗り出すように、開いた窓からのぞきこんだ。
「ぼくがどうかしたんですか？」突っかかるように訊ねる。「きのうだって来ましたが、別に騒

がれた覚えはありませんね」
「あれは掃除婦が来る前だったからですよ、大尉」局長らしい、一番年長の腰の曲がった男が答えた。
「それでその掃除婦が、ぼくと何の関係があるというのです?」
「ただ好奇心をそそられただけですよ、大尉」デビット・ボーゲル局長は言った。「たいした事件も起こらないようなこうした小さな町では人々が何に関心を持つものか、ご存じでしょう」
「さあ、知りませんね。話に聞いてはいますが。小さな町では、人々は他人の噂ばかりしているってね。でもぼくは、ここに休養に来たのです。人の手を煩わせるつもりもありませんし、自分のことは自分で……」
「あいにくこの町では、自分のことなんてものはないのです。どんなに個人的なことでもね!」
老デビットは、決めつけるような口調で言った。「しかし、この件は口外しないでおきましょう。あなたがその気になって、話してくださる時まで」
「あなたがたがいったい何の話をしているのかさえわかれば、それなりに答えられるのですが」
老いたオランダ人の柔らかな灰色の目に出合って、フロムも敵意を失った。
老人は踵を返し、足を引きずりながら私書箱の後ろに置いた棚の前まで行くと、その一番上から分厚い茶封筒を取り出した。フロムは思わず首を振った。軍の公式通信など、届くはずがない。ひと月かふた月の間は手紙を受け取らなくてすむように、わざわざ誰にも住所を知らせずに来た

のだ——もちろん、ハリエット・ヘードルは別として。彼女こそ、フロムがすっかり心の重荷を片付けたその時には、妻となるはずの女性だった。しかしハリエットだったら、こんな手紙を送ってきはしない。彼女の手紙はいつも小さく、しゃれていて、甘い香りがする。この老人たちにハリエットの封筒の香りをかがせたら、初めはくしゃみでもしそうだった。
「あなたのお名前は間違いなく、エヴァン・フロムさんですね？」デビット・ボーゲルが念を押した。「E-V-A-N F-R-O-M-Eですよ？　で、肩書は確かに陸軍大尉（キャプテン）ですね？」
「きのうそう申し上げたはずですよ。それに郵便物が来るかもしれないともね。ぼくが手紙を受け取るのが、そんなに不思議なんですか？」
「世間には不思議なことがたくさんあるものですよ、大尉」デビット・ボーゲルは答えた。
だだっ広い郵便室にいた灰色の髪の事務員たちは、ひとり残らずカウンターの後ろに寄って来て、フロムを見つめていた。誰ひとりにこりともしない。彼らがじっと待っているさまは、人なつこい灰色の鳥（からす）の群れを思わせた。
「申し訳ないですが、この手紙をお渡しする前に年齢を教えていただけますか？」
「ぼくは休戦記念日に生まれました。一九一八年十一月十一日です！」フロムは不機嫌に答えた。「だから、きょうで三十歳というわけです。ちょうど誕生日ですからね、局長さん。さあ、その手紙をいただけますか？　それとも、あざや傷跡もお見せしましょうか？」
老局長は封筒の文字をためつすがめつ眺めた。

「驚いたな！」老事務員のひとりが言った。「ペンシルヴァニアでは何だって起こるのさ！」デビット・ボーゲルは答えた。「さあ、お受け取りください、大尉。それをご覧になれば、わたし共がばかげた振る舞いをした理由もおわかりいただけると思います」

エヴァン・フロムは肩をすくめたが、分厚い封筒を受け取ると、汗で湿ったカーキ色のシャツがますますべったりと広い肩に貼りついた。彼の目はまず、消えかけた震える筆跡で書かれた宛名——まるで細長いくもの脚のような字だった——に吸い寄せられた。

エヴァン・フロム陸軍大尉、合衆国陸軍
留め置き郵便
クライスト・ホーム
ペンシルヴァニア

見たこともない筆跡なのに心の内部で何かが強く揺さぶられ、わずかにだが持つ手が震えた。その筆跡が非常によく見知ったもの、自分の字同然によく知っているものだったからだ。だがどうしても、いつどこでそれを見たのか思い出せない。その上、差出人はまるで知らない——それでいて非常に覚えのある人間だった！

ジョセフ・トーエル
留め置き郵便
クライスト・ホーム
ペンシルヴァニア

一瞬、自分の内部でベルが鳴り響いたような気がした。だがすぐそれも、何の手がかりも残さずに消えてしまった。どう考えても、ジョセフ・トーエルなる人物に心当たりはない。
「きっと何かの間違いです」エヴァン・フロムは言ったが、内心間違いなどではないことを強く感じていた。「ジョセフ・トーエルなんて人は知りません」
老人たちは目配せを交わし合った。五人とも、全然表情を崩さない。
「ええ、ご存じないだろうと思っていました、大尉」デビット・ボーゲルが口を開いた。「彼は一八九八年に亡くなりましたから。ここの局長を務めていたんです。八三年に建てられた、この郵便局の初代局長です！」
エヴァン・フロムはほっと息をついた。
「では、どう見ても何かの間違いですね。この手紙はぼくのではありません」
「わたしたちもそう思っていました。初め掃除婦があの棚の後ろからこれを見つけ出した時には」デビット老人は、振り向いて棚を指さした。「あの棚は五十年以上も前に備えつけられたも

のです。なぜ彼女があの後ろを掃除する気になったのか、あるいはなぜわたしがそう言いつけたのか、まるで見当もつきません。ただ、強いて言えば……」
「強いて言えば、何です？」フロムはうながした。
「ご冗談でしょう？　あなたがた五人が、そんな性質(たち)の悪いいたずらをするとは思えませんがね……そうでしょうとも」疑うようなフロムの口調に五人が傷ついた様子だったので、彼はあわててつけ加えた。「ええ、あなたがたはそんないたずらをするような人には見えませんよ」
　彼は不意に言葉を切った。その目は分厚い封筒の、配達法指示に釘づけになっていた。たった今突然、それに気づいたのだ。差出人はその指示をくもの脚のような書体で――それ以上に適切な表現はないように思われた――差出人住所氏名(リターン・アドレス)の右側にしたためていた。〈一九四八年十一月十一日当日に受取人が取りに来るまで留め置くこと！〉
　フロムはぱっと顔を上げ、五人の老人を見つめた。彼らの姿がかき消え、代わりに全然別の人物が、それも自分と同じように若く、この土地の者ではない人間たちが立っていればいいと期待しながら。そして、この古い石造りの郵便局全体が消え失せ、基地病院の天井が現れはしないかとひそかに願いながら。そうすれば看護婦のハリエット・ヘードルが、心配そうに彼の上にかがみこんでこう言ってくれるだろう。「もう大丈夫よ、大尉。すべては終わったわ。あなたはショ

ックを受けただけ。それに負けてはだめよ！」
だが老人たちは消えはしなかった。郵便局の古い建物も残っている。依然としてスチームの熱でむし暑く、ペンシルヴァニア・ダッチの村そのもののように重々しく。
「いつ、ジョセフ・トーエルが死んだんですって？」まるで夢の中で自分の声を聞いているように感じられ、人にもそう聞こえはしないかと心配だった。額に吹き出た汗――スチームのせいではなかった――にも気づかれたくなかった。「一八九八年九月十三日です」デビット・ボーゲル老人が言った。「わたしが彼のあとを引き継ぎました。それ以来、ずっとここで働いています」
「じゃあ、相当キャリアが長いんですね？」エヴァン・フロム大尉は言った。「とにかくぼくはもう帰ります。この手紙は絶対ぼくのじゃありませんよ。きっと同姓同名の人がいたんでしょう。とりあえず内容を確かめて、またお返しにあがります。それとも、今開けましょうか、そちらの机の上で？」
「お好きなようになさってください」デビット・ボーゲルは言った。「でもご心配なく、それはあなたの手紙です。ジョセフ・トーエルは、一度だってミスを犯したことがありませんから！」
ボーゲルの声には、いまだに五十年も前に死んだ局長への憎しみがこもっているようだった。フロムは奇妙な感じを受けた。憎しみという感情が、こんなにもあとをひくものだとは。そのほかにも、半世紀もの間変わらない感情なんてあるだろうか？――彼はかさばった封筒の重さを手のひらで測りながら、自分の胸に聞いてみた。

でも今は、そのことは考えるまい。彼はなじみ深いクライスト・ホームへの道を引き返しながら、思い直した。自分のつかのまの夢は、ハリエット・ヘードルと共にあの病院に置いてきてしまったのだから。彼女を迎える決心を固める、その日が来るまでは。

ピーター・ベルッから贈られた二階建て五部屋の家に戻ると、フロムは封筒をテーブルの上に置いた。力強く両手をこすり合わせながら、居間のドアに据えつけられた等身大の鏡に全身を映してみる。オーケイ、まったく正常だ。彼は自分に言い聞かせ、肩の重荷を振り払うかのように背筋を伸ばした。砂色の髪は相変わらずぱさぱさしている。いいさ、髪なんて放っといたって死にやしない、と彼は思った。体重は少し落ちていたが、病院にいた時もハリエットはあまり食べさせてくれなかった。男は運動をしていないとすぐぶくぶく太るものだし、太った男と結婚するのはいやだと言って。現在の体重は百八十ポンド。骨太でがっしりした体格なので、六フィートの身長とちょうど釣り合いがとれていた。

鏡の方にかがみこみ、自分の目をじっとのぞきこむ。おかしなところは少しもなかった。

「妙だな」ふと、彼は思った。「なぜピートはこの家をぼくにくれたのだろう？　でも、彼には子供も身寄りもなかった。ほかに誰に譲るというんだ？」

それでもなお、ふっきれないものが残っていたが、先ほどの手紙に比べたらどうということもないはずだ。彼は今すぐにこの謎に取り組もうと決心した。ピーター・ベルッは出征する際備品

や家具をそのまま残していったらしい。地下室のボイラーにスチーム・ヒーター、それに今彼が黄色い封筒を――その時初めて封筒は歳月のせいで黄色くなったのだと気がついた――開けている、年代もののレター・オープナーまでも。中の手紙は大判用紙（フルスキャップ）にぎっしり書かれており、ゆうに二十ページはありそうだった。書き出しの挨拶（サリュテーション）（手紙のDear～にあたる部分）は書いていない。だが、最初の一行が彼の目をひいた。

〈この家は〉とそこには書かれていた。〈贈り物ではない。昔の借金を肩代わりしてもらう報酬なのだ。だから、驚くにはあたらない。支払人の名を予見するのは容易なことではなかった〉

興味をひく内容だった。どうせ、狂言まがいの作り話ではあろうが。

ところがそれに続く文章は、そう言ってすませられるものではなかった。

〈ハリエットの名のほうがまだ予見しやすかった。より密接なつながりがあるからだ。ヘードルというのが姓なのだろうが妙な名だ。彼女をすぐに呼びよせたまえ。君のこれからの仕事に、深く関わっているのだから。我々はともにこの負債を作った。ともに誤ちを犯したのだ！〉

エヴァン・フロムはもう一度封筒を手にとって、調べてみた。ハリエット・ヘードルは二十五歳だ。ジョセフ・トーエルは五十年前に死んでいる。ともに誤ちを犯したわけがない。彼は別の点を考えてみた。ピーター・ベルツはハリエットに会ったことがなかった。そしてハリエットは、一度もペンシルヴァニア州クライスト・ホームを訪れていない。ということは、郵便局の人間が彼女の名を知っているはずがないのだ。

奇妙な戦慄が、腰からゆっくりと背筋を上がってきた。恐怖ではない。が、何かぞっとする感じだった。何かを予期しているかのように悪寒が全身に広がっていく。
〈借金は支払わなければならない〉と手紙は続いていた。〈私は注意深く時機を待っていた。今の君の借金が、すっかり清算されるまで。君のこれからの一生は、ハリエット・ヘードルのものだ。だがそれを別にすれば、クライスト・ホームの外での借りは――人間に対しても、神に対しても――すべて返したはずだ〉
背筋の悪寒が、さらに少し上がってきた。まだばかげた話だという気はしているものの、手紙に書かれたことは本当だった。彼はこの世界の何人(なんぴと)にも、一セントとて借りはなかった。信仰のことなら、問題にするまでもない。クリスチャンとして、少なくとも人並みの務めは果たしてきた。そう、借りは全然ない。ニューヨークの銀行にある一万四千ドルの預金は、近々クライスト・ホームの地方銀行に移すつもりだった。何とも妙な話だ。こんな昔の手紙が彼の今の財政状態を言い当てているとは。それでもハリエットの名前さえのっていなければ、取るに足らない偶然と片付けることができただろう。
彼は読み続けた。
〈私の余命はあと六十七日だ〉ジョセフ・トーエルのくもの脚のような書体を見ていると、フロムにはひどいペンシルヴァニア・ダッチ訛(なま)りが聞こえてくるようだった。〈もう、債務を弁済するだけの時間はない。だが、それほど心配はしていない。それが致し方ないことである以上、ど

う気をもんでみても無意味だからだ。しかし、借りた金は、現世で無理ならば来世で返さなければなるまい。ゆえにこの借金は、君のものだ！〉

「だけどいったい、どうやってそんなことを証明してみせるんです？」エヴァン・フロムは声に出して呟いた。〈余命はあと六十七日〉という文字に目が吸い寄せられ、ふとある疑問が浮かんだ。「ならば彼はその時点で、ぼくの現在の余命がどのくらいか知っていたのだろか？　いや、知っていたとしてもどうでもいいことだ。たとえ、あと何年、何カ月かの寿命だろうと――ハリエット・ヘードルとさえ暮らせるならば！」

〈ここに債権者のリストをあげておく〉古い手紙はさらに続いていた。〈彼らの何人かはすでに死亡したかもしれないが、その相続人がいるはずだ。そうした死者と生者との関係は、すなわち私と君の関係なのだ〉

　エヴァン・フロムは誰もいない居間に向かって皮肉たっぷりにおじぎをしながら、言った。

「それではいずれ、それがどういう関係なのかお教え願えるわけですね。借金を肩代わりしろとおっしゃるからには」

　読み進めるうちに、フロムはその答えの一部というべきものを見いだした。〈その関係がどのようなものかは、時機が来ればわかるだろう！〉

「どうしても気に入りませんね、あなたのその、父親みたいな物言いは！」エヴァン・フロムは、思わず声を荒げた。

手紙には七人の債権者の氏名と、それぞれの融資額が書いてあった。フロムは無意識に鉛筆を取りあげた。金額をひとつずつ、机の上のメモ用紙に書いていく。そのメモ用紙に目を留めて、彼はふと笑みを浮かべた。そこには、〈ワルドルフ・アステリア・ホテル〉と印刷されてある。ピートはホテルに行くと、決まって記念に何か持ち帰ってきたものだ。が、ワルドルフ・アストリアの名前を聞いたことはなかった。このメモは、ピートがいつ頃持ってきたものなのだろうか。

フロムは全部の金額を合計した。「三千百十一ドルか。たいした額じゃないな。ぼくの財政状態を知っていたなら、ジョセフだってそう思ったはずだ」

だが次の行を読んで、息が止まった。

〈金利はかなり低いが、長年の歳月がたっているため、合計すると約一万四千ドルとなるだろう〉

彼は手紙を脇に押しのけた。妙な悪寒が、さらに背筋を上がってくる。ここまでくると単なる偶然ではない。戯言(たわごと)だと笑ってすませられる話ではなかった。だが現実の問題として、一八九八年の夏にジョセフ・トーエルが、一九四八年のエヴァン・フロムの預金高をこれほど正確に見通すことなど、できるものだろうか？

「もし銀行の名前まで書いてあるようだったら、ハリエットに電報を打って今すぐ飛んで来てもらおう。いや、どちらにしてもすぐ呼び寄せなければ！」

とはいえフロムは、怖れてはいなかった。確かに異様なできごとではあるが、その裏に必ず真相が隠されているはずだ。突きとめてみれば、結局は笑い話ですむことかもしれない。

「この借金で破産したあとも、笑っていられればの話だが！」彼は呟いた。心のどこかに、この借金は彼のものだ、一セント残らず払わなくてはならない、と言っている声がある。〈私の墓を訪ねてくれるには及ばない。だが君の立場を考えるに、もし来てくれれば特異な体験をすることになるだろう。なぜならその時にこそ、君は知ることになるからだ！〉手紙はそう続いていた。

「何を知るっていうんです、ジョゼフ？」エヴァン・フロムは罵った。「あなたの手紙には、ひとつとして、ぼくに理解できることはないんですよ！」

〈アンナと私は寄り添って眠っている。死後もふたりの墓の手入れをしてもらうような計らいは、あえてしておかなかった。そんなことをしても無意味だからだ。しかし、人並みのエゴイズムから、墓石は風化しやすい砂岩ではなく大理石になっている。だから、もし気が向いてそれを見に来る時があれば、刻まれた名が読み取れることだろう〉

エヴァン・フロムはたっぷり二時間、手紙から目を上げずに読んでいた。ジョセフ・トーエルがこの判読しにくいくもの脚のような文字を書いた時には、もう八十歳近くになっていたはずだ。フロムは、なぜ書き出しの挨拶がないのかを考えてみた。それがないということ自体、何らかの説明になっているはずだ。だが、見当もつかなかった。それでいてフロムが手紙を読みながら声をたてて、あるいはくすくすと笑うたびに、ジョセフ・トーエルも彼といっしょに、時には彼に

向かって笑いかけているような気がするのだった。

ジョセフ・トーエルは、フロムに動かしがたい証拠を見せておく必要があると考えたらしく、手紙の端々にそれがしるされていた。たとえば一九一八年に休戦記念日が制定されたこと、その数カ月前にフロムの父親がフランダースで戦死したこと、そしてフロムがこの歴史的な記念日に生まれおちたことなど。さらにこの日には毎年、クライスト・ホームの郵便局が八時半まで開いていることも添えられていた。また、第二次世界大戦中のフロムのさまざまな経験についても、かなり正確に触れてある。とはいえ少なくともふたりの人間はこうしたことをすべて知っているはずだ、とフロムは思い返した。亡くなったピーター・ベルッと、今も精力的に活動しているハリエット・ヘードルと。

あのふたりを一度も引き合わせる機会がなかったことは、かえすがえす残念だった。

奇妙な手紙を読み終えると、フロムはいてもたってもいられないほどトーエルの墓に行ってみたくなった。〈アンナ〉という、おそらくは妻であろう女と並んで埋葬されているという、その墓に。だが何ゆえに、この過去の手紙は〈アンナ〉のことに触れているのだろうか。墓石を識別するためという理由以外、フロムには考えつかなかった。いや、そんなことは理由になっていない。間違いなくトーエルには何らかの意図があったのだ。時が来れば、それが明らかになるだろう。

フロムは、手紙というよりは日記のような、それでいてそのどちらともいえないトーエルの手

紙を、壁の金庫にしまった。ピーター・ベルツはこの金庫のことを何も言っていなかったが、家の中を見回った際に、開いたままになっていたのを見つけたのだ。
カーキ色のシャツの上に、作業上着を羽織る。たとえ銀行預金がすべて借金の返済に回るとしても、少しまともな服をそろえておこう！　彼はそう思いながら、外に出た。しかしそれでは、ハリエットが着いた時に、誰が結婚許可証の費用を払うというんだ？
そういえばハリエットに電報を打つ予定を忘れていた。家に戻って電話で電報を頼み、リンカーン・ハイウェイに足を向ける。それから丘の頂上に通じる道を左手に折れた。この丘があるために、彼の家はクライスト・ホームの村からは見えなかった。左右を見て、車にはねられないように気をつけながら、フロムは素早く道路を横切った。

まず店に寄って必要な買い物を済ませ、店主に家政婦の手配を頼んでから、道を東へと進んでいく。その道はメノナイト教会を通り過ぎたところで右にカーブし、背の高い木々の植えこみに突き当たって消えていた。この木の名前はぜひ調べておこう、と彼は思った。実に美味な果実をつけるのだ。きびきびした足取りで脇道にそれ、さらに東へ向かう。そのうち舗装が途切れ、道は丘の急な斜面を上がっていった。その先はまたも高い木立の中に消えているため、まるで道がはるか彼方から助走して、木にジャンプしようとしているかのようだ。彼は道を渡ると、誰かが閉め忘れたらしい門から塀の内側に入った。ズックの靴が、小石の感触を伝えてくる。右手の方

で、鎖につながれた大きな犬が吠え始めた。
エヴァン・フロムはちょっと動揺した。犬に吠えられたことなどめったになかったからだ。なぜこの犬は吠えたのだろう？　もちろん、犬が吠えること自体は何の不思議もない。が、この犬は尻尾を巻いて座り、フロムを見つめ、鼻先を空に向けて長々と吠えたのだ。まるで今が明るい昼日中ではなく、月の出ている夜更けであるかのように。それは、なんとももの哀しげな鳴き声だった。フロムは庭の門のところで立ち止まり、この大型犬に向かって指をぱちんと鳴らした。
「おい、仲よくしようぜ！」
すると、犬はもう一度哀しげに吠えた。その声に網戸から女がひとり、せわしげに出て来たので、フロムは歩きだした。漠然とその女に見覚えがあったからだ。クライスト・ホームに来て以来、見覚えのある物や人間にはもううんざりしている。そうは思ったものの、二、三歩行ったところで振り向くと、網戸の外に立って腰に手を当て、じっと彼を見つめていた女に話しかけた。
「この犬はいつもこんな吠え方をするんですか？」
「いいえ、フロム大尉」名前も知らない女は答えた。「お葬式の行列が通り過ぎる時だけです。だから見に来たんですわ。きょうはお葬式があるなんて聞いていませんでしたから。それとも」女は親しげに微笑みかけた。「お知り合いの方のご供養に？」
「いえ」フロムはあわてて言った。「いえ、違うんです。そういうわけではありません。でも、もしあなたの犬に口がきけたら、何ということか……」

だが女はすでに背を向け、家に戻っていくところだった。網戸が音をたてて閉まった。フロムは今や、奇妙なほど動揺し、恐怖を感じていた。現実離れしたことがこうもたて続けに起こって心が乱れるのは妄想のせいで、戦争で受けたショックが原因なのだろうか。長いこと退院できなかったのも、そのショックがなかなか治らなかったからだった。彼はそんなことを考えながら、舗装のない道をのぼっていった。

墓地は大きなものだった。その一部はかなり古いらしく、ぎっしりと墓石が立っている。新しい方の土地には、墓石や記念碑がまばらに見られるだけだった。墓地全体が丸い小山の上にあって、灰色がかった緑の草が足をおおうほどに丈高く密生していた。風が草の間をそよぎ、戯れ、おじぎをさせて通りすぎていく。すると地面は灰色から緑へ、緑から灰色へと色を変え、まるでひっそりした山中の湖に墓石が浮かんでいるような、神秘的な光景を見せていた。フロムはたくさんの墓地を見てきたが、これほど楽しげで、親しみさえ湧いてくる墓地は初めてだった。

左に曲がり、古い方の地所に足を踏み入れる。高い記念碑があって墓地の由来が書いてあったが、ここよりさらに古い墓地がどこかにあるというくだりをちらっと読んだだけで通り過ぎた。そのまま墓地の中央を貫く、深い溝のような小道を進んでいく。両側には草が高く茂っているため、大理石や砂岩の墓石は——砂岩の方がずっと傷みがひどく、ほとんど碑銘が読み取れないくらいである——風そよぐ湖を思わせる草原の間に、わずかに見え隠れしている程度だった。

フロムは右に曲がった。二十歩ほど歩いて、今度は左に折れた。もう一度右に折れ、簡素な大

理石の墓石の前で立ち止まる。古い方の地所に入ってから初めて目に留まった墓石だった。名前と日付に自然と目が吸い寄せられた。そこにはジョセフ並びにアンナ・トーエルと刻まれ、それぞれの生年と没年がしるされていた。これで間違いない。アンナはジョセフの妻だったのだ。彼女は一八九〇年、夫に八年先立ってこの世を去っていた。

きょう一日はエヴァン・フロムにとって、かつてないほどに不可解な一日であった。病院で過ごした日々の間にも、とらえどころのない白昼夢と悪夢とが、常に現実と入り混ざっていた彼ではあったが。

そう、それは確かに不思議な体験だった。ジョセフ・トーエルとその妻の墓の前に立ち、トーエルがあの手紙を書いたのは、エヴァン・フロムの誕生と洗礼の二十年も前だったのだと実感することは。それも三十八歳の誕生日を待って、その手紙をエヴァン・フロムその人に届けるために。

郵便局の老人の言葉が、脳裏によみがえってきた。「ペンシルヴァニアでは何だって起こるのさ！」

彼は怒ったように頭を振った。魔法だの呪いだのというものはいっさい信じていなかった。これは絶対に何かの悪ふざけだ。しかし、あの郵便局の老人たちの仕業とはとても思えない。ピーター・ベルツがこれに一枚嚙んでいるとも思えなかった。もしこれがピートの仕組んだことだと

すると、彼は自らの死を予期していたということになるわけで、それはエヴァン・フロムに降りかかったできごとと同じくらい突っ拍子もないことだった。
いや、事はもっと単純なのだ。賭けてもいい。同じ部隊にいた軍隊仲間がこのクライスト・ホームに来ているに違いない。今この瞬間にも、一風変わった歓迎のしるしとしてこれを仕組んだ奴が、どこからか見ているかもしれないのだ。友人たちはみな、彼が病院でどれほどの苦しみをなめてきたか知っている。だから、友人であるならばとてもこんな仕打ちをするとは思えないが、だがどうして、軍隊の紳士諸君とはわからないものなのだ。中には、実に奇抜なユーモアのセンスを持っている連中だっているのだから。
「あなた方の名前は今、不当に利用されています」彼はジョセフとアンナに向かって、穏やかに言った。「でもぼくが、必ず突きとめてみせます。誰であろうと、こんないたずらを仕組んだ連中を」
彼は向きを変え、何歩か歩き出して急に立ち止まった。そのまま身じろぎもしなかった。再び背筋にあの冷たい感覚を、さっきよりはるかに強く感じながら。
ジョセフとアンナ・トーエルの墓の場所は誰にも聞いていなかったはずだ！
悪寒が背筋を駆け上がっていくとともに、さっきの女の家にいた犬には絶対気づかれずに帰りたいと心の底から切望した。
だが、それは失敗に終わった。犬は長々と遠吠えし、つながれた鎖ががちゃがちゃ鳴った。

ジョセフ・トーエルは、彼なりに適切な順序を考えて、債権者のリストを作ったようだ。最初の人物はアドルフ・ブルーナー、負債額はちょうど四百ドルだった。そこへ向かうのに、フロムはリンカーン・ハイウェイを通ってはいかなかった。ベルツ家のいぼたの木の生け垣を回り、ダーリング家の裏庭を抜けていく小道があったはずだ。彼は足ばやに歩いていった。と、裏門の横にいた雌犬が彼を見て鼻面を上げた。

「おい、吠えたりしたらぶん殴るぞ」彼は犬に話しかけた。

ブラットハウンド犬は彼の言葉を理解したかのように尾を振って門を叩き、吠えはしなかった。フロムはダーリング家の生け垣の破れ目から車庫のドアに続く坂道に抜け、クライスト・ホームでもかなり古い家の、長い石段を上がっていった。ドアについた真鍮のノッカーを持ち上げ、音をたてる。すると、若い女性が出て来た。

「まあ、フロム大尉！」彼女は言った。村人がこんなにも早く新参者の名前を覚えてくれるとは、なんとも心温まる話だ。が、同時に彼は戸惑いを覚えた。彼女の名を知らなかったからだ。

「ミス・ブルーナーですか？」彼は訊ねた。「いいえ、ミス・ブルーナーはわたしの大伯母ですの。あまり具合がよくないんですけど、お客さまならいつだって歓迎ですわ。ただ、はっきりと大きな声で話してくださいね。耳が遠いんです。もう九十七歳ですから」

フロムは小ざっぱりした居間に通され、娘が勧めてくれた古いがっしりした椅子に腰を下ろし

た。なんとも懐かしい気持ちが湧いてくる。フロムはその感情を押しやった。要するに、古い居間なんてどこも似たりよったりなのだ。彼が子供の頃に足を忍ばせて歩き回った居間も、きっとこんな感じだったに違いない。

娘は二階へ駆け上がっていった。その若々しく引き締まった足首に、フロムはうっとりと見とれていた。まだ、ぴちぴちした女性の脚に無関心でいられるほど、年老いてはいない。だが少々後ろめたくもあった。今ごろハリエットは、彼と会うために機上の人となっているはずだったから。

枯れ木のように細い、非常に威厳のある老婦人が背筋をすっと伸ばして、娘に先立って降りて来た。雪のように白い豊かな髪はひとすじの乱れもなくきちっと結い上げられ、首には何千ドルもしそうなチョーカーをつけている。彼女の足首は、若い姪に負けないくらい美しかった。眼鏡はかけていない。そしてその黒い目は、鷹のように鋭かった。エヴァン・フロムが見える位置まで降りてくると、彼女は足を止め、やせた手を喉元に当てた。何か言いたそうに口を開きかけたが、そのまま彼の前に来て手を差し出した。

「エヴァン・フロム大尉です。初めまして、ミス・ブルーナー」彼は挨拶した。

「驚きましたわ!」老婦人は言った。「一瞬、あなたを見て……でももちろん、そんなことはありえないわ。わたしももう年をとったのね」

「ペンシルヴァニアではありえないことなんてないのですよ、ミス・ブルーナー」エヴァン・フ

ロムは言った。「クライスト・ホーム郵便局のデビット・ボーゲルがそう言っていました。ぼくを見て誰かを思い出したんですね。どうか教えてください、ぼくにとってはとても重要なことなんです」

婦人は軽やかに笑った。

「何をおっしゃるやら」彼女は言いながら、フロムのすぐそばの椅子に腰かけた。「こんなお婆さんがあなたを見て何を考えたかなんて、話しても退屈なさるだけですよ。で、このわたしに何のご用かしら？」

しかし何から切り出せばいいのか、彼には考えもつかなかった。ただひとつだけ、ジョセフ・トーエルの手紙の件だけは、この老婦人にも黙っているつもりだった。

「昔の借金の件でお伺いしたのです、ミス・ブルーナー。ハインリッチ・ブルーナーさんに対する負債の件で……」

「でも、兄は」彼女はさえぎった。「亡くなりましたわ、四十七年も前に！　あなたが兄にお金を借りているとは、ちょっと考えられませんけど。それでなくても兄は用心深い人でした。とても用心深くて、誰にもお金など貸したことはありません！」

その口調には、あからさまな皮肉がこめられていたのではないだろうか？　しかし想像するだけなら、なんとでも勝手に言えるものなのだ。

「でも、例外ってことがあるでしょう？」エヴァン・フロムは食いさがった。「たとえばジョセ

フ・トーエルに四百ドルばかり貸したんじゃないですか？」
若い娘は、自分は立ち聞きなどしていないといわんばかりに、台所で歌を歌っている。ミス・ブルーナーがさっと立ち上がった。それがあまりに素早かったので、一瞬一世紀近くを生きてきた人間ではなく、十七、八の娘に思えたほどだった。
「もしそうだとしたら、何だとおっしゃるのです、大尉？　どうするおつもりです？　どうしてそんなことに興味をお持ちになるのですか？」
フロムは山をかけてみた。
「その理由は、初めにぼくを見た時、誰かと見違えたことと関係あるんじゃないですか――たとえば、ジョセフ・トーエルと間違えたとか！」
だが、山ははずれた。老婦人は若々しい、鈴をふるような笑い声をたてた。
「まさか、そんなこと。ジョセフ・トーエルが亡くなってから五十年もたつんですよ。今さら彼の負債など、どう考えたって……」
「ぼくはそれを払いに来たのです！」エヴァン・フロムはきっぱりと言い切ったが、自分で自分の言葉に驚いていた。「ぼくは何も、あなたと言い争いをしに来たわけじゃないんです。その四百ドルをお返しにあがっただけですよ！　理由はちょっと申し上げられないにしても、お心当たりはあるはずです」
「お若い方」ミス・ブルーナーは言った。「万が一、あなたがその借金を払わなければいけない

何かの理由があるにしても――そんな借金が本当にあればの話ですが――もうとっくに時効になっていますわ。七年たてば、借金は時効になると定められていますから」

「いいえ！」フロムは反発した。「一般的にはそうかもしれません。でも法律がどうであろうと、この件は別なのです。時効にはなっていません」

未婚の老婦人はまだ立ったままだった。

「あなたのお話はわたしには理解しかねます、フロム大尉。でもとにかく、これ以上お話したくありません。なんだか、自分の棺桶に片足を入れているような気がしてきますわ。わたしは、今の年の倍も生きたいと思っているのですからね。帰ってください！　兄の書類は調べておきましょう。もし、借金があったなら……とてもあるとは思えないけど――」

「何かわかったら、お電話をいただけますね？」フロムが訊ねた。「長年の利子がありますから、その四百ドルはかなりの額になっているはずです」

彼は表へ出て左に曲がり、砕石を敷きつめた道路（マカダム・ロード）を歩いていった。今にも彼と同じ軍服を着た旧友が、木や生け垣の後ろから飛び出してきそうな気がする。旧友たちはまんまとかつがれた彼を見て、部隊にいた時のように大声で笑いころげるだろう。だがもしそうなら、老郵便局長デビット・ボーゲルも、片棒をかついでいることになる。どう考えても、あの灰色の髪の紳士がそんなことをするとは思えなかった。

彼はもう一度、ジョセフ・トーエルの手紙に書き出しの挨拶がなかった理由を考えてみた。どうにもそれが心にかかっている。挨拶がないということは、誰かがジョセフ・トーエルの古い原稿を見つけ、封筒だけ用意していたずらを仕組んだとも考えられる。いやしかしあの手紙には、彼やハリエット・ヘードル本人のことが書いてあったし、彼の戦争体験にも触れていた。それについては仲間も知っているとして——しかし、父の戦争体験や第一次世界大戦での戦死は知っているはずがない。

右手に折れ、また長い石段をのぼる。ブルーナー家のものより、さらに古いようだ。

「この古い家々はきっと、ぼくが訪れたあと煙のように消えてしまうんだ！　そうとも。ここはペンシルヴァニアなのだから！」彼は心の中で呟いた。

今度の訪問相手は、マンフレッド・リッチャーという老人だった。ミス・イルザ・ブルーナーより年老いて見えるが、まだ八十歳で、両目を失明していた。ドアを開けて老人の顔がのぞいたとたん、フロムはぎくっとした。濁った見えない目が、まっすぐこちらに向けられていたからだ。

「何でしょう？」老人の声は震えていた。六フィート数インチの身体を誇らしげにぴんと伸ばし、フロムの頭上に目を当てている。「どなたですかな？」

「エヴァン・フロム大尉です」フロムは挨拶した。「マンフレッド・リッチャーさんにお会いしたいのですが」

「わしがリッチャーだよ、お若いの」老人が答えた。「あんたの声には非常に聞き覚えがある。

もちろん、お会いするのは初めてだが。さあさあ、お入りなさい。らな」

「ペンシルヴァニア・ダッチの方々は、よそ者を警戒すると思っていましたが」

「そのとおりだよ、お若いの。このわしもそうだった。だが年をとると、変わってくるものでね」

ふたりは腰をおろした。この老人はひとり暮らしらしいが、どうやって家の中をこんなにきちんと片付けているのだろう。フロムは不思議に思った——しかし、間もなく疑問が解けた。台所に続いているらしい自在戸（スウィング・ドア）の向こうに、青ざめた顔が見えたのだ。またしても彼は、これまでの古い家も人々も、彼が去ったとたんに霧となって消えてしまうのではないかと空想した。

「教えてください」フロムは切り出した。「ぼくの声に聞き覚えがあるとおっしゃいましたね。詳しく聞かせてください」

「ああ、確かに言ったがね。しかし取るに足らないことだ。もうこの話はよそう」

老人の声は怒りを含み、悪意さえ感じられた。フロムは老人の見えない目を、リンゴのように赤い頬を、そして絹のような白髪をまじまじと見つめた。

「ジョセフ・トーエルは死んだ時、あなたにいくら借りてたんですか？」鋭い口調で訊ねる。「あなたはぼくの声を聞いて、彼を思い出したんでしょう？　だから怒ったんだ」

老人は震えだした。口が開き、両端から泡のようなものが吹き出している。エヴァン・フロム

は仰天した。老人というものは突然ショックを受けたら、どんなことになるかわかったものではない。大急ぎで自在戸に駆け寄り、押し開けた。
「すみません、リッチャーさんを興奮させてしまったようなんです。すぐ来てください」台所の老女に声をかける。
「マーサ」リッチャーが言った。「その若い男をよく見てくれ――いったい誰なんだ？　たった今、あのトーエルの悪党のことをわしに聞きおった――」
老人は、途中で声を詰まらせた。その時突然、フロムの胸にわけのわからない嫌悪感がこみ上げてきた。衝動的に、何の理由もなく。トーエルとリッチャーは、故あって犬猿の仲だったに違いない。フロムはトーエルから借金とともに、憎しみをも受け継いでしまったのだ。それは、何とも妙な感情だった。彼は必死で気持ちを抑えながら、老女に手を貸してリッチャーを二階の寝室に運んだ。部屋を出る時にも、まだ老人の震えは止まらない。トーエルの手紙の件に触れるわけにはいかなかったが、階下に降りたフロムはできるだけわかりやすく訪問の目的を説明した。
「ここの人はよそ者とは商売がらみの話をしないものでしてね」老女は言った。「でも心当たりを訪ねて聞いてみましょう。マンフレッドの書類も調べておきます。もし、何か見つかったら……でもたとえお宅にその借金を払う理由があったとしても、今さらそんなことを知りたがるなんて、あたしには理解できませんね。マンフレッドのお葬式代くらいにはなるでしょうけど」
「二百五十ドルに年複利八パーセントの利息が五十年分ついているんです」フロムは言った。

「ええ、それだけあれば、軽く二、三人分の葬式代が出ますよ」

言って、すぐに後悔した。心ならずも老女を脅かしてしまったのだ。さっきから、言わなければよかったと思うことばかり口にしている。クライスト・ホームへなど、来なければよかった。だが砕石の道路を引き返すうちに、そんなことはないと思い直した。それに、この奇妙な現実離れしたできごとの数々にも、意外なほど心を惹かれ始めている。結局はただのいたずらということになったとしても、寒い冬の晩に火を囲んでの、話の種くらいにはなるだろう。

さて三番目は、オトカー・ゲットマンだった。

フロムは牧草地の小道に足を踏み入れた。もう何年も放ったらかしにされているようだ。小道は踏み固められているというより、地面に焼きついているように見えた。先ほど登った高い小山を見上げると、岩を固めた土台が目についた。かつては蔦のからまる大きな農家だったに違いない。きっと納屋もあっただろう。得体の知れない感情が、マントのようにすっぽりと彼を包みこんだ。岩の土台がすすけて、猛火の跡をとどめている。この建物の中で何人の人間が、どれほどの生き物が火に身を焦がしながら死んでいったのだろう。男がひとり、曲げた腕に猟銃をはさんで瓦礫の山を突っついていた。フロムがそちらへ向かうと音を聞きつけた男が急に振り向き、銃を構えた。

「おい、おい、待てよ！」フロムは叫んだ。

「ぼくは雉じゃないんだ。初めまして、エヴァン・フロム大尉だ。元大尉と言うべきかな。オト

カー・ゲットマンを捜しているんだが」
「十年おそかったな」猟銃を持った男が言った。「火事のすぐ後に来てりゃ、近所の連中といっしょにじいさんの骨でも拾えたただろうがね。おれもそうだけどさ。おれ、ジョージ・ゲットマンだ。じいさんのただひとりの身内だよ。オトカーじいさんが火事で逝っちまったから、この土地がおれに転がりこんできたのさ。前にもここへ来たことがあるのかい、じいさんを捜しに？」
「いいや、なぜ？」
「別に、ただ、妙だなと思って。この十年間、おれに伯父のことを聞いた人はひとりもいなかったからね。で、ここへ来て雉狩りでもしながら土地をどうするか考えようと思ってたら、あんたがやって来たんだ。こんな機会に偶然会うなんておかしいな。で、オトカーじいさんに何の用だったんだい？」
フロムは慎重に言葉を選んで説明した。とうの昔に他界した郵便局長ジョセフ・トーエルのことも話したが、自分との関係は説明しなかった——第一、どうして説明などできよう？　そして、昔の借金のことを伝えた。年若い青年は、首を横に振った。
「オトカーの書類はみんな燃えちまったよ。そりゃあ、思いがげず昔の借金が——時効だろうと何だろうと——入ってくるなんて嬉しいけど、正直言って何にも知らないんだ。もちろん、払ってくれるっていうんなら言うことないけどね。弁護士と相談してみて、連絡するよ。家はどこ？」

「ピーター・ベルツがいた家だ、リンカーン・ハイウェイ沿いの」
「ああ、あそこか。ピートとはガキの時分、よくいっしょに遊んだよ。オトカーじいさんの家にも何度か行ったしな。おれは今、ニューヨークで電話帳を作る仕事をしてるんだ」
エヴァン・フロムは青年と別れて、小道を戻っていった。三回とも空振りなんて、完全にジョセフ・トーエルのミスじゃないか！　もしジョセフいうところの債権者たちが、今までのようにいったん権利を放棄しておきながら後になって払えと言ってきたりしたなら、ジョセフの言葉など無視して借金は払うまい、と彼は決心した。「この借金は君のものだ！」——結構なことだ！　こんなわけのわからない借金を追いかけて歩く羽目になるとは。借金を払う権利を要求して回る負債者なんて、聞いたこともない。
フロムは家に戻った。もう一度注意深くジョセフ・トーエルの手紙を読み返してみる。何か見落としたことがあるかもしれない。だがこうして読み直してみると、第二次世界大戦中の彼の行動についての予言は、最初思ったほど的を射ているわけではなかった。どうやらこの件は、あっけなく幕切れとなりそうだ。一生に一度の奇異な経験になるかと興味津々でいたのに、期待はずれに終わろうとしている。
だがとりあえず、残り四人の〈債権者たち〉を訪ねてみることにしよう。そんなことを考えていると、家政婦が仕事の報告をしに来た。彼女はアーミッシュ教徒で、フロムの知る限り、買い物も料理の腕も最高の家政婦だった。もう六十代だったが、おそらく十代の時にも美しい少女と

は言えなかっただろう。しかし、ことペンシルヴァニア・ダッチの食べ物のこととなると、彼女より詳しいものはいないくらいだった。
家政婦が来て二日後に、ハリエット・ヘードルが到着した。とび色の髪を波打たせた有能で活動的なハリエットは、ひと目で家政婦のヘドヴィッグが気に入った。
「彼女なら申し分ないわね、エヴァン」ハリエットが言った。「一生、ここにいてもらいましょうよ。さあ、このすばらしい村で最初に何をする？　ねえエヴァン、なんだか久しぶりに帰って来たような気がするわ。ランカスターに着いた時から、ずっとなの！」
「まさか、ハリエット！」フロムがさえぎった。「嘘だろう、そんなこと？　だって一度もここへ来たことはないじゃないか」
「ええ」彼女は探るようにフロムを見つめた。病院で彼がショックから立ち直りつつある時も、よくそんな目で彼を見つめたものだった。「ねえ、まず何をしたい？」
「できるだけ早く結婚しよう。この辺の人々は、未婚のカップルがいっしょに住むなんて、不謹慎だと思うだろうからね！」
「わたしだってそうよ」彼女は言い返した。その目はまだ物問いたげであったが、フロムは無事に式を挙げるまでは、何も言うまいと決めていた。ふたりともクライスト・ホームの地は初めてだったので、ベルッの家が自然とふたりのハネムーンの場となった。今さら旅行なんて意味のないことだ。ふたりとも、これまでいやというほど各地を点々としてきたのだから。ひとところに

落ち着くのが、ふたりの最大の願いだったのだ。

式の後、フロムはハリエットに手紙のことを打ち明けた。ハリエットは黙って耳を傾けていたが、聞き終わると手紙を手にとって、自分で丹念に読んだ。しかしフロムは、二、三の妙なできごとは話さずにおいた——たとえば場所も知らない墓地にひとりでに足が向いたことや、三人の債権者たちを訪れた時、毎日そこへ通っていたような気がしたことなどを。そう、いっぺんにはとても話せないほど不思議な経験ばかりだったから。

新婚の夫婦は、連れだって残る四人の債権者のもとを訪ねた。だが、何もわからずじまいだった。ジョセフ・トーエルが七人のうちのひとりからでも本当に借金していたにせよ、それらしい記録は何ひとつ残っていない。ジョセフ・トーエルの名に、体を震わせて怒り狂ったマンフレッド・リッチャーからさえ、何の音沙汰もなかった。

「これでぼくたちの世にも不思議な物語もおしまいみたいだな」ハリエットを前にして、フロムは言った。「結局ぼくの考え過ぎだったんだ。それに、ジョセフ・トーエルがあの昔の文書に、書き出しの挨拶も入れずにおいたわけが、やっとわかったよ」

「まあ、何なの?」

「あれは覚書だったんだ」フロムはあやふやに笑いながら答えた。「ぼくだって随分ああいうものを書いたからね。軍の細かい指令を忘れないようにするために。でも自分への挨拶なんて、一

度だって書かなかったよ！」

ハリエットは嘆息をついた。

「本気でそう思ってるの？　あなた宛のジョセフ・トーエルの手紙は、つまりは彼の覚書で――だから当然、挨拶の言葉もなかったってわけ？」

「いや、そういうわけじゃないけどさ。でも、おもしろい推理だと思わないかい？　あらゆる可能性を考えているうちに、文字通り生まれ変わるということだってあるんじゃないか、という気になってね。あらゆる死者が墓場から甦り、赤ん坊から再び人生を始めるんじゃないかって…」

「どうかしらね」ハリエットは考えこむように言った。「そんなことが実際にあり得るなんてことになったら、どんな気持ちがするかしら。少なくとも、自分は人生をもう一度なんて真っ平だという人は大勢いると思うわ」

「そうかな、そんな奇跡が現実に起こり得るのだとしたら、誰だって飛びつくと思うよ。でもとにかく、ぼくたちにわかったことは何もなかったね。これでこの話は立ち消えだろう。ジョセフの債権者たちのただひとりとして、ぼくの一万四千ドルからびた一文、手に入れられなかったわけだ。おかげさまで、無事ニューヨーク銀行に入っているよ！」

その時突然、玄関のドアをノックする音が聞こえた。ノックは長々とやかましく響いた。クライスト・ホームでは、訪問者は必ず中の人間に聞こえるようにけたたましくノックをするらしい。

ドアはそれに耐えられるように頑丈でなければならないのだ。
フロムはドアを開けた。
五十歳くらいの艶のない肌をした男が、申し訳なさそうに頭を下げた。おそらく百十ポンドもないくらいだろう、やせてひょろりとしている。フロムは、彼のブリーフ・ケースに目を留めた。
「ずっと時機を待っていたのです」やせた男は口を開いた。「なにぶんご新婚ということでしたので、おふたりが落ち着かれるまではとお訪ねするのを控えておりました。私はクリストファー・バーグ。弁護士をやっておりまして、ランカスターに住んでいます。こうしてお訪ねしました理由は」ハリエットが中に入るように勧めると、男は再びすまなそうに頭を下げた。帽子を取り、彼女が勧めた安楽椅子に腰かけながら、話を続けた。「実は、この家についている抵当権のことでなのです」
ハリエットは夫と顔を見合わせた。
「抵当ですって?」フロムが信じられないといった顔でくり返す。「この家は、ピーター・ベルツから贈られたものなんですよ。担保にも何にも入っていないと言っていました。少なくとも、ぼくはそう信じていましたが」
「手違いがありましてね」バーグが答えた。「ええ、はなはだ遺憾なことですが、きっとピーター・ベルツさんも、その件はご存じなかったのでしょう。抵当権のことが今までまったく問題にならなかったとは、信じられないような話ではありますが、事実は事実です」

「もしかして、抵当に値する額は……」
「一万四千ドルね！」ハリエットがフロムの言葉をついだ。
「ああ、もうご存じだったんですか！」バーグがほっと息をついた。「これで話がしやすくなりました！　何から始めたらよいものか困りきっておりましたので」彼は、そわそわしながら言った。「まったく厄介な問題です。ただ弁護士の立場から申し上げておきますと、訴訟にもちこめばおそらくあなたが勝つでしょう」
「遠慮なさらずに、始めてください」エヴァン・フロムがうながした。「まずはジョセフ・トーエル――故ジョセフ・トーエルが絡んでくるのですね？」
「そうです」バーグが答えた。「おっしゃるとおりです。あなたがもし彼のことを尋ねて回ったり、古い記録を調べたりなさらなかったら、私もこうしてお伺いしてはいなかったでしょう。単刀直入に申しまして、この問題の関係者は七人、それに加えてジョセフ・トーエルと、あなたに家を贈ったピーター・ベルツのお祖父さまです。七人の債権者のうちでご存命なのはおふたりだけですが、それぞれ相続人がいます」
「もう一度、初めから話していただけますか？」フロムがさえぎった。
「いいですとも。事の発端はピーター・ベルツ、あなたにこの家を贈られたお若いピーター・ベルツさんと同名のお祖父さまだったのです。ええ、ベルツさんがあなたに家を贈られたのは存じています。遺言は文書として記録されていますから。お祖父さまのベルツさんとジョセフ・トー

エルとは、生涯を通じての親友でした。トーエルがクライスト・ホームの郵便局長となれたのも、ベルッさんの力添えがあればこそです」
「弁護士さん、今のお話はあなたの時代よりも少々前の時代のことですよね？」フロムが訊ねた。
「ええ、私はランカスターで弁護士をしているバーグ家の、三代目にあたります」バーグが言った。「私の祖父が、トーエルやベルッさんと同じ年代でした。亡くなった祖父の遺品に、この件の書類が入っていたのです。ともかく先を続けましょう。このジョセフ・トーエルという人は、あるアイデアを思いつきました――もっともそれが最初でもなければ、最後でもなかったそうですが――それは、画期的な発明となるはずでした。しかし郵便局長の乏しい給料では、とてもそんな費用は作れなかったのです。ただ彼はとても弁の立つ男で……」
「それで友人たちに、投資してくれるように説得したんですね」フロムが先回りして言った。
「おっしゃりとおり。まるでその場にいたようですね！」
「ぼくも自分で何か発明できたら、とずっと思っていましたから」彼はハリエット・フロムに微笑みかけながら答えた。「本題に戻りましょう。ぼくの推理と合わせれば、真相がかなりはっきりすると思います。トーエルには担保とするものがなかったので、資金の三千百十一ドルを銀行から貸してもらえなかった。そこで彼は、ブルーナー、ゲットマン、リッチャーそれに他の四人の友人からお金を借りた。ただわからないのは、ベルッのお祖父さんがどういう関わりを持っていたかです――もしかしたらお祖父さんが、合計が先ほどの額になる手形を振り出したんです

か？」
「まさにそのとおりです！」バーグが、眉を上げて叫んだ。「あなたがおっしゃった合計額もぴったりです。ジョセフ・トーエルはその七人を説き伏せて、研究資金を融資してもらった。そしてベルッさんが手形を振り出した。ところが銀行は、その手形の引き受けを拒否したのです。ベルッさんの唯一の担保といえば、今我々が座っているこの家しかなかったからです——ええ、祖父のベルッさんが建てたこの家しか！　ところが家はすでに担保に入っていたので、ベルッさんは苦心惨憺してその借金を返しました。それと並行して、彼自身の最初の負債額を返しながら、七人分の手形の利子を払っていたのです。そして——」
「そして」とフロムが引き継いだ。「彼は手形を取り戻し、七人全員の名義でこの家の抵当証券を作ったんだ！　でも、どうして孫のピーター・ベルッがそれを知らなかったんでしょう？」
「だからこそ、あなたはこの債務から逃れることができるわけです」バーグが言った。「でもそうすれば、この家も失うことになりますよ。家の価値は、一万四千ドル程度ではきかないでしょう。その二倍、いやそれ以上かもしれません。私の推測では、ジョセフ・トーエルの死後、七人の債権者たちが話し合って、抵当権の行使を猶予したのではないでしょうか。彼らは知っていたのです、ジョセフ・トーエルはこれといった遺産も負債のかたとなるようなものも何一つ残さずに死んでいったと……」
「そんなことはない！」フロムは言い返した。「彼は手紙を残しています。たぶん、トーエル家

の者に借金を払ってもらうつもりだったんでしょう」
「手紙？」バーグはおうむ返しに言った。「手紙のことなんて聞いていませんが」
エヴァン・フロムはハリエットに向かってにやりとした。彼女もフロムに笑い返す。彼らはふたりだけが感じあうものを、大いに楽しんでいた。愛とは偉大なものだ。愛の翼はふたりだけの間を羽ばたき、ほかの人が気づきもしないものを伝えあう。フロムは心ひそかに考えていた。もしジョセフ・トーエルの手紙をバーグに見せたなら、彼は何と思うだろう。何を言い、どういう反応を見せるだろうかと。しかし、この奇妙な話はすでに人から人へと伝わりつつある。これ以上余計なことは言わないでおこう、と彼は決めた。
「抵当証券はファイルに収められ、しだいに忘れられていきました」とバーグは続けた。「抵当権の共有者たちの間でいろいろともめごともあったでしょうが、記録には何も残っていません。それに、もしあなたがこの妙な一件について尋ね回ったりしなければ、今でも抵当のことは忘れられたままになっていたでしょう。さてフロム大尉、この先どうなさいますか？　今や、この家は抵当に入っていることがはっきりしました。家の権利を取得するためには、この条件も受け入れなければなりません――これまでの利子といっしょにです」
「ご存命のふたりの債権者と五人の相続人はどういう方法を希望するでしょうね？　利子だけを払って、額面三千百十一ドルの抵当権はそのまま持っていてもらってもいいですし、あるいは一万四千ドルでぼくが債務と利子とを引き受けてもいいですよ。ぼくとしては、とりあえず一万四

千ドルに対する利子を払いたいと思うのですが。利率はどのくらいになるでしょうか？」
「法律では、現在の利率の二パーセント・アップとなっています」バーグは渋々答えた。「ということは、年に八百四十ドルですね」
「では、まず最初の年の分を小切手で払いましょう。あとは成り行きを見てからにします」
「お金が入れば、債権者たちも喜ぶでしょう」バーグは言いながら、腰をあげた。「細かい点は私にお任せください。それから、私の報酬ですが……」
「ちょっと待ってください」フロムがさえぎった。「ぼくがあなたに依頼したわけじゃないんですよ。それは別口にしてください。あなたの依頼主は債権者の方々です、お間違えなく」
小男はおじぎをして出て行った。フロムとハリエットは顔を見合わせた。フロムはひどく興奮していた。自分でも抑えられないほどだった。それに、気分も上々だ。相当に金も残ったことだし。
フロムは笑い出した。ハリエットがその横に座り、ふたりは互いに相手の体に腕を回した。
「わたしたちほどに愛し合ったカップルはいないわね」ハリエットが言った。
「もちろんさ」フロムが答えた。
「じゃあ、教えてちょうだい。一万四千ドルの借金があなたのものだってはっきりした時、なぜ笑ったりしたの？」
「考えていたんだよ。もし人間が自分の過去を知ることができたら、もし過去に戻ってそれを見

ることができたら、どうするだろうって。もしぼくが、何世紀も逆のぼってぼくという人間の起源を探ることができたら、どんな気持ちになるだろうって。墓から墓へ、そして海の底から化石や灰にいたるまでを巡り歩いて。もしぼくがジョセフ・トーエルだとしたら、新しい肉体を得て自分自身の墓を見おろすことのできる、最初の人間になるんだよ。自分の過去を思いながらね！」

「すぐに行ってみましょうよ」ハリエットが言った。

「あなたの今の話をすべて信じるわけじゃないけれど、でもジョセフのお墓は見てみたいわ！」

フロムは身軽にはね起きた。電話のベルでも鳴らないだろうかとひそかに期待しながら。ぜひ試してみたいことがあったのだ。しかし、それをハリエットに知られてはまずい。疑われてもならなかった。彼はコートに袖を通しながら、頭の中では目まぐるしく案を練っていた。

「ひと足先に行っておくれ」フロムは言った。「新しいハンカチと煙草を取ってくる。すぐに追いつくよ」

階段を駆け上がりながらフロムは息を殺して彼女の言葉を待っていた。単純な、「どっちに行けばいいの？」という質問を。しかしハリエットは、何も聞かなかった。「いいわ、でも、早くしてね。わたしは歩くのが速いのよ」

ハリエットは外に出て、ドアを閉めた。フロムはひと呼吸置いてから窓辺に行き、外を眺めた。ハリエットはリンカーン・ハイウェイを左に折れ、最初の交差点で止まり、注意深く左右を見てから、東へ延びる道へと足早に進んでいく。フロムは、彼女の姿が角を曲がって路傍の古い家の

陰に消えるまで、待っていた。それから、ハンカチも煙草も持たずに飛び出した。
ハリエットはものすごい速さで歩いていた。全然、振り返りもしない。ほとんど駆け足だった。墓地のある斜面へと続く険しい小石の道も、足を止めずに歩いていく。鎖につながれた犬が哀しげに鳴き、彼女はその横をますます足を早めて過ぎ去った。
フロムは大急ぎで愛妻の後を追った。
それでもハリエットは振り向かなかった。追いつく間もなく、不意に彼女の足が止まった。恍惚とした表情で、トーエルの墓石を見おろしている。
フロムは彼女の体に腕を回した。
「誰に道を訊いたんだい？　ぼくは教えなかったよ！」彼はやさしく訊ねた。
「誰にも教えてもらう必要はなかったみたいだわ、あなた」ハリエットは振り向いて彼を見つめた。ふたりはもう一度、一八九〇年にアンナ・トーエルが、一八九八年にジョセフ・トーエルが死亡したと刻んだ古い墓石を見おろした。それから新婚のふたりは向き合って、愛情をこめて見つめ合った。
「わたしたち、ついに知ったのね！」ハリエットが言った。
「そうだね」フロムは答えた。「だけど、要するに何を知ったんだろう？」
「アンナとジョセフの愛は、永遠に生きているということをよ！　きっとふたりは幸福に暮らしたんだわ！　でもお願いだからエヴァン、発明だけはよしてね！」

悪魔の素顔

WELCOME HOME!

チャールズ・キング

Charles King

「来たれ、闇を司るアーリマンよ……来たれ、ザミエルよ……サマエルよ……破壊の神ベリアルよ……」

じめじめした地下の霊廟から湧き上がってくるかのように、感情のない単調な声は果てしもなく続いた。暗黒の天使を呼ばわる祈りは朗々と響き渡り、身を硬張らせた傍観者たちの間からは、時折鋭い喘ぎが洩れるばかりだ。

「来たれ、アバドンよ……来たれアポルオンよ……来たれ――」

不意に誰かが悲鳴を上げた。と同時にぼうっとした影が頭上を過ぎ、一瞬のうちに消え去った。またも別の影が、さらにまたひとつ、音もなく闇の虚空を過ぎていく。会衆から不規則に洩れ出ていた吐息は今やしだいに断続的になり……気違いじみた呪い師の声と相まって、身の毛もよだつコーラスをなしていった。

不気味な影はどんどん速度を増して宙を舞い……抑えきれぬ不安は、ますます鋭く会衆の心に食いこんでいく……その瞬間、ぼくの懐中電灯が床に一条の光を放った。それで十分だった。手

探りで頭上のスイッチを入れる。と、黄色い光が部屋を包み、中の人々の顔を照らした。
金縛りにあったように身じろぎもしない一同が、光にくらんだ目で呆然と前方を見つめている。つい今しがたの恐怖がなおも色濃く彼らの間に漂って、手で触れることができそうなほどだった。ただひとり呪い師だけが、自らの祈禱の呪縛から解き放たれている。彼女の双眸はひたとぼくに据えられ……怒りにぎらぎらと燃えたっていた。ぼくは素早く口を開いた。
「おい、みんな、見せ物は終わりだ……またしてもイカサマだったよ！」
猛り狂った老女は金切り声を上げ、部屋の向こうから躍りかかってきた。その鉤ばった爪が顔に伸びてくる直前に、ぼくは老婆をねじ上げた。
「いつまでバカみたいに座ってるんだ！　テーブルの下を見ろよ！」
ぼくの鋭い一喝に、みなははっと我に返った。夢見心地に立ち上がると、老婆が座っていたテーブルにばらばらと近寄っていく。老呪い師は激しく泣きわめいていた。
「どうだ？　何があった？」
誰かが、ショックに打たれた声で言った。
「床の上に押しボタンが――」
「そのとおり」そう答える間にも、狂った老婆をきつくつかまえ直さなければならなかった。老婆は口を歪め、その端からだらだらと唾液を流している。「そのとおりだ！　あのボタンで、君たちを脅かした影を操っていたというわけさ。影は針金で天井から吊るされていたんだ……」

「でも……さっきのは……」
「わかってるよ。背筋を凍らすような本物の恐怖に捕らえられ――身動きもできなかったって言いたいんだろ。まんまと担がれたのさ」
「担がれた?」
「そうさ、考えてもみろよ」ぼくは説明した。「ぼくがつかまえているこの婆さんは、魔女だっていう触れこみだったんだぜ。黄泉の国の使いたちと直接つながりを持っているって、のたまわってたんだ。金を出せば、それを証明してみせるとまで約束した。君たちは、自分で認めたくはないだろうが、なかばこいつの言葉を真に受けてたじゃないか――たぶん、怖いもの見たさの好奇心でね……いたい!」

ぼくは頬を流れる血を拭いとった。インチキ魔女の婆あめに、とうとうひっかかれてしまったのだ。ぼくは老婆を突き倒し、リラ紙幣を二、三枚放って、友だちをさっさとその家から連れ出した。そのままみんなでぼくの部屋に直行し、イタリア特産のワインをあけて、おおいに浮かれ騒いだ。窓辺に立って外を眺めると、荘厳なアルプスの山並みに夕闇が静かにおちていく。と、友人の声が、ぼくを悪霊破りの本業に引き戻した。
「先を聞かせてくれよ、ジュールズ。おまえ、俺たちがあのばあさんの雰囲気に半分呑みこまれていたって言ってたよな――始まる前から、もうあいつの言うことを信じかけていたって」

「そうさ、違うかい？　君たちは交霊会にぼくを案内するって言い張ってたじゃないか。忠告しておいたはずだぞ、幽霊だの女夢魔(サキューバス)だの、それに生霊や亡霊なんてものはいないんだって。そんなものは、にせ霊媒師が懐(ふところ)を肥やすための手段に過ぎない……」
「でも、ジュールズ」
「最後まで聞けよ。君たちだって知ってるだろう、何年もの間、ぼくは世界じゅうを回って今夜のようなイカサマを暴いてきた。子供の頃、生まれ故郷のペンシルヴァニア州ダッチ・タウンで、愚にもつかない亡霊の話をさんざん聞かされた反動でね。怖くて眠れない夜が、幾晩も続いた。ナンセンスな怪談をくり返し聞かされて、死ぬほど怖がったもんだ……」
「それでおまえは、そうしたものが存在すると宣言している奴らを目の敵にして、打ち倒して回っているのか。噂を追って、ルーマニアのトランシルヴァニアからトランスヨルダン（現在のヨルダン王国）まで、休む間もなく走り回っていたよな……でも、俺たちはちゃんとわきまえてるさ、悪霊なんてものはすべて──」
「何を言う。正直に認めればいいじゃないか。人間ってものは、結局迷信から逃れられないんだ──そして、ああいったペテン師どもの食いものにされているんだよ──君たちだってつい先刻、あの子供だましの手品と催眠術にころりとだまされていただろう？」
　ぼくが熱(あつ)くなっているんじゃないかって？　そりゃそうさ。ぼくはこの道で魔術師破りとして──人がどう呼ぼうと勝手だが──かなりの名を挙げてきた。この分野に関するぼくの論文は、

広く翻訳され、読まれている。そして今こうして、友人たちと休暇を過ごしにイタリアまで来ていながら、相も変わらずこの連中の迷信深さと闘っているのだ。頭の古い田舎の頑固者たちは、今でも満月の夜になると、動物の皮だの心臓だのといった怪しげなものを埋めたりしているが、この一見知的な連中も、結局彼らと大差なかった。いったい何のために今までこの仕事をしてきたのだ？　人間というものはそれほど愚かで強情で、自分の妄想にしがみついているものなのか？　まったくもう、こんなことにはうんざりだ……。

「そうむきになるなよ、ジュールズ。俺たちはおまえの言うことを信じてるって。本当さ。ただ、ちょっと……」

「もう、よせ」ぼくはさえぎった。「今まですがりついてきた迷信や妄想から離れるには、少々時間が必要だって言うんだろ。そんなセリフは聞き飽きたね。現実離れした空想だよ――ガキの夢物語みたいなものさ」

やがて、友人たちもみな帰り……ぼくはくどくどとあんな説教をしたことを、ひとり悔やんでいた。要するにあいつらも人並みだっていうだけの話じゃないか。いつも新しいスリルを求め、すぐにおびえてだまされて――だけど、それはあいつらの問題だ。今のぼくには、休暇が必要なのだ。自分がライフワークとして選んだこのやくざな仕事から、少しの間逃れる時間が。あれこれと考えを巡らしているうちに、やっと申し分のない場所を思いついた。母さんが死んで以来、

この十年間、故郷に帰っていなかったのだ。ぼくはすぐに、父に電報を打った。
　心が決まると、あとはとんとん拍子に準備が進んだ。あっという間にぼくは友に別れを告げ、荷作りをすませて、故郷へ向かう汽船の客となっていた。旅はいたって平穏で、ぼくは船のバーに入りびたり、陽気なバーテンと無口なバーテンがかわるがわるに働いているそのバーの、気のきいた雰囲気を楽しんでいた。
　やがて船は汽笛を鳴らし、警笛とタグボートの勇ましいエンジン音が響く中、マンハッタンの埠頭に向けてゆっくり堂々と進んでいった。自由の女神像を通り過ぎると、乗客たちの胸に一様に安堵の思いがあふれたようだ。長い間会わなかった父、そして故郷の町を早く見たくて、ぼくはひたすら先を急ぎ、途中ペンシルヴァニア・ホテルのバーで一杯ひっかけただけで、すぐにそこから数ヤード先のペンシルヴァニア駅へと向かった。
　がたごと鳴る車輪のリズムを聞きながら、ぼくは一晩じゅう、列車の中で考えごとをしていた。興奮しすぎて、とても眠るどころではない。生まれ育ったペンシルヴァニアのダッチ・タウンに近づくにつれ、ぼくは自分が必要としていたものをはっきり悟った。あののんびりとした町の暮らし、心地よい眠気を誘うような静けさ——それこそが、今まで求めていたものだったのだ。
　何時間も辛抱した果てに、ついに待ちに待った朝がやって来た。ずっと窮屈な姿勢をとっていたので、食欲は全然ない。ぼくは手早く身じたくを整え、そのままじっと待っていた。そしてとうとう、長い長い旅は終わり、何両にも連なる列車はぼくの町の駅にすべりこんだ。ぼくはバッ

グを向こう側の引きこみ線の上に投げると、あとに続いて飛び降りた。
前もって電報を打っておいたのに、父の姿は見当たらなかった。だが、あれからもう何年もたっているのだ。寄る年波には勝てず、まだベッドにいるのかもしれない。だったら、食事は町のホテルで済ませておいた方がいいだろう。できるだけ老いた父の手をわずらわせないためにも。久しぶりに町並みを眺めながら、少しぶらぶら歩いてみようか。
町に一軒だけあるホテルをめざして歩きながら、ぼくは最高の気分だった。ここにいる間はのんびりした、平穏そのものの日々を送れるに違いない……町並みはどこもかも、少しも変わっていなかった。小さな店々は昔のままに、持ち主とともに心地よい夢に浸ってまどろんでいる……そして広場では、つましく信心深いアーミッシュ教徒やメノ派教徒たちが、農場でとれた作物を並べていた。

「おはようございます、旅のお方」しわだらけの顔をしたホテルのクラークが、穏やかに声をかけてきた。
「おはようございます——でもぼくは、よそからきたわけじゃありませんよ」
すると、何か深刻な考えごとをしているかのように、男の顔のしわが伸び、縮み、また新たなしわが刻まれた。とうとう彼は口を開いた。
「すみませんが……あなたにお会いした覚えは……」

「それは残念ですな」ぼくは少し強い口調で、「ジュールズ・スワルツの息子はこの十年間に、父の旧友にもわかってもらえないほど変わったというわけですか？」

昔の知り合いに思い出してもらえるというのは嬉しいものだ。もちろん、正直に言えば、それは単なる自己満足にすぎないのだが……ところが彼の答えは、ぼくが予想だにしなかったものだった。

「あなたは……本当にあなたは、あのジュールズ・スワルツの息子さん？」

「たった今、そう言ったじゃないですか」

「お母様が亡くなって以来、ここへは戻って来ませんでしたね？」

「ええ、そうです」

老人は一生懸命しゃべろうとするあまり、どもっていた。「それじゃあ……あの、あなたは、子供の頃にここを出ていかれたっきりなんですね？」

だんだん、つまらない会話になってきた。元来ぼくは、プライベートなことをあれこれ聞かれるのは好きじゃない。でもまあいいじゃないか、とぼくは思い直した。おしゃべりな老人の質問に答えてやったからといって、何の害にもなるまい。この老人にとっては、しばらくはそれも格好の話の種になるのだろう。

「そうですよ。ぼくは子供の頃家を離れ、今久しぶりに古巣を訪ねて来たところです」

「お母様が何で亡くなられたか、覚えておいでですか？」

これにはさすがにうんざりした。限度を知らない老いぼれ雄鶏め。ぼくはわざと彼を怒らせるように答えた。「それについてはぼくの方よりあなたの方がよくご存じなんじゃないですか、詮索好きなご主人さん。母が心臓発作で倒れたと手紙で知った時には、ぼくはメキシコにいましたから。ええ、あなたなら、もちろんぼくより詳しいでしょう……」

ぼくの明らかな皮肉は、明らかに効を奏しなかった。おかげで、いい教訓になった。高齢でぼけてきたホテルのクラークを話相手に選ぶのは、金輪際やめにしよう。彼の答えを聞いて、ぼくはますますそう確信した。

「そう、たぶん、わたしの方がよく知っているでしょう……たぶんわたしの方が……」

もう、たくさんだ。ぼくは、バッグを手にとると、身を翻して玄関を出て行った。おしゃべりで間の抜けた爺さんひとりのために、帰郷の気分を台なしにされてはかなわない。新鮮な空気に触れると、急に空腹だったことを思い出した。ふと見ると、ずっと向こうの角に、赤いペンキ塗りの軽食喫茶がある。全然見覚えのないものだった。この古い町にも、確実に新しい波が押し寄せつつあるのだ。

中はとても清潔で、ぼくはすぐにベーコンエッグの大皿を注文すると、むさぼるように食べ始めた。コーヒーがすばらしくうまい。この店をひとりでやっているらしい男にそう言うと、彼は満足気に笑った。

「このあたりの町のお方にうちのコーヒーをほめていただけるとは嬉しいですな——たいていの

方は、強すぎるっておっしゃるんですよ」
「ぼくはこのくらい濃い方がいいね」
「わたしもですよ、よその町のお方」
「正確に言えば、よそ者ってわけじゃないんだ。生まれはここなんでね。父に会いに帰ってきたんだ」
「そりゃあ、楽しみでしょうな。お父様というと？」
「ジュールズ・スワルツ。ぼくも父と同名で……」
「ほう！」

ぼくは口に運びかけていたコーヒー・カップを、不意に止めた。コーヒーがカウンターにしたたり落ちる。用心深く、ゆっくりとカップをおろした。今しがたの「ほう！」は不用意なほど鋭く、穏やかならざる意味合いがこめられていた。ぼくは、だんだんうんざりしてきた。父やぼくの名を口にするたびに、相手は飛びあがり、急に用心深くなるのだから。
「教えてくれ」ぼくは努めて平静な声で訊ねた。「なぜみんながみんな——今のところだが——ぼくがジュールズ・スワルツと言うたびに、何か忌まわしい名を聞いたような反応を見せるんだ？」
彼はすぐには答えずに、濡らした布巾で注意深くカウンターをふいていた。重大な質問には、

じっくり考えてから答えるタイプに違いない。用心深く、言葉を選んでいる様子だった。
ようやく彼は言った。
「わたしはこの町には長くないのでね、ストラー——ええと——スワルツさん。ですから個人的には、何も知りません」
「でも、噂は聞いてるんだろ？」
「ええ……聞いてます」
「どんな噂を？」
「あなただってご存じでしょう。こういう小さな町の人間が、どんなに噂好きか……」
「知ってるつもりだよ。ぼくがここから逃げ出した一番の原因は、それなんだ。ペンシルヴァニア・ダッチには、病的なほどの迷信話がはびこっているみたいでね」
「そうそう、そうですとも、スワルツさん。こういう商売ですから、ここには年じゅういろんな人間が出入りしましてね、いやでも耳に入ってきますよ——ありとあらゆる話が」
「聞かせてくれ」
「忘れちゃ困りますよ、これはわたしがいったことじゃないんですから……」
ぼくはいらいらしてきた。「わかってる……わかってるって……あんたはただ、聞いた話をしてくれるだけだ」
「そのとおりです」

彼の襟首をつかんでさっさとしゃべらせることができるものなら、ぼくは喜んでそうしていただろう。
「さあ、早く——」
そしてとうとう、彼は話し始めた。
「人が、次々にいなくなっていくのです！」
「人がいなくなった？　町の人間が？」
「いいえ。通りすがりの人間ばかりです。セールスマンとか、旅行客とか……」
「でも、それが父と何の関係があるんだ？」
「その……あなたのお母様とも関係が……」
言うなり彼は飛びのいて、カウンターの後ろの壁にぶつかった。ぼくが思わず、手を出しそうになったからだ。
「待った！　わたしはただ、くり返しているだけですよ。お客さんが話せって言うから！」
ぼくの心臓は早鐘のように鼓動を打ち、手はぶるぶると震えていた。「酒を一杯くれ。いや、二杯だ——ふたりに一杯ずつ」
彼は黙ってライ麦ウイスキーをグラスに注いだ。ぼくたちは無言で乾杯し、喉が焼けつくような液体をいっきに飲みくだした。
「もう一杯飲んでおこう！」

「そうですね、スワルツさん」
強い酒にどうにか気分も落ち着き、ぼくは煙草に火をつけた。ありがたいことに、手の震えはほとんど止まっている。「続けてくれ……何もかも聞いておきたいんだ」
彼は警戒するようにこちらを伺ったが、ぼくの様子を見て安心したらしい。「あの、町の人たちはあなたのお母様は心臓発作で亡くなったわけではないと……」
「じゃあ何だって言うんだ？」
「噂では——その——ご自分で命を絶ったと！」
「自殺？」
「はい」
「でも……でも、どうして？」
「ですから、町に来た人間が蒸発してしまったので——」
ぼくは血がにじんできそうなほど力をこめて、カウンターのふちを握った。「頼む！じらさないで言ってくれ！蒸発した人間がどうしたっていうんだ？」
「聞いた話で……ただの噂ですが……その人たちは、あなたの家でいなくなったと！」
なんて奴らだ！人の不幸にたかる、無知で腹黒いハイエナどもめ！ぼくを町から追い出したあの心ない噂話が、前世代の偏見と恐れに満ちた愚にもつかない陰口が、心美しい母を死に追

いやったのだ。あいつらの戯言が、胸をえぐる外科医のメスのような正確さで母の墓穴を掘り、苦しめ抜いてその中へ追いこんだのだ。ぼくは、この町に耐え切れずに逃げ出した。だが母は残り、彼らと闘い……そして敗れた。

「お……お気の毒です、スワルツさん」

「ふたりは……ぼくの両親は……ずっと旅行客を泊めてたんだね？」

「ええ。ホテルの部屋をとれなかった人たちは、いつもご両親のお宅に泊まっていました。ホテルとご両親との間で、契約のようなものを交わしていたのでしょう」

そう、家にはいつも客が泊まっていた。肥沃な土地は作物を生み出してはくれるものの、小さな町の農家は常にやりくりに追われている。だからぼくの家では以前、何人もの下宿人をとり、短期の旅行客を泊めていたのだ。副収入のわずかな金は、家計の穴埋めに不可欠のものとなっていた。

「でもホテル側はしばらく前に、旅行客を紹介するのはやめてしまいました」

彼の言葉に、ぼくは過去の思い出から覚めた。彼の話は、いよいよ核心に迫りつつあるのだ。

「それは、母が死んでから？」

「いえ――その前からです。お母様が……亡くなられたのは……ホテルの経営者がご両親にそのことを通告した、すぐあとでした」

「それで、それで父は元気でいるのか？」

彼は小さく咳払いした。「お父様には、このところほとんどお目にかかっていません」
「このところって、母が死んでから……」
「そうです」
そうだったのか。そのせいで、心破れた年老いた父は駅まで迎えに来なかったのだ。どこへ行こうと執拗につきまとってくる残酷な視線や噂にさらされるのは、誇り高い父には耐えられないことだったに違いない。といってぼくを呼び寄せ、同じ無念の思いを分かち合うには、父はあまりにやさしすぎた。だがぼくが何を思おうと、事はもう起こってしまったのだ。彼の声が再びぼくを現実に引き戻した。
「わたし自身、この町の新参者ですからね。ここの人たちの考えには、どうもついていけません……」
彼は明らかに、義憤を感じているようだった。ただ生来の慎み深さから、あまり押しつけがましい言葉は言うまいとしているのだ。ぼくは彼の気を軽くしてやろうと、答えた。
「ぼくもまったく同じ意見だ」
すると、彼の表情が少し明るくなった。「わたしはあなたのご家族が好きでしたよ。食事をしに店へいらした時も、いつもよくしてくれました……礼儀正しくて……ほかの人たちより、よっぽど礼儀正しかった……」
聞いているうちにぼくは、泣き出しそうになった。彼はぼくを力づけようとしてくれているの

だ。彼なりの正直な、誠意あふれる言葉で。ぼくは身ぶりで先をうながした。
「あなたはあのおふたりの息子さんです」彼は顔を赤らめて、唐突に切りだした。「あなたになら、きっと何かできるはずです。お母様は亡くなられましたが、お父様には平和に暮らす権利があるのですから」
彼の誠意に応えられる方法は、ただ一つだった。ぼくはしっかりと彼の手を握った。それは、気恥ずかしくて言葉にはできない感謝の意を無言のうちに精いっぱい伝えようとする、男と男の握手だった。
そう、確かに何かできることがあるはずだ。言ってみれば、これはぼくがやっていた……いや、やり続けている仕事なのだ。世界の至る所で、ぼくは思うだにぞっとするような迷信を次々と打ち破ってきた。この町の住人に負けないくらい頭の固い、意固地(いこじ)な人々を、過去の遺物と化したばかげた迷信を頑(かたく)なに信じている知性のない人々を、説き伏せてきた。そうだ……これこそぼくに与えられた仕事なのだ。母さんを安らかに眠らせ、父さんに安らかな日々を送らせることが。
「電話を貸してもらえる？」
彼は片隅の小さな仕切りを指さした。ぼくは二、三枚の紙幣を銀貨に換えてもらった。ニューヨークへの電話はすぐに通じ、三分とたたずに用事は済んだ。先方は快く依頼を引き受けてくれ、電話を切った時にはすっかり気分は晴れ晴れとしていた。
「本当にどうもありがとう」帰り際にぼくはもう一度礼を言った。「いろいろと親切に教えてく

れて、とても助かったよ」

　父の家までは、歩いて行くことに決めた。たいして遠くはない。それに何よりも、これ以上迷信にとり憑かれた村人たちと、むかつくような会話をせずにすむ。足を進めるうちに、しだいに心に安らぎが戻ってきた。舗装のない道路には風がそよぎ、草が甘やかに香っている。節くれだった巨大な木々が、実もたわわになった枝を重たげに、まるで祈りの最中のように垂れていた。間もなくぼくは、ぼくが生まれおちた、そしてぼくの前には父が生を授かった我が家へと通じる小さな門を押し開けた。最初にぼくの心をよぎったものは、不安だった。見た目にもはっきりと、我が家の地所は荒れ果てている。伸び放題の雑草や、茎の先で枯れかかっている穀物の穂が、この土地がいかに手入れされていないかを無言のうちに物語っていた。ようやく安らぎを取り戻した心に、見る間に暗い影が忍び寄ってきた。

　家の外に立ったまま、はやる心を一瞬抑える。心を落ち着かせ、にこやかな表情を作るために。何とかそれができると、ぼくは中へ入っていった。

　部屋の隅で、規則正しく動いていた揺り椅子の音が止まった。

「お帰り、我が息子よ」

　ぼくは一瞬立ちつくし、ついで、まっしぐらに駆け出していた。老いた父にしっかりと抱きつきながら、頬には涙がとめどなく流れてきた。あんなに力強かった父……その父が今はやせ衰え、

腰が曲がっていた。懐かしい太い声も……今はこれほどに力なく……寂しげで……
「父さん。ちっとも変わってないね！」
「そうかね？」父は微笑んだ。切ないほどに哀しげな微笑みだった。ぼくは徐々に話を進めようと決心したのも忘れ、急き込んで言った。
「父さん、もう大丈夫だよ。今朝町で、何もかも聞いてきたんだ。父さん、つらかったろうね。町じゅうの噂の的になって、後ろ指をさされて。でも、これからはぼくが……」
「いいんだ」父は血管の浮き出たやせた手をゆっくり挙げて、ぼくを制した。「そっとしておいてくれ、わしは忘れたいんだよ」
「心配いらないよ。ぼくは何も、ばかげた復讐をしようなんて思っちゃいない。ただ父さんの名誉を挽回して、父さんが町の一員だってことを、みんなが自慢に思ってくれるようにしたいんだ。そうすればこれからだって、心ない不信心な噂で誰かが一生苦しむようなこともなくなるじゃない」
「やめるんだ。そんなことをしてはいかん」
「だって――」
老いた父のしわよった顔に、怒りのあまり赤い筋が浮き立った。父はぐっとこぶしを握り、また開いて……
「いかんと言ったら、いかん！」

うぬぼれているわけではないが、父はぼくの専門分野での評判を耳にしているはずだった。母はぼくがせっせと送った手紙や新聞の切り抜きを、父にも見せたはずだ。それでも父がこれほどにやめろと言い張るなら、不本意ながらそれに従ってもかまわない。だがしかし、そうは思うものの……

「遅すぎたよ、父さん」

「遅すぎた？」

「うん。もう、友だちに電話しちゃったんだ——友人夫妻なんだけど——ここに来て、このばかげた噂を吹き飛ばす手伝いをしてくれるって約束なんだよ」

父の声は、聞きとれないくらい低かった。

「遅……すぎたか……」

「でも父さん」ぼくはあわてて、「父さんだけのためってわけじゃないんだよ……こういう悪い芽をつみとらない限り、この先いわれのない陰口に悩まされる人がたくさん出るかもしれないだろう」

ぼくの懸念は、一瞬のうちに喜びに変わった。父の顔に、今初めて安堵の色が浮かんだのだ。いや、違う。正確に言えば、それは安堵ではなかった。むしろ、長い葛藤の末の解放感のようなものだった。ちょうど、自分を苦しめ続けてきた重荷が、今やっとその細い肩からすべり落ちた

かのように。

「そのふたりは、親しい友人かね？」

ぼくはすぐさまこの話題に飛びついた。「そうだよ、父さん。一番の親友だ。夫婦そろって教養のある人で、名の売れた一流の作家なんだ。雑誌にも寄稿して読者がたくさんついているから、あのふたりがこの町についての真実を――ぼくがこれから証明する、動かしがたい真実を――書いてくれれば、ここにはびこっている迷信的な恐怖も姿を消して、昔の良識が戻ってくるよ。この先永遠にね」

父はしばし、ぼくを見つめていた。その顔に浮かんだ完全な解放感は、しだいに顔いっぱいに広がっていった。

「そうだな……きっと」

ぼくは父の腕に腕をかけた。「さあ。久しぶりに家の中を見せてよ。うちを離れていた時期が長すぎたものね」

「ああ、長すぎた」

こんなにも長い間家を離れていたことに、ぼくは内心自分で自分を罵っていた。実際、今朝耳にしたあの悲しい事件を思い起こすにつけ、確かに家を離れていた歳月が長すぎることを痛感しないわけにはいかなかった。ぼくは間違っていた。老いた父の生活を顧みるでもなく……たったひとり、噂と中傷の矢面に立たせて……

どの部屋にも、人が住んでいる雰囲気は微塵もなかった。温かみもぬくもりもなく、ただ寂漠としている。ぼくは無理して明るい声を出した。「屋根裏部屋をのぞいてみない、父さん？ あれから何か、記念になるような品物が増えたかな？」

「屋根裏はやめておこう、息子よ」

父の返答に、なぜか急に胸騒ぎがしてきた。

「どうして？」

「母さんのものを見たいんなら、行ってきなさい。わしは……わしはやめておこう……」

ぼくは、とたんにほっとした。「じゃあ、ひとりで見てくる。いいんだよ、父さん。わかってるって」

父は、どれほど母を愛していたことか。ぼくはひとり屋根裏を見て回った。絵画、洋服、手芸品……母を偲ばせるこうした品々はすべて、ぼくが生まれる前から家にあったものだった。何もかもきれいに磨かれ、整理されて、変わることのない父の深い愛情を表している。それでいて父は、自分のことにはすっかりかまわなくなってしまった。でも、それもすぐに変わるだろう。友人の助力を得てこの町をおおう腐った空気を吹き飛ばし、あとはずっと父さんといっしょに暮らすのだ。もうひとりにさせはしない。ぼくたちは、ふたりして……と、突然、爪先から頭の先まで戦慄が駆け抜けた。か細い悲鳴が空気を引き裂き、ぼくの心に突き刺さったのだ。

ぼくは稲妻のように廊下を駆け抜け、急勾配の階段を一度に数段ずつ飛び降りていった。だが

階段の下には、すでに誰かの姿があった。階段の足元の床に俯せに倒れ、見るも無残に砕けた首は激しくねじれて、見えない両の目がまっすぐにぼくを見つめている。父さんだった。

一時間とたたないうちに、ぼくは亡骸を葬儀屋へ運んでいった。ぽかんと口を開けて見守るばかどもに、事故死だったときっぱり告げる。奴らのちっぽけな頭の中に、〈自殺〉という文字が浮かんでいることくらい、見え見えだった。だからぼくは聞かれる前に自分から話し、探るような目を向ける愚か者どもを押し分けて、その場を離れたのだ。

そして、農場へと戻っていった。もはや力を貸してもらえなくなった友人たちを待つために。いや、そんなことはない！　力になってくれるとも！　かわいそうな父さんにあれだけはっきりと断言してみせたからには、男として、是が非でも罪のない人々を救わなくては。肥え太った俗信を根絶やしにしない限り、死ぬまで陰口に悩まされることになる、罪のない人々を。

ぼくは待った。

ポーチに近づいた足音が、友人たちの到来を告げた。ぼくは立ち上がりながら平静な表情を取り繕うとしたが、彼らをひと目見るなり、すでに父の件を知らされてきたことを悟った。口うるさい奴らめ……好き勝手に他人の噂ばかり……限度を知らず……残忍に……

リラがぼくの顔を引き寄せて、キスしてくれた。物静かな愛らしい声がぼくの心を慰め、包んでくれる。

「聞いたわ、ジュールズ。乗ってきたタクシーの運転手に」
ジムはしばし、何も言わずにいた。だがぼくの手を強く握ったその手から、温かい真摯な友情が伝わってきた。
ふたりはぼくの友達だった。かけがえのない親友だった。
しばらくしてぼくは暖炉に火をおこし、三人で煙草を吸いながら火を囲んだ。三人とも食欲がなく、夕食にも形ばかり手をつけただけだった。これまでの痛ましいできごとの一部始終を話しながら、ぼくは心の中で強く深く神に感謝していた。これほどに思いやりに満ちたすばらしい友情を、今のぼくに与えてくれたことを。
「あなたの言うとおりだわ、ジュールズ」リラが言った。「わたしたち、何としてもあなたの計画をやり遂げるべきよ」
ジムもいつものとおり、慎重に考え深げに意見を述べた。「ぼくもリラに賛成だ、ジュールズ。君の考えは実に立派だよ。人道的で思いやりにあふれている。君はほんとうに心の広い男だ」
これだから、ふたりを好きにならずにはいられないのだ。「ここに二、三泊もすれば、すぐに真相を突きとめられるよ。さてと、そろそろ寝る時間だ。君たちの寝室は二階に用意してあるからね」
「あなたは、ジュールズ？」
「ぼくもすぐに寝るよ」

ひとりになって、ぼくはじっと座ったまま考えていた。これまでのさまざまなできごとを幼年期に逆のぼって反芻し、愛する母さんと父さんに思いを馳せる。知らないうちに、数時間が静かに過ぎていった。ふと腕の時計に目をやると、もうかなり遅い時刻だ。真夜中だった。

次にふと目に留まったものが、最も不可解だった謎を解き明かし……それまでの一連の事件を、論理的に説明してくれた。

その部屋の鏡はよごれ、くもの巣がかかっていた。ぼくは目をそらし、暖炉の前に座り直した。もう一度、過去のできごとをふり返ってみる。だが今、そうする間にも、事実は驚くほど明快に、おのずから明らかになっていった。

母は間違いなく自殺したのだ。母もこの事実を知り、それを知りながら生きていくことができなくなったのだ。

そして父は？　そう、今にしてわかった――わかりすぎるほどに――なぜ父が、あのふたりは親しい友人かと訊ねたのか。そして、「遅すぎた」というぼくの言葉を呆然としてくり返したのか。それも一度ではなく……二度までも。

また、ぼくが「長すぎた」と言った時に、なぜ老いた父がそれをくり返したのかも。父の意味していたことは、ぼくが考えていたこととはまるっきり違っていたのだ。父は、精いっぱい努力した……誰もそれは否定できまい。ぼくに秘密を知らせまいと、精いっぱい努力したのだ。だが、

このぼくが父を追いつめた……追いつめてしまった……
そして最後に父は、否定しようのない事実として「遅すぎた」ことを、「長すぎた」ことを悟り、自分を解放し、背負い続けてきた重荷を父から――ぼくへと移したのだ。
そう……父もまた、自殺した。それがただ一つの道だった。真実を知った息子と対面するのは、あまりにつらすぎたから。その父の気持ちもぼくにはよくわかった。
時間だ。ぼくを呼ぶ声がする。ぼくは立ち上がった。もう一度、ほこりまみれの鏡に目を走らせる。何が映っているのか十分知っていながら。鍛えあげたぼくの精神はなんとかそれを拒もうとしている。しかし、ぼくの目には――ぼくの自意識には――それができないのだ！
ぼくは両手に目をやった。指が伸び、鉤状になって、元の骨格とはまるで関係なく曲がりくねっている。黒い毛が点々と生えていた。ぼくは、顔を見た……ぼくの顔が……異常に大きくなり……一面にぼつぼつとあばたができたかと思うと、こぶ状の何か異様なものが……そして牙が、牙が二列、先が曲がり、土気色の唇からぐっと前方に突き出して……
ぼくは空腹だった。
音もたてずに階段を上がり、中で友人の眠る、閉め切ったドアの前に忍び寄る。ノブには触れなかった。その必要はなかったのだ。ぼくは苦もなくドアそのものをすり抜けた。そして、父から受け継いだ呪わしき運命を心ゆくまで味わい始めた……

幼い魔女

MISTRESS SARY

ウイリアム・テン

William Tenn

夕方、家に帰り着いた私はふとドアの前で足を止めた。歩道で小さな女の子がふたり、まじめくさった表情でまりをついて遊んでいる。だが子供たちが口ずさんでいるその古いわらべ歌を聞くなり、私は血の気を失い、あごをきつく閉じて、紫色になるほど唇をかみしめていた。右のこめかみがどくんどくんと脈打っている。だがそれでいて、歌が終わるまでは金縛りにでもあったように動けないことは、よくわかっていた。

一羽　二羽　こまどり　三羽
みんなでサリーちゃん　みいつけた
樺（かば）の小枝にちょこんとのって
まるで小さな妖精みたい！

女の子が気取って最後の節を歌い終えると、私ははっと我に返った。急いで鍵をあけ、家に入

るなり後ろ手にドアを閉めてす早く錠をおろす。ついで玄関、台所、書斎と、片っ端から灯りをつけてまわった。それから、どのくらいの時間がたっただろうか。部屋の中をくり返し行ったり来たりしているうちに、ようやく乱れた呼吸もおさまり、あのおぞましい不吉な記憶も潮がひくように歳月の割れ目の中へと退いていった。

それにしても、なんと忌まわしい歌だ！　いや、子供たちに罪はない――友人たちがなんと言おうと、私は子供を恨んでいるわけではないのだ――しかし、なんだって子供たちはあんな愚にもつかない歌を歌うのだろう？　それも、私がいる時に限って……まるで底知れぬ悪意を秘めた小鬼どもが、私の気持ちを知ってわざとそうしているかのように……

サリエッタ・ホーンは西インド諸島でともに暮らしていた父に先立たれ、クレイトン夫人のもとへ送られてきた。サリエッタの母の兄弟姉妹といえばクレイトン夫人ただひとりだったし、イギリス植民地総督であった父には、ひとりも親戚がいなかったからである。そういうわけでこの子供はカリブ海を渡って、ナンヴィルにいる私の下宿の女主人の家に引きとられた。そして当然の成り行きで地元のナンヴィル小学校に通うことになったのだが、そこでは私が算数と理科を、ミス・ドルーリィが英語と歴史と地理を教えていた。

「あのホーンの家の子供ときたら！　まったく手に負えないわ！」その日、午前中の休憩時間にミス・ドルーリィが嵐のような勢いで私の教室にのりこんできた。「どうしようもない奇形だわね。おまけに醜くて、ずうずうしくて！」

彼女のわめき声ががらんとした教室に吸いこまれて消えるまで、私は興味津々にそのヴィクトリア朝風のやぼったい服装を観察していた。胸はがちがちのコルセットで持ち上げられ、いらいらと机の前を行き来するたびに、厚いスカートとペティコートの裾がくるぶしにあたって翻る。
私は椅子によりかかり、頭の後ろで両手を組んだ。
「度をわきまえた方がいいですよ。あいにくぼくはこの二週間、新学期の準備だの何だのと忙しくて、ゆっくりサリエッタを見てやる時間もありませんでしたが。クレイトン夫人には子供がいないとあって、あの子が木曜日に着いてからというもの、目に入れても痛くないほどかわいがっていますからね。あなたがいつもの調子でサリエッタを罰したりしたら——その、つまり先週のジョーイ・リチャーズのような目に遭わせたりしたら、きっと黙っていないでしょう。夫人だけじゃない、教育委員会だってそうですよ」
ミス・ドルーリィはきっとして顔を上げた。
「あなたはまだ経験が浅いからそんなこと言えるんだわ、新米さん。そのうち、ジョーイ・リチャーズみたいな強情っぱりには鞭でも使うしかないってことがわかるわよ。そうでもしなくちゃ、父親みたいな役立たずの飲んだくれになるのは目に見えてますからね。生意気なことを言った時には、樺の枝の鞭できつくお仕置きをするのが一番よ」
「そうですかね。とにかく、教育委員会の中にはあなたのやり方に目を光らせている面々もいることをお忘れなく。でもどうして、サリエッタのことを奇形だなんていうんですか？　あの子は

遺伝子の突然変異で色素がないだけです。ちっとも奇形なんかじゃありませんよ。現に何千人という白子が、普通の人とまったく変わらない、幸福な生活を送っていますしね」

「遺伝ですって！」ミス・ドルーリィは鼻であしらった。「見当違いもいいところね。あの子は奇形なのよ。魔王(サタン)が作り出した、もっとも意地の悪い小悪魔なんだわ。さっきの授業で、西インド諸島のおうちのことをみんなに話してあげなさいって言ったら、なんて答えたと思う？『そこは愚か者や見る目のない者には、閉じた本同然の場所(ところ)です』だって。まったく！　休み時間のベルが鳴らなかったら、あの場で鞭の味を教えてやったのに」

彼女はペンダント時計を見おろした。「そろそろ次の授業が始まるわ。チャイムを調べておいてくださいね、フリン先生。今朝は一分ほど早めに鳴っているようよ。それから、ホーンの子供に生意気な口をきかせないようにね」

「ぼくのクラスでは、生意気な口をきく生徒なんていませんよ」私がにやっとして答えると同時に、ドアが手荒くしまった。

入れ違いに、八歳の子供たちが次々と教室に入ってきた。間もなく部屋は陽気な笑い声とおしゃべりに満ちあふれた。

私はまず長い割り算の問題を出し、時折ひそかに一番後ろの列を盗み見ていた。サリエッタ・ホーンは背筋をぴんと伸ばし、両手をきちんと机の上に組み合わせて座っている。その背後には

マホガニーのベニア張りの物入れがあり、サリエッタの長い灰色のお下げと、その文字通り抜けるように白い肌が黄色がかって見えていた。目もかすかに黄色を帯び、大きな虹彩はほぼ無色といってもいい色で、半ば透明なまぶたはいつ見てもまばたきひとつしない。どうひいき目に見ても、サリエッタは醜い子供だった。口は大きすぎたし、両の耳は頭からほぼ真横に突き出し、上唇にかぶさりそうな長い鼻の先は不格好なカーブを描いている。飾り気のない純白のドレスが、やせた体に妙に大人びた印象を与えていた。

割り算の解き方を説明し終えると、私は後ろの席にたったひとり座っている少女の方へ歩いていった。「もう少し先生のそばに座らないかい？　ここじゃ黒板が見えにくいだろう」私はできるだけやさしい声で話しかけた。

すると彼女は立ち上がり、軽くひざを曲げておじぎをした。「ありがとうございます、先生。でも、前の席では日の光で目を痛めてしまいますので。それに暗いところの方が体が楽なんです」そう言うと、私の気遣いに応えて醜い口元にかすかな微笑みを浮かべてみせた。

私はやむなくうなずいた。サリエッタの形式ばった淀みのない言葉遣いに、落ち着かない気分を味わいながら。

続いて理科の授業に入ったが、その間じゅうサリエッタの視線がまとわりついてくる。そのまばたきもしない目でまじまじと見つめられるとどうにも居心地悪く、私は意味もなくやたらと実験装置をいじり回していた。子供たちはいち早くその原因を察したのだろう、ひそひそと囁(ささや)いた

り、首を伸ばして後ろの席を伺ったりしている。
私は蝶の標本箱をとり落とし、それを拾おうと立ち止まってかがみこんだ。と、不意に教室じゅうの生徒がはっと息を呑み、三十の小さな喉からいっせいに同じ叫びがもれた。
「見ろよ！　あいつ、またやってるぞ！」私はさっと体を起こした。
サリエッタ・ホーンは相変わらず身じろぎもせず、体を硬張らせて座っている。だが今、その髪は豊かな栗色に変わり、目はブルーに輝いていた。頬と唇にはほんのりと赤みがさしている。
私は、固い机に食いこまんばかりにぐっと指を突きたてた。そんなばかな！　光線のいたずらだろうか？　だとしても――ありえないことだ！
教師としての威厳も忘れ、ぽかんと口を開けて見とれているうちに、サリエッタがふと顔を赤らめたように見えた。身を乗り出すように見入っていた生徒たちも、次々と姿勢をもとに戻す。
私はどうにか気をとり直し、震える声で再び蝶や蛾の羽やまゆについて、説明を始めた。
しばらくすると、彼女の髪や肌はまた雪のような白さに戻っていた。だがもう、いくら集中しようとしてもまるで授業に身が入らない。それは、生徒たちとて同じことだった。授業は台なしになってしまった。
「わたしの授業の時もそうだったのよ、あの子」昼食の時間にミス・ドルーリィが興奮して話しだした。「そっくり同じだわ！　ただあの時は、肌が小麦色で髪は烏のような黒、目も黒くきらきらと光っていたわ。あの子がわたしのことを馬鹿って罵って――まったくなんて失礼な子かし

ら！――そのすぐあとでのことよ。樺の鞭に手を伸ばしたとたん、みるみる黒くなったの。もう少し時間があったら、赤毛にだってなっていたでしょうよ。だけど、あいにくベルが鳴っちゃって」

「そうですね」私は答えた。「でも、光線の微妙な変化で色が変わったのを、見間違えたのかもしれませんよ。あの時本当に色が変わったのかと聞かれると、ちょっと確信がありませんね。とにかく、サリエッタ・ホーンはカメレオンじゃないんですから」

年配の女教師は、ぎゅっと口元を結んで黙っていた。そのうち唇はつやのない肌色となり、しわよった顔を横ぎる一本の線のように見えてきた。彼女は首を振ると、パンくずの散らかったテーブルに身を乗り出した。「そうよ、カメレオンじゃないわ。魔女なのよ。わたしにはわかるの！　聖書には、魔女を撲滅せよと書いてあるわ。火にかけて焼き殺せって」

私が無理に声をたてて笑うと、その笑い声は食堂代わりの薄汚れた地下室に気味悪くこだました。「何を言い出すんですか！　たった八歳の女の子が――」

「だからよけい、今始末するべきなのよ。大人になって、もっと危険な存在になる前にね。間違いないわ、フリン先生、わたしには確信があるの！　わたしの先祖は、ニューイングランドで三十人の魔女を火あぶりの刑に処したんですからね。うちの家系は、そういう勘が特別冴えてるの。わたしたち一族と魔女との間には、妥協なんてあり得ないのよ！」

サリエッタに畏怖の念を抱いていたという点では、ほかの子供たちもミス・ドルーリィと同じだった。彼らはこの白子の子供を、〈ミストレス・サリー〉と囃し立てた。しかしサリエッタは、どういうわけかこの呼び名が気に入っていたようだ。ある時、校門を出た子供たちが一団となってサリエッタの跡をつけ、歌を歌って囃し立てているのを、怒ったジョーイがやめさせようとした。だが、当のサリエッタがそれを押しとどめたのである。「放っておきなさいな、ジョセフ」彼女はいつもの、妙に大人びた口調で言った。「この子たちの言うとおりよ。わたしはほんとに小さな妖精みたいだもの」

ジョーイはそばかすだらけの顔に当惑の表情を浮かべ、握っていた拳をゆるめると、ゆっくりとサリエッタのそばに戻った。ジョーイは彼女を崇拝していた。ふたりとも子供たちからのけ者にされていたし、ともにみなし児であったため――始終飲んだくれているジョーイの父親は、いない方がましなくらいだった――いつ見ても、ぴったりくっついていた。帰宅後、夕方のさわやかな空気を吸いにポーチに出てみたりすると、しっとりしたたそがれの光の中で彼女の足元にうずくまっているジョーイをよく見かけたものだった。そんな時サリエッタは途中で言葉を切り、小さな人さし指を鋭く口元に当てて、彼に注意した。そうしてふたりは、私がポーチを離れるまでひとこともしゃべらずにじっとしているのだった。

ジョーイは、少しばかり私に好意をよせていた。そのおかげで私は、ミストレス・サリーの生い立ちを耳にした数少ない人間のひとりとなったのである。それは、ある夕方のことだった。ぶ

らりと散歩がてらに外へ出ていって、ふとふり返るとジョーイが小走りについてきた。たった今、ポーチを出てきたところらしい。
「すげえや」ジョーイは嘆息まじりに言った。「ストガロは、ミストレス・サリーにいろんなことを教えてくれたんだって。今、ここにいてくれたらなあ。あのヒステリー・ドルーリィのことだって、きっとなんとかしてくれるのに。絶対仇をとってくれるよ」
「ストガロ？」
「うん。魔法使いなんだ。サリーのお母さんのせいで刑務所に入れられたもんだから、怒ってサリーが生まれる前に呪いをかけたんだって。そしたらサリーのお母さんはお産で死んじゃって、お父さんはお酒ばかり飲むようになったんだ。ぼくのお父さんよりたくさん飲んでたって言ってたよ。それでサリーはストガロを見つけて、友だちになったんだって。ふたりの血を混ぜて、お母さんのお墓の前で仲よくしますって誓ったのさ。それからストガロはサリーにブードゥー教の魔法や悪魔の子が生まれる呪いや、豚の肝臓から惚れ薬を作る方法や、それに――」
「君がそんなことを言うとはね、ジョーイ」私はさえぎった。「よりにもよって、そんな馬鹿げた迷信を信じるとは！　それも、君ほど理科のできる子が！　ミストレス・サリーは――サリエッタはね、文明のおくれた、迷信深い人ばかりいるところで育ったんだよ。でも、君は違うだろ！」
ジョーイは足をぶらぶらさせて、道ばたの雑草を蹴っとばした。「わかりました」消え入りそ

うな声で、答えた。「あんなこと言って、すみません、フリン先生」
　ジョーイはくるっと背を向けて、行ってしまった。白いシャツにコーデュロイの半ズボン姿がしだいに遠ざかり、やがてひとすじの縞となってジョーイの家の方角に消えていく。私は途中で話をさえぎったことを後悔した。それ以来彼は私に打ち解けなくなり、サリエッタはサリエッタで、私にはおろか、相手が叔母であっても話しかけられた時以外は口をきかないようになった。
　私はどれだけその日のことを後悔したことか。それも、日がたてばたつほど。
　気候は驚くほど温暖になってきていた。ある朝、ミス・ドルーリィは私に言った。「こんな冬は、絶対今までにはなかったわ。暖気団のせいで小春日和が続いているって話だけど、それにしてもこう毎日毎日、異常に暖かい日ばかりだなんて。いったい、どうなってるのかしら！」
「科学者の見解によると、地球全体がだんだん温暖になってきているそうですよ。今はまだ影響が小さいのでほとんど気づきませんが、メキシコ湾流が――」
「メキシコ湾流ね」小馬鹿にしたような答えが返ってきた。ミス・ドルーリィは十年一日（いちじつ）のごとく堅苦しい重たげな洋服に身を包み、季節はずれの暑さのせいで、ますます癇癪（かんしゃく）を起こしやすくなっている。「メキシコ湾流が聞いてあきれるわ！　あのホーンの子供がナンヴィルに来てからというもの、何もかもおかしくなってしまったのよ。チョークはすぐに折れるし、机の引き出しは引っかかって開かないし、消しゴムは粉々になるし――あの小悪魔が、わたしに呪いをかけよ

うとしているんだわ！」

「いい加減にしたらどうです」私は立ち止まり、校舎を背に彼女に向き直った。「限度というものを知らないいんですか。魔術を信じるのはあなたの勝手ですが、子供たちまで巻き添えにしないでください。生徒たちは勉強をしに来てるんですよ。間違っても、気違いじみた妄想を抱いた

――その――」

「妄想を抱いたオールド・ミス、そう言いたいんでしょ。かまわないのよ」ミス・ドルーリィはかみつくように言い返した。「あなたが内心そう思っていることくらい、ちゃんとわかってたわ、フリン先生。それに、あなたがあのチビのご機嫌をとって、自分に危害のないようにしていることもね。でもわたしはあの子の正体を知ってるし、あなたがサリエッタ・ホーンと呼んでいるあの小悪魔の方だって、正体がばれたことくらい感づいてるわよ。わたしたちは闘うしかないんだわ。善と悪ががっぷり四つに組んで、最後の最後まで闘うのよ。どっちかが死ぬまでね！」ミス・ドルーリィはスカートの裾を翻し、ずるずると引きずりながら校舎への階段をのぼっていった。

思えばあの時から、私はミス・ドルーリィの正気を疑い出したのだ。しかしその時にはまだ、自分自身のことについては露ほども心配していなかったのである。

その日の算数の授業でのことだった。始業時間になると生徒たちはのろのろと教室に入ってきたが、誰もひとことも口をきかず、まるで沈黙という名の巨大なシャボン玉にでも閉じこめられ

ているみたいだった。しかし最後の生徒がドアを閉めると同時にシャボン玉は割れ、ひそひそと聞きとりにくい声が教室じゅうにさざめき渡った。
「サリエッタ・ホーンはどうしたんだ？」私は訊ねた。「それに、ジョーイ・リチャーズは？」ジョーイの姿も見えないことに気づいて、重ねて質問した。
するとルイーズ・ベルが立ち上がった。ごわごわに糊づけしたピンクのドレスのひだが、やせた体の前方に張り出している。「あのふたり、いたずらをしたんです。ジョーイがドルーリィ先生の髪をひと房切り落としたので、先生はジョーイをつかまえて鞭で打ち始めました。そしたらミストレス・サリーが立ち上がって、ジョーイにはあたしがついてるから手を出させないって言ったんです。それでドルーリィ先生が、あたしたちみんなを外に出しました。きっと今頃、ふたりを鞭で叩いています。あの先生、どうかしちゃったんです！」
私は勢いよく教室の後ろのドアに駆け寄った。突然、悲鳴が聞こえた。サリエッタの声だ！弾丸のように廊下に飛び出して走り出す。その間も悲鳴はしだいに高くなり、聴きとれないほどの高音から震え声になったかと思うと、いきなりやんだ。
力まかせにミス・ドルーリィの教室のドアを引き開ける。心の準備はしていたつもりだった。殺人さえも含めた、あらゆることに対して。だがなお、目の前の光景は予想だにしていなかったものだった。私はドアのノブを握ったまま、その場の劇的な光景にすっかり心を奪われて立ちつくしていた。

ジョーイ・リチャーズは黒板ぎりぎりまで後ずさり、汗ばんだ右手に茶色の長い巻き毛をひと房握っている。ミス・ドルーリィと向かい合って、ミストレス・サリーが立っていた。頭を前に垂れ、白亜のような首の後ろ側には、痛々しいまっ赤なみみずばれが浮き出している。ミス・ドルーリィは石のように立ちつくし、呆然と手の中のものを見つめていた。握られていたのは、ぽっきりと折れた樺の枝の断片。残りの部分は、粉々になって足元に散らばっていた。

子供たちは私を見て、我に返った。ミストレス・サリーがすっと背を伸ばし、唇をきつく結んでドアの方へと歩いていく。ジョーイ・リチャーズは体をかがめ、手にしたひと房の髪を女教師のドレスの背にこすりつけた。だが彼女は、ジョーイのことなどまるで忘れてしまったかのようだった。ジョーイは、ドアのそばで待っていた少女に近づいた。小さな手の中で栗色の髪が、ミス・ドルーリィのブラウスからこすりとった汗できらきら輝いていた。

ミストレス・サリーが軽くうなずくと、少年は髪を手渡し、彼女はそれを慎重にポケットの中にしまいこんだ。

それからふたりはひとことも言わずに私のまわりをスキップし、教室で待っているみんなのところへ向かっていった。

ふたりとも、どうやら無事だったようだ。少なくとも、たいした傷は負っていない。

私はミス・ドルーリィに近づいた。激しく体を震わせ、うわごとのように何やら口走りながら、

その目をひたと樺の枝の断片に据えている。

「粉々になってしまったわ！　粉々に！　わたしは――見てよ、こんなになったのよ！」

私は彼女の腰に腕を回して、この中年女を椅子に腰かけさせた。彼女はまだ熱に浮かされたように、ぶつぶつひとりごとを言っている。

「一度だけ――あの子を打ったのは一度だけだった。腕を上げてもう一度打とうとしたら――樺の鞭を頭の上に振り上げたら――急に粉々になったんだわ。ジョーイは教室の隅にいたから――そんなことできっこないのに――こんなに粉々になってしまった」彼女は手の中に残った樺の枝の断片をじっと見つめ、何かかけがえのないものを失ってしまったかのように、痛ましげにそっと体を揺さぶり始めた。

生徒たちが待っているはずだ。私は彼女に水を一杯飲ませ、用務員に知らせてあとを任せると、急いで教室に戻った。

誰が書いたのか、教室の黒板いっぱいに歌の歌詞がなぐり書きしてあった。子供のいたずらとしても、度が過ぎている。

一羽　二羽　こまどり　三羽
みんなでサリーちゃん　みいつけた
樺の小枝にちょこんとのって

まるで小さな妖精みたい！

私は激しい怒りを覚えて生徒たちに向き直った。だが見ると、教室の席順が変わっている。ジョーイ・リチャーズの机が空になっていた。

彼は、ミストレス・サリーの隣にいた。彼女と並んで教室の後ろの、長く深い陰の中に。

ありがたいことにミストレス・サリーは、家に帰ってからも学校での事件をひとことも口にしなかった。いつもどおり黙りこくって夕食のテーブルにつき、自分の皿から頑なに目を上げようとしない。そして食べ終えるとすぐに、用があるからと言って席を立った。クレイトン夫人は聞こえたのか聞こえないのか、相変わらずせかせかと動き回り、騒々しくしゃべっている。これで少なくとも、夫人から学校に文句がくることはなさそうだった。

夕食後私は、ミス・ドルーリィが親戚の人と住んでいるという、古風な切り妻造りの家を訪ねていった。歩いている間にも全身から汗が吹き出し、何かに気持ちを集中させることなど、とてもできない。むし暑く風ひとつない夜で、木々の葉も息をとめたように動かなかった。

ミス・ドルーリィは、だいぶ元気になっていた。しかし、これで一件落着というわけにはいかないようだ。いくらサリエッタと和解するように勧めても、耳を貸そうともしない。彼女は植民地時代風の、ゆったりしたカーブの揺り椅子（ロッキング・チェア）に座って体を揺らしながら、激しく頭を振って答え

た。

「いいえ、いやよ、真っ平だわ！　あんな陰険な小悪魔となんて、誰が仲直りするものですか。まだ魔王と握手でもした方がましだわ。それにあの子は、前よりずっとわたしを憎んでいるのよ――わかるでしょ――わたしに追い詰められて、正体を現してしまったんですもの。そうよ、とっさに魔力を使ってしまったのよ。こうなったら――もう、正面きって闘うしかないわ。なんとかしてあの子と、あの子を魔女に育てた妖術師を倒すのよ。まず、いろいろと計画を練らなくては――ああ、それにしてもなんて暑いのかしら。この暑さ！　頭が――頭がちっとも働きやしない」彼女は重苦しいカシミアのショールで汗をぬぐった。

のろのろと家路をたどりながら、私はみじめな気持ちで解決の糸口を探っていた。こんな状態では、いずれとんでもないことが起こる。そうなれば私たちの学校は教育委員会のやり玉にあげられ、徹底的な取り調べを受け、信用もがた落ちとなってしまうだろう。私は何とか冷静に解決法を考えてみようとしたが、汗で服はべとべとと体に貼りつき、息をするのさえ億劫だった。

家に戻ると、ポーチはひっそりと静まり返っていた。ふと庭で何か動く気配を目にして、私は足を速めた。ふたつの影が伸びている。ミストレス・サリーとジョーイ・リチャーズだった。ふたりは私が姿を現すのを待っていたかのように、じっとこちらを見守っていた。

地面にしゃがみこんだサリエッタの両手には、人形が握りしめられている。ろうで作った小さな人形で、茶色の髪はきっちりしたひっつめ髪に結ってあった。いつものミス・ドルーリィの髪

形だ。がちがちの蠟の体には、薄汚れたモスリンのドレスが巻きつけられている。それは長さといい、あっさりした型といい、ミス・ドルーリィの服装そのままだった。まさに、蠟造りの見事なカリカチュアだ。

「ねえ、こんなことは馬鹿げてると思わないかい」私はようやくの思いで、口を開いた。「ドルーリィ先生だって、悪かったと思って気にしてるんだよ。迷信に惑わされて、君にひどい仕打ちをしてしまったって。サリエッタももっと素直になってくれれば、みんな仲よくなれるんだ」

ふたりは立ち上がった。サリエッタの胸には、人形がしっかりと抱きしめられている。

「馬鹿げてなんていません、フリン先生。とにかくあの底意地の悪い女には、罰を与えなくては。一生涯忘れられないような、恐ろしい罰をです。突然ですみませんが、今夜はやることがたくさんあるので、これで失礼します」

サリエッタは白いドレスの裾をひらひらさせながら階段を上がり、音もなく寝静まった家の中へと入っていった。

私は少年に向き直った。

「ジョーイ、君は利口な子だ。これから男同士の話を――」

「すみません、フリン先生」ジョーイは門の方へ歩きだした。「ぼく――ぼく、うちに帰らなくては」リズミカルに歩道に響くスニーカーの音がしだいに遠ざかり、やがて闇の中に吸いこまれ

ていった。私は、ジョーイの信頼をすっかりなくしてしまったのだ。
その夜は、ひどく寝苦しかった。私はくしゃくしゃにもつれたシーツの上でひっきりなしに寝返りを打ち、まどろみ、はっと目覚めてはまたうとうとしていた。
真夜中近く、私は震えながら目を覚ました。拳で枕を打ち、気を取り直して再びまどろみかけた時、かすかな音が耳に飛びこんできた。聞き覚えのある音だ。それは夢の中にまで押し入ってきた音、激しい恐怖で眠りから私を引き戻した音だった。私は上体を起こした。
サリエッタの声だ！
彼女は歌を歌っていた。調子の早い、わけのわからない言葉で。音階はどんどん高く、メロディーはますます早くなり、まるで想像を超えた何かの限界にいきつこうとしているかのようだった。声はついに人間の耳に聴きとれる音域を超え、鋭い金切り声になったかと思うと不意にやんだ。ついで鼓膜が痛むほどのかん高い叫びが、空気を震わせながら長く尾をひいた。「クールーノーオー、ストガーロー！」
そして、静寂。
二時間後、私はようやく眠りについた。
ぎらぎらと強烈な陽光をまぶたに感じて、私は目を覚ました。着替えをしながらも妙に体がだ

るく、何をする気にもなれない。食欲も全然なく、生まれて初めて朝食抜きで学校へ向かった。
歩道には熱気の渦が巻き、私の顔や手は汗だくだくだった。焼けつくようなコンクリートの熱が、靴底を通して足に伝わってくる。ふだんは気にも留めない校舎の陰さえ、オアシスのように感じられた。
ミス・ドルーリィも、まるで食欲がないようだった。地下食堂のテーブルの上には、ていねいにレタスでくるんだ手製のサンドイッチが、そのままに残っている。肉の薄い両手にあごをのせ、赤く腫れた厚ぼったい目は、まっすぐに私に向けられていた。
「なんて暑いのかしら!」彼女は嘆息まじりに呟いた。「とてもがまんできないわ。それに、なんだって誰もかもがあんなにホーンの子供に同情するのかしらね。ちょっと陽の当たるところに座らせただけなのに。この暑さには、わたしの方がよっぽどまいっているわ」
「まさか……サリエッタを……陽の——当たる——」
「ええ、そうよ! あの子だけ特別扱いすることないでしょ。いつだって、涼しくて気持ちのいい後ろの席に座ってるんだから。しゃくにさわるから、陽当たりのいい大きな窓のそばに席を移してやったのよ。あれであの子も、この暑さがどんなに不愉快なものなのかよーくわかったでしょうよ。せいせいするはずなのに——あれから、ますます気分が悪くなったような気がするわ。体がバラバラになってしまいそう。ゆうべはゆうべで、ほとんど眠れなかったし——やっと寝ついたと思うと、恐ろしい悪夢を見るのよ。巨大な手に引っ張られ、なぎ倒されて、わたしの手や

顔に無数のナイフが突き刺さり――」
「あの子を陽に当てるなんて！　白子なんですよ！」
「白子ですって。馬鹿馬鹿しい！　あの子は魔女なのよ。そのうち、蠟人形でも作りかねないわ。ジョーイ・リチャーズにしたって、ただのいたずらでわたしの髪を切ったとは思えないし。きっと命令されたのよ、あの――いたたっ！」彼女は座ったまま、いきなり体を二つに折った。
「お腹が――すごく痛い――！」
私はなす術もなく発作が鎮まるのを待ち、脂汗を流しているやせこけた顔を見つめた。
「妙ですね、あなたまで蠟人形の話を持ち出すなんて。あなたがあまりあの子を魔女だ魔女だと言うものだから、本当に人形を作っていましたよ。ええ、ゆうべぼくがあなたの家を出て――」
ミス・ドルーリィははじかれたように立ち上がり、緊張に体を硬張らせた。一方の手でスチーム・パイプにつかまり、憑かれたような目をひたと私に据えている。
「あの子が蠟人形を作ったのね。わたしのを？」
「まあお待ちなさい、子供なんてそんなものですよ。人形は、あの子の目に映ったあなたそのもの、といった感じでしたね。デザインは少々雑ながら、なかなかの出来でしたよ。ぼく個人の意見ですが、あの子にはおおいにその方面での才能があるんじゃないかな」
だが、ミス・ドルーリィは聞いていなかった。「あの激痛！」彼女は思い出したように呟いた。
「てっきり腹痛だと思ってたわ！　あの子が人形にピンを刺してたのよ！　あのチビの――早く

手を打たなきゃ――できるだけ用心して。とにかく、一刻も早く」

私は立ち上がり、テーブル越しに彼女の肩に手を伸ばした。「落ち着いてくださいよ。そんなにむきになることじゃないでしょう」

彼女はさっと飛びのき、階段の近くに立ったまま、うわごとのように早口で何やら呟き始めた。

「棒もだめ。鞭もだめ――あの子には通用しない。でも、この手を使えば――つかみかかって素早く締め上げれば、きっと手も足も出ないわ。とにかく、あの子に隙を見せてはだめ」声は、すすり泣きに変わっていた。「絶対に隙を見せてはだめよ！」

次の瞬間、彼女は意を決したように勢いよく階段を駆け上がっていった。

私はテーブルを押しのけ、大急ぎで後を追った。

校庭では、生徒たちが長い板張りの塀沿いにずらりと並んで弁当を広げていた。が、今は食べるのも忘れ、驚きのあまり放心したように何かに見入っている。開いた口にサンドイッチを運ぶ途中で、その手が止まっていた。私はその視線を追った。

ミス・ドルーリィがつむじ風のごとく校舎の脇を走っていく。まるで、スカートをはいた二本足の豹のようだ。何度もよろめいては壁に手をつき、なおも走り続ける。そのすぐ先の日陰には、サリエッタ・ホーンとジョーイ・リチャーズが座っていた。ふたりは一心不乱にモスリンのドレスを着た蠟人形を見つめている。人形は日陰から少し離れた、セメントの上に置いてあった。仰

向けに寝かされ直射日光を浴びて、私のいる場所からでも蠟が溶け始めているのがわかる。
「おーい」私は叫んだ。「ミス・ドルーリィ！　落ち着いて！」叫びながら、必死で彼女の後を追った。
私の声に、ふたりの子供ははっと顔を上げた。その刹那、ミス・ドルーリィが前にのめり、飛びかかるというより倒れこむような格好で少女にのしかかった。ジョーイ・リチャーズはさっと飛びのいて人形をひっつかむと、私の方へ転がってきた。私はジョーイにつまずき、骨も砕けそうなほどしたたかに地面に体を打った。あわてて首だけ曲げて、後ろをふり返る。視界の隅に一瞬、ミス・ドルーリィが映った。その右手が勢いよく少女の体をなぎ払い、いたいけな体は蝦のように曲がってぐったりと女教師の足元に崩れ落ちた。
私は上体を起こしてジョーイに向き直った。背後では、子供たちが世にも恐ろしい悲鳴をあげている。
ジョーイは両手で力まかせに人形を握りつぶしていた。私が魅入られたようにそれを見つめている間にも、蠟は——日光ですでに軟らかくなっていた蠟は——みるみるその形を失い、きつく握ったそばかすだらけの指の間からぐんにゃりとはみ出してきた。モスリンのドレスからにじみ出し、どろどろになって、校庭のアスファルトの上にしたたり落ちていく。
子供たちの鋭い絶叫にかぶさって、たて続けにミス・ドルーリィの断末魔の悲鳴があがった。
ジョーイは目を皿のようにして、私の肩ごしにその光景を見つめている。だがその間も指はな

おも人形に食いこみ、私は絶望の中で祈るように人形を見つめ続けていた。悲鳴と叫喚が怒濤のようにあたりに渦巻き、巨大な太陽は容赦なく照りつけて、私の顔からは滝のような汗が流れ出していた。指の間から蠟をぽたぽたとたらしながら、ジョーイは突然、狂ったように歌いだした。息もつかずに、かん高い声を張りあげて。その声は大きく、さらに大きくなって、吹きすさぶ風のごとくあたりを聾し、世界じゅうに響くかと思われた。

一羽　二羽　こまどり　三羽
みんなでサリーちゃん　みいつけた
樺の小枝にちょこんとのって
まるで小さな妖精みたい！

ミス・ドルーリィの悲鳴と子供たちの叫びが空気をつんざき、ジョーイの歌声がとどろき渡る中、私はそれでも小さな蠟人形から目を離せなかった。ジョーイ・リチャーズの硬張った小さな**指から溶け出していく人形から、目が離せなかった。溶けていく人形から、目が離せなかった**

……

笑顔の果て

メアリ・エリザベス・カウンスルマン

THH SMILING FACE

Mary Elizabeth Counselman

考古学者のセドリック・ハービン卿は、粗布の簡易ベッドに横たわったまま、苛立たしげに頭を振った。また目が覚めてしまった――今度はジャガーの吠え声のせいだ。二時間前にはちいちいという猿の鳴き声、その三十分ほど前はジャングルの不気味な物音のせいだった。

こうして仰向けに動けないまま、うだるような寝苦しい夜を迎えるのも、すでに八日目になる。彼はちらりと傍のシャバンテ族の少年をにらみつけた。少年は巨大なしだの葉を大儀そうに動かして、ハービンに群がる小さな性質の悪いピウム――ぶよ――や蚊を追い払っていたが、きまり悪そうに歯を見せて笑うと、またせっせとしだを動かし始めた。ここの原住民の風習で下唇に突き刺したカピバラ（南米に住む巨大なモルモットに似た獣）の歯が、かたかたと激しくぶつかり合う。ハービンは、絶え間なく吹き出してくる汗に悪態をつきながら、汗が目に入らないように、何度もまばたきした。裸の胸にまゆのようにぐるぐると絆創膏を巻きつけられた体で、なんとか起き上がろうとしてみる。が、とたんに呻き声をあげて沈みこんでしまった。

すると、すぐにテントの垂れ布が上がって、じっとりした夜の闇から若い娘が現れ、足早に中

に入ってきた。
「あなた？　呻いていなかった？　痛むの？」
「いや、たいしたことはない。ただ――退屈でたまらん！　うんざりだよ！　まだ起きていたのかい？」
セドリック卿は、けだるそうに娘を見上げた。娘は彼の上に身をかがめ、顔や首に流れる汗をやさしくふきとった。小柄ですばらしい美貌の金髪娘だ。しわのよったシャツに乗馬ズボンといった身なりでさえ、息を呑むほど美しい。彼女が微笑むと、まわりのものは何も見えなくなるほどだった。口元がきゅっと上がった愛らしい唇は見るからに明るく陽気で、きらきらと輝く青い目は、いっしょに楽しく話をしましょうと誘いかけているようだ。ブラジルのインディオの少年は、彼女を見て眩しそうに微笑みかけた。そしてハービンは――父娘ほども年齢(とし)が離れているように見えるが、彼女の夫であった――嬉しそうに娘の手をとった。
「ダイアナ」彼は嘆息をついた。「かわいいダイアナ。おまえはどうして、そんなに楽しそうにしていられるんだね？　わしのせいで、この探検旅行が台なしになってしまったというのに。よりにもよって、とぐろを巻いているボアにぶつかるとは――このマット・グロッソの奥地が初めての観光客じゃあるまいし！」彼は自分の失態を思い出して顔をしかめた。「協会の奴らの口車にのって、こんなばかげた遠足に来るんじゃなかったよ。それも、ハネムーン代わりにだ！　いったいどういうつもりで、おまえをこのひどい熱帯地獄に連れてきてしまったんだろう？」

「さあさあ、もうそんな話はよして！」ダイアナ・ハービンは、彼の口にそっと二本の指を当てた。夫の頭をやさしく持ち上げ、ひょうたんに入ったマテ茶を飲ませると、ひと月遅れの雑誌をぱらぱらとめくってみせる。「さあ、これでも読んで、気分を落ち着けて。いくら夢にまで見た『失われた都(ロスト・シティ)』の探検に行きたくたって、三本も肋骨が折れているんじゃ無理よ。この体じゃどうしようもないでしょう。いらいらするだけだから、もう何も考えないで！　マリオが状況をよく呑みこんでいるから、なんとかしてくれるわよ」

その名を聞いて、中年のセドリック卿の顔に一瞬妙な表情が浮かんだ。ほんの一瞬だったのでダイアナの目には留まらなかったものの、夫の声が不自然に緊張しているのにはすぐ気がついた。

「マリオ——ああ、なるほど」考古学者はわざとらしい口調で、「我らの若くハンサムなガイド君だね」

「ハンサム？」妻は声をたてて笑った——あまりに軽やかな笑い方だったので、セドリック卿は怪訝(けげん)そうに妻を見つめたほどだった。「彼が？　そんなこと、思ってもみなかったわ……ああもしかしたら、セドリック！」彼女は目を輝かせながら夫を見つめ返すと、「やきもちをやいているのね！　あのマリオに？」ダイアナは目を半ば閉じ、映画のロミオさながらに、芝居がかったジェスチャーをしてみせた。「『ああ、セニョーラ！　あなたはジャングルに咲く一輪の蘭のようだ！』」——からかうようにマリオをまね、突然笑い崩れる。「ねえあなた、彼のせりふときたら、まるでメロドラマだわ！」

だがハービンは、笑うどころではなかった。険しく細まったグレーの瞳が、冷たく輝いた。「あの与太者が！」突然彼は、大声で怒鳴った。「あいつめ、ほんとにそんなことを言ったのか？　礼儀知らずの合いの子め！　すぐ呼んで来い。この場で首だ！」

「何言ってるのよ！」妻は笑いながら、夫の額にキスをした。「セドリック、ばかなまねはよして。ブラジルの男は、アメリカの娘と見ると誰かれかまわず言い寄るのよ。それだって――彼らにしてみれば国際親善のつもりなんだわ！」彼女は滋養の濃いマテ茶をもうひと口、夫に飲ませた。その目がいたずらっぽく輝いている。「マリオはとても優秀なガイドだわ。わたしたちの雇った好戦的なシャバンテ族が、道々出会う部族といさかいを起こさないでいるのも、彼のおかげよ。彼がいなければ、芋の木や板砂糖と交換してもらうのに、持ち物が半分に減っていたかもしれないわ。それに何と言っても、あなたの夢の『失われた都』へ行き着く道を多少でも知っているのは、ベルムでも彼だけじゃない――そんな所があればの話だけどね」彼女はすげなくつけ加えた。「いい、そんな都があったらしいという証拠は、リオ国立図書館で見たばかげた古い新聞だけなのよ。マリオはそんなもの信じていないわ」

「マリオがね！」考古学者は、鼻で笑った。「いいかい、もしファーセット陸軍中佐とその息子が、一九二五年その都を探す途中で亡くなったのだとすれば、何かきっとそれに関する手がかりが――くそっ、このいまいましいベッドに縛りつけられてさえいなかったら！」彼はまたも腹立た

しげに罵った。「あと二日歩けば、そこへたどり着くというのに。わしの一生の仕事だったんだぞ！　わしは——」

「あなた、落ち着いて」愛らしい若妻が、なだめるように彼の腕をなでた。「またという機会があるわ。もう一度出直しましょうよ。とにかく今は、早く傷を治して。動かせるようにならないうちは、ベルムまで帰れないわ。見た目より傷が深いことだってあるのよ。ああ、あの恐ろしい大蛇！　木から落ちて来て、あなたを押しつぶすなんて——」彼女は身を震わせ、小さくすすり泣きながら夫の側にひざをついた。そのひんやりした頬に、彼の手をそっと押し当てる。「ああセドリック、命まで危ないところだったのよ！」

ハービンは身体の力を抜いて、長いつややかな金髪をやさしくなでた。苛立ちと苦悩の陰が、徐々にその顔から消えていった。

「かわいいダイアナ。わしはいまだに夢を見ているような気持ちだよ。おまえのように愛くるしいアメリカ娘が、干からびた偏屈な年寄りと——このわしのようなイギリス人といっしょになってくれるとは！　あの夜、リオの探検家クラブで過ごした夜以来、わしの人生はがらりと変わった。おまえがあのフォレスターの間抜けに背を向けて、微笑んでくれた瞬間に。このわしに向かって！　あの時——そう、初めておまえの微笑みを見たあの時、信じられないようなすばらしいことが起こったんだ。まるで太陽が——生まれてはじめてわしのために昇って——ああ、うまく

言えん！」セドリック卿は、当惑したように急に言葉を切った。「どんなに言葉を尽くしても、わしの気持ちは表せまい」
「そんなことないわ！」妻が囁いた。「わたしも思い出していたところよ。初めてわたしが、かの有名なセドリック・ハービン卿に会った時のことを。あら、だめよ！」抱き寄せようとした夫の腕をするりと抜けて、「今はだめ！　マリオとわたしが、足りない物をそろえてマチュラから帰ってきてからね。さあ、早く眠って！　わたしも休まなくちゃ。夜明けに出発するつもりなの」
ダイアナのやさしい陽気な微笑みをなおも未練がましそうに見つめてから、ハービンは答えた。
「わかったよ。でも、大急ぎで帰って来るね？　できるだけ、大急ぎで――ああ、動けないのがじれったいよ！」
妻はかがんで、もう一度軽く夫にキスをした。「今度の木曜日は、わたしたちの初めての記念日よ。結婚して、まる一カ月たつんですもの！　そんなすばらしい日をマリオなんかと過ごすと思う？　それにあの、しょっちゅう『ティカント！　ティカント！』ってわけのわからない掛声をかけている、にやけたタピラペ族となんか――間違っても、記念すべきその日の日記に書けるようなことじゃないわ！」
セドリック卿はおかしそうに笑うと、おとなしく横になった。夜明けには短い旅に発つダイアナの後ろ姿を、熱っぽく目で追いかけながら。
河沿いのマチュラの村は、リオ・ダ・モールチ――死の河――を、ほんの二、三マイル下った

ところにある。かつてその河は、インディオに虐殺されたポルトガル人の採鉱技師たちの血で、まっ赤に染まったのだった。だが今では、村には小さいながらも物々交易場（トレイディング・ポスト）がある。持ち主は太った片眼のオランダ人だった。ダイアナはそこからベルム経由で、協会に電報を打つだろう。こんなふうに——ハービンは苦々しく嘆息をついた——夫は今、ろくに動けもしない状態です。せっかくの探検を台なしにしてしまいました、と。そしてマリオは、減りつつある一行の備蓄を補充してくるだろう——コーヒーにキニーネに芋の木（マンディオッカ）。それからマリオが最近運搬人（ポーター）として雇い入れた、新たな部族の民に与える二、三の装身具も。シャバンテ族の者は新しい運搬人が気に入らない様子だったが、彼らのキャピタウー——隊長——であるビュリティでさえ、今の人数では備品と負傷した白人との両方を担いで帰ることなど、できない相談だと認めていた。

ハービンはマテ茶をすすり、新しい運搬人たちのことを思い出していた。発育不全といった感じの、醜い矮小（わいしょう）なインディオたち——マリオが雇ったのは四人だった——きたならしいぼろぼろの腰布をまとい、手編みのヘッドバンドでとめた黒髪は脂ぎって、くねくねとうねっている。彼らはウルブー族の者たちだった——セドリック卿は顔をしかめ、ベルムのインディオ監督官がその部族のことを何と言っていたか、思い出そうとした。確か、彼らのことを〈禿げ鷹族〉と呼んでいたはずだ。人食いの風習でもあったのだろうか？　だが、思い出せなかった。ブラジル人のガイドが狩りをするウルブー族の一行に出くわした時、あの四人はそろって完全武装していたそ

うだ——弓と五フィートの矢を持ち、槍と吹き矢を携えて。そして実際に毒を塗った吹き矢が(黒と銀色の皮膚を持つイグアナを狙ったものらしいが)肩すれすれのところを飛んでいったと、後でマリオが青ざめて話していた。

「ああ、あいつがいなくなればせいせいする!」ハービンは継ぎを当てたテントの屋根をにらみながら、半ば声に出して呟いた。「こと女性に関しては、ああいう見てくれのいい若造どもは信用できん! 特に相手が、ダイアナのようにきれいな娘ともなると——あいつはロマンチックで感じやすく、まだほんの子供だからな」

「は? セニョール、何か?」不意にシャバンテ族の少年の声が返ってきて、ハービンはびくっとした。少年は勢いよくしだの葉を動かしている。蒙古系の濃い褐色の顔に、歯が白く輝いていた。

「何? ああ、何でもない! ひとりごとだ」ハービンは怒ったように言い返した。「上にいるふくろぐもを叩き落としてくれないか。頭に落っこちてきそうだ」

「はい、セニョール!」少年は素早く言いつけに従った。それというのもダイアナから、しっかり働けば耳飾りとして夫のカフスボタンをあげようと言われていたのだ。

ハービンは目を閉じた。蛙や蟬の単調な鳴き声にやっとうとうとしかけたと思うと、アナコンダのしゅっという音が間近に聞こえて、驚いて目を覚ます。時折、鰐の水しぶきの音も聞こえてきた。寝ぐらの砂州からのっそりと川に入って、水を浴びているらしい。ぶよは相変わらずしつ

こかったが、セドリック卿はほどなく混沌とした夢の中に引きずりこまれていった——愛する若妻が、もつれ、からまった蔓ややぶの中に迷いこんでしまう光景が、くり返しくり返し現れてくる。妻は彼を呼び続けていた。彼を呼び、声をたてて笑い、さらに先へ、どこか手の届かぬところへと進んでいく。彼はファサオ——南米土人の短剣——を空しく振り回し、ジャングルの緑の壁を切り裂こうとする。だがいっこうに壁は破れず、切りつけようとするたびに短剣は薄っぺらなゴムに変わってしまって——

目が覚めると、頭痛がした。体がだるい。日はすでに高く昇り、テントの中にはむっと熱気がこもっている。シャバンテ族の少年が、朝食を盆にのせて運んできた——火であぶったとり肉、飴(あめ)状の板砂糖(ラパデュラ)で甘みをつけたファリーニャ(粉穀)のかゆ、発酵させた砂糖きびを入れたコーヒー。ハービンは顔をしかめて、横目で少年をにらんだ。その黒い目が妙に興奮したようにきらきら光っていたからだ。だが少年の穏やかな声はふだんとまるで変わりはなかった。

「セニョール、お早うございます(ボン・ディア)！　よく眠れましたか(デュウミオウル・ベン)？」礼儀正しくあいさつをする。

「ああ、ぐっすり眠った(ムィタ・ベン)よ」ハービンはぼそぼそと答え、あくびをした。「セニョーラはどこだ？　もう朝食は済ませたのかね？」

少年がぱっと明るい笑みを浮かべた。その表情はどこか謎めいて、ジャングルそのもののようにとらえどころがなかった。

「セニョーラ、いない、いない」彼はそう答え、ポルトガル語に怪しげな英語を混ぜて、説明し

始めた。「セニョーラ、イッテしまった。セニョーラ、セニョール・マリオ。イッテしまった。ご主人、ねせておくように言われた。ご主人、ビョーキ。起こすなと」

「なんだと！　もう行ってしまったのか？」セドリック卿はがっかりしたようだったが、肩をすくめて言った。「まあいい——明日の日暮れまでには戻って来るだろう。二、三マイル川下へ向かえばマチュラだ。ふたりは——」ハービンは突然言葉を切った。シャバンテの少年の顔に、またも何かをおもしろがっているような、意味ありげな表情が浮かんだからだ。「何だ？　何をにやにやしてる？」彼は語気を荒くした。

答える代わりに、少年はテントの入り口へ走っていくと、手招きした。少年よりずっと年上の、神経質そうなシャバンテ族が——おそらく少年の父親か、年の離れた兄なのだろう——恐る恐る入って来た。全身を緊張させ、もし白人の機嫌が悪ければすぐにでも逃げ出そうと、身構えているかのようだ。

「セニョール？　プリーズ？」男は口ごもった。隊長のビュリティだ。男の下唇に突き刺さった乾いたやしの茎を見て、ハービンは突然思い出した。茎は男のつるっとしたあごに、まるで釘のひげのように垂れていた。

「セニョール？」彼は再び口を開いた。「プレゼント、あたえるか？　ビュリティ話したら、プレゼント、あたえるか？」

「何を話すっていうんだ？　このおしゃべり猿め」セドリック卿は怒鳴り返した。が、不意に胃

の筋肉がねじれるほどの激しい不安を覚え、肘をついて上体を起こそうとした。「何？　ああわかった。わかった——報酬だな！　話せ！」
シャバンテ族の隊長は体を揺らし、テントの支柱にもたれかかった。酔っ払ってるな、とハービンはすぐに見抜いた。原住民の飲む強いラム酒の匂いがぷんと鼻をつく。ビュリティは一度ならず二度までも話しかけてはまばたきし、ばかみたいにニタニタしていたが、やっと話し始めた。
「セニョーラ。セニョーラとセニョール・マリオ。川、下ってない、のぼっていった。マチュラに行かない。部族のものもいっしょ——」彼は指を一本立て、ついで自信なさそうに二本目を立てた。「ここをデテいった。ゴイアスへむかった。かえってこない」
「何だと！」ハービンは、折れた肋骨に突き刺さるような痛みが走るのもかまわず、ぐいと体をねじってベッドに起き上がった。「でたらめ言うな！」大声でわめく。「き、きさま——ただじゃおかんぞ、嘘つきのろくでなしめが！　戯言ばかり抜かしやがって。舌を切ってやる！」
ビュリティは縮みあがり、激しく首を横に振った。「ウソじゃない！　ウソとちがう、隊長！　ホントのこと！　セニョール、おこった？　ビュリティおこるの、いけない。わたし、なにもしてない。おとなしくて——いいインディオ！」
セドリック卿は周囲をにらみすえ、彼に投げつけるものを捜した。が、シャバンテの民は素早く踵を返し、一目散にテントから逃げていった。その背に、白人探検家の罵詈雑言を浴びながら。

ハービンは息を切らしながら、ベッドに倒れこんだ。絆創膏の下で傷がずきずきと疼いている。せっかくふさがりかけていた傷がまた開いてしまったのかもしれない。自分はこうして、まったく無力に横たわっていることしかできないのだ。怒りと苛立ちが彼を打ちのめした。あの原住民は嘘をついている。でたらめに決まっているじゃないか！　まさかダイアナが、床に伏したきりの自分を見捨てるはずが——はずが——。ないと言い切れるだろうか？　年の離れた中年の夫は、若く美しい妻の愛情に絶対の自信を持てるものなのだろうか？

セドリック卿は必死で自分を抑えながら、じっと横たわっていた。歯を食いしばり、両の拳をきつく握りしめて。旅行かばんの陰から隠れていたシャバンテ族の少年が這いだしてくると、こわごわとハービンを扇ぎはじめた。ハービンはうるさそうに手を振って少年を追い払ったが、また呼び戻した。

「おい、小僧——」彼は言い淀んだ。今しがた、あんなに癇癪を起こしたことを思うと、ひとりでに顔が赤らんでくる。「小僧、おまえ、もしかして——何か知らないか、わしの——セニョール・マリオがどちらへ向かったか？　川を下って行ったか、それとも上がって？」

「いいえ、隊長」原住民の少年はうやうやしく目を伏せた。が、その無表情な顔にかすかに軽蔑の色が浮かんでいるのを、ハービンは見逃さなかった。

「誰かわかるものはいないか？　狩り案内人はどうだ？　そいつなら道についた跡から、一行が向かった方向を捜し出せるだろう。どうだ？」セドリック卿は必死で食いさがった。

「狩り案内人(ハンターズ・ガイド)ですか、キャピタウ？」シャバンテ族の少年は、相変わらず見かけだけは慇懃(いんぎん)にハービンの前に立っていた。「ええ、たぶんわかるでしょう。でも——魔道師(ブルーホー)の方がよく知っています。魔道師に頼んで、セニョーラの一行の行く方を教えてもらいなさい。魔道師には何でも見えます——過去も未来も現在も」

「魔道——？　ああ、そうか。なるほど」

セドリック卿は笑いたくなるのをこらえた。ブルーホー、すなわちこのマット・グロッソの地に住む部族の妖術師が信じ難い力を持っていることを聞かされたのは、これが初めてではない。インディオ監督官にも、探検に魔道師をひとり連れて行くように忠告された——シャバンテ族の運搬人一行のまとめ役として、医者として、そしてまた相談役として。魔道師はたいてい老人だった。顔は皺(しわ)深く、目は謎めいている——熱帯性つる植物の繊維を調合した、トパーズ・グリーンのヤージェという劇薬を常用するため、半ば狂人のように憑(つ)かれた目であった。シャバンテ族の魔道師ムリカも、その例外ではない。

とはいえ、ムリカなら——ハービンは素早く考えをめぐらした——ダイアナやあのブラジル野郎のことを、誰よりもよく知っているだろう。噂という噂は、隅々のどんな些細(ささい)なものに至るまで、いち早くこうした老仙人の耳に入ってくる——そしてのちに、超自然の力で透視した知識として、信じやすい連中を煙に巻く材料となるわけだ。

「それがいい、ムリカだ！」セドリック卿は熱っぽくうなずき、原住民の少年に指をぱちんと鳴

らした。「さあ、奴を呼んで来い！　すぐにだ！」
シャバンテ族の若者はうなずくと、テントを飛び出していった。ほどなく大急ぎで戻って来たが、今度は丁重にテントの垂れ布を上げ、しなびた老インディオを中に通した。
たいていの者がゆうに六フィートはあるシャバンテ族にしては、ムリカは並はずれた小男だった。しかし彼の毅然とした態度や、羽根の頭飾りを戴いた皺深い物静かな顔には、どこかしら尊敬の念を抱かせるものがあった。老人は顔と胸一面に、赤と黒の塗料を塗っていた。青みがかった黒の染料はジェニパオパの実から、赤の染料はウルクの実からとったものだ。細い腰には尾のついたジャガーの毛皮を巻きつけ、手首から肘にかけて、盗んだ銅の電線をぎっしり巻いていた。下唇には吠え猿のかなり大きな骨を突き刺していたが、話すのにはほとんど支障がないようだった。英語は全然解さない。が、完璧といえるほどのポルトガル語を話す。黒魔術の道に入る以前に、キリスト教のミッション・スクールで習ったのだろう。その声は遠く響くオーボエの音色のように、深く豊かで美しかった。セドリック卿は皮肉っぽい笑みを浮かべてはいたが、内心この老人の威厳に気圧されていた。
「ムリカか？」彼は口ごもりながら老インディオに声をかけた。「おまえ――おまえをここへ呼んだのは――つまり――」
老いた魔道師は無表情にうなずき、葉巻用パイプの形をしたものに、ほぐした植物の繊維らしきものを詰めこんだ。探検家の寝台のそばに足を組んで座り、気持ちよさそうにテントの支柱に

もたれかかる。そのままひとことも言わずに目を閉じると、ゆっくりとパイプをふかし始めた。苦そうな嗅いだこともない匂いがテントに充満し、セドリック卿は頭がふらふらして、何とも言えず妙な気分になってきた。彼はいらだたしげに眉をひそめ、口を開いた。

「おい、いいか。怪しげな呪文につき合っている暇はないんだ。要点だけ教えてくれ。わしの妻がどっちへ――」

シャバンテ族の少年が鋭くしっと言って、それをさえぎった。首を横に振り、身ぶりで静かにしろと合図する。それからハービンの寝台の反対側に回って、畏れおののきながら囁きかけた。

「セニョール――しゃべってはいけない！　魔道師はアヤハスカを吸っています。その薬を吸うと違う次元界の光景が――」

「ふん！」セドリック卿はじれったそうに鼻を鳴らした。「その話ならさんざん聞かされたよ――まったくくだらん迷信だ。それとも」と彼は口元をゆがめ、「あるいは実際に効くのかもしれんな。ペンタトール・ナトリウム（静脈用麻酔薬）のような働きをするのかもしれん。潜在意識を解き放つわけだ。そうすれば意識の上では忘れてしまっていることも探り出せる。ふーむ！」ハービンは横向きになり、老人を目にしてたじろいだ。老人は完全に無言のまま陶酔したように体をゆらゆら揺らし、パイプをふかしている。

が、ほどなく魔道師は目を開いた。阿片に酔ったような、薄気味悪い目つきだった。その目はハービンの方を向いていながらまるで彼を見ておらず、彼の肉体を突き抜け、しみのついたテン

トの布を越えてはるか遠く、葉や枝のもつれ絡まったジャングルの彼方までを見通しているかのようだった。非常にゆっくりと、老魔法使いはしゃべり始めた。歌うような奇妙な節をつけ、ある時はシャバンテ語で、ある時はポルトガル語で。ハービンには、ポルトガル語はなんとかわかったが、インディオの言語（ことば）はわかるはずもなかった。

「……彼らは日の出に向かって進んで行く。一行はゆっくりと進んでおる。荷物の担ぎ手が三人、みなシャバンテ族じゃ。〈微笑の君〉は天幕の下で眠っておる。男がそれを見ている……今、銃を撃った。血のように赤い羽根を持つインコを仕留めたのじゃ。男はその羽根をセニョーラに捧げた。女は笑い、感謝し、黄金（こがね）に波打つ髪にその羽根をさした……」

セドリック卿は狂ったように傷ついた体を起こしながら、内心思うさま毒づいていた。ばかな。何もかもでたらめだ。まるで根拠のない無意味な狂言だ。彼は、むかつきながら自分にそう言い聞かせた。が、果たしてそうだろうか？　日の出に向かってと老人は言った。ということは、一行はマチュラではなく、ゴイアスへ向かっているのだ。そう、ビュリティの言ったように。魔道師はなぜあんなに自信ありげなのだ？　岸辺一面についた獣の足跡の中から、一行の跡を見つけ出したのだろうか――椀状のジャガーの足跡や幅広の三本指を持つ貘（ばく）の足跡、それに羊ほどもある密林の水辺に住むモルモット、カピバラの水かき状の足跡の中から？　あるいは、ただの当て推量だろうか？

『……女が歌っている』不意にムリカが続きを話し出した。「この歌だ、はっきり聞こえてくる……」老人はハミングし始めた。その切れ切れの調べが何なのかわかったとたん、ハービンは頭に針のような痛みを感じた。ノエル・カワード作曲の『どうぞわたしを縛らないで』だ。ダイアナの好きな古い歌だった。まさにこの曲だ。彼女が探検家クラブで、若いフォレスターと踊っていたのは。そう、あの晩——あの晩——

彼は耳を疑った。驚いたことに、ムリカがその歌詞を歌いだしたのだ。ただのひとこととて、英語は知らないというのに——

どうぞわたしを縛らないで
どうぞわたしを追いかけないで
運命(さだめ)のままにその手に抱いて
愛して、そして自由にさせて……

その詞(ことば)の響きが、枯れきったシャバンテ族の歌い手には明らかに何の意味もなさないその詞が、鋭いナイフのようにハービンの胸を貫いた。

「やめろ!」彼は目を血走らせてわめいた。「こんなのが——こんな歌が、聞こえるもんか! いったい……いったいどうして歌なんか聞こえるんだ。奴らは川下に——それともおまえの言う

ように川上にかもしれんが——四、五時間も前に発ったんだぞ！」
　老魔道師は答えずに目を閉じた。次に目を開いて再び白人の方を見た時には、今までの夢見るような奇妙な目つきは消えていた。組んだ足をほどいて立ち上がり、ハービンのベッドの側に歩み寄って、じっと待っている。セドリック・ハービンは老人をにらみつけ、それから肩をすくめると、安物のかみ煙草の箱を放り投げた。老インディオは優雅にそれを拾い上げた。贈り物を受けとるというより、まるで相手に授けるような仕草で。
「まだ知りたいことがおありですかな、隊長（キャピタウ）？」老人は穏やかに訊（たず）ねた。「ムリカは過去を見た——リオの神父が、婚礼の誓いを唱えたのを。〈微笑の君〉に早くはめようと焦り、キャピタウが指輪を落としたのを。そして金色のひげの男がそれを拾い、花婿に——」
　ハービンは思わず息を呑んだ。またも頭がちくちく痛む。「キムポールだ！」彼は呻（うめ）いた。「そいつは——その男はわしの親友だ。わしは確かに指輪を落とした……だがなぜ、おまえが知ってるんだ……？　ダイアナに聞いたのか、それとも何かの折にわしが……そうとも、きっとそうだ」彼は不意に口をつぐんだ。気づかれないように、そっと額の汗をぬぐう。「わかりきったことじゃないか。超自然の現象など……そんなものがあるものか！」
　ムリカは眉ひとつ動かさなかった。相変わらず穏やかな顔つきだ。静かにハービンの側に立ち、じっと待っている。その姿は、ハービンがこれまで一度として味わったことがないほどの確たる自信にあふれていた。実際、この皺よった物静かな賢人の顔を見ていると、今までになく自分が

あやふやになってくるのだった。
「未来も知りたいかの、キャピタウ？」シャバンテ族の老人は柔らかく訊ねた。「アヤハスカはすべての次元を見せてくれる。過去の姿も、現在の姿も、未来の姿も」
「そいつは恐れ入ったな！」セドリック卿はいきまいた。ムリカに食ってかかるというよりは、自分を奮い立たせようとするかのように。「ならば、聞かせてもらおう！　これから先はどうなるんだ？　妻はブラジルの若造と逃げたと言ったな。で、戻って来るのか？」
ムリカはもう一度パイプをふかした。その目がまたも酔ったように濁り、瞳孔がどんどん拡大し、虹彩をすっかり呑みこんでしまったように見えた。ハービンは、その光景に心を奪われて見入っていた。こんなものはばかげた芝居だと、みぞおちのあたりの言い知れぬ不快感にしても単なる気のせいなのだと、必死で自分に言い聞かせながら。
と、ムリカがかっと目を見開いた。体がゆらゆら揺れている。その声は非常にか細く、深い坑道の中で話してでもいるように、エコーがかかっていた。
「見えてきた……」老人は抑揚をつけて話しだした。「聞こえる……〈微笑の君〉が……悲鳴をあげている。星に未来がしるされている……キャピタウはこの先、死の迎えが来るまで、セニョーラの笑顔を手元に置いておくことだろう。しかし……」
「それで？」魔道師の言葉が切れると、ハービンは緊張した声で先を促した。「それで？」
「しかし、星にはこうもしるされておる」ムリカは消え入りそうな声で言った。「その笑顔を見

たとたん、キャピタウは気が狂うであろう、と。わしに見えるのはそこまでじゃ」

セドリック卿はぜいぜい息を切らしていた。ばかばかしい。最初から最後まで、つまらないイカサマだ。だが……あのノエル・カワードの歌はどうだ。落とした指輪のことは。それに、キムボールのブロンドの口ひげ——彼もダイアナも、ムリカの前でそんな話をしたことは断じてないはずだ。あるいはたまたま、当て推量がまぐれで当たっただけなのかもしれない。しかし——

彼は寝台に横たわり、必死で気持ちを鎮めようとした。体の両脇で力いっぱい拳を握りしめていたため、爪が手のひらに食いこんでいる。そこから血がにじみ出し、手首を伝ってしたたり落ちたが、ハービンはそれすら気づかなかった。しかしムリカはそれを目に留め、白人の寝台に歩み寄った。ジャガーの毛皮の下から猿の頭蓋骨を取り出すと空中に何やら奇妙な線を描き、骨をそっとハービンの額に置いた。

「キャピタウ。寛容は復讐に勝るものです……」

ハービンは、いきなり頭をぐいとひねった。猿の頭蓋骨が、うつろな音をたてて床に落ちる。

彼はムリカをはっしとにらみつけた。

「出て行け！」歯をきしらせながら怒鳴りつける。玉のような汗が額にも鼻の下にも吹き出していた。「わしをどうしようと言うんだ。寝たきり動けずにいるこのわしを？　気違いにしようというのか？　出て行け！」

再び体をねじって身を起こすと、息をきらしながら激しくムリカを罵り続けた。シャバンテ族

の少年は素早くトランクの陰にもぐりこんだが、老魔道師は動ずる気配もなく、軽く頭を下げてテントの出口に向かった。

「嫉妬とは毒のようなものじゃ、キャピタウ」老人は柔らかな美しいポルトガル語で言った。「セニョールは道の分かれ目に立っている。よく考えなされ！」

「出て行け！」ハービンは大声でわめくと、マテ茶入りのひょうたんを、老人の頭めがけて投げつけた。が、ひょうたんはインディオに近づくと不思議なカーブを描き、何の危害も与えずに床に落ちてしまった。ハービンは身震いした。そういえば、魔道師は矢も吹き矢もそらせてしまうという話を聞いたことがある。嘘だ。そんなことがあってたまるものか。

ハービンは肋骨の痛みに、歯を食いしばりながら横たわった。額から汗がしたたり落ちた。テントの中は蒸し風呂のようだった。どこか上流の方で、鰐が水をはねている音がかすかに聞こえてくる。原住民たちが群れ集って何やら気味悪い叫びをあげ、鷹ははるか上空を旋回しながら鋭く鳴いていた。その下では運搬人に雇った原住民たちが、短い弓と赤えいの逆とげをつけた五フィートの矢で、魚を狙い射っている。ハービンの思いは美しいブロンド娘とハンサムな若者の後を追って、川の上流へと飛んでいた。ふたりは草でふいた日よけの天幕の下で、ぴったりくっついて座っていることだろう。今頃はキスを交わし合っているかもしれない。あるいは若い恋人たちがよくするように、互いに寄り添っているだけかもしれない。

ハービンは思わず呻いた。怒りと苦悩が胸に渦を巻いている。ダイアナ、いとしいダイアナ。所詮は見果てぬ夢だったのだろうか。頭は空っぽながら、はつらつとした美しい若者が現れたとたん、彼女は行ってしまった――この探検を台なしにするような、彼自らのとんだヘマによって、セドリック・ハービン卿の輝かしい名声も色あせてしまったのだ。もう二度とこの腕に彼女を抱くことはかなうまい。もうあの親しみのこもった笑顔を、シャバンテ族をして〈微笑の君〉と言わしめた、あの眩しい微笑を見ることもないだろう。

ハービンの目が急に険しくなった。くそっ、そういえばあいつは、いつだって笑ってばかりいたじゃないか！　本当にこの逆境にも屈せずに陽気でいられたのか、それとも単に自分を嘲笑っていただけなのか？　アメリカの女どもは、どいつもこいつも尻が軽くてはしゃいでばかりいる――自分が見知っていたイギリスの女たちとは、まるで正反対だった。自分と結婚したのも結局ただの戯れだったのかもしれない。初めから、飽きたら捨てるつもりでいたのだ！　このにやついた原住民たちのもとに自分を置き去りにし、ガイドさえいないという至れり尽くせりの条件でベルムに追い返すつもりだったのだ。

マリオのことを思い出して、セドリック卿の顔がひきつった。あつかましいブラジル人のくずめ！　あいつらの後を追っていくことさえできれば――せめてこの手で、あいつの日焼けした首を絞めてやれれば！　狂おしい殺意に指を鉤のように曲げ、彼は突然、破鐘のような声を張りあげた。

「小僧！　小僧！　どこに隠れやがったんだ？」シャバンテ族の少年は、トランクの陰から身を震わせて這い出してきた。「もう一度ビュリティを呼んで来い！」ハービンは怒鳴りつけ、すぐに首を横に振った。「いや、いい——あいつならどうせどこへも逃げはすまい。ここはウルブー族の縄張りだからな。ん、そうだ——！」ハービンの目がきらめいた。「あの新しい運搬人(ポーター)たちだ！　奴らを呼んで来い。すぐにだ！」

　インディオの少年は飛び上がって命令に従った。白人をなだめたい一心で、それに加えて、贈り物のカフスボタンのことも気がかりだった。五分とたたないうちに、少年は四人のずんぐりしたウルブー族を連れて来た。ハービンはまだ怒りに身を震わせながら、四人を眺め回した。まず、ポルトガル語で話してみる。次に、あやふやなシャバンテ族の片言で。が、〈禿げ鷹族〉たちは白痴みたいににやにやしながら、頭(かぶり)を振った。ハービンは顔をしかめた。あとはジェスチャーに頼るしかない。

「セニョーラ……」そう言って彼は、空中に女の形を描いた。「わかるか？　おまえたちに頼みたい……彼女を連れ戻すんだ」彼は架空の女を自分の方に引き寄せる真似をした。

　と、ウルブー族の首長が突然うなずいた。目に邪悪な光を宿し、目元から口の端にかけて深い傷跡のある、背の低くがっちりしたインディオだ。彼が仲間に何やらぺらぺらしゃべると、他の三人も熱っぽくうなずき、早口でまくしたて始めた——その気味の悪い声に、ハービンは思わず身震いした。奴らが崇(あが)めている、あのむかつくような忌まわしい鳥の声にそっくりだ。と、首長

がビーズのように目を輝かせながら、前に進み出た。
「チューリ？」彼は狡猾そうに訊ね、それから英語らしき語を発してまずハービンを指し、次にジャングルの彼方を漠然と指さした。「モン？」
「えっ——ああ、ホワイト・マンか？　マリオだな？」ハービンの顔がゆがんだ。「マリオなどくそくらえだ！　勝手に始末しろ！」吐き捨てるように言って、奴はくびだというジェスチャーをして見せる。するとウルブー族の首長はにんまりとほくそ笑み、うなずきながら、喉をかき切る真似をした。その顔は蠅の羽根をむしってもよいと許しを得た子供のように、邪な喜びに輝いていた。
間もなく彼らは、屍肉に群がる騒がしい禿げ鷹どものように去って行った。ハービンはベッドに横たわり、ぐったりと目を閉じた。獲物を追い、仕留める術に長けたウルブー族のことだ。一両日じゅうに一行ののろい小舟に追いつくだろう。そしてもし彼らが人食い人種だとしたら——それこそがインディオ監督官に授かった忠告なのだとしたら、マリオめ、ざまあみろだ！　夫が無力に横たわり、追いかけることもできない弱みにつけこんで、他人の妻をかどわかした罰当たりめ！　ダイアナは、奴らが連れ戻してくれるだろう。そして——そう、自分はこんな所とはおさらばだ。
ハービンの閉じたまぶたから妻を恨む涙があふれ出た。ダイアナ——おまえはなぜこんなひど

い仕打ちをしたんだ？　いや、彼女はまだほんの子供じゃないか。なんでも夢見る年頃で、すぐに心を動かされる。〈寛容〉だって？　なぜムリカは〈寛容は復讐に勝る〉などと言い出したのだろう？　ハービンはひきつった笑みを浮かべた。とにかく、時がたてば彼女を許すこともできるだろう。そして、共に人生を築いていくのだ。たとえ彼女がハンサムなガイドと駆け落ちしたという汚点が、越えがたい密林の壁のようにふたりの間に立ちはだかっていたとしても。そうとも、ムリカの予言など当たるものか。ハービンの微笑は今や穏やかで、一途な思いにあふれていた。わしは文明人なのだ、と彼は自分に言い聞かせた。これから先、毎日眺める妻の笑顔が、ムリカの予言のように〈彼を狂気に追いこむ〉など、とんでもない。彼が妻の破廉恥な行為を許しさえしたなら、おそらく彼女は今までにも増して、そして今度こそ心底から愛してくれるだろう。

「アキュ！」浅瀬でシャバンテ族のひとりが叫んでいる。きっと大物を仕留めたのだろう――あるいは殺人魚ピラニアにむきだしの脚をかまれたのかもしれない。小さいくせに獰猛なあの魚は、ほんの数分で人間を骨だけにしてしまうのだ。「アキュ！」彼らは始終そう叫ぶ。未開人どもにとってこの言葉の意味は、その時々の状況に応じて「やあ！」になったり「万歳！」になったり、あるいは「痛い！」になったり様々に変化するのだ。無邪気で単純な原住民を思って、ハービンはふっと笑みを洩らした。

嘆息をつきながら、妻に寛容さを見せるその時を待ち焦がれているうちに、考古学者はつかのまのまどろみに誘いこまれていった。シャバンテ族の少年は、またもおずおずと巨大なしだの葉

で扇ぎ始めた。ハービンの寝顔を見つめるその目は激しいショックに見開かれ、今や心底からの畏れと敬意を宿していた。

セドリック卿はその夜、美しい妻の夢を一晩じゅう見ていた。次の日もその次の日も、彼はおとなしく寝台に横たわり、わずかに残ったキニーネを服用し、不平も言わずに出されたものを食べた。そして感傷的な気分になっては、心の中で何十回となくダイアナに向かって、彼女の不貞をやさしく寛大にさとしてみるのだった。ダイアナは泣きながら彼の首にすがりつき、許しを乞うだろう。そしてもちろん、自分はそうするはずだ。ハービンは謙虚な気持ちでひとり呟いた。彼女を取り戻せれば、それでいい。彼を見つめ何事もなかったように昔のままに微笑みかけてくれれば、それでいいのだ。だが、マリオが話題になった時のウルブー族のジェスチャーを思い出すと、良心がちくりと痛む。ダイアナが真剣にあいつを愛していたとしたら？　自分にそんな権利があるのだろうか？　しかし、ジャングルのガイドなどといっしょになって、この先どんな人生を送るというのだ？　ハービンはせせら笑った。あのやくざ者がどんな目に遭おうと、自業自得じゃないか！　妻を誘惑した男を自らの手で、あるいは人の手を借りて殺すのは、激しやすいブラジル人の間では、当然のことと見なされているはずだ。その上——セドリック卿は冷たい笑みを洩らした——その気になれば、自分はウルブー族の首長にそんな命令など与えていないと、彼らが誤解しただけなのだと言い逃れることもできるだろう。

〈禿げ鷹族〉を出発させて五日目のこと、ムリカ老人が静かにテントの中に入ってきた。彼は一瞬その場に立ち止まり、訝しげに仰向けに寝た白人を見つめていたが、ゆっくりその側へ歩み寄った。

「キャピタウ」彼の声は穏やかだった。「おまえさんはウルブー族に命令を下した。それはよからぬ行いじゃ。セニョールは分かれ目に立ち、間違った道を選んでしまった」

ハービンはぎくっとした。このおいぼれめ、テントの外をうろついて立ち聞きしたのだろうか？ 顔をしかめ、いらだたしげに手を振りながら、魔道師に出て行けと合図をする。傲慢なペテン師じじいめ！ ちょっと甘い顔をすれば、すぐ図にのりやがって！ だが、ムリカは出ていかなかった。焦点の定まらない大きな目に懸念の色が浮かび、次いであの、遠くを見るような目つきになった。ハービンは鼻にしわを寄せた。魔道師のパイプから、再びアヤハスカの苦い匂いが漂ってくる。ムリカは見つめていた。彼を——そして彼の向こう側を。

「見えてきた……」豊かな声が歌うように話し出した。「見える……『失われた都』が、ジャングルに呑みこまれた都市が。巨大なレンガが積み重なり、奇妙な文字が刻まれている。〈微笑の君〉がその前に立ち、男が写真をとっておる」

「何だと！」セドリック卿は目をぎらぎらさせてはね起きた。「じゃああのならず者は妻を盗んだだけでなく、わしを出し抜いてそこを探し当てたのか？ 発見の手柄を、わしから横取りするために——」彼の目が冷酷な光を帯びた。「そうか、それなら——追っ手の奴らに何をされよう

と、当然の報いだ！」そして、声を押し殺して呟いた。「あいつらを送って正解だったよ！　大正解だ！」
　ムリカは何も答えず、ひどく重々しく頭を振った。
「奴らはほんの子供じゃ」依然として静かな口調だった。「キャピタウ、密林の民を責めてはならない。たとえ彼らが間違った思いこみをしていたとしても。彼らは、セニョールの命令で行っただけなのだから」
　ハービンは目を細め、じれったそうにうなずいた。「よかろう。では、このわしが彼らに奴を殺せと命じたのだ！　だが、それがおまえに何の関係がある、このしなびた老いぼれめ」すごい剣幕でまくしたて、手を振ってムリカを追いたてた。「とっとと出て行け！　彼らは明日の日暮れには、妻を連れて戻ってくる――わしの望みはそれだけだ！」そして、自分に言い聞かせるように呟いた。「もう――もう二度とダイアナから目を離すものか！　あいつはまだ、甘いロマンスを夢見ているような子供なんだ。自分の本心も知らずにいるんだ」
　彼は手を伸ばしてマテ茶のひょうたんをつかみ、ひと口すすって、横になった。期待に胸を躍らせ、ほとんどまんじりともせずに長いうだるような熱帯夜を過ごした。続いて蒸し暑い日中も、もう二度も読んでしまった古雑誌でなんとかはやる気持ちを紛らせながら待っていた。肋骨の痛みもしずまり、折れた骨の先端もつながりだしたようだ。まったくこの厄病神の肋骨め！　だが明日になれば運搬人たちの手でボートに乗せられ、ダイアナともども文明の地へと帰っていくの

だ。少し長くかかるかもしれないが、ずっと水路を通っていこう。このくそ暑い緑の地獄から、一日も早くダイアナを連れ出さなければ。ベルムに着いたら一流のホテルをとり、マリオのことなどきれいさっぱり忘れさせるのだ。山のようにプレゼントを送り、やさしく細やかな愛情を注いで。

突然、叫び声が聞こえた。ハービンは全身を耳にして聞き入りながら、それがこちらに近づいてくるようにと祈った。ウルブー族が戻って来たに違いない。と、テントの垂れ布がはね上がり、シャバンテ族の少年が鉄砲玉のように飛びこんで来た。ひどく取り乱して目を大きく見開き、ロもきけずにただうなずいている。が、どうにか気を鎮めて切り出した。

「キャピタウ?」少年はうやうやしく囁いた。まるで、魔道師に話しかける時のように。ハービンは満足げに顔をほころばせた。「キャピタウ。あの――セニョール・マリオは奴らといっしょじゃありません。いっしょに出た部族の者は殺されたか、逃げ出したみたいです。でも――〈微笑の君〉は、セニョールの命令どおりに取り戻したとか」

「そうか、よし、よくやった!」セドリック卿は目を輝かせ、そわそわしながら顔の汗をぬぐった。「もう岸に上がったか? ここへ連れて来い。早く! 急げ!」

もうすぐ妻と対面するのだと思うと、いやでも体が緊張で堅くなる。妻はおそらく、にやけたウルブー族に両脇をはさまれ、怒り狂いながら引きたてられてくるだろう。ところが、ウルブー

族の首長はひとりで入って来ると、くしゃくしゃになった紙をハービンに差し出した。ハービンは心臓が飛び出しそうになった。ダイアナの筆跡だ。『失われた都（ロスト・シティ）』で〈禿げ鷹族〉に不意をつかれ、急いで彼宛てに書きなぐったのだろう。その手紙は彼女の潔白を、献身を、そして彼が疑っていた愛情を証明していた。

ハービンは恥ずかしさに顔をほてらせながらも、感謝の気持ちに胸を震わせ、唇を動かしながら手紙を読み始めた。

愛するあなた——

このメッセージを、同行したシャバンテ族のひとりに託して送ります。すでにご存じのようにわたしたちはマチュラへは行きませんでしたし、初めから行くつもりもありませんでした。わたしはマリオを説得して、あなたの夢の『失われた都（ロスト・シティ）』に連れて来てもらったのです。あなたの今回の探検が水の泡と帰さないように。いとしいあなた、あなたはそれにすべてを賭けていたようですし、あなたが自己嫌悪に陥っているさまを見るのは、とても耐えられなかったのです。でも、わたしがひとりでこの都を探しに行くと言えば、あなたはきっと反対したことでしょう。だから黙って出て来ました。

マリオは写真を何枚か撮りましたし、わたしは石壁や陶器に刻まれていた象形文字を一部書き写しました。ダーリン、あなたとファーセット陸軍中佐、それにリオにあったばかげた新聞記事は、みな正しかったようです。ここには、寺院のようなものが残っています。

きっと、インカの時代のものなのでしょう。生贄を捧げる石の祭壇には、金と銀の象眼細工がほどこしてあります——あなたにぜひ見せたかった。でも、ちゃんと地図を作ってあります。ですから、あなたの傷が治って——

手紙はそこで、いわくありげに破かれていた。セドリック卿は顔を上げ、にやにや笑っているウルブー族の者を見つめた。彼を見おろして笑っているその顔は、まるで発育不全で矮人となった、森の悪魔のようだった。原住民は再び嬉しそうにうなずいた。キャピタウの命令を首尾よくやりおおせたことが、自慢でならないのだ。彼は再び喉をかき切るしぐさをして見せた——その時突然、氷の手で心臓をわしづかみにされたように、セドリック卿はインディオ監督官の言葉を思い出した。ウルブー族は人食い人種ではない。首狩り族なのだ。

ハービンの喉はからからだった。妻はいったいどんな光景を、どんな恐ろしい儀式を目にしたのだろう？　それもひとえに、彼のせいで。許してくれるだろうか？　嫌悪に身震いすることなく、もう一度自分を見つめてくれるだろうか？　はたして、妻は——？

「〈微笑の君〉は？」ハービンの声はうわずっていた。「どこにいる——妻はどこだ？」もどかしげに空中に女性の体を描き、自分を指さしてみせる。「中へ入るように言え！　連れて来るんだ！　早く！」

ウルブー族の首長は邪悪な笑みを浮かべ、宿題を誇らしげに先生に提出する少年のように、何

度もうなずいた。部族の言葉で何やら外へ向かって叫ぶと、原住民のひとりが枝編みの小さなかごを持って入って来た。

ふたを開けきらないうちから、しなびた物体が目に飛びこんできた——おぞましい微笑みに縫い合わされた唇、血のしみを丹念に拭きとった、流れるような長い金髪——ハービンは狂ったように悲鳴をあげ始めた……

ガラス壜（びん）の船

P・スカイラー・ミラー

SHIP-IN-A-BOTTLE

P. Schuyler Miller

わたしには、すぐにその場所がわかった。

初めてそれを見たのは、十歳の誕生日を迎える直前のことだった。わたしは父と連れ立って、いつものように川沿いの古い町並みをぶらぶらと歩いていた。みすぼらしい小さな店や、今にも倒れそうな家々が建ち並ぶそのあたりも、父の少年時代にはもう少しましな所だったようだ。父はここで船具商人として働き、小金を蓄めて大学に進んだのである。だから一緒に散歩している間にも、古い仲間たちや、昔関わりのあったらしいだらしない着こなしの女たちが、よく声をかけてきたものだ。土曜日の午後ともなると、たいていは薄汚れた暗い居酒屋に連れていかれる。わたしの前には毒々しく色づいた飲み物が大きなグラスに入れて置かれ、わたしはそれに手をつけぬまま、この一風変わった知り合いたちが父の過去から引き出してくれる思い出話の数々に、うっとりと聞き入っていたのであった。

そしてその時も、わたしたちはいつもの散策を楽しんでいた。わたしはもうすぐ十歳になるところだった。ふと気がつくと、父さえも見も知らぬ通りを前にしていたのだ。ひどく狭い小路で、

両側には崩れかけた倉庫が迫り、不格好に折れ曲がったガス燈がぼんやりと光を投げている。わたしたちはウォルナット・ストリートに沿ったポルトガル人街の、裏手にあたる路地にいたらしい。そしてそこは、ほとんど路地の行きどまり近くだった。片側はがっしりしたレンガの壁となって、百ヤード近くも倉庫が軒を連ねていた。反対側の歩道は狭く、敷石にはひびが入っている。粗末な店々の窓が一列に並んでいたが、大半はすでに空き家となっていた。

ひょっとしたら、そのまま気づかずに通り過ぎていたかもしれない。わたしたちは古い栗の木の下の、小さな芝地に向かう途中だったから。土曜日の晩になると人々はそこにたむろしてパイプをふかし、ビールを飲み、チェスの腕を競い合っては微笑ましい口げんかをくり広げるのだった。だが、ちょうどわたしたちがその通りにさしかかった時、小路の奥に灯りがついた。黒々と伸びる裂け目の奥で不意に輝いた光がわたしの目をとらえ、反射的に父のコートを引っぱると、ふたりして目を凝らした。わたしは今でも時々不思議に思う。あの時、誰がどうやってあの灯をともしたのだろうと。

その店のドアは、灯りの真下にあった。そうでなければ、目に留まらなかっただろう。しかし、わたしは確信している。その灯りは、ドアを照らし出すためのものだったのだと。闇の中にあっても、その店構えには人目を引く何かがあった。ドアの前にはしみ一つない小旗が飾られ、正面の低いウインドーにはめられた小さな四角いガラスが、きらきらと光を反射していた。実に手入れの行き届いた店らしく、こわれたポーチやすすけた板ガラスの間を縫って近づいていくにつれ、

それがいっそうはっきりした。
店を見つけたのはわたしの方だったから、父と決めたルールに従って、ドアを開けるのはわたしの役目だった。が、店の前まで来ると、思わず足が止まってしまった。周囲と比べると、そこだけあまりに鮮やかな対照をなしていたのだ。周囲の路地は古く、あたりの建物はこの界隈(かいわい)の倉庫よりさらに古そうで、おそらく一世紀近くは経ていただろう。古き良き時代に建てられたこうした単純で直線的な建物は、今や金も人手もかけられず、うちすてられ朽ちかけているというのに、この店だけは茶色の美しい外観を保っていた。ずっと以前に写真で見た、ディケンズ時代のロンドンの建物に似ている。それはまるで、薄汚い荷船の間に一隻だけ混ざった、堂々たるガリオン船のようだった。ウインドーは低くて幅広く、鉛の桟(さん)でいくつにも区切られていて、深いグリーンの小さなガラスがはめこまれている。店の前の敷石には塵(ちり)一つなく、数字を刻んだみかげ石の縁石も、路地の中央の丸石さえも、ぴかぴかに磨きあげられていた。
わたしたちは、初めて番地に目を留めた。マーデリー通り五十二丁目、としるされている。
街灯が戸口の石段を照らしていたが、それよりさらに柔らかで温かな光が、この不思議な形のウインドーから漏れ出ていた。おそらくは、それが生まれて初めて見るオイル・ランプの光だったのだ。重たい樫のドアを開ける前に、わたしは小さなはめこみガラスの一番透き通った箇所を探し、鼻を押しつけて中をのぞいた。そこにわたしが見たもの——それはおとぎの世界であった。

四年前に母が亡くなって以来、叔母がわたしたちと共に住むようになっていた。そしてわたしは父のあとに従い、こうしたむさ苦しい裏通りの粗末な店を転々としていたので、汚物や悪臭、それにその品の悪さにも慣れっこになってしまった。そうしたものを期待し、理解するようにさえなっていたのだ。それは良くも悪くも、貧しさに苦しみ疲れた人々が、なおも精いっぱい生きていくための生活の舞台であったのだから。彼らのうちのごく一握りが、父のように世に出て成功を収めた。さまざまな世渡りの術によって、あるいは、時にはいかがわしい手管を使って。だが物心ついた頃から身をもって覚え、成長とともに骨の髄までしみこんで人格の一部となってしまった貪欲な面持ちや疑い深さは、めったなことで消えるものではない。しかし父のまわりの友人たちは、そうしたものとはほとんど無縁の温かい人たちばかりだった。

そしてこの場所は、わたしが見てきた世界とは、まったく様相を異にしていた。それは、夢の国であった。骨董品店——それはストックトンの小説中の〈魔法の卵〉に出てくるような幻の店だった。父の書斎で読んだ古いすすけた本の中に見いだした、ありとあらゆるすばらしい世界そのものであり、そのすべてがいちどきに生命を帯びて、目の前に現れたかのようだった。店は奥行き深く、外側から想像するよりずっと広い。左手に幅広い樫のカウンターが奥まで走り、大きなタペストリーがドア近くの右手の壁に掛かっている。それは、褪せかけてはいるが美しい色彩にあふれ、不思議な生命感に満ちていた。

床は大きな厚い松材で、滑らかに磨かれている。天井は低く、がっしりした横梁が肋骨のよう

に並んでいた。大きなドアを開けて店内に入った時、不意にわたしを包みこんだのは、そのかぐわしい松と樫の香りだったのだ。

この妖精の国の店には、それにふさわしいえもいわれぬ芳香があった。白檀や没薬の、神秘的な東洋の香り。ミントやタイムそれにラヴェンダーの香り。さらには使いこんだ革や磨きあげられた銅製品、鋭利な輝きを放つ冷たい鋼鉄の匂いなどが混ざっていた。それは九歳の少年にとって、夢の中だけで見る世界だったのである。

幅広いカウンターの後ろには、扉に小さなガラスをはめた戸棚があった。ガラスを通してぼんやりと見えるだけだったが、そこには赤みがかった古い樫材に積まれた品々より、さらにすばらしいものが詰まっていた。天井から吊るされた三つの船型のランプが、黄色い光を投げかけている。カウンターの上には特大の鉄の燭台に大きな蠟燭がさしこまれ、それが店にある灯りのすべてだった。柔らかな光は、光沢のあるしっとりした絹や錦の巻き布、そして緋色のベルベットを愛撫し、タペストリーの下に積み上げられた、ふかふかのカーペットの異国情緒あふれる模様を照らし出している。濃い暗赤色や深いひすい色の精巧な磁器細工が、淡い光に流麗な姿を浮かべていた。また、複雑な彫刻を施した象牙色と黒檀色の屏風が店とその奥とを仕切り、半ばは陰となり、半ばは光に映されてわたしの目を驚かした。その手前のどっしりした箱の上には、グロテスクな道化人形と、思い思いのポーズに吊るされた操り人形の一家。そしてエナメルと象眼細工の小さなテーブルの上には、チェスの駒が行儀よく並んでゲームの開始を待っていた。

父はチェスの駒に目を留め、まっすぐに近づいていった。わたしはといえばその間も次から次へと現れる宝の山の間をさまよい、不思議な香りを胸いっぱいに吸いこみ、ただもううっとりして夢の品の数々に指をすべらせていた。父の見た駒は一方が象牙色、もう一方が黒と赤で、ペルシャ製のものだった。それは今、わたしの手元にあるが、見る人が見れば実にすばらしい年代物だとわかるだろう。

そうそう、言い忘れていたことがあった。大きなドアを押し開けた時、店の奥の方で銀のベルが鳴ったということを。その透明な響きさえ、このおとぎの国に一歩足を踏み入れたとたん、忘れてしまったのだ。だから店の主に見つめられているのに気づいた時は、驚きのあまり心臓が飛び出しそうになったほどだった。

わたしはいったい、どんな主を想像していたのだろう？　歳月と多くの経験を乗り越えてきた、賢い小人だろうか？　奴隷として美しい混血娘を連れている、恰幅のいい欧亜の混血か中国人だったのだろうか？　それとも、この店のごとくうわべは美しく、内には妖術の数々を秘めている、ひげを生やした小鬼だろうか？　あの当時もわたしたちは、今の子供たちと同じように、そうした妖精物語をたくさん読んだものだ。もっともわたしの感傷的な趣味は、いささか古風なものとなってしまったかもしれないが。

しかしあらゆる空想に反して、店の主は巨大な男だった。肌は褐色で、喉から頬にかけてひき

つれた深い古傷の跡がある。彼は波と潮風にもまれてきた海の男だった。その体は、父二人分にわたしくらいの少年を足したほども大きい。年齢はわからなかった——だが年寄りでないことは確かだ。髪は黒く、針金のようにごわごわしていたから。そしてまた、若いとも言えなかった。日にさらされた服を着て、素足に縄編みサンダルといった出で立ちだった。

父は、品定めするかのように彼を一瞥(いちべつ)した。この界隈で見知らぬ人間と言葉を交わす時には、父はいつもまず、そうやって相手を観察した。そしてどうやら主を気に入ったらしく、チェスの駒の値段を訊ねた。それによって、わたしはまたも驚くべきことを知ったのである。

これだけの大男であることから、当然その声は轟くような低音だと予想していた——船乗りだったことは一目瞭然だし、そのひげからして、吠え狂う波や風にも負けぬ大声で、部下に命令をくだしてきた士官クラスだろうと思われたから。ところがその声は小さくやさしげで、声が喉につかえてでもいるようにきしんでいた。それを聞いてわたしは、思わず背筋がむずむずしたほどだ。

「売り物ではありません」彼は囁いた。

わたしは、それがよく使われる手だということを知っていた。だから、父がふだんのようにさらに突っこんで訊ねもせず、あっさりと背を向けて棚やカウンターの上を物色し始めたのには、むしろ驚いてしまった。父は象の足で作った風変わりな踏み台の上にかがみこんだり、つややかなレースに指を走らせたりしながら進んでいく。その後ろを、鉄の燭台をかかげた主が続いた。

「坊主の誕生日がもうすぐなんだ」父はさりげなく言った。わたしが全身を耳にして聞き入っていたのは、言うまでもない。「何か、気に入りそうなものはあるかね？」

男がわたしを見た。その目は黒く、石のように冷たかった――さながら、彼の店に並んでいる石の彫刻の断片のように。鉤ばった鼻から幅広い残忍そうな口元にかけて、深い溝のようなしわが刻まれている。しかしその声は、カウンターにのせた上質の絹のように柔らかく、繊細だった。「坊ちゃんにご自分で選んでもらったらいかがです？　蠟燭を貸してあげましょう。その間、我々はチェスを楽しむことにしませんか」

父はおそらくびっくりしただろうが、表情には出さなかった。表情や言葉を抑える術は、十分すぎるほど身につけていたから。それはずっと昔、まさにこのあたりの裏通りで、頑健なすばしこい身体が必要に迫られて覚えこんだ、生きる術だったのだ。「けっこうですな」父は答え、ベストのポケットからお守りにしている金貨を取り出した。たぶんギリシャ時代に逆のぼるコインだと思う。あるいはもっと古いかもしれない。「当てた方が白だ」

投げ上げたコインがランプの光の中をくるくると回った。「表」男は囁くように言った。コインは木の床に落ち、父はそれを男に拾わせた。「表です」彼は穏やかに言った。「でもよろしければ、黒をいただきたいのですが」

ふたりは小さなテーブルの側に椅子を引き寄せた。わたしはすぐに彼らのことなど忘れ、蠟燭

の光が照らし出す魔法の品々に心を奪われた。今でもよく覚えている。わたしは長い間立ちつくし、壁いっぱいに広がっているタペストリーをじっと眺めていた――織り地は歳月に黒ずんではいたが、生き生きとした色彩にあふれ、何かの神話が描かれていた。それが何の神話なのかは、今もってわからない。やがてそれにも飽き、ふと目を移した瞬間思わずぎくりとした。頭上のたる木に掛かっていた幾つもの仮面が、虚ろな目でこちらをにらんでいたのだ。あわててそれに背を向け、品物が乱雑に並べられた長いカウンターに向き直り、何かすばらしい掘り出し物がないかとひっかき回し始めた。戸棚を開けたくてうずうずしていると、不意に主のしわがれた声がして、背筋を奇妙な戦慄が駆け抜けた。「いいんだよ、坊や――開けなさい」

こうして、長い長い宝探しゲームが始まった。何もかもが珍しい宝の山から、たった一つだけ、どうしても欲しいと思うもの、今までの何よりも欲しいと思えるものを見つけ出したい一心で。そして、あの船を見つけたのだ。

今にして思えば、それは偶然――非常に稀なる偶然だった。いや、それとも運命だったのだろうか。わたしたちの預かり知らない、神の御手に委ねられた運命だったのかもしれない。わたしは次から次へと戸棚を開けた。重たい燭台を高く掲げて中をのぞき、あるいはそれを背後のカウンターの上に置いて、愛着をこめて宝に触れていった。戸棚の下にも、カウンターの下にも、深い引き出しがついていた。わたしはそれを開け、そのたびに新たな驚きを発見した――華麗な蝶を南国風の木に止まらせた化粧箱、爪でも傷がつきそうなほど柔らかな金の装飾品、何百種類も

の宝石、ミイラにされた見たこともない小動物。戸棚の一つは、貼りついたように動かなかった。わたしは力をこめて引っ張った。と、壁全体が扉といっしょに動いて、その後ろにぽっかりと、深さ五フィートほどの壁龕(へきがん)がのぞいた。そこには鉄の籠(かご)に入れられた、大きなガラスの壜(びん)が飾られていた。それは、薄いグリーンの完全な球体だった——そしてその中に、あの船が入っていたのだ。

船は横帆式の、古いものだった。細部に至るまで完璧な出来栄えだ。港町の店々で見かける船の模型といえば、大半がこれより小さく作りも雑で、ラム酒の壜だの俄(にわか)作りのフラスコだのに入れられている。それが最近の製造方法となってしまったのだ。もはや職人技に対する誇りなどなく、ひたすら奇をてらったものばかりを作る方法に。しかし、この船は違っていた。壜入りの船がどれも判で押したように帆をいっぱいに上げ、その糊づけした、またはニスを塗った帆布に架空の風をはらませて少し傾いているのに比べ、この船はゆったりと帆をゆるめ、甲板(デッキ)に陽光をいっぱいに受けて静かに浮かんでいた。そのガラスのような海面には、さざ波ひとつ立っていない。小指の爪ほどの水夫たちが、気難しげな顔でそれぞれの持ち場についている。ブリッジには船長が立ってわたしを見つめ、脅すように目の前に腕を突き出していたが、その腕の先端は小さな、光り輝く鉤針となっていた。

その瞬間、わたしは悟った。これこそがわたしの求めるもの、これまでの何よりも欲しかったものなのだと。それは非の打ちどころのない製品でもなかったし、見た目は派手で美しい、一見

完全無傷なガラスに密閉された工芸品とも違っていた。わたしがその船を欲しかった理由は——それは、三十年後の今でも変わっていないが——子供心にもこの船は本物なのだ、どこかの本物の海を航海して来たのだという確信を抱いたからにほかならない。手に入れさえすれば必ず船に乗りこむ方法が見つかる、そうすれば世界じゅうの少年が夢見ている冒険に旅立てるのだと、心から信じたからだった。

わたしは振り向いて父を呼ぼうとした。ゲームは終了して父は立ち上がっていたが、やせた顔に奇妙に考え深げな表情を浮かべて、じっと最後の駒の並び方を見おろしていた。父が勝ったのだ。チェスの駒は、父のものとなったのだ。しかし店の主は、父ではなくわたしを見つめていた。灯りは彼の後ろ手にあったがその顔にぼんやり浮かんでいた表情を見て、わたしはぞっとした。

わたしは素早く後ずさりした。蠟燭が傾き、熱い獣脂が手首に飛び散った。反射的に腕を引っこめたとたん、肘が開いた扉にあたり、ばたんという音とともに戸棚が閉まった。男が店の向こうから虎のような勢いで飛んできた。そしてカウンターに身を乗り出し扉を引き開けると——船は跡形もなく消えていた。

有無を言わせぬその口調には、脅すような響きがあった。「さあ、坊や。お父さんはわたしを負かした。で、何が欲しいんだね？」

わたしは彼との間に蠟燭を置き、さらに後ずさった。もう何も欲しくなかった。ただ外へ出たかった。父とともに、光に満ち、人々のあふれている通りに。おとぎの国はシャボン玉のように

消え去り、恐れと、そして同時に罪の意識が心を苛んだ。あたかも、禁断の事物をのぞき見てしまったかのように——そう、彼の声がそれを示唆していた。
「な、なにもいらないよ！」わたしは答えた。「なんにも欲しくないんだ」
「何もいらないって？」父の声だった。「何を言うんだ、トム。聞き分けのない子だね。すばらしいものがこんなにいっぱいあるのに。父さんが勝ったので、この方はとても高価なチェス駒をくださるといっている。おまえが何か代わりのものを選んでくれた方が、父さんだって気が楽だ。さあ——何が欲しい？」
妙なことだが、父がそこにいるだけで、すべては変わってきた。もはや恐れも消え、罪の意識など感じる理由とてなかった。代わりにむらむらと敵意が湧き起こり、わたしは冷たい黒い目を正面から見据えて答えた。
「船が欲しいんだ——ガラスに入った船が」
これが、その時の話のほぼすべてだ。ただ、船を手に入れることはできなかった。わたしは欲しいものはそれ一つだとくり返し、あまりにも高価な賞品を勝ちとった父は、むしろとまどって何とか代わりのものを選べと促した。しかし、船はわたしがようやく見つけ出した宝物だったのだ。引き出しという引き出し、戸棚という戸棚をすべて探し回った末に、遂にこれこそはと思った快速帆船。それは、帆を強く張り石膏の航跡を引きずった生命のない他の船とは、比べるべくもない傑作であったのに。だが、船は消えていた。日に焼けた水兵を乗せ、静かに浮かんでいた

あの帆船は。そしてそれから長い間——わたしたちが他の町に引っ越し、新しい学校で新しい友人を見つけ、そしてとうとう社会で働くようになってからも、わたしは相変わらずその理由を考え続けていたのだった……

　再びその通りを見かけた時、わたしはすぐに思い出した。

　実を言うと、ずっと探し続けていたのだ——それほど懸命にというわけではなく、三十年前に父と歩いた古い通りをなにげなく散歩しているといった様子で。夏の夜には今でも河岸の小さな公園で人々がチェスを楽しんでいたが、もう顔見知りの人はいなかった。しかしこの町の人たちは、めったなことでは昔の仲間を忘れないものだ。わたしは旧友とともに公園で乾杯し、二軒、三軒とはしごして古き良き時代を語り、新しい時代は退廃的で生彩がないなどと話し合った。そして、真夜中近くとなった。夜空には砂をまいたように星々がちりばめられ、わたしの足はおのずと河岸に向いた。人気のない通りを、影法師だけを道連れにさまよい歩く。こつこつと響く足音を聞きながら、頭の中は夜の幻想でいっぱいだった。

　街灯が行く手に光の帯を投げかけている。星あかりより、わずかに明るい程度だ。そしてわたしが歩道の縁石を下りて靴の裏にでこぼこの丸石を感じた、その瞬間だった。二つのものが不意にわたしを夢想から呼び戻し、歳月のヴェールの彼方からあの思い出を引きずり出した。わたしは顔を上げた。ここが、その場所だったのだ。

三十年という時の流れに通りはいっそうよごれて黒ずみ、対照的にそこの磨かれた敷石だけは、十歳になる直前の晩に見た時よりもさらに輝いているほどだった。何年か前に、倉庫の一つが焼けおちていた。小路の左手に立ちふさがっていたレンガの壁は崩れ、瓦礫(がれき)の山と化して、焼け焦げた木材の骨組みだけが、夜空に黒々とそびえている。通り過ぎた家々には人もなく、板を張って閉鎖されていた。店々の入り口は壊れ、たわんだドアが開きっ放しになっている。だが五十二丁目まで来ると、そこは何一つ変わっていなかった。そう、何一つ――三十年という歳月の中で。どっしりした大きなウインドーには相変わらず鉛の桟で仕切られた何枚もの古い、ひび割れたガラスがはめこまれ、内部はほとんど見えなかった。あの時と同じ柔らかなランプの光が通りに洩れ出ている。大きな鉄の掛け金がついた重たいドアも、変わっていなかった。そして三十年前と同様に、わたしはドアを開けて中へ踏みこんだのだった。

ドアが開くと同時に、小さなベルの音がした――銀のベルらしいその音は、店のどこか奥の方で鳴った。磨かれた松材の床にわたしの靴音が響き、三つの船型ランプは右手の壁に掛かった特大のタペストリーと左手のカウンターや戸棚を照らし出している。

中央のランプの真下、カウンター近くには、象牙細工と赤いエナメルの小さなテーブル。その上に、チェスの盤(ボード)と駒が置いてある――象牙色に、黒と赤。チェスの駒から目を上げると、三十年前のあの日のように、彼がそこに立っていた。

おそらく、彼にはわたしがわかったはずだ。わたしは父親似だった。だがそれは別としても、

わたしのことを覚えていたと思う。ただあいにくなことにわたしは父ではないので、その夜わたしたちが始めたゲームは、前とはかなり違うものだった。
「何かお探しですか?」彼の声は昔のままに柔らかく小さくしわがれていて、その傷のある喉に引っかかっているような声だった。この三十年間、しばしば夢の中にまで聞いた声だ。そして、彼自身もまったく変わっていなかった。着ている服さえも——神に誓ってもいい。
彼は、もう一度同じことを訊ねた。すると三十年の時の壁はあっというまに溶け去り、彼の前に立っているのはあたかも怖れと敵意とを胸に秘めた、十歳の少年であるかのようだった。少年は答えた。「船を探しているんです。ガラスに入った船を」
一瞬彼は、店に陳列してある木の偶像と化したように硬くなった。次にわたしに答えた彼の口調は、記憶の中のように柔らかでもなければ、愛想のかけらもなかった。「すみませんが、船は置いていません」
わたしはゲームの幕開け(オープニング)を変えてみたわけだが、今やゲームそのものが変わりつつあった。まあいい、今度はわたしが駒を動かす番だ。「さしつかえなかったら、自由に見させていただきます。何か、気に入るものがあるかもしれません」
彼は小さなテーブルの側のカウンターから、鉄の燭台を持ち上げた。思っていたほど大きくない。だがそれは、三十年前にはわたし自身が小さかったせいだろう。「チェスはなさいますか?」彼は穏やかに訊ねた。「珍しいチェスの駒があるんですよ——とても古いものです。それに、実

にすばらしい。ご覧になりませんか？」

それは、言い知れぬ圧迫感を感じさせる雰囲気だった。目に見えない力がくもの巣のようにわたしのまわりに張りめぐらされ、あの時と同じ状況——三十年の時を逆行して、あの日と寸分違わぬ状況に引き戻そうとする。いつの間にかわたしはテーブルの側に立ち、象牙色の駒を手にとっていた。わたしの父が勝ちとった、あのチェスとまったく同じものだ。わたしは今でもそれを家に置いてある。ただ一つだけ、〈ナイト〉をなくしてしまったけれど。

「ありがとう」わたしは言った。「でもわたしも、とてもすばらしいものを一つ持っていましてね——これとそっくりなのを。なんでもペルシャの品だとか」

彼がわたしの言葉を聞いていたかどうかはわからない。彼は燭台を頭上に掲げたまま、じっと立ちつくしていた。石のような双眸がわたしの顔にひたと据えられている。「このチェス駒をかけて、ひと勝負しませんか」彼は囁いた。

「自信がおありのようですね。これは、とても高価なものでしょうから」わたしは答えた。

彼は無理に微笑もうとした。が、残忍な薄い唇は一瞬不機嫌に歪み、あごの傷跡にけいれんが走った。「おかげさまで、腕には自信があるんです。お宅様のお手並みを拝見できますか？」

わたしは長いこと、まじまじと彼を見つめた。角ばった褐色の顔は、三十年前と比べて少しも年老いていない。その目は輝き、冷たくて——年齢というものが感じられなかった。その時、ふ

とわたしは思った。おそらくは父も、勝ったと決まった瞬間に、突然思い当たったはずだ。もしわたしが負けたら、その代償は何なのだろう。しかし、わたしの中の反抗的な十歳の少年が、すでに答えを出していた。「いいですよ――お相手しましょう。でも、チェスのセットは欲しくありません。船を賭けるなら、やりましょう」

「船はありません」彼はくり返した。「でももし何かお望みのものがあれば……」

「探してみましょう」わたしはカウンターの方に向き直り、所狭しと並べられた、珍しいさまざまな品を見渡した。十歳にも満たない子供の目に映ったほど、魅惑的な品々ではなかった。精巧な工芸品や美しい細工の間に、けばけばしい安物が混ざっている。戸棚を開けてみると中の品々は、あの時わたしが戻したとおりの位置に収まっているように思えた。次に引き出しを開けてみる。同じ色、形のグロテスクな貝殻。華やかな蝶。十歳の頃の記憶が鮮やかに甦ってきた。

わたしは彼の方を振り向き、鉄の燭台を受け取った。これであの時の状況は、完璧に再現された――それはまるで、わたしの心を形づくるジグゾーパズルに、欠けていた最後の一片をはめこんだかのようだった。三十年の歳月が一瞬のうちに溶けていく。わたしは片端から戸棚を開け、蠟燭を掲げ、次々と中のものに手を触れていった。ただ今回は、日焼けした大男がぴったり後ろからついてきていたが。と、不意に第六感がわたしに知らせた。この戸棚だ。扉を引っぱると、その時くっついたように動かない。もう一度試してみる。男が、はっと息を止めたようだった。その時何かが――偶然だろうか、それとも運命だろうか？――わたしにそのからくりを教えてくれた。

取っ手を引きながらわずかにひねりを加えると、戸棚は蝶番を軸に音もなく回り、壁龕(へきがん)が現れた――そして、そう、あの船が。

船はあの時と同じで――それでいて、同じではなかった。ゆるんだ帆はいっそう日にさらされ、一部はたたまれていた。まるで船長が、風を待ちわびるのを諦めてしまったみたいに。甲板(デッキ)は照りつける南国の太陽にすっかり白くなり、小ぎれいな船体の塗料はところどころはげ落ちていた。小さな水夫たちが着ている服はみすぼらしくすり切れ、記憶していたより数が少ない。だが小人(こびと)の船長は三十年前と同じようにブリッジに立ち、その目はにらむように虚空に据えられ、わたしを見つめ、わたしを通して彼方を見つめていた。そして今、彼の両手は後ろに組まれ、右手の輝く鉤針の上あたりを、左手のこぶしが握っている。前ほど背筋がしゃんとしておらず、少し老けたような感じだった。

店の主の方に振り向くと同時に、わたしはきつく鉄の燭台を握りしめた。彼の顔に、なんとも危険な表情が浮かんでいたからだ。だが、それはすぐに消え去った。「そうそうこれを忘れていました」彼は言った。「では、これを賭けましょう」

すると、何者かに導かれてでもいるように、わたしの手はひとりでにベストのポケットに滑りこみ、すべすべした小さな金貨を取り出した。あの夜父がゲームの始まりに投げ上げた、例の金貨だ。

彼はちらっとそれに目を落とし、再びわたしを見つめた。「もしよろしければ、わたしは黒の方が使い慣れているんです」

わたしはそれほど腕に自信があるわけではない。チェス盤の枡目に駒を並べながら、再びさっきの疑問が胸に湧いてきた。わたしが負けたら、その代償は？　彼はいったいわたしの何を欲しているのだろう――この、いつも決まって黒を選ぶ男は？

その夜のふたりの勝負は、かなりの白熱戦だったと思う。彼もそう思っていたに違いない。盤にかがみこみながら、日焼けした傷跡のある顔が、紙のように白くなっていたから。ゲームはスピーディに展開し、わたしは一瞬たりと、次の手を迷うことはなかった。彼は彼で陰湿な自信を内に秘めているようだった。どのように駒を進め、どのようにゲームが終わったのかは思い出せない。ただ突如として、わたしは彼のキングが追いつめられたことを知ったのだ。彼も同時にそれを悟ったに違いない。わたしが自分のクイーンに手を伸ばすと、彼の顔がものすごい殺意に歪んだ。

彼が勢いよく立ち上がったはずみに、盤と駒が床に叩きつけられた。彼に注意していたのは賢明だった。わたしは同時に飛びのき、椅子を引き倒し、重い燭台をひっつかんだ。彼がよろめくように突っこんでくる。その頭に、力いっぱい燭台を投げつけた。

目に見えない力が我々のまわりに張りめぐらされ、三十年を経た今、ふたりを共に引き寄せたのだろうか？　あれは偶然だったのか、それとも運命だったのだろうか？　わたしの狙いは確か

だったはずだ。なのに、はずれた。鉄の燭台は彼をそれ、捕らわれの船を入れた大きなグリーンの球に衝突した。

次の一瞬は、果てしなく長いものに感じられた。鋼鉄のような指が喉に食いこみ、わたしは両のこぶしでやみくもに彼の顔を殴って、逃れようともがいた。彼は怒り狂ってわたしを罵り、その顔は憤怒と恐怖に歪み、かすれた声でわけのわからない言葉をわめき散らした。と、不意にあたりに大波と海の咆哮が轟き、張りつめたロープが風にうなり、マストがきしみ、はらんだ帆がばたばたと煽られる音が耳に飛びこんできた。部下に指図する怒声が響き、それに答える水夫たちの声がした。暗がりから何か黒くて巨大なものが現れて横を通り過ぎ、潮の香が鼻孔をつき、猛り狂う疾風とともに突然灯りが消え——そして、わたしの喉を絞めつけていた鉄の指がゆるんでいった。

ようやく息がつけるようになると、わたしはマッチを擦り、頭上の梁から吊り下がった船型ランプに火をつけた。グリーンのガラスの球体は、粉々になっている。船は、消えていた。そして足元には、散り散りになったチェスの駒の間に、不気味な物体がだらりと伸びていた。服はボロボロに破れ、その肉の裂け跡は、まるで船底に付着したふじつぼに引きずられたかのようだった——喉は、鉄の爪の一撃を食らったかのごとく切り裂かれている。それはあまりにも長く海底にいたために、完全な人間とはなりえなかった、異形のものの姿であった。

美しき人狼

THE MAN WHO CRIED 'WOLF'

ロバート・ブロック

Robert Bloch

月が出たばかりだった。冴え冴えとした光が湖面に輝きわたり、ドアを開けて入ってきたバイオレットの髪に、銀色のヴェールを投げかけた。
だが、そのつやのない蒼白な顔色は、月光のせいではない。まぎれもない恐怖のためだった・
「いったい、どうしたんだ？」私は驚いて訊ねた。
「人狼（ウァーウルフ）よ」バイオレットが答えた。
パイプを置いて肘掛け椅子から立ち上がると、私は妻に歩み寄った。妻は目を大きく見開いてその場に釘づけになったまま、まばたきもせずに私を見つめている。その姿はまるで、ガラスの目をはめこんだ大きな陶器の人形のようだ。
肩を揺さぶると、ガラスのような目にさっと光が戻った。
「おい、しっかりするんだ」
「人狼がいたのよ」妻は消え入りそうな声で言った。「森からずっと後を尾（つ）けてきたの、後ろで小枝を踏む足音が聞こえたわ。怖くて、とても振り向けなかった。でも、はっきりと気配がした

のよ。だんだん近くに忍び寄って来て、月が出るとそれに向かって吠えてたわ。もう、夢中で走ってきたの」
「吠え声を聞いたのかい？」
「ええ、聞いたわ、たぶん」
「たぶん、ね！」
私がくり返すと、バイオレットはまつ毛を伏せて一瞬うなだれたが、不意にその頬に赤みがさした。私は妻を見つめたままうなずいた。
「本当にこの小屋の近くで、狼の吠え声が聞こえたのかい？」
「じゃあ、あなたは――聞かなかったの？――」妻の声は、喉を締めつけられてでもいるようにかすれていた。
私はゆっくりと、しかしきっぱりと頭を振った。
「落ち着いてくれよ、バイオレット。もっと冷静になるんだ。先々週から同じことばかり話してるけど、もう一度言わせてもらうよ」
私はやさしく妻の手をとると、椅子にかけさせた。煙草をくわえさせ、火をつけてやる。唇が震えて、煙草が小刻みに揺れた。
「いいかい、バイオレット。ここには狼はいないんだ。確かにカナダの未開地には違いないけど、二十年も狼なんて出ていないんだよ。町の居酒屋のレオンに聞いたって、きっとそう言うだろう。

そりゃあ、ひょっとしたら北の方から迷いこんできた獣か家畜が、湖のまわりをうろついているのかもしれない。だとしても、人狼なんているわけがないじゃないか。

君も私も、そんなばかげた迷信にまどわされるような、無知な人間じゃないはずだよ。迷信深い君の御先祖の話などいい加減忘れなさい。君は今や、伝承文学研究の大家の妻なんだからね」

妻の先祖であるカナダ人のことをからかったのは少々行き過ぎだったかもしれない。ただ、妻にショックを与えて、気を引き立ててやろうと思ったのだ。

しかし、逆効果だったようだ。妻は震え始めた。

「でもチャールズ、何か物音くらいは聞こえたでしょ？」囁くような、か細い声。その哀願するような目に出会って、私は耐え切れずに視線をそらした。

「いや、何も」

「何も聞こえなかったたっていうの？　夜になると、それが小屋のまわりをうろついていたっていうのに」

「ああ、聞こえなかった」

「じゃあ、あなたを起こしたあの晩は——壁にそれの影が映っていたでしょう？」

私は首を横に振り、無理やり微笑みを浮かべた。「まさか、私の本を読み過ぎたせいじゃないだろうね。でもとにかく、どう説明したらわかってもらえるだろう。君の言ってることは——その——単なる思いこみなんだと」

バイオレットが煙草をふかすと、その先端がぱっと明るく燃えたった。しかしその目は相変わらず死んだようにどんよりしている。

「あの狼の声や足音を一度も聞いたことがないの？　森で尾けられたこともないの？　あなたひとりっきりでここにいる時にも、小屋に近づいて来たこともないっていうの？」妻は訴えるように言った。

「あいにくだが、一度もないね。私は本を書くために、君より一カ月前にやって来た。そして、毎日のように書いていた。だが、人狼にも幽霊にも、吸血鬼（ヴァンパイヤ）や食屍鬼（グール）や悪霊にもお目にかからなかったよ。ここにいるのはインディアンとカナダ人と地元の住民たちだけだ。そうそう、一度レオンの店から帰ってくる途中でピンクの象を見たと思ったんだが、気のせいだった」

私は笑った。しかし彼女は、にこりともしなかった。

「ねえバイオレット、これはまじめな話だが、君をここへ連れて来たのはどうやらまちがいだったようだね。君のようなフランス系カナダ人にとっては、こうした荒野はすばらしく魅力的だろうと思ったんだが――だってこのあたりは君の生まれ故郷によく似ているだろう？　でも今になって、私は――」

「今になって、わたしの正気を疑い始めたのね」

彼女の唇から、這うようにして言葉が洩れた。

「まさか。そんなことは言ってないだろ」
「でも心の中ではそう思ってるんでしょ、チャールズ」
「思っているものか。誰にだって起こりうるものなんだよ、こういう――幻覚は。医者だって、そう言うはずだ。目や耳の錯覚は必ずしも、その――精神的なアンバランスを意味するものではないとね」
私は急いで弁解したが、妻が納得していないのは明らかだった。
「ごまかさないで、チャールズ。自分でも気づいているのよ。どこかおかしいんだわ」
「ばかな、くよくよ考えないことだ」私はなんとか微笑んだが、自分でもわかるほどぎごちない笑い方だった。「とにかくだね、バイオレット。この私が、そんなことを思っているはずがないだろう。人のことなんて言えた義理じゃないしね。覚えてるかい、ケベック州で式を挙げる前、私はいつも君のことを魔女扱いしていた。〝北の国の赤い魔女〟と名づけて、短詩(ソネット)まで作って聞かせたじゃないか」
バイオレットは首を振った。「それとこれとは、全然話が別じゃない。あなたには、自分のやってることがちゃんとわかっていたもの。いもしないものを見たり聞いたりはしなかったでしょ」
私は咳払いをした。「実はちょっと思いついたことがあるんだ。この話を誰か私以外の人にもしたかい？」
「いいえ」

「で、同じような状態がもう二週間も続いているんだね？」
「そうよ」
「よし。私だってもうこんな状態はたくさんだ。君の気持ちも、痛いほどよくわかっているつもりだよ。だから、君の不安をなくすために——要するに、ただの気休めだが——ドクター・メルーのところへ行ってみよう。なに、ちょっと相談しに行くだけだ。
彼の腕なら、十分信用できる。内科だけでなく、精神科の方の腕もね。知ってるだろう、ドクターは趣味的に精神病学を研究してるんだ——そりゃあ、精神科医としては田舎に埋もれたアマチュアかもしれんが、とにかく信用のある人だし、大丈夫、君の立場は十分に尊重してくれるさ。今までのことだって、たちどころに原因をはっきりさせてくれるよ」
「いやよ、チャールズ。メルー医師のところへは行かないわ」
私は眉をひそめた。「そうか。まあ、いいさ。君が不可解な人狼の話を信じこんでいるから、気になったまでだ。子供の頃、狼憑きのことでよっぽど怖い話を聞かされたんだろう？　君のおばあさん——あの人には、インディアンの血が流れていたね？——に世にも恐ろしい言い伝えを聞かされて、まっ昼間から震えていたんじゃないかい？」
バイオレットはうなずいた。「ウイ——ええ、そうなの」
妻の口から自然と子供の頃の言葉遣いが洩れたが、私は気づかないふりをして先を続けた。
「おばあさんは狼男、つまり人狼の話をしただろう……満月の夜には姿を変え、四つん這いに

なって吠えながら駆け回り、月明かりに毛深い影を映し出すという人狼の話を。奴らは獲物を求めてさまよい、餌食(えじき)に飛びかかって喉を切り裂くという話を、襲われた人間は恐ろしい病菌に感染して人狼になってしまうという話をしなかったかい？」
「ええ、したわ、何度も何度も」
「やっぱりね。だからつまり、幼年期を過ごした荒地に戻って来たせいで、子供の頃の恐怖が甦ったんだよ。人狼は、その頃恐れていたものの象徴に過ぎない。恐らく内面の罪の意識が、妄想の中でしだいに半人半獣の姿をとって擬人化されていった。そしてずっと心の奥底に潜んでいたのが、今、表面に表れてきたんだ。
私は精神医学に関しては、ドクター・メルーのようにアマチュアでさえない。でも、人がこうした幻想を抱くのは、決して異常なことではないと自信を持って言えるよ。君が包み隠さず打ち明けてくれれば、本当は何を恐れているのか突きとめることができるはずだ。力を合わせて、恐怖の真の原因を確かめるんだ。不気味なうなり声をあげ、森の中でよだれを垂らしながら首筋に忍び寄ってくる、架空の怪物の姿を借りた恐怖の真の姿を――」
「やめて！　もうたくさん！　お願いだから今は――とてもこんな話には耐えられないわ」
バイオレットは泣きだした。私は不器用に慰めの言葉をかけた。
「すまない。君の気持ちも考えずに。しばらくこの話はしないでおこう。君が落ち着いてこの問題に取り組めるようになるまでね。そろそろ、休もうか」

私はなだめるように妻の肩を叩き、寝室へ連れていった。
服を脱ぎ、ベッドに入る。枕元のランプの光をしぼり、完全に消した。
小屋の中はまっ暗だった。周囲の木々の梢から、わずかに月光が洩れてくるばかりだ。彼方の湖は銀色に燃える海となっていたが、私はその輝きに背を向けて、まどろみの中に吸いこまれていった。
すぐ隣に、バイオレットが体を硬くして横たわっている。が、私がうとうとしかけたのにつれて、ゆっくりと徐々に緊張を解いていった。
やがて、ふたりとも眠ってしまった。
どのくらいいたっただろう。私は不意に目を覚ました。バイオレットの指が肩に食いこみ、耳元に荒い息遣いが聞こえる。
「聞いて、チャールズ！」彼女はあえいだ。
じっと耳を澄ませてみる。
「聞こえる？　小屋の外の――足でドアをこすってるような音が？」
私は首を振った。
「目を覚ましてよ、チャールズ。ちゃんと聞いて。さっきまで窓の下で鼻を鳴らしてたのよ。今度はドアを引っかいてるわ。ねえ、なんとかして！」
私はベッドから飛び起き、妻の腕をつかんだ。

「おいで、確かめてみよう」
手探りで懐中電灯を探すうちに、椅子にどすんとぶつかってしまった。
「逃げていくわ」バイオレットが泣き声を出した。「急いで」
私は片手でしっかりライトを握ると、バイオレットを引きずるようにしてドアに向かった。足を止め、妻を離し、素早く掛け金をはずす。
ドアがさっと開いた。大きな弧を描きながら、眩しいライトがあたりを照らす。小屋のまわりの空き地には、虫一匹見当たらなかった。
光を足元の方に向ける。
いきなり、バイオレットが悲鳴をあげた。
「見て、チャールズ！　そこよ、ドアのすぐ外の地面！　足跡があるでしょ——ね、ドアの前に足跡が」
私はそちらに目を走らせた。
そう、足元の地面にくっきりと刻まれていたのは、見まごうかたなき巨大な狼の足跡であった。
私はバイオレットに向き直り、長いことじっとその顔を見つめた。そして、首を横に振った。
「いいや、バイオレット」私は囁いた。「君の見間違いだ。何も見えないよ、何も！」
翌朝、バイオレットはベッドから起き上がってこなかった。私はリサに会いに、ひとり町へ向

かった。
リサは父親といっしょに、町の四つ辻の近くに住んでいる。父親はもう年で、全身が麻痺していた。リサはその父を養うために、観光客向けにインディアンのビーズ細工やかご細工を作って売っていたのだ。
それがリサと知り合ったきっかけだった。先月のことで、私はひとりでここへやって来た。バイオレットにブレスレットでも買ってやろうと、路傍のこの店に寄ったのだ。そしてひと目リサを見たとたん、すべてを忘れてしまった。
リサは半分インディアンで、半分は女神だったから。
その黒檀のように黒い髪以上に深く、光沢のある黒など想像もできまい――いや、ひとつだけそれがある。ほかでもない、彼女の瞳が。それは夜の闇に開いた、二つの卵形の窓だった。見事なまでに整った彫りの深い顔立ち、磨きこまれた銅のようにつややかな肌。その肢体はほっそりとしていながら力強く、それでいて抱きしめるとなよやかに溶けてしまう。
それがわかるまでにたいして時間はかからなかった。打ち明けると、彼女を知って二日後のことだ。
私は決して性急な男ではない。しかし私の出会った女性は半分インディアンで、半分は女神だったのだ。
そして――悪の化身だった。

黒貂の毛皮とてかなわぬ、輝くばかりの髪を持った夜の魔性……吸いこまれそうな双眸に、地獄への深淵をのぞかせた闇の女王……背教の徒そのものの比類なき肢体は、もっとも深い罪に満ちていた。

彼女は私をはるか古代の甘くて苦い堕落の園へと誘い、ユダヤの民に言い伝えられたイヴ以前のアダムの妻リリスが手にしたという、禁断の実をさし出した。月の出ない夜に彼女は淫らな妖魔サキューバスのごとく無言のうちに私を訪れ、私は夜と闇を貪って、禁じられた快楽に身を委ねた。

やがてバイオレットが来て、ふたりの密会は妨げられた。逢瀬には十分な注意が必要だとリサに告げたが、彼女は笑っただけであった。

「ほんのしばらくの間ね」リサは答えた。

「ほんのしばらくの間？」

リサはうなずいた。異様なほど目を輝かせて。「そうよ。あなたの奥さんが生きている間だけ」

実に自然な言い方だった。そして一瞬のちには、私にとってもそれは極めて自然なことだと気づいたのだ。なぜならそれは事実であり、ふたりの真情そのものであったから。

私はもう、バイオレットを必要としていなかった。この新たに知った夜の女神だけがほしかった——それは、愛でも、身を焦がす情熱でもない。言うなれば、完膚なき悪と私の魂との結婚で

あったのだ。
そしてそれを手に入れるためには、バイオレットは死ななければならない。
私はリサを見つめ、うなずいた。「妻を殺してほしいんだね？」
「いいえ。もっと別の方法があるわ」
「インディアンの魔術？」
ほんのひと月前だったら、人がそんな話を口にしただけで笑いだしていただろう。しかしリサを知った今、この手にリサを抱いた今、その古い言い伝えは確たる重みを持っていた。
「違うわ、正確にはね。あなたの奥さんは死にはしない。だけど、あなたといっしょにはいられなくなったとしたら？」
「つまり、彼女がぼくの元を去るということだね――離婚して？」
「わからない人ね。気のふれた人たちを閉じこめておく場所があるでしょ？」
「でもバイオレットは狂人じゃない。ごくごくまともだよ。よっぽどのことが起こらない限り、気がふれたりするものか」
「たとえば、狼を見たりとか？」
「狼？」
「狼があの女の後を尾け回すとしたら、どう？　彼女がひとりの時を狙ってつきまとい、脅かし、悩ませるの。そうしたら、きっとあなたにその話をし、助けを求めるわ。あなたは彼女の話など

まるで信じないようにするのよ。間もなく彼女の精神は――」

リサは肩をすくめた。

私は何も聞かなかった。リサの言ったことを、そのままに受け入れただけだった。彼女が森のまじない師に力を借りたのか、それとも闇の運命を司る者に呪いの言葉を捧げたのか、私にはわからない。

わかっていたのは、彼女の言った通りに狼が妻を尾け回すようになったことだけだ。私は何も見えず、何も聞こえないふりをし続けた。バイオレットはしだいに狂気に追いやられていった。そんな話をどこで聞いたのか、彼女は復讐の女神が自分を罰するために、人狼に姿をやつして現れたのだと信じこむようになった。ますます好都合だ。妻は急速に狂気へと向かっている。

そしてリサは、じっと時機が来るのを待っていた。美しい顔に、謎めいた微笑みを浮かべて。

こうしてリサは今朝、四つ辻近くの小さな路傍の店で私を待っていたのだった。

陽射しの中で見る彼女は、ビーズ細工の得意なごく普通のインディアン娘だった。だがひとたびその顔が陰というヴェールでおおわれると、その瞳と髪は謎めいた彼女の存在そのままに輝く漆黒となり、永遠に変わらぬ神秘となるのだ。

彼女が腕を巻きつけてきた。氷のように冷たく火のように熱いその肌が触れると、私は背筋がぞくぞくした。

「奥さんはいかが？」彼女が囁いた。
「あまり良くはないね。ゆうべ、ドアの近くで狼の足跡を見つけたんだ。そのせいで、ヒステリックになっている」
リサは微笑んだ。
「本当のことを教えてくれないか。いったいどうやって狼にあいつの後を尾けさせたんだい？」
リサは微笑んだだけだった。
私は嘆息をついた。「あまり詮索しない方がいいんだろうな」
「その通りよ、チャールズ。計画どおりに事が進んでいるだけで十分じゃない？　バイオレットは狂ってきてるんでしょ？　もうすぐ完全に狂人だわ。そうすれば、わたしたちはいっしょになれる——これからずっと、そうよね？」
私はじっとリサを見つめた。「そうだね、それで十分だ。でも一つだけ教えてくれ。今度は何が起こるんだい？」
「奥さんが狼を見るのよ。ええ、実際に目にするの。きっと、腰を抜かさんばかりに驚くわ。でも、話を聞いてあげてはだめよ、今までどおりにしてちょうだい。そうすればきっと警察に行くわ。この村に来て、なんとか信じてもらおうと、狼の話をして歩くかもしれない。そのうち、誰もが彼女のことを気違いだと思うようになる。何か聞かれたら、あなたは何も知らないと突っぱねるのよ。間もなく医者が送られてきて、奥さんを診察するわ。あとは、もう——」

「あいつが狼を見るんだね？」私はおうむ返しにくり返した。「実際に見るんだね？」
「そうよ」
「いつ？」
「今夜にしましょうか、お望みとあれば」
私は重々しくうなずいた。が、ふと疑問が浮かんだ。「しかし、あいつはもうかなりまいっている。怖がって、森の中など歩かないだろう」
「だったら、狼が彼女のところへ行くわ」
「わかった。私は足跡を消しておけばいいんだね、今朝みたいに」
「ええそうよ。それから、あなたは今晩小屋にいない方がいいわ、チャールズ。あなたは感じやすい人だから、おびえている奥さんを見るのは、心が痛むんじゃなくて？」
バイオレットの顔が脳裏をよぎった——空想の中の怪物が現実に這い寄ってくるのを目のあたりにして、目をかっと見開き、恐怖の悲鳴に口を開け、ショックに醜くひきつれた顔が。そう、そのとおりになるのだ。それもすぐに。
私は微笑を浮かべた。
リサも冷たく笑い返した。店を出る時、背後から彼女の高笑いが響いてきた。その残酷な喜び方——それは、どこか常軌を逸したものだった。
そして、当然ながら私はその理由を悟ったのである。リサは完全に正気ではないのだと。

その晩、私と妻はひとこともロをきかずに夕食をとった。やがて湖上に月が昇るとバイオレットは立ち上がり、ブラインドをおろした。その顔には、隠し切れない苦痛の表情が浮かんでいる。
「どうしたんだい、眩しいのか？」
「月なんて見たくもないのよ、チャールズ」
「どうして、きれいじゃないか」
「いいえ、とてもそうは思えないわ。夜なんて大嫌い」
来たるべき事態を思うと、私は自然と寛大になっていた。「バイオレット、今ちょっと考えていたんだが、この土地は——ここはどうも君の神経にさわるようだね。いっそ都会に戻った方がいいんじゃないかな？」
「ひとりで？」
「仕事が終わったら、私もすぐに戻るよ」
バイオレットは額にかかったとび色の髪を払いのけた。その髪の、なんと色あせてしまったことか。私は心が揺らいだ。まるで輝きというものをなくした、くすんだ、生気のない髪。その顔もその目も、同じようにくすんで生気がなかった。
「いやよ、チャールズ。ひとりでは帰らないわ。あれが追いかけて来るもの」
「あれって？」
「狼よ」

「ばかだな、狼は都会には来ないよ」
「普通の狼ならばね。でも、あれは、普通じゃないと思うんだい？」
「なんで君が——その——目にした狼は、——」
彼女は私が言い淀んだことに気づいてほんの一瞬黙ったが、のしかかる絶望に耐え切れず、急いで言葉を続けた。
「なんでって、あの狼は夜しか現れないのよ。それに、本当の狼はここにはいないじゃない。まだあるわ、あの獣には何か邪悪な気配を感じるの。あれは私を襲おうと追ってくるんじゃないのよ、チャールズ——私につきまとっているの。それも、私だけに。何かが起こるのをじっと待っているんだわ。わたしがここを出ていったら、きっと後を尾けてくる。逃げられるわけがないのよ」
「逃げられないのは、それが君の心の中にいるからだ」私はぴしゃりと言い放った。
「バイオレット、私はずっと辛抱してきた。君につき合って、仕事をする時間もなかった。この二週間というもの、ばかげた君の妄想ばかり聞かされてきたんだ。自分でどうにかできないんだったら、人の助けを借りるよりしょうがないね。悪いけど、きょうの午後、ドクター・メルーのところへ行ってきたよ。君の症状を話しにね。会ってくれるそうだ」
私の手きびしい非難に、バイオレットは力なくくずれ落ちた。
「だって、本当なのよ」その声がかすれている。

「あなたはわたしが——わたしが狂ってると思っているのね」
「人狼なんて、実在しないんだ。そんな架空のものより、精神錯乱という病気の方がよっぽど現実味があるからね」
私は立ち上がった。
バイオレットが、驚いたように顔を上げた。
「どこへ行くの？」
「レオンの店さ。酒でも飲まないことには、君の妄想に振り回されてこっちまでおかしくなりそうだ」
「チャールズ。ひとりにしないで——お願い、せめて今夜だけでも」
「君の空想の狼が来るっていうのかい？」私は抑えた口調で訊ねた。「いい加減にしたまえ！正気だということを信じてほしいんなら、せめて二、三時間はひとりでしゃんとしているんだね」
「チャールズ——」
私はドアの前へ行き、開け放った。月光が銀色の縞となって床の上に伸び、彼女は一瞬たじろいだ。私はその場に立ち止まり、笑顔をつくってみせた。
「バイオレット、私のがまんももう限界だ。それでも君が医者にも行かず、ここに残ると頑張るんなら、そして気が変になっていることも認めないつもりなら——それを証明して見せてくれ」
私は向きを変え、外へ出ると手荒くドアを閉めた。それから、きびきびと道をおりていった。

実に美しい夜だ。私は深く息を吸い、一マイル先の四つ辻へと、足どりも軽く進んでいった。気がせいて、足が自然に早くなる。私は急いで目的地へと向かって行った。レオンの居酒屋に寄るつもりなど、最初からなかったのだ。

リサの家に着いた。

小さな小屋はまっ暗だった。もう、ベッドに入ってしまったのだろうか。どちらにしても、リサの老父はとっくに寝入っているはずだ。とがめられる心配はない。

小屋に近づきながら、私の心はすでに決まっていた。リサが眠っていたとしても、起こして外に連れ出そう。こんなに美しい月夜は、眠るためにあるわけではないのだ。

突然、すぐ間近のドアから物音が聞こえた。ドアが中からゆっくりと開く。本能的に暗がりに身を潜めると、一つの影が小屋から現れた。

「リサ!」私は囁いた。

彼女は振り向くと、こちらにやって来た。

「そうか、君も同じことを考えていたんだね」低い声で囁きかけ、彼女を腕に抱きしめる。

「さあ、ここを出よう。湖に行ってみないか」

湖岸へと続く小道を連れ立って歩く間、リサはずっと押し黙っていた。

私たちは、長いこと月を見つめたまま立っていた。私がそっとリサの腰に腕を回すと、リサは

向き直って首を振った。
「だめよ、チャールズ。もう、行かなくちゃ」
「行くってどこへ？」
「町に用事があるの」
「待たせておけばいいさ」
私は彼女の顔を両手で包み、かがんでキスしようとした。リサがぐいと身を退いた。
「どうしたんだ、リサ？」
「ほっといてよ」
「何かあったのかい――まずいことでも？」
「ないわ。もう帰って、チャールズ」
私はまじまじと彼女の顔を見つめた。そして、気がついた。その頬が異様なほど紅潮し、目がぎらぎらと輝いている。半ば開いた唇は情熱のためではなく、私への拒絶を表していた。
リサは私を見てはいなかった。両の瞳は私を越え、背後の月にひたと据えられている。双眸に二つの月が映っていた。二つの月はしだいに膨れてリサの暗赤色の瞳孔を呑みこみ、さらに大きくなって銀色に燃える炎の玉と化していく。
「帰って、チャールズ」リサが低く言った。
「帰って――早く」

だが、私は動かなかった。
それは、確かにめったにあるチャンスではなかったから——そう、人狼への変身を目のあたりにすることなど。かくて私は、少女が狼に変わっていくさまを一部始終見つめていたのである。
第一の徴候として、呼吸方法が変わってきた。息遣いがしだいにぜいぜいと荒くなり、さらにしわがれたあえぎ声に変わった。胸が激しく波打っている。上に下に、上に下に、上に下に——そして、次の変化が。
肩が前方に傾いた。体が前かがみになるというより、斜めにどんどん伸びていくようだ。両腕が、腕のつけ根にばりばりのめりこんでいく。
そのままリサは、地面に倒れこんだ。暗がりから月光の中へ、さらに暗がりへと、激しくのたうち回る。が、その肌はもはや銀色の光に輝いてはいなかった。しだいにきめが荒く、黒くなり、ふさふさした毛が生え始めた。
それはさながら、出産の陣痛のようだった——そして、ある意味では出産であった。彼女は生を授けつつあったのだ。新たな魂にではなく、彼女自身のもう一つの風貌に。分娩にも似た苦痛と筋肉の収縮は、すなわち純粋なる生理作用なのだ。
頭部が刻々と形を変えていく。それは、魂を魅惑するような光景だった——まるで見えざる彫刻師の手が生きた粘土をこね、練り回し、骨ごと押しつぶして新たな形態を造りあげていくかのようだ。

長く伸びた頭部から一瞬巻き毛がすっかり消えたかと思うと、見事な体毛が生えてきた。耳が外に張り出し、太くなった首にそってピンク色の先端がぴくぴく動いている。目が縦長に裂け、顔じゅうの筋肉がけいれんし、と、鼻からあごにかけてがぐっと盛り上がった。顔は激しい苦痛にゆがみ、盛り上がった部分はさらに隆起し、がっしりしたあごとなって鋭い牙が突き出した。

皮膚はすでに数段濃くなっている――そのため全体の印象は、現像しすぎて黒くなった、定着液からあげたばかりの写真を思わせた。

服が体からすべり落ち、リサの四肢はぐんにゃりと溶けて縮み、毛が生え、新たな関節が節くれだってきた。苦悶に身をよじりながら地面をかいていた両手は、今や獣の前肢と化している。すべての変貌が終わるまでに、およそ三分半かかっていた。間違いない、ちゃんと時計で測っていたのだから。

そう、私は注意深く時間を測っていた。もちろん、ひどく驚いたことは事実だ。しかし、これはすべての人間に与えられる機会ではない――この、狼に変わっていく娘を見るという機会は。私はいわゆるプロの好奇心というものをもってこの変貌にじっと目を凝らしていた。またとない光景に、恐怖も忘れて魅入られていたのだ。

こうして変貌は終わりを告げた。目の前には一匹の狼が、息を切らし、四本の脚でしっかりと立っていた。

そして、私は理解した。今やすべてが明らかだった。なぜリサにはほとんど友だちがいないのか、なぜ夜ひとりで出歩くのか、そしてなぜ私に帰れと言ったのか——さらには、なぜあれほど自信たっぷりに、幻の狼の行動を予言できたのかも。

私はその場に立ったまま、微笑んだ。野獣の目が、哀願するようにわたしの目を探っている。私がおびえ、ショックを受け、あるいは激しい嫌悪を示すものと思っていたのだろう。

思いもかけず私が微笑んだのを見て、毛深い喉の奥で悲しげに鳴いていた声は、甘えるようなごろごろという音に変わった。私の反応に安心したのだ。

「もう、行った方がいい」私は囁いた。

それでも彼女は迷っていた。手を伸ばし、変身の苦痛にいまだに汗ばんでいる額をそっと撫でてやった。「心配はいらない、大丈夫だよ、リサ。私を信じるんだ。私の気持ちは——私たちふたりの絆は——何も変わっていないんだから」

喉のごろごろという音が巨大な狼の毛深い胸の奥へと呑みこまれていった。

「さあ、急いだ方がいい。バイオレットはひとりだ。彼女を驚かせるって約束だろ」私はなだめるように声をかけた。

灰色の獣は向きを変え、森の向こうへと消えていった。

私はひとり湖へ向かった。月の光が湖面にちらちらと躍っている。

不意に、さっきまで感じなかった激情がいちどきに押し寄せてきた。すべては明白だ——あま

りにも明白だった。
私はひとりの娘と手を結び、妻を狂気に追いやろうとしている。その彼女とて、正常とは言い切れない。そして今や、彼女が人狼だということがわかってしまったのだ。恐らく私自身も多少狂っているに違いない。
だが、これが現実なのだ。そしてそれに対する答えなど、どこにもなかった。とにかく、今さらあとへは引けない。事は計画通りに運んでいた。そして最後には、私は望みどおりのものを手に入れるのだ。いや——はたしてそうだろうか？
突然私は泣きだした。
後悔ではない。恐怖でも、自分を哀れんでいるわけでもなかった。ただ、あるイメージが不意に脳裏に浮かんできたのだ。この腕に抱いたリサがしだいに変貌していくイメージが。リサの赤い唇に唇を重ねると、突然それが横目でこちらを伺っている狼の鼻面になっているイメージが。
しかしほどなく私の泣き声は、深い森の奥から聞こえる、嘲るような狼の遠吠えに妨げられた。
私は両手で耳をおおい、身震いした。
突然私は森の中を駆けだした。もう吠え声は聞こえず、自分の荒い息遣いだけが耳の中に響いている。私は狂ったように、盲滅法に走り、ようやく小屋に着いてつんのめった拍子に、顔と手を切ってしまった。

中はまっ暗だった。わたしはぜいぜい息を切らしながらドアを探り、こじ開けようとした。だが、鍵がかかっている。
中からバイオレットの悲鳴が聞こえた。よかった。とにかく――まだ生きている。
そのとたん、稲妻のように頭に閃いたことがあった。
人狼は人をおびやかすだけではない……殺すこともできるのだ。
それだけに、悲鳴が聞こえてほっとした。ドアを開けると、妻は泣きながら腕に飛びこんできた。私は再び胸をなでおろした。
「見たのよ、狼(あれ)を！」妻の声はかすれていた。「今晩、現れたの。窓から中をのぞいてたわ。姿は狼だけど、あの目は人間のものよ。じっとわたしを見ていたわ、緑の目で――それからドアを開けようとして――ずっと吠えていた――気絶しそうだったわ――ああ、チャールズ、助けて――助けてちょうだい」
とても計画どおりになどできなかった。取り乱した妻を前にして、嘘をつきとおすことなど。わたしは彼女の腕を取り、できる限り安心させてやろうと囁きかけた。
「わかっている。あいつを見たんだね、私も見たよ、森の中で。だから飛んできたんだ。吠え声も確かに聞いた。君の言ってたとおりだ――狼がいたんだよ」
「人狼よ」彼女は言い張った。
「とにかく、狼がいるということは確かだ。明日、町の四つ辻まで行ってくるよ。人を集めて、

あの獣を見つけなくては」
それを聞いて、妻は微笑んだ。まだ震えはとまらなかったが、どうにか微笑みを浮かべてみせた。
「何も怖がることはない。私がついている。もう大丈夫だよ」
私たちはその夜、おびえた子供のように抱き合って眠った。
とにかく私とバイオレットのふたりは、そうやって夜を明かしたのだった。
目が覚めた時にはもうお昼を回っていた。バイオレットが静かに朝食のしたくをしている。
私は起き上がって、やつれた顔に伸びたひげをそった。食事のしたくができていたので腰をおろしたが、どうにも食欲がでない。「小屋のまわりに足跡がついてるわ」バイオレットが言った。
もうその声は震えてはいない――自信を得て、力づいたのだ。
「そうか、じゃあ、四つ辻まで行って来るよ。まずレオンとドクター・メルーに話して、何人か男手を集める。それに、乗り物の都合がついたら、騎馬警察隊へも知らせておこう」
「じゃあ、狩りに参加する気なの？」
「もちろんだ。私もいっしょに奴を仕留めに行く。君への、せめてもの罪滅ぼしにね――ずっと君を疑っていたんだ。そうでもしなければ自分が許せないよ」
バイオレットは私にキスをした。
「ここにひとりでいても、怖くないかい？」

「ええ。もう大丈夫よ」
「よかった」
私は家を出た。
四つ辻へ向かう間も、さまざまな考えが胸に湧いてきた。だが四つ辻のレオンの店に踏みこんだとたん、そんな考えもいっぺんに吹き飛んでしまい、私は大声で飲み物を注文した。
デブのレオンはバーの隅で小柄なドクター・メルーと話しこんでいた。腕をオーバーに上げ下げし、目をぎょろつかせて話していたが、私を見ると口をつぐんでそばにやって来た。カウンターから身を乗り出し、まっすぐ私の目を見つめる。
「これはどうも、コルビーさん。ようこそいらっしゃいました」
「ありがとう、レオン。このところ、いろいろと忙しくてね――なかなか寄れなかったんだ」
「忙しいって、お宅で何かあったのですか？」
彼はまたも私を見つめた。私はとまどい、唇をかんだ。しかし、そんなことに答えるのに、どうしてとまどう必要があろう？　「うん。家内の具合があまりよくなくてね。ほとんどつきっきりだったんだ」
「お宅のあたりは、寂しい場所なんでしょう？」
「君だって知ってるじゃないか」私は肩をすくめた。「どうして？」
「いえ、別に。ただ最近、夜、何か聞こえないですか？」

「何かって？　夜聞こえる物音かね？　それだったら、かえるやこおろぎや――」
「それに、狼とか？」
私は目をしばたたいた。デブのレオンは私から目をそらさない。
「狼の声を聞きませんでしたか？」
私は首を振った。手が震えていることに気づかれないようにと内心祈りながら。
「そいつはおかしい。湖の向こうで狼の吠え声が聞こえるそうですよ」
「だって、この辺には狼などいないじゃないか――」
「おやおや」レオンは嘆息をついた。「とんだ見当違いですね」
「どういうことだい？」
「ビッグ・ピエールを覚えてますか、ガイドをやっている――湖をはさんであなたの向かいに住んでいる色の黒い男なんですが」
「ああ」
「ビッグ・ピエールはきのう、何人かで誘い合わせて湖へ行ったんですよ。娘のイボンヌは、留守番役で小屋に残っていました。一晩じゅう、ひとりっきりだったんです。そのせいで、我々も狼のことを知ったわけですよ」
「彼女が話したのか？」
「いいえ、彼女は何も話してませんよ。今朝たまたまメルー医師が彼女の家の前を通りかかって、

ちょっとあいさつでも、と思ってお寄りになったんです。そうしたら裏庭に彼女が横たわっていて——前の晩、狼に襲われたんですよ！　今頃魂は天国へ行ってるでしょう」
「死んだのか！」
「ええ、確かに。もちろん、そうは思いたくないですがね。メルー医師は狼の足跡をつけてみたそうですが、森の中で見失ってしまいました。でもビッグ・ピエールが戻ってきたので、早速そいつを狩りにいくそうです」
ドクター・メルーもだんだんこちらに寄ってきた。興奮のため、ロひげが逆立っている。
「あんたはどう思うね、チャールズ？　狼野郎が——人食い狼が——この辺をうろついているんだ。わしは騎馬警察に通告して、なんとか善処してもらおうと思っている。あんただって、もしあの気の毒な娘さんの死体を見ていたら——」
私は飲み物を置くと、あわてて向きを変えた。
「バイオレットが！　帰らなくては。ひとりで待っているんだ」
私はレオンの店を飛び出すと、陽の当たる通りをほとんど駆け足で戻っていった。

これでリサが、バイオレットを脅かした後どこへ行ったのか、はっきりしたわけだ。そして人狼というものは、単に狼に変身するだけではないということも。
私は路傍のリサの店に駆けこんだ。休業中だ。貼り紙を破り捨て、リサの部屋のドアに急ぐ。

ノックをしたが、中からは全身が麻痺(まひ)した老人の、怒ったような呟きが聞こえてきただけだった。諦めて背を向けたとたん、ドアがすっと開いた。リサが立っている。陽光に目をしばたたきながら。顔はゆがみ、土気色で、髪はむきだしの肩に乱れかかっていた。

「チャールズ——どうかしたの？」

私は彼女を家の裏の木陰へ引きずっていった。リサはじっと立ったまま、まっすぐわたしを見つめている。その顔はやつれ、目は疲労に濁っていた。

私はいきなりリサを殴った。力まかせに。彼女は身を退(ひ)き、逃れようとしたが、私はもう片方の手ががっしりと彼女の肩をつかんでいた。もう一度、したたかにその頬を打つ。リサは弱々しく泣きだした。犬のように——狼のように。

「バカ！　なんだってあんなことをしたんだ？」

私はまたも、思いっ切りリサを打った。喉が詰まり、言葉がはっきり出てこない。

リサは泣いていた。私は激しく彼女を揺さぶった。

「泣くのはよせ！　ゆうべのことを知らないとでも思ってるのか？　あいにくだが、ちゃんと知ってるよ。この辺の者はみんな知ってるぞ。なぜあんなことをしたんだ、リサ？」

リサはぱっと顔を上げた。もはや私をごまかせる見込みはないと悟ったらしい。「どうしようもなかったの」彼女は呟いた。「あなたにはわかりっこないわ、奥さんのいる小屋を後にして、湖沿いに戻って行ったんだけど……その時なのよ——わたしが、もうとてもがまんできなくなっ

たのは」
「何を？」
「飢えよ」
彼女はひとことで答えた。
「あなたにはわかりっこないわ。――飢えるとどんなふうになってしまうものか。胃がひっくり返りそうになって、頭の中はそのことでいっぱい、ほかに何も考えられなくなるのよ。そうなったらもう――ひとりでに体が動いてしまうの。ビッグ・ピエールの小屋の前を通るとイボンヌが井戸のところにいて、水を汲んでいたわ。あたりはまっ暗だった。彼女の姿を見たのは覚えてるけど――あとはまるで記憶がないの」
私は、彼女の歯ががちがち鳴るほど激しく揺さぶった。
「記憶がないだって？　あの娘は死んだんだぞ」
「ああ、よかった！」リサはあえいだ。
わたしは思わず息を呑んだ。「よかった――死んでよかったっていうのか？」
「もちろんよ。だって、もし死ななかったら――もしわたしたちみたいなものに咬まれて助かったなら――わたしと同じように、呪われた種族になってしまうのよ」
「そうか」私の言葉は、ほとんど声にならなかった。
「わからないの？　何も好きこのんであんなことをするんじゃないのよ。飢えのせい。いつだっ

て飢えのせいなの。以前は——体に変化が兆してきたのを感じると——ずっと遠くに行ってたわ。誰にも気づかれないように。でも昨夜は思いがけなく突然飢えに襲われて、抑えようがなかったの。あんなことになってしまったけど、彼女が死んだのは不幸中の幸いだったのよ。かわいそうに」

「そうだったのか」私は力なく答えた。

「どうして？」

「ひとつ、些細なことを忘れているがね。これで私たちの計画は台なしだ」

「妻はもう、幻の狼におびえたりはしないだろう。自分につきまとう獣のことを話して回ったところで、誰も気違いだとは思わないさ。今じゃ、現実に狼がいることが知れ渡っているんだから」

「そうね。じゃあ、どうすればいいの？」

「どうもこうもないよ。しばらく成り行きを見守るしかない」

リサは私の体に腕を回し、あざになった顔を押しつけてきた。「チャールズ」涙声でリサは言った。「それじゃあわたしたち、いっしょになれないってこと？」

「あんなことをしでかしたあとで、よくそんなことが言えるね」

「わたしを愛してないの、チャールズ？」

柔らかな唇がおおいかぶさってきた。狼のキスではない。いとしい娘の、温かな、魂を溶かすようなキスだ。その腕は柔らかで、しなやかだった。体が自然に彼女の抱擁に応えていく。この

若い娘に身を灼くような欲望をかきたてられ、それに抗いながらも、しだいに甘い魅惑に溶けていった。
「なんとか考えてみよう」私は言った。「でも、約束してくれ——ゆうべのような事件は今後二度と起こさないと。それに、妻にも近づいちゃいけない」
「約束するわ」リサは嘆息をついて、「とっても難しい約束だけど。でもできるだけのことをするわ。ねえ、今晩、ここへ来てくれない？　いっしょにいてくれれば、なんとかがまんできるはずよ——あの飢えを」
「また来るよ、今晩だね」私は答えた。
と、突然彼女の目に恐怖の色が浮かんだ。
「チャールズ」リサは囁くように言った。「月が昇る前に来てちょうだい」

小屋に戻ると、バイオレットがドアの外で待っていた。
「ねえ、聞いた？」それが彼女の第一声だった。
「君は誰に聞いたんだい？」私は妻の質問をそらした。
「男の人があなたを訪ねて来たのよ。その人が全部教えてくれたわ。狼のことを聞かれたから、最近あったことを洗いざらい話したの。中であなたを待ってるわよ」
「君に事情を聞いて、私に会いたいと言い出したんじゃないのかい」

「そうよ。一対一で話したいんですって。クラギンさんといって、騎馬警察の方らしいわよ」
こうなったら、中へ入るしかなかった。
カナダ北西部の治安にあたる騎馬警察隊員にお目にかかるのは初めてだった。騎馬警察の制服さえ着ていなければ、クラギンは大柄な町の巡査といったところだった。礼儀をわきまえ、頭も切れそうだ。
「チャールズ・コルビーさんですね？」入って行くと、彼は肘掛け椅子から立ち上がって言った。
「そうです。何のご用でしょう？」
「もうお察しだと思っていましたが。湖の向こう岸に住んでいた、亡くなったイボンヌ・ボウチャンプスさんの件なんです」
私は嘆息をついた。「そのことなら、町の四つ辻で聞きましたよ。狼が出たんですってね？私がそれらしいものを見聞きしてないかというお尋ねですか？」
「何かご存じですか？」
私はためらった。それがまずかったようだ。制服の大男は、私を見つめて微笑んだ。
「答えていただくには及びませんよ。小屋のまわりを見れば、誰だって一面についた狼の足跡に気がつくでしょうからね。実際、足跡はここからまっすぐ湖を回ってボウチャンプス家へと続いています。きょうの午後、跡をたどってみたんです」
私は何も言えなかった。煙草に火をつけようとして、すぐそれを後悔することになった。

「それに」クラギンは話し続けた。「奥さんのお話も伺いました。かなり狼のことに詳しいようですね」
「そうですか？　ゆうべ、ここで狼を見たと話したのですか？」
「そうです」クラギンの顔から微笑が消えた。「ところで、ゆうべ狼が現れた時、あ、な、た、はどこにいましたか？」
「町です」
「居酒屋に？」
「いえ、ぶらぶら歩いていました」
「歩いて、ねえ」
ふたりのやりとりは決して火花を散らすようなものではなかったが、私は緊張しっぱなしだった。クラギンは話を少しずつ自分の土俵へ持っていくつもりに違いない。はたして、私の予想したとおりだった。
「では、その件はしばらく置いておくとしましょう」彼は切りだした。「どちらにしてもこの事件の全貌は、もうつかめていますから。ただ、この人食い狼の習性について何かわからないものかと調べているところでしてね。今、狼狩りの隊を組んでいるもので。でもあなたは、参加なさるおつもりはないでしょうな。お仕事とはまるで分野が違いますしね？」
私は答えなかった。

「だって、そうでしょう？」彼はくり返した。「あなたは作家ですよね」
私はうなずいた。
「超自然の事物について、いろいろな物語を書いていらっしゃるとか。奥さんのお話によると、目には見えない怪物の話をひとつ書きあげたばかりだそうですね」
私はまたうなずいた。うなずいているだけなら、楽なものだった。
クラギンはすっと立ち上がった。「何かおもしろい考えをお持ちですか？」彼は訊ねた。
「どういう意味でしょう？」
「わたしには、あなたのように物を書く方は当然少しばかり——変わっているように思えるのです。お気にさわったら申し訳ないのですが、化け物の話を書いていらっしゃるくらいですから、そのほかのいろいろな物事についても、かなり変わった考えをお持ちなのではないかと」
私はぐっと息を呑んだ。が、すぐににやっと笑ってごまかすと、彼に訊ねた。「私が書いている化け物の物語は、私の自叙伝だとおっしゃりたいのですか？」
私の質問は、彼が予期していたものとはちょっと違っていたらしい。私はなおも続けた。
「どうなさったんです？」わざとゆったりとした口調で、「私が吸血鬼にでも見えますか？」
クラギンは、無理に笑顔を作った。「人を疑うのは商売ですのでね。お答えする前に、歯を見せていただけますか？」

私は口を開け、「あー」と言った。
それも彼の気に入らなかったようだ。
私は自分に歩があると見て、いっきょに押しまくった。
「何を企んでるんです、クラギンさんとやら？　あんたは妻がこの付近で狼を目撃したのを知っている。それが昨夜だったことも知っている。そして狼がここから湖の向こうへ行き、少女を殺し、消え失せたことも知ってるはずだ。
お望みの情報はすべて提供しましたよ。もちろんひとつだけ、あんたが漠然と考えている疑問には答えていないがね。あんたは私が怪物か何かだと思っている。狼に姿を変え、妻を脅し、ここを出て、闇に紛れて犠牲者を殺したと思っているんだろう」
今や私は、完全に彼を窮地に追いこんでいた。「あいにく、ディック・トレーシーの漫画の世界とは訳がちがうんですよ。もちろん、この辺の一部の混血児の間では幽霊や人狼や悪魔が信じられていることは知っていますが。でも、騎馬警察の皆様方がそんな迷信を鵜呑みにしていると は、よもや思いませんでしたね」
「いえ、実のところコルビーさん、わたしは――」
私はドアに手をあてた。外を指さし、愛想よく微笑んだ。「警察のお方、さっさとあなたの狼を追いかけに行ったらいかがです」
クラギンはおとなしく出て行った。

腰をおろし、ひと汗かいた時のように爽快な気分に浸っていると、バイオレットが入ってきた。
私は初めて気のきいたふるまいをしたわけだ。直接核心をついた問いかけは、クラギンが心ひそかに抱いてたかもしれぬ疑いを追い払った。彼を辱しめ、警察官たるものとして事実に重きをおいているという自負を打ち砕き、人狼の噂をする田舎者に貶めたのだ。
同じ手を使って、バイオレットの疑いも晴らしてやろう。そう思って私は気軽に、先ほどのやりとりを詳しく話して聞かせた。
彼女は黙って耳を傾けていた。
「わかったかい、これが真相なんだ」私はそう締めくくった。「狼は確かに現実にいる——だが、ごく普通の狼だ。君はそいつがただの狼じゃないと思ってるらしいがね。知性を持っているって言いたいんだろ。ドクター・メルーによると、その手の狼はもとは人間だったらしいよ。だから、ずっと悪知恵が働くんだそうだ。
とは言っても、獲物を食い殺す時には野獣と同じだけどね。ただの狼であり、それ以上の何者でもない。今晩狼狩りが行われるそうだから、君ももっと安心して休めるだろう」
バイオレットが私の腕に手をかけた。「あなたはいてくださる?」
私は眉をひそめた。
「いや。四つ辻に戻って、狩りに加わるつもりだ。ゆうべそう言ったろう。狼狩りに参加するのは、私の名誉でもあるんだ」

「行かないで――怖いわ――」
「ドアに鍵をかけておきなさい。狼は鍵を開けられないからね」
「でも――」
「じゃあ、行ってくるよ。私を信じるんだ。私が出かけた方が君は安全なんだから」

リサの家の裏手の木陰に着いた時には、月はもうほとんど中空に昇りきっていた。彼女は暗がりにひとり立っていた。その姿を認めて、私は安堵のあまり息が詰まりそうになった。私を待っていたのは狼ではなく、若い娘であったから。

リサが微笑み、素早く抱きついてくると、今までの心配などすっかり吹き飛んでしまった。
「来てくれると思ってたわ」彼女は言った。「いっしょにいられるのね。ああ、チャールズ、わたし、怖い」
「怖い？」
「ええ、聞かなかった？　クラギンとかいう男が――騎馬警察の隊員らしいけど――気になることを話していったの。きょうわたしに会いに来て、狼のことを何か知らないかって聞いていったわ。この向こうの居酒屋のレオンが、わたしが夜になると出かけるって、まるでおしゃべり好きの老婆みたいにみんなにふれ回っているらしいのよ。それに、人狼の話をして歩いてるんですって」

「心配いらないよ」私はリサを慰め、クラギンとのやりとりを簡潔に話して聞かせた。「でも、今晩狩りをするって言ってたわ」リサは言い張った。「レオンは店を閉め、町じゅうのほとんどの男たちはクラギンのあとに続くんですって。夕暮れに出発して、湖の方へ向かったわ。まずビッグ・ピエールの小屋に行き、そこから狼のあとを追うそうよ」
「でも、どうしてそれが気がかりなんだい？」私は笑いながら訊ねた。「狼はいないんだ。私たちは今晩いっしょにいるじゃないか」
「そうね。あなたといっしょなら安心だわ」リサは昨夜変身を遂げた木立の向こうの湖岸を見つめながら答えた。
「ここに座って、話をしない？　レオンの店は閉まっているけど、昼間のうちに行ってワインを買っておいたの。ワインは好き、チャールズ？」
リサは陶器の水差しを示し、私たちは並んで草の上に寝転んだ。
ワインは甘口だが、かなり強かった。東の空にかかった月を見るうちに、しだいに酔いがまわってきた。
突然、リサが私の肩をつかんだ。
「あれを聞いて！」
彼方（かなた）から物音が聞こえてくる——湖の向こうの、はるか彼方から。かすかな人の叫び声に、単調で鋭い吠え声が混っていた。

「狩りよ。犬を連れてるんだわ」
リサは身震いした。すっかり酔いのまわった私は、彼女を強く引き寄せた。
「何も怖がることなんてないんだ」やさしくなだめたものの、空を見ているうちに恐怖がこみ上げてきた。それをいっそうかきたてるかのように、湖の向こうの騒ぎは大きくなっていった。
奴らは人狼を狩りたてている――そしてその彼女は今、私の両腕の中にいるのだ。
背教の徒リサの完璧なまでに美しい横顔が、苦悩に青ざめた月の光に、くっきり浮かび上がっている。
魅入られたように互いに見つめ合う月と娘。そしてその双方をじっと見つめている私……
月は満ち、汝の忌まわしき血を誘う。人狼たる汝の身内を流るる、汚辱に満ちた血を――
「リサ」私は囁きかけた「大丈夫かい？」
「もちろんよ、チャールズ。さあ、飲んで！」
「だからその、何かが起きそうな感じはしないかい――君の身に」
「いいえ。今夜は平気。大丈夫よ、あなたといっしょだもの」
リサは笑って私にキスをした。私は飲み続けた。拭いきれない怖れを酔いで紛らわすために。
「もう、バイオレットにつきまとったりしないね？　この騒ぎが立ち消えになるまで、夜出歩くのはやめるね？」
「ええ、そうするわ」彼女は私の唇にワインを持ってきた。

「辛抱するんだよ。私が新しい計画を思いつくまで、待てるね？」

「あなたの言うことなら何だって聞くわ」

私はリサと向き合った。「時間がかかるかもしれない。いっしょになれるまで、恐らく計画したより長くかかるだろう。でも、離婚以外に方法はないんだ。バイオレットはこういう問題に関しては古風な女だから、あくまで闘うだろう。法律的に見て、私が自由の身となるまでには何年もかかることになる。それまで待てるかい？」

「離婚するの？　何年もかけて？」

「それまで待つって約束してほしいんだ。バイオレットやそれに――ほかの人を傷つけたりしないって約束してくれ。それ以外に、いっしょになれる手だてはないんだから」

リサは私と向き合っていた。その顔は木立で陰になっている。と、彼女はかがんで私の唇に唇を押しあてた。

「わかったわ、チャールズ。それしか方法がないのなら、わたし待つわ。ええ、待ってるわ」

私はさらに杯を重ねた。頭は冴え冴えとしている。と、不意にまわりがぼやけ、それからまたはっきりした。猟犬の吠え声が耳に轟き、しだいに遠くあいまいになっていった。リサの顔がぼうっと大きく見える。と思うと、視界からすっと消えた。

ワインのせいだ。だが、かまうものか。リサは約束してくれた。甘いキスをしてくれた。もう

これ以上は緊張が続かない。この数日は私にとって、はてしのない悪夢だった。
もう一度口いっぱいにワインを含む。
やがて、いつの間にか睡魔に襲われて……
「おい、起きろ！」
切迫した、きしるような声が耳に飛びこんできた。続いて突然首筋をぴしゃぴしゃ叩かれた。
「起きろ、コルビー！　さあ早く！」
私は目を開け、上体を起こした。月が頭上高くにかかり、青ざめた光が私の上にかがんでいる顔を照らしている——ドクター・メルーの顔だ。
「眠ってたのか」私は呟いた。「リサはどこだ？」
「リサ？　最初からあんたしかいなかったよ。目を覚ますんだ——いっしょに来てくれ」
私は立ち上がったが一瞬よろめき、どうにかバランスを立て直した。
「大丈夫か？」
「ああ、平気さ、ドクター。何があったんだ？」
「それが、その——」
彼の声にはためらいと怖れが混ざっていた。私はすぐにそれに気づき、はっと思い当たった。
次の瞬間、酔いはすっかり吹き飛び、思わず声を張り上げていた。
「言ってくれ、ドクター。何があったんだ？」

「あんたの奥さんが」彼は重々しく口を開いた。「あんたがいない間、小屋に狼が現れたんだ。わしはちょうど前を通りかかったものだから、異常がないかと寄ってみた。着いた時には、もう狼は逃げていたよ。だが――」
「どうした！」
「バイオレットが、狼に喉を裂かれたんだ！」
私たちはひた走りに走った。闇の中を、夜より生まれ出で、恐怖を孕んだ黒い帳の中を。
リサは嘘をついたのだ。私にワインを飲ませ、眠るまで待ち、そしてそれから――
そのことばかりが、頭の中で渦巻いていた。
小屋に着いた。ドクター・メルーは、バイオレットが横たわるベッドの傍にひざをついた。彼女は頭を動かし、弱々しく私に微笑んだ。
「助かったんですか？」声が喉に詰まっていた。
「うん。喉に食いつかれたんだが、運よくわしが着いて止血したんでね。傷はそんなにひどくない。が、とにかくショックを受けている。一日二日は安静にしておくことだ」
私は妻の横にひざまずき、包帯を巻いた首の上にかがんで頬にキスをした。
「神よ、感謝します」私は呟いた。
「あれこれ奥さんに質問しないように」とメルーが忠告した。「今はゆっくり休ませるんだ。わ

しが着いたのは、襲われた直後だった。狼はあの窓から入ってきたに違いない。ガラスが飛び散っているからね。わしが小屋の近くまで来ると、あいつは小屋から飛び出してあわてて逃げて行きおった。足跡がそこらじゅうについてるよ」
私は彼といっしょに小屋の外へ出てみた。彼の言ったとおりだ。
「まもなく狼狩りの一隊が到着するだろう。これだけ跡が残っていれば、やすやすと追跡できるはずだ」
私はうなずいた。
突然、森から吠え声が響いた。興奮した男たちの叫び、それにかぶさるように狂おしい猟犬の吠え声。
ドクター・メルーはぐいと口ひげを引っ張り、そちらを振り向いた。「きっと、見つけたんだ！」彼は叫んだ。「ほら、あの声！」
叫び声や低い呟き声が聞こえた。茂みをひっかき回す音。と、鋭い悲鳴が起こり、ついで――
ライフルが一斉に火を放った。
「おお神よ！　やったぞ！」ドクターが躍り上がった。
猟犬の吠え声はいっそう近くなっていた。向こうの茂みから走ってくる足音と、小枝の折れる音が聞こえる。すぐ近くに人の声がする。
と、茂みから小屋の前の空き地に、狼が這い出してきた。

灰色の巨大な獣は力尽き、激しくあえいでいた。どす黒い血の跡を点々と残しながら、傷だらけの体を引きずって空き地を横切ってくる。大きな頭を垂らし、しまりなく開いた口から牙をのぞかせ、苦しそうに息を切らしながらこちらへ向かってきた。
メルーが拳銃を引き抜き、撃鉄をおこした。私はとっさにその手をつかんだ。
「やめろ。撃つな！」
狼の方へ歩み寄る。その目が私の目と合った。が、何の反応も示さない――死を目前にして、どんより濁っているだけだった。
「リサ」私は囁いた。「待てなかったんだね」
ドクターには聞こえなかったが、狼はそれを耳にした。ぐいと頭をもたげ、一瞬、毛深い喉からしぼり出すように哀しげな声を上げた。
そして、狼は死んだ。
私はそれが死ぬのを見ていた。極めて明白な死であった。四肢が硬張り、頭が垂れ、それきりうつ伏せに動かなくなった。
狼の死を見るのは、まだがまんできた。
しかし続いて襲ってきた感情は、とうてい耐えられるものではなかった。
リサが死んだのだ。

彼女が狼に変わるのを見たその時には、冷静に時間を測ることとさえできた。だが今、死んだ狼が娘へと変貌していくさまを目のあたりにして、私はわなわなと震え、悲鳴をあげ続けるばかりだった。

体が伸び、くねり、折れ曲がった。両の耳が頭蓋に沈み、手足は細長く伸びて、見るまに白い肌となっていく。ドクター・メルーが横で叫んでいた。しかしその声も、私の耳には入らなかった。ただただ、リサの裸体から目が離せなかったのだ。狼のいた跡に横たわる。愛らしいリサの裸体から。それはまるで、目の前にぽっかり花が浮かび上がったようだった——手折られた、一輪の青ざめた白百合が。

リサはそこに横たわっていた。月の光を浴び、死の手に抱かれて。私は泣きむせび、いきなり小屋を飛び出した。

「嘘だ——こんなことは、全部嘘だ！」

ドクターのしわがれた声が私を呼び戻した。震える指が足元の白い肢体を指している。

私は目を凝らし、そして見た——さらに別の変化を！

それを描写するのはとても耐えられない。私は今になって初めて、リサがいつ、どうやって人狼の犠牲者となったのか、決して話さなかったことを思い出した。と同時に、その犠牲となった者は並はずれた若さを保つ、という言い伝えをも。

足元の女性は、みるみる年老いていった。

愛らしい娘が狼に——そうした変貌を目のあたりにするのは、確かにおぞましいことだろう。だがしかし、この胸の悪くなるような最後の変貌ほどショッキングなものは、他にないはずだ。花のような少女が、毒々しく紅を塗った、見るからに汚らしい老婆と化してしまったのである。
そして老婆は——さらに醜いものへと変わっていった。
とうとう、信じられないほど年老いた命なき抜け殻が地面に横たわっていた。萎び、干からびてしわくちゃになったものが、ミイラさながらににたっと笑い、月に向かって締まりなく口を開いていた。
リサは遂に、本当の姿に戻ったのであった。

あとは目まぐるしく事が運んだらしい。男たちが犬を連れて到着した。ドクター・メルーは狼であり、娘であったもの、そして今はそのどちらでもないものの上にかがみこんでいた。しかし私は、それきり気絶してしまった。
翌朝目覚めると、ドクター・メルーがバイオレットの傷に包帯を巻いていた。彼女は起き上がれるくらい元気になり、スープを運んで来てくれた。私はまた眠ってしまった。
その次の朝も、メルーがやって来た。体調はかなり回復していたので、私は起き上がった。聞きたいことが山ほどあったのだ。それでも彼の話を聞いて、ほっと胸をなでおろした。
ドクター・メルーは賢明な処置をとってくれたようだ。その狼が人狼だったということは肯定

したが、死体の身元をリサだとは鑑定しなかった。クラギンの助力を得て、事件は闇に葬られた。結局のところ、それ以上の調査を続ける意義はなかったのだ。地元住民のためにも、関係者全員で事をもみ消すのが一番順当な計らいであったから。

バイオレットも落ち着いて、ほとんど以前の彼女に戻っている。

昨夜私は、彼女にすべてを告白した。

彼女は微笑んだだけだった。

すっかり回復したら、たぶん都会に戻って私と離婚するだろう。はっきりとはわからないが。許してくれるとも言わなかったし、意見も非難も口にしなかった。ただなんとなく不安げで、落ち着きがなかったようだ。

きょう彼女は、散歩しに出て行った。

私は午後いっぱいずっと座りっぱなしで今度のできごとをタイプしていた。日も暮れたことだし、彼女はまもなく戻ってくるだろう。あるいは、すでにこっそりと都会へ戻ったのかもしれない。だが、傷はまだ十分治ってないはずだ。旅をするのはちょっと無理だろう。

月が湖の上にのぼってきた。もう月は見たくない。あの事件を思い出させるものは、何であれ耐えられない。こうして事件を書きとめることによって、つらい思い出を振り切れるといいのだが。

時がたてば、心の傷も癒えるだろう。バイオレットは確かに私を憎んでいる。だが彼女は私と

別れ、そして私はひとりで何とかやっていくと思う。
そう、彼女は私を憎んでいるに違いない。私のせいで、人狼に殺されかけたのだから――
私はなおも書き続ける。もうそのことは、考えないことにしよう。考えないことに。
いや、何か考えなくてはならないことがあるはずだ。しかし、書くのをやめたくはない。だからこうしてひとり、ここに座っているのだ。夜の帳が死に絶えた大地をおおう黒い屍衣のようにおりてくる、このひとときにも。
私はここに座り、静寂に耳を傾ける。湖にのぼる月を見つめ、バイオレットの帰りを待たなければ。
彼女はどこへ行ったのだろう？　出歩いたりしては体に毒だ。喉に傷を負っているというのに。
彼女の喉の傷――リサが咬んだ傷。
何かがあったはずだ、私が思い出さなければならないことが。頭がどうもはっきりしない。だが確かに、彼女の傷に関係あることなのだ。それはすべて私の恐怖に結びついている。月光に対する恐怖、ひとりでここにいることへの恐怖に。
いったいそれは、何なのだろう？
思い出した！
そうとも。はっきりと思い出した。
私は今、バイオレットがどこかへ行ってしまったことを、戻って来ないことをひたすら祈って

いる。
彼女はきょう、落ち着きがなかった。そしてひとりで森へ行った。理由ははっきりしている。傷が効き始めたのだ。

イボンヌが死んだと告げた時のリサの言葉が鮮やかに脳裏に甦ってきた。彼女は思わず、よかったと呟いた——なぜなら、もしイボンヌが咬まれながらも助かっていたら、彼女もリサと同じように……
バイオレットは咬まれ、死ななかった。そして今、傷の効果が表れ始めたのだ。月は高く、湖の上に燦然と輝いている。バイオレット、森を駆けめぐるバイオレットは……
あそこだ！　窓の外に——彼女が見える！
この目に確かに——それが見える。
こうして私が書いている間も、小屋に忍び寄ってくる。月光にその姿が、くっきりと浮かびあがっている。銀色の光がそいつの背のつややかな毛皮に照り映え、黒い鼻面と鋭くとがった牙に反射していた。
バイオレットはわたしを憎んでいる。
バイオレットは戻って来た。だが——女としてではなく。
待て！　ドアの鍵は？　かけたはずだ。

これでいい。入っては来られまい。見たまえ、ドアの外側に前肢をかけ、引っかいている。喉の奥で、哀れっぽく鳴いている。あの喉——そしてああ、あの強そうなあご！

クラギンかドクター・メルーが立ち寄ってくれるかもしれない。来てくれなかったら、一晩じゅうここに座って起きていよう。夜が明けたら、彼女も行ってしまうだろう。そして元の姿で再び帰って来たなら、家から追い出してしまえばいい。

そうだ。待てばいいのだ。

しかし、あの吠え声ときたら！　ひどく神経を逆撫でる。私がここにいることを知っているのだ。タイプの音を聞きつけたはずだ。間違いなく、知っている。もし私を襲ってきたら——

いやいや、できるわけがない。ここにいる限り安全だ。

待てよ。何を企んでるんだ。もうドアのところには見えない。あごを鳴らす音が聞こえる。窓の下を動き回る音も。

窓だって？

ガラスはあの夜、リサが飛びこんできた時に割れてしまった。窓にはガラスが——入っていない——

吠えている。中へ飛びこもうとしている。来た！

もう目の前だ……月光に狼の影が躍って……バイオレット……やめろ……バイオ……

解説

仁賀　克雄

「眠られぬ夜のために」、なんだ、ヒルティじゃないかとの誤解は無用である。あの眠くなるような難しい本と違って、本書は夢魔、亡霊、悪魔、魔女、人狼などの登場する、面白くて怖くて、ますます眼が冴えてくる、恐怖小説のアンソロジーである。

本書編者カート・シンガー（一九一一—）は数奇な前半生を送った人である。オーストリアのウイーンに生まれたが、ウイーン大学卒業後に、当時台頭してきたヒットラーの極右団体ナチスに自由主義の立場から反対し、同志と地下新聞を発行し、これを攻撃した。このためナチスから反逆者として圧迫を受け、一九三三年にはスウェーデンに逃れた。三八年にはオーストリアがドイツに併合されたため、八カ国を転々とし、四一年にアメリカの市民権を得ている。

その経歴から戦争に興味を持ち、三四年には第二次世界大戦を想定した「来たるべき戦争」を刊行している。その後世界各国の諜報活動や組織についての権威となり、「スパイの三百年」「世界最大のスパイ」「歴史を変えたスパイ」など数十冊に及ぶフィクションやノン・フィクションを書いている。その著作は他に「ダニー・ケイ物語」「ヘミングウェイ伝」「シュヴァイツアー伝」などもある。

恐怖小説のアンソロジーは一九六五年の“KURT SINGER'S HORROR OMNIBUS”を手始めに、“GHOST OMNIBUS”(65年)“WEIRD TALES OF THE SUPER NATURAL.”(66年)“TALES OF THE UNCANNY”(67年)など十数冊ある。いずれもイギリスの出版社より刊行されており、その独自の選択眼が、ピーター・ヘイニング、ヴァン・サール、マイケル・パリー、ヒュー・ラムなどの恐怖小説のアンソロジストと並んで人気がある。

「空白の夢魔」オーガスト・ダーレス

オーガス・ダーレス(一九〇九—七一)はアメリカのウィスコンシン州ソーク・シティに生まれ、生涯を同市で送った作家兼編集者で、その多作ぶりから「ウィスコンシンのバルザック」と呼ばれた。十三歳から書き始め、十七歳の時「蝙蝠(こうもり)の鐘楼」がウィアード・テールズ誌二六年五月号に掲載され、怪奇作家としてデビューした。ラヴクラフトに兄事し、彼の死後遺稿の散逸を惜んで、文友ドナルド・ワンドレーとアーカム・ハウス出版社を興したことは有名である。作家としても幻想小説にすばらしい短編を残している。本編はW・T誌の四五年五月号に掲載された作品である。

「祖霊に安らぎを」ヘレン・W・カッスン

ヘレン・ウエンボーム・カッスンという女流作家は、ウィアード・テールズ誌の一九四〇―四五年に四作の怪奇短編を書いているが、その経歴はわからない。コリンズ一族の祖先の霊が納骨堂に集まって、この世の子孫にアドヴァイスするユーモラスな亡霊談である。この作品はW・T誌四五年三月号に掲載された。

「聖家族」マーガレット・セント・クレア

マーガレット・セント・クレア（一九一一――）はイドリス・シーブライトの名でも知られるSF女流作家である。カンサス州ハチンソンに生まれ、カリフォルニア大のバークリー校卒業、作家エリック・セント・クレアと結婚。四六年「地獄の辺土へのロケット」でSF界に登場した。邦訳は長編「アルタイルから来たイルカ」と短編集「どこからなりとも月にひとつの卵」などがある。本編はW・T誌五〇年一月号に掲載された作品。W・T誌には五〇―五四年に十編の幻想と怪奇の短編を書いている。

「時を超えて」キャロル・ジョン・デイリー

キャロル・ジョン・デイリー（一八八九―一九五八）はニューヨーク子のハードボイルド作家である。一九二二年、ブラック・マスク誌に登場して以来、レイス・ウイリアムズ、ヴィー・ブ

ラウン、サタン・ホールを主人公とする長短編を次々と発表、そのヴァイオレンスが受けて流行作家となった。西部のカウボーイが現代の暗黒街の正義のガンマンとなったとして評判になった。レイス・ウイリアムズはピストル一挺に生命を賭け、犯罪者を狙ったら必ず仕留める私立探偵だった。荒っぽい通俗ものではあるが、ハメットやチャンドラーのハードボイルドの先駆者である。その短編はほとんどがアクションもので、本編はW・T誌五〇年一月号に書かれた唯一のファンタジーである。

「謎の木片」エミール・ペテイジャ

エミール・ペテイジャ（一九一五——）はモンタナ州ミルトタウン生まれのSF&ファンタジー作家である。一九三五年「二つのドア」というファンタジーでデビューした。サラリーマン、撮影技師、写真家などのかたわら短編を書いていた。六三年に作家専業となったため、長編を出版したのが六〇年代とかなり遅れている。長編ではフィンランドの神話伝説「カレワラ」をテーマにしたものが有名である。W・T誌には四五—五二年に八編を執筆しており、本編は四九年十一月号に掲載された作品である。

「過去からの遺書」アーサー・J・バークス

アーサー・J・バークス（一八九八―一九七四）はエスティル・クリッチーやスペンサー・ホイットニーの別名を持っていたアメリカのパルプ雑誌作家で、机に向かえばどんな種類の小説でもたちまち書き上げてしまうところから、「パルプ雑誌のスピード商人」という仇名（あだな）がついていた。一九二〇年から小説を書き始め、二八年には一財産出来たので軍隊を中尉で辞め、専門作家となった。多作の割には後世に残る作品は少ない。W・T誌はじめ怪奇小説誌に数多くの短編を書いた。短編集には"LOOK BEHIND YOU"（54年）"BLACK MEDICINE"（66年）がある。本編はW・T誌四九年十一月号に掲載された。

「悪魔の素顔」チャールズ・キング

チャールズ・キングは、W・T誌の一九四五―七年にかけて七編の怪奇小説を書いている作家だが、その素性や経歴については資料が見つからず不明である。本編はW・T誌四五年五月号に掲載された。

「幼い魔女」ウイリアム・テン

ウイリアム・テン（一九二〇―）はアメリカのSF作家フイリップ・クラスのペンネームである。一九四六年アスタウンディング誌に「凶のアレクザンダー」を書いたのを手始めに、短編小

説作家としてSF界で活躍した。そのユーモアのあるアイデア・ストーリーは五〇年代に花開き、ブラウン、シェクリー、ブラッドベリらと並んで、日本でも当時かなりの人気があった。奇想天外な作風が売り物で、短編集が二冊邦訳されている。本編はW・T誌四七年五月号に掲載された。他にW・T誌に書いた短編はない。

「笑顔の果て」メアリ・エリザベス・カウンスルマン

メアリ・エリザベス・カウンスルマン（一九一一――）は生粋(きっすい)のウィアード・テールズ専属作家で、他にはあまり作品を書いていない。一九三三年ストレートな幽霊小説「影の家」でデビューし、以来五三年まで三十編の幻想と怪奇の短編を書き、いくつかの佳作を残している。アメリカではあまり評価されず、その短編集はイギリスで出版された。"HALF IN SHADOW"（64年）である。本編はW・T誌四九年十一月号に掲載された。

「ガラス壜(びん)の船」P・スカイラー・ミラー

ピーター・スカイラー・ミラー（一九一二―七四）はアメリカのSF作家兼批評家で、その処女作は一九三〇年にワンダー・ストーリー誌に発表した「赤い疫病」である。聴視覚教育の管理者を務める一方、四九―七四年死去までアスタウンディング誌（後にアナグロ誌）の書評を担当

した。作品数は少なく、長編はL・スプレイグ・ド・キャンプとの合作「人類」(50年)、短編集「タイタン」(54年)の二冊である。W・T誌には三九—四六年に五編の質の高い短編を発表している。本編はW・T誌四五年一月号に掲載され、各種のアンソロジーに収録されている佳作である。

「美しき人狼」ロバート・ブロック

ロバート・ブロック(一九一七——)はその作風からして、ウィアード・テールズ誌を代表する作家といっても過言ではない。一九三五年一月号のW・T誌に「修道院の饗宴」で登場して以来、五二年一月号の「ルーシーがいるから」まで、十七年間にわたり七十六作の怪奇短編を書き、ヘンリー・カットナーやラルフ・ミルン・フェアリーなどとの合作も含めると八十作に上る。そのうちには「切り裂きジャックはあなたの友」のような代表作も含まれている。「サイコ」で有名になったのは五九年のことだが、彼の短編作家としての佳作はW・T誌時代が圧倒的に多い。本編もW・T誌四五年五月号に発表された本邦初訳の短編である。

一九八六年一月

訳者略歴

ながい　ゆみこ　1957年札幌生まれ。立教大学フランス文学科卒。翻訳家。訳書に本シリーズ『真夜中の黒ミサ』(共訳) スター・チャレンジシリーズ『惑星危機一髪』などがある。

ソノラマ文庫〈海外シリーズ〉㉔
眠られぬ夜のために

昭和61年2月28日　初版発行

著　者――A. ダーレスほか
訳　者――長井裕美子
発行人――喜久村　繁
発行所――株式会社　朝日ソノラマ
東京都中央区銀座4―2―6
第2朝日ビル (〒104)
振替番号　東京 2-40311
印刷所――図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-257-62024-2